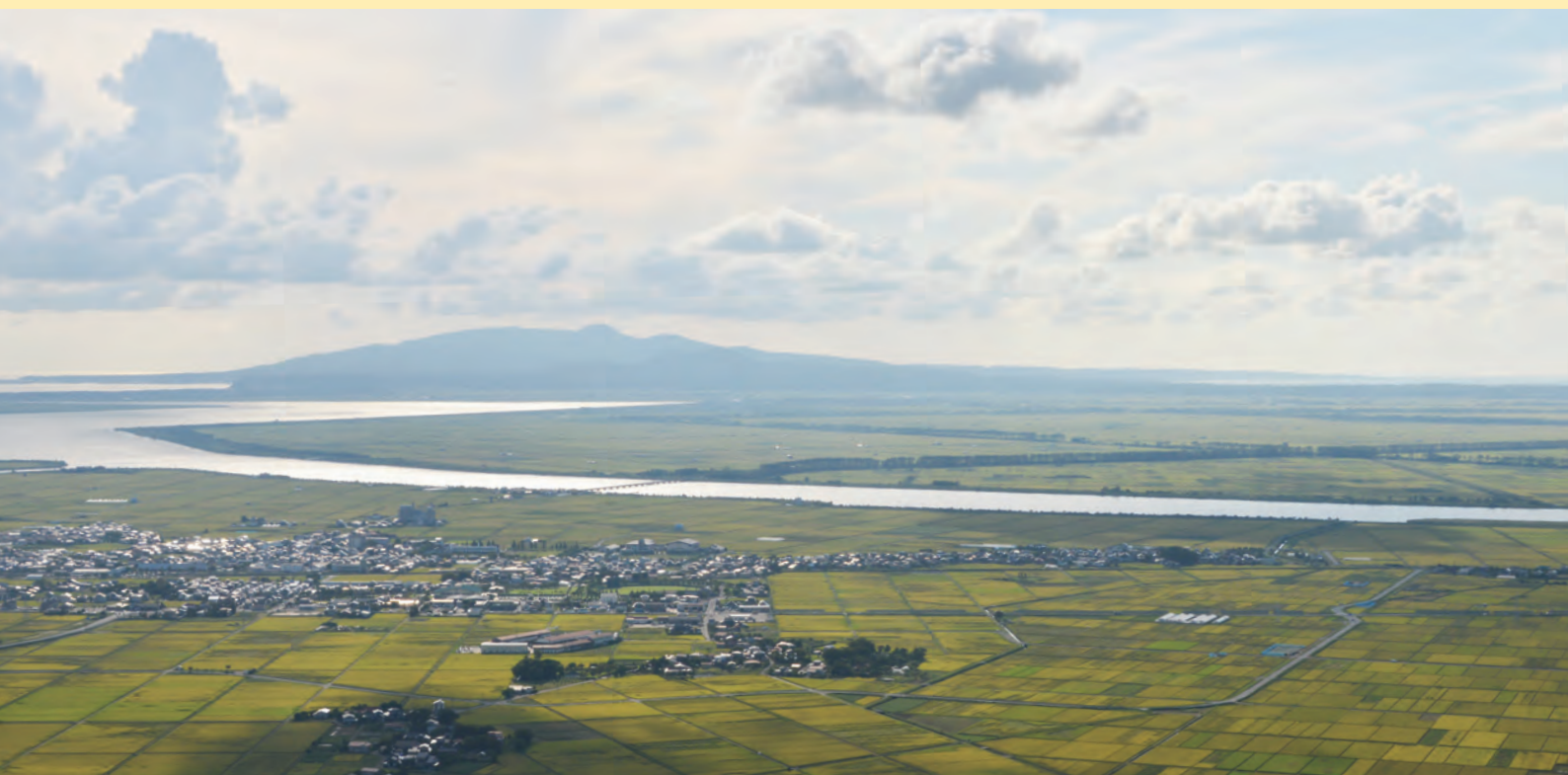


八郎潟沿岸の亀ヶ岡文化

—中山遺跡・高石野遺跡・大沢Ⅰ遺跡出土資料の研究—



2018年

上條信彦 編

弘前大学人文社会科学部 北日本考古学研究センター

八郎潟沿岸の亀ヶ岡文化

—中山遺跡・高石野遺跡・大沢Ⅰ遺跡出土資料の研究—

2018年

上條信彦 編

弘前大学人文社会科学部 北日本考古学研究センター

例 言

1. 本書は、弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センター（旧称 人文学部 亀ヶ岡文化研究センター）が資料調査した秋田県南秋田郡五城目町中山遺跡、山本郡三種町高石野遺跡、男鹿市大沢Ⅰ遺跡の出土品の研究報告である。
2. 資料調査は八郎潟沿岸の縄文時代晩期の様相解明を目的として、平成23～26年度に行った。
3. 調査の実施にあたって、秋田県立博物館、男鹿市教育委員会、潟上市郷土文化保存伝習館、五城目町教育委員会、三種町教育委員会から多大な協力があつた。特に男鹿市教育委員会と五城目町教育委員会とは共同研究の形で実施された。
4. 本書作成には上條信彦（人文社会科学部 准教授）を中心に、小泉翔太（人文社会科学部 特任助教）・長谷川大旗（人文社会科学部 大学院生）・伊藤昂平・石川世将・落合美怜・大内望咲・田中康貴（以上 人文社会科学部 学部生）が加わった。なお、第3章の書き下し文の作成には弘前大学人文社会科学部 武井紀子 准教授の教示を得た。
5. 出土品などの整理および報告書の作成に至る作業は弘前大学人文社会科学部日本考古学ゼミナールにおいて行った。
6. 本書の編集は上條信彦、校正は上條・小泉・長谷川が行った。また日本考古学ゼミナールの学部生・大学院生を中心に分担執筆した。分担は目次および末尾に記した。
7. 写真撮影について、遺物写真は上條の指導のもと日本考古学ゼミナールの学生が担当した。
8. 本書の作成に当たって出土遺物の整理作業・実測作業、図版作成などの従事者は以下のとおりである。

小泉翔太（人文社会科学部 特任助教）・長谷川大旗・三浦一樹・折登亮子・尾崎美由紀・小山内美穂・伊藤昂平・今村 涼・蝦名由紀・小笠原大知・柿崎寛人・木村彩絵・佐々木宏太・佐藤紗也香・佐藤友美・遠山 舞・花田晶平・藤村菜都美・牧野つぐみ・鎌田光相・小林晃太郎・田中康貴・中川めぐみ・中畑美咲・中村優子・別所 陽・和歌山由菜・池田一登・石川世将・大内望咲・落合美怜・佐々木葉月・成田真美・成田有希・船橋美晴・松尾佳奈・村上千敏・和田千明（以上、弘前大学日本考古学ゼミナール学生・大学院生）
9. 本文中はすべて敬称略とさせていただいた。
10. 調査に際して、以下の機関、個人にご協力・ご教示を賜った。記して感謝申し上げる。

秋田県立博物館・秋田県立公文書館・男鹿市教育委員会・潟上市教育委員会・潟上市郷土文化保存伝習館・五城目町教育委員会・東京大学総合研究博物館・五城目町文化の館・三種町教育委員会・稲葉佳代子・五十嵐祐介・片岡太郎・加藤 竜・川上 護・増永洋一・鎌田義人・佐宗亜衣子・諏訪 元・関根達人・高橋忠彦・武井紀子・富樫泰時・廣嶋 司・越高博美（順不同・敬称略）
11. 実測したデータ・図面は、弘前大学人文社会科学部北日本考古学研究センターで保管している。
12. 本研究は、平成23～27年文部科学省特別研究「冷温帯地域の遺跡資源の保存活用促進プロジェクト」（調査）、平成28・29年度弘前大学人文社会科学部特定プロジェクト研究センター経費（整理）によって実施された。

観察表の凡例

土器観察表の表記基準を以下で示す。文様等の分類基準は第1章第2節「土器の分類基準」を参照されたい。

1. 時期

時期は、後期後葉、後期末葉をそれぞれ後後、後末と略した。

2. 部位

図2に部位の模式図を示した。() は観察表で用いる略語である。深鉢、鉢、浅鉢は、上から、口唇部(口唇)、口縁部(口)、頸部(頸)、体部(体)、底部(底)、台部(台)である。注口土器、壺は、上から、口唇部(口唇)、口縁部(口)、頸部(頸)、体部上半(体上)、体部下半(体下)、注口部(注口)、底部(底)である。残存部位については、口縁部から体部下半までがある場合、口-体下と示す。うち口-底と示す場合は、口縁部から底部までの完形を示す。

3. 計測値

計測値の() は、残存値あるいは復元径を示す。器高は口縁部から底部までの長さである。口径は、口縁部の径である。最大径は外径のうちの最大値である。底・台径は、底部・台部の径である。厚さは、時期ごとにその平均値が変わる。このため、体部上半の厚さの平均値を出した。貼瘤等の突起がある場合は、これを除いて計測した。

4. 文様

文様分類は、第1章第2節iv・vを参照されたい。表では口縁部と頸部以外に施される例が少ないため、体部などは「その他」に記載した。同一部位で複数の文様が施文される場合は、「7+5」のように上の文様(5)+下の文様(7)の順で記載した。文様単位がわかる場合は「5×5」のように記載し、これは文様(5)が5単位であることを示す。例えば「(7+5)×8」は文様7と文様5が8単位ずつ施されることを示す。無文の場合は、「無」と記載した。欠損の場合は、空欄にした。

5. 底部

第1章第2節viiiに従い、以下のように表記した。

平底：平、上げ底：上、丸底：丸、球底：球、尖底：尖、四脚：脚

6. 地文

地文は、主文様が施文される前の文様である。LRは単節LR縄文、RLは単節RL縄文、無は無文(地文なし)を示す。方向は地文の方向を示す。→は複数の地文・方向の場合の順番を示す。同一部位に複数の文様がある場合は、上記「4. 文様」に拠った。

7. 混入物

混入物はその含有量が多い順から順番に略語を用いて示した。略語は以下の通りである。

qu:石英(quartz)、sa:砂(sand)、rm:赤色鉱物(red material)、ws:白砂(white sand)、ph:金雲母(phlogopite)、fe:長石(feldspar)、bi:黒雲母(biotite)、ss:海綿状骨針(sponge spicule)

8. 調整

調整は、土器の器面調整の種類と方向をしめす。調整は須藤隆編(1995)の定義を参考にした。略語で記載した。略語は以下の通りである。

ミ:みがき、ナ:なで、ケ:けずり、オ:おさえ、地:地文で調整不明

9. 色調

色調は、土器の器面の色である。『標準土色帳 2008年度版』(農林水産省農林水産技術会議事務局 監修)に拠った。器面のなかで最も広範囲に分布し平均的な色調を取りあげた。内面、外面の列はそれぞれの色の名前、記号はそれぞれのJIS標準色票の記号番号である。

10. 炭化物

炭化物は、土器に付着した炭化物の付着部位と、その量である。部位、量の順で記載した。量は、厚く(厚)→やや厚く(微厚)→薄く(薄)、この三段階で判断した。() は観察表における略語である。実測図では目立つ場合にトーンでその範囲を示した。

11. 付着物

炭化物以外の付着物である。主に、赤漆を含む赤色顔料(赤)とアスファルト(アス)の付着について記載した。() は観察表における略語である。観察表ではその範囲を記載した。実測図では灰色のトーンでその付着範囲を示す。

目 次

例言

観察表の凡例

第1章 本書刊行の目的	上條信彦
第1節 本書刊行の経緯と研究の対象	1
第2節 土器の分類基準	2
第2章 五城目町教育委員会の中山遺跡発掘調査資料の再検討	長谷川大旗・落合美怜・田中康貴・上條
第1節 五城目町教育委員会の中山遺跡発掘調査資料について	6
第2節 82年度調査出土土器・土製品	8
第3節 83年度調査出土土器	24
第4節 90年度調査出土土器	48
第5節 出土位置不明資料	54
第6節 遺構内出土土器	57
第7節 出土土器からみた中山遺跡における空間利用	63
第3章 東京大学総合研究博物館所蔵の中山遺跡出土遺物	上條・長谷川
第1節 調査の背景	66
第2節 『石器 中山』（複製）の再発見	67
第3節 考古学的視点からみた『石器 中山』の内容	67
第4節 東京大学総合研究博物館所蔵標本の再検討	72
第5節 まとめ	73
第4章 館岡コレクション	長谷川
第1節 館岡コレクションの内容	80
第2節 館岡コレクションの中山遺跡出土資料	80
第5章 中山遺跡出土寄贈石製品	上條
第6章 石川理紀之助旧蔵資料	石川世将・長谷川
第1節 資料について	84
第2節 石川理紀之助旧蔵資料の検討	84
第7章 高石野遺跡出土遺物	大内 望咲・牧野つぐみ・上條
第1節 高石野遺跡の概要	87
第2節 検討の方法	87
第3節 高石野遺跡出土完形土器	88
第4節 高石野遺跡出土土器片	96
第5節 高石野遺跡出土土製品・石製品	116
第6節 高石野遺跡の遺物分布	119

第8章 大沢Ⅰ遺跡出土遺物	落合・伊藤昂平・牧野	
第1節 遺跡について		121
第2節 大沢Ⅰ遺跡出土土器		122
第3節 大沢Ⅰ遺跡出土土製品・石製品		128
第9章 佐藤初太郎旧蔵の大沢遺跡出土遺物	上條	
第1節 佐藤初太郎旧蔵資料について		131
第2節 佐藤初太郎旧蔵大沢遺跡出土遺物		132
第10章 天野源一旧蔵の大沢遺跡出土遺物	上條	
第1節 天野源一旧蔵資料について		136
第2節 天野源一旧蔵大沢遺跡出土遺物		136
第3節 大沢遺跡出土遺物のまとめ		138
参考文献		143
写真図版		145

第1章 本書刊行の目的

第1節 本書刊行の経緯と研究の対象

平成17年に設立された弘前大学人文学部附属亀ヶ岡文化研究センター（現 人文社会科学部北日本考古学研究センター）では、縄文時代晩期の東日本に展開した亀ヶ岡文化の実態を探るべくこれまで、青森県外ヶ浜町今津遺跡（晩期中葉）、同・三戸町杉沢遺跡（晩期前葉～中葉）、同・むつ市不備無遺跡（晩期前葉～末葉）の調査を行った。これらの三遺跡は地域的に津軽半島域、馬淵川流域（南部地域）、下北半島域の三地域に区分することができ、それぞれの地域性がうかがえる資料を蓄積したことになる。以上のこれまでの調査によって、青森県域の亀ヶ岡文化について、一括資料が少なかった現状から、石器などを含めた検討が可能となった。

特に、亀ヶ岡文化の実態に迫るためには、造形的に優れた資料群だけではなく、その背景にある経済基盤や技術などにも眼を向けていくことが重要である。そこで本センターでは低湿地遺跡の重要性に着目し、秋田県五城目町中山遺跡を発掘調査した。低湿地遺跡は泥炭遺跡とも呼ばれ、古くは亀ヶ岡遺跡や是川中居遺跡など、すでに亀ヶ岡文化の研究史のはじめより注目されていた。近年、低湿地遺跡の調査例の増加や、資料に対する保存科学あるいは自然科学的分析技術の進展により、これまで困難であった低湿地遺跡の調査技術が向上し、自然科学的分析によって土器や石器だけでは分からない縄文時代の実像が分かりつつある。

そこで、八郎潟を中心に、専門知識をもつ大学機関と、地域と密着して活動する自治体が協同して、資料を再調査、再評価を行うことにした。五城目町教育委員会、男鹿市教育委員会とは縄文時代晩期を中心とする調査研究のための共同研究を開始した。日本海沿岸の縄文時代晩期は、東北日本海沿岸の沖積平野では砂丘が発達したため、良好な遺跡は少ないものの、秋田市戸平川遺跡例などの低湿地から漆器類が検出された遺跡もあり、こうした遺跡を調査することにより縄文の具体像が明らかになりつつある。

本書では、共同研究において過去の調査で出土した資料の集成・記録化を行った。これは、本研究におけるもうひとつの目的である、発掘調査が単なる学術研究で終わることなく、「考古資料」が少なくとも遺跡を知る地域の人びとへ、地域アイデンティティを深める作用のひとつとして成果を還元できないかということに関連する。遺跡の中には、過去の調査の結果、地域の人々が財産であるという認識をもちつつも、資料が活用されないまま、あるいは過去に活用されたものの、さらに事例の増加した現在でも再評価されないままの資料が数多く眠っている。特に過去に調査された資料の多くは昭和50年～平成初期に注目された資料であり、それから20数年の年月が経ち、その頃生まれた世代が地域の担い手となりつつある。

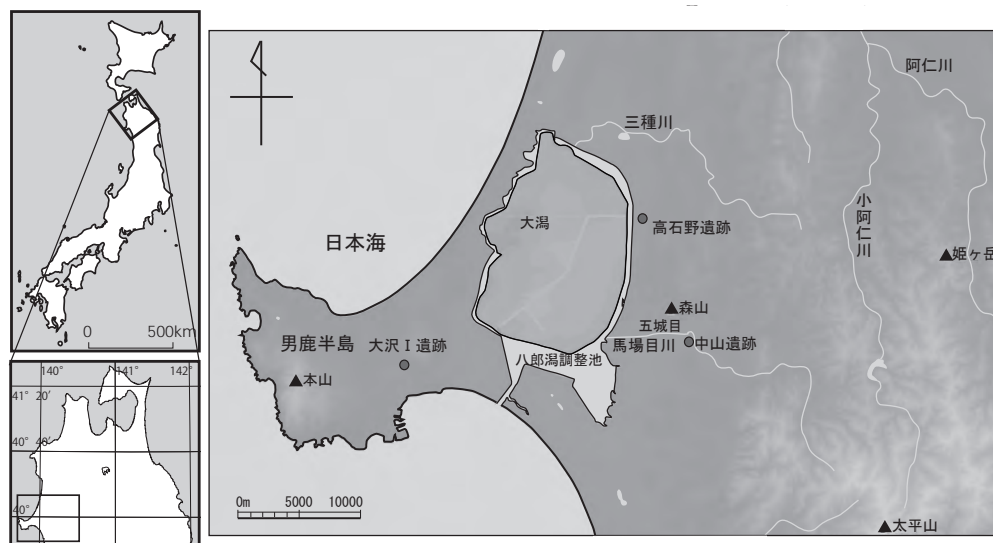


図1 八郎潟と調査遺跡の位置

しかしながら、再評価されないままの資料は、彼ら地域の担い手から注目される機会は徐々に少なくなっていると感じられる。その一環として、特別展示の実施や、文様のデザイン化とその応用、学史的資料の蓄積とその研究など、地域で活躍する大学ならではの独自の視点による研究・教育活動を展開し、発掘資料の再評価を行っている。本書では、2011年から開始した弘前大学の中山遺跡の発掘調査を機に始めた八郎潟沿岸域の縄文時代後晩期の遺跡群である中山遺跡の過去の発掘資料の調査、三種町高石野遺跡、男鹿市大沢Ⅰ遺跡（図1）の資料調査の成果を取めた。実習の一環で750点余の資料を資料化し、実物を用いた教育的効果も大きい。今後、各遺跡の再評価につながることを希望したい。

最後に五城目町教育委員会、男鹿市教育委員会、三種町教育委員会、東京大学総合研究博物館、潟上市教育委員会、潟上市郷土文化保存伝習館、秋田県立博物館、秋田県教育委員会、五城目町民の皆様にはこうした目的にご賛同賜ったうえ、調査にご協力を賜り、報告書への刊行までこぎつけることができた。改めて感謝申し上げたい。

（上條 信彦）

第2節 土器の分類基準

土器の観察属性について以下に記す。第2章以降、分類記号は、便宜上文章中に（ ）付けで挿入した。

i. 器種

器種は、長谷部言人が考案したとされる「正方形九等分法」を基準とした。縄文土器を正方形の9等分した枠にはめ込み、各部位の割合で器種を決定するものである（甲野 1995）。これに加えて、機能や形状等を付帯して以下のように分類した。

深鉢：口径と器高の比が1以上のもの

精製深鉢：文様や突起といった装飾のつく深鉢

粗製深鉢：地文のみで、文様等の装飾のない深鉢

鉢：口径と器高の比が1未満～1/2以上のもの

台付鉢：鉢に台がつくもの

浅鉢：口径と器高の比が1/2未満～1/3以上のもの

台付浅鉢：浅鉢に台がつくもの

壺：体部が丸く膨らみ、細い頸部が作出されるもの

注口土器：注口部があるもの

香炉形土器：鉢の口縁部に橋状の釣り手や、様々な透かしがつくもの

ミニチュア：極めて小型のもの

ii. 器形

〈鉢・深鉢・浅鉢〉

括れにより分類した。括れがある器形はその場所で細分した。

1：括れがある器形

1a：括れが、器高の1/4以下にあるもの。頸部が比較的長い。

1b：括れが、器高の1/4以上にあるもの。頸部が比較的短い。

2：括れがない器形。頸部が内湾または、直立するもの。

〈壺〉

体部の形状で分類した。

1：体部が球状のもの。

2：体部上半と下半の境界が明瞭に稜線で区切られ、三角形を呈するもの。

〈注口土器〉

口縁部の傘部の有無、体部上半と下半の比率で分類した。その中で頸部の位置により細分した。

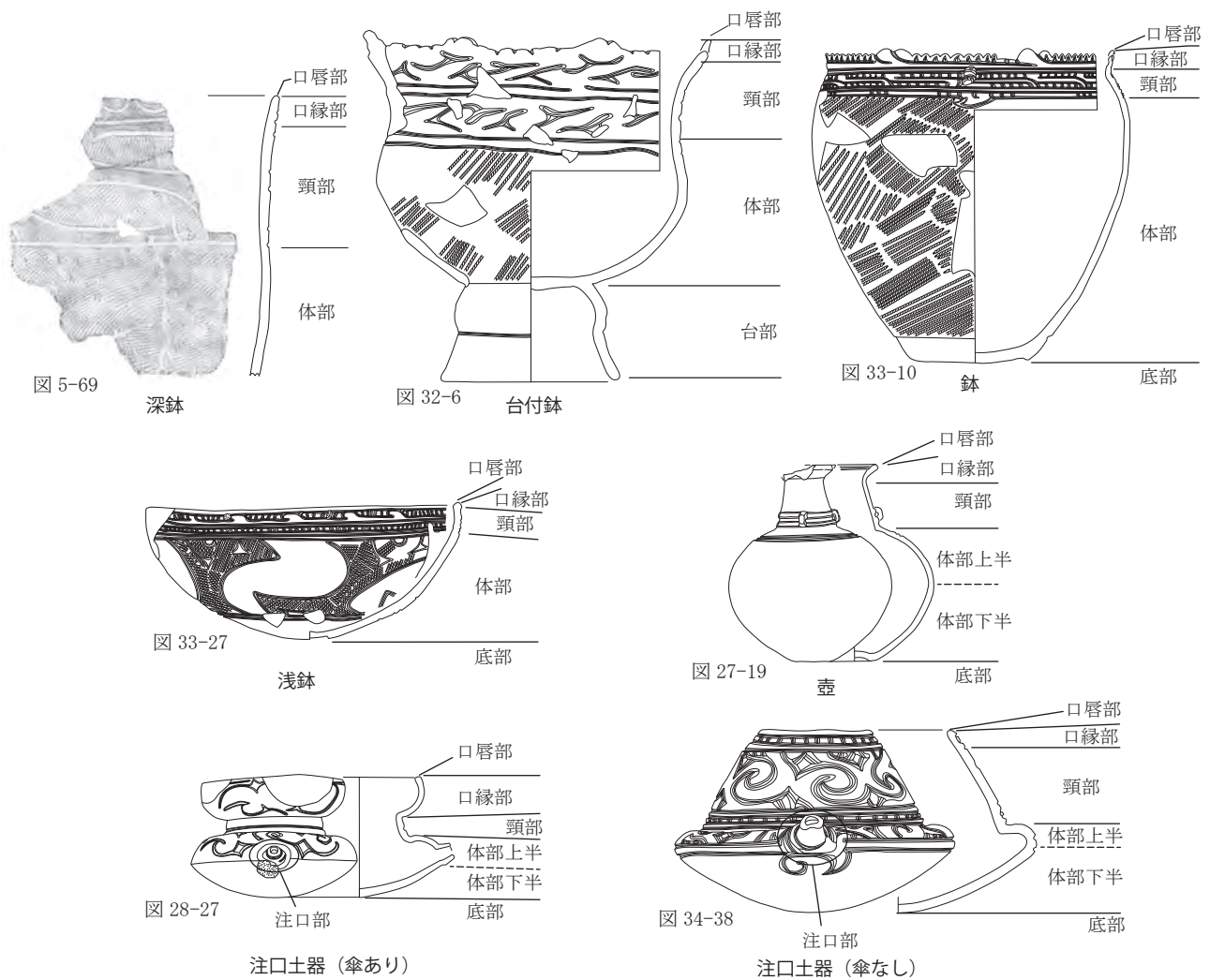


図 2 器種・部位模式図

A：傘のつくタイプ

B：傘のつかないタイプ

1：体部上半と下半の比率が1：3以上のもの

2：体部上半と下半の比率が1：3以下のもの

2a：2のうち、肩部が頸部より張り出すもの

2b：2のうち、肩部が頸部より張り出さないもの

iii. 部位

部位は、図2にその模式図を示した。深鉢、鉢、浅鉢は、上から、口唇部、口縁部、頸部、体部、底部、台部に分類した。注口土器、壺は、上から、口唇部、口縁部、頸部、体部上半、体部下半、注口部、底部に分類した。頸部は、括れのある器形の場合は、括れと口縁部との間を指し、括れより下を体部とした。括れない器形の場合は、頸部と体部の間に明確な境界線がないが、口縁部直下の文様帯の終わりを、その境界とした。注口土器と壺は体部の最大径より上を体部上半、下を体部下半とした。

iv. 文様帯

文様帯は、土器に帯状に展開する施文範囲のことで、当該期は幾層にわたって重なる個体が多い。本報告では文様帯を、深鉢、鉢、浅鉢は、口唇部・口縁部・頸部・区画・体部文様帯に分類した。注口土器と壺は口縁部・頸部・体部上半・体部下半・注口部文様帯に分類した。

〈口唇部文様帯〉

口縁部の縁に設定される文様帯である。主に晩期中葉の浅鉢に見られる。

〈口縁部文様帯〉

口縁部の形態に沿って設定される文様帯である。壺と注口土器は、傘部に設定される文様帯も口縁部文様帯とした。口縁部文様帯が無文で頸部文様帯に文様モチーフが施される場合も多い。基本的に副文様である。

〈頸部文様帯〉

口縁部の下に設定される文様帯である。深鉢と鉢において、入組帯状文や入組三叉文のような、主文様モチーフが施されることが最も多い。口縁部にほど近いところに施された文様でも、そのモチーフが頸部文様帯由来の場合はこの文様帯に分類した。浅鉢では、主文様モチーフが施される文様帯が体部となる場合が多く、非常に狭く副文様モチーフが施される場合が多い。

〈体部文様帯〉

頸部の下に設定される文様帯である。深鉢や鉢では、施文される個体が少ない。施文される場合は、頸部文様に副文様が施され、体部文様帯に主文様モチーフが施されることが多い。浅鉢では体部文様帯に配置文等の主文様モチーフが施される。壺、注口土器は体部上半に施される文様をこの文様帯に含めた。

〈区画文様帯〉

頸部文様帯と体部文様帯の間の文様帯である。二つの文様帯を区画するようにキザミや横位の挟りといった区画文様が施されることが多い。

〈注口部文様帯〉

注口土器の注口部直下に主に1単位で施される文様帯である。

v. 口縁部

〈口縁部形態〉

平口縁、波状、突起の3つに大別し、その中で突起は、山形のもの、B字形突起（B突起）のもの、それ以外に分類した。なお、本文及び観察表には本基準による番号で記載した。

- | | |
|------------------------|----------------------|
| 1：平口縁。装飾がなく、平坦なもの。 | 4：山形口縁。山形の突起が連続するもの。 |
| 2：突起口縁。平口縁に突起がつくもの。 | 5：B突起。B突起があるもの。 |
| 3：小波状口縁。 | |
| 3'：小波状口縁のうち特に細かい波状のもの。 | |

〈口縁部断面〉

断面の形態と肥厚の有無を基準に分類を行った。分類は、須藤編（1995）を参考にした。なお、本文及び観察表には本基準による番号で記載した。

- | | |
|------------------------------|--------------------|
| 1：調整により、緩やかな丸みをもつもの。 | 4：2のうち口縁部が肥厚するもの。 |
| 2：丸みを削り取ったり、調整したりして、平坦になるもの。 | 5：口縁部外面がそぎ落とされたもの。 |
| 3：1のうち口縁部が肥厚するもの。 | 6：口縁部内面がそぎ落とされたもの。 |

〈口縁部文様〉

口縁部に施文される装飾をモチーフで分類した。また、口縁部に施される文様以外の装飾もここに含めて分類した。

- | | |
|-----------------|---------------------|
| 1：貼り瘤のつくもの。 | 4：玉抱三叉文が施されるもの。 |
| 2：キザミが施されるもの。 | 5：口縁部に沿って弧線が施されるもの。 |
| 3：山形三叉文が施されるもの。 | 6：三角形の挟りが施されるもの。 |

vi. 文様モチーフ

主な文様をモチーフで分類した。2個体以上の土器に施される文様に限定して下記の通り分類した。他の文様は、観察表にその文様を明記した。口縁部文様以外は、この基準を基に分類を行った。

- 1：入組帯状文。磨消縄文により、帯状文が段で入組む文様。
 - 1a：多段入組帯状文。段が二つ以上形成されるもの。段部は内側に入組まないもの。
 - 1b：多段入組帯状文。段が二つ以上形成されるもの。段部は内側に入組むもの。
 - 1c：入組帯状文のなかで、縦に連続した「Z」字状に展開するもの。
 - 1d：多段入組帯状文。段部が発達し、弧状になるもの。
- 2：挟入組帯状文。入組帯状文に三角形の挟りが施されるもの。
- 3：玉抱三叉文。玉状の沈刻文や円状の沈刻文を三叉状の沈線である三叉文が囲うもの。
- 4：連弧文。連続した弧により文様を構成するもの。
- 5：入組三叉文。沈線によって三叉文が互いに入組むもの。
- 6：羊歯状文。沈刻により、連続した四角形を曲線に沿ってポジで表現する文様。
 - 6a：羊歯状文のうち、縦のクランクを充填するように四角形のポジ文が配され、それぞれの単位で分離するもの。
 - 6b：羊歯状文のうち、それぞれのクランクが、端部で結合し、四角形のポジ文が充填するもの。
 - 6c：羊歯状文のうち、それぞれのクランクが、端部でかぎ状に入組み、四角形のポジ文が充填するもの。
 - 6d：羊歯状文のうち、二段の直線に並んだ四角形のポジ文が直線のポジ文に区画されるもの。
 - 6e：羊歯状文のうち、二段の直線に並んだ四角形のポジ文が区画なしで配置されるもの。
 - 6f：羊歯状文のうち、一段の四角形のポジ文のみのもの。
- 7：渦巻文。沈線により、渦巻のように同心円を描く文様。
- 8：配置文。雲形の文様を配置するもの。
- 9：無文帯。文様モチーフはないが、無文の帯を作出しているもの。
- 10：ノ字文。沈線により「ノ」字型の曲線を描くもの。
- 11：横位挟り。連続した横位の挟り。
- 12：工字文。沈線により「工」の字のような文様を描くもの。

vii. 瘤

縄文時代後期後葉の土器は、瘤付土器と称されるほど、瘤が隆盛する。瘤は貼付によって作出される貼瘤である。この属性は当該期を考察するうえで、非常に重要な属性であるため、瘤の密度、位置に着目して分類を行った。

「瘤の密度」は面積における瘤の量を比較するために設けた。ほとんどが破片資料のため、破片の面積における瘤の割合を求めた。指数は「破片の面積÷瘤の数＝瘤1つ当たりの面積」として求めた。この場合、数値が小さい方が、瘤の詰まり具合が大きい。

viii. 刻目と挟り取り（キザミ）

隆帯や口唇、突起などに連続の沈刻を施すことである。「キザミ」には刻目と刺突、挟り取り、横位挟りがある。

刻目：平たくとがった工具を突き刺して沈刻することで、線状の刻みが施され断面は三角形になる。

刺突：とがった工具を突き刺す、点々とした沈刻である。

挟り取り：横に粘土を挟り取ることに、連続する沈刻を描くことで、断面は丸になることが多い。

横位挟り：連続した横位の挟り取りで、挟り取りの間の空白部分に粘土の盛り上がりや瘤がつくことが多い。

ix. 底部

平底：底が平らなもの。

上げ底：底の中心が端部より上に上がるもの。

丸底：球底に丸い台を付け少し持ち上げるもの。

球底：球状の底で、接地面が小さく、安定しないもの。

尖底：底が尖っていて自立しないもの。

四脚：四つの脚で接地するもの。

第2章 五城目町教育委員会の中山遺跡発掘調査資料の再検討

第1節 五城目町教育委員会の中山遺跡発掘調査資料について

本章では昭和57(1982)・58(1983)年度、平成2(1990)年度の五城目町教育委員会による調査時に出土した資料のうち、未掲載資料を中心に図化した。検討の結果、昭和57年度調査出土土器131点、土製品3点、昭和58年度調査出土土器202点、平成2年度調査出土土器31点、計367点を本書に掲載することができた。今回の再検討により、中山遺跡全体の時期的な様相を明らかにすることができる。

中山遺跡は秋田県北秋田郡五城目町高崎字中泉田ほかに所在し、八郎潟の東岸に流れ込む馬場目川流域に位置する。中山遺跡は明治中期にはその名が知られる。考古学史的な背景として、明治29(1896)年に佐藤伝蔵による亀ヶ岡遺跡の発掘報告が東京人類学会雑誌に掲載された後であり、亀ヶ岡遺跡をはじめとする、いわゆる泥炭遺跡の成因とその民族について議論されていた頃になる。佐藤初太郎の中山遺跡調査も、佐藤伝蔵氏の調査で提起された課題を意識して調査されたものと見られる。残念ながら、佐藤初太郎の調査については、その後の佐藤の異動とも絡みその実態は不明であったが、後に触れるように、『石器 中山』のコピーの発見によりその概要が明らかとなった。『石器 中山』を見る限りでは、秋田県ひいては日本国内においても当時としては亀ヶ岡遺跡の次に東北で注目されてもよいほどの精細な報告であったとみられる。

中山遺跡の研究略史を述べるにあたり、本項では明治年間と、昭和57年以降との二つに大別して述べてゆく。

(1) 明治年間の調査とその後

中山遺跡が文献上に現れるのは、明治16(1883)年『東京人類学会雑誌』第2巻第11号、真崎勇助「秋田県鑛石産地一覧表」における「高崎－泉屋敷俗ニ中山ト云」の記述からである。

明治33(1900)年4月に佐藤初太郎による最初の中山遺跡の発掘調査が実施される。佐藤は『石器 中山』と題する和綴じ本に調査結果を残しており、その報告では、出土遺物、遺跡の地勢、地質について言及された(佐藤1900)。なお、佐藤初太郎については第3章で詳述する。

この後に中山遺跡の名が見られるのは昭和3(1928)年『日本石器時代遺物発見地名表』における中山遺跡の地名の記載(東京帝国大学1928)、および『人類学雑誌』第58巻第7号「石器時代土偶の乳房及び下腹部膨隆に就いて」における人類学教室に羽後国出土の土偶が23点あることを紹介、出土地として中山の記載がある程度で、大正・昭和期になると文献ではほとんど現れなくなる。

(2) 昭和57・58年度、平成2年度の五城目町教育委員会による調査

昭和57(1982)年には五城目町教育委員会によって中山遺跡のA区、B区、C区が調査された(五城目町教育委員会1983)。この調査により、住居跡1軒、竪穴状遺構2基、土坑墓12基、土坑30基及び4基の土器埋設遺構が検出された。

土坑墓はA区で3基、B区で9基の計12基が検出された。遺物の出土した土坑墓はA区で3基、B区で3基である。出土した土器は貼瘤文土器、平行な数条の刻目帯を施す土器、入組状の文様を施す土器である。これらの6基についてはいずれも縄文時代後期後半に時期比定されている。

出土した遺物は縄文時代後期から晩期に至る土器、及び土製品と、石器、石製品である。「土器は大別して縄文時代後期の十腰内Ⅲ～Ⅳ式を中心とする刻目列を施すもの(1類)、貼瘤文を付した十腰内Ⅴ(2類)及び後期中葉から晩期初頭に至るまで多用される入組文を施す土器群(3類)を中心とし、加えて三叉文を施す晩期大洞B式のもの(4類)も少なからずみられる。…(中略)これらの事から、本遺跡は縄文時代後期から晩期初頭にかけ2時期をとだえることなく連続して営まれたものと考えられる。」と述べ

られている。石器は石鏃・石匙が多数出土した反面、石錘は1点も無く、山間部に位置する本遺跡の生活形態の一端を表すと考えられている。

C区は佐藤初太郎の報文を参考に調査が実施され、その結果、湿地帯の土層はほぼ佐藤氏の報文と一致した。土器は縄文時代晩期主体で、A区・B区で多量に出土した後期の遺物はなかった。

続く昭和58(1983)年の調査では、遺構の分布を確認することを目的とし、新たにD区・E区・F区が設定された(五城目町教育委員会1984)。

D区においては、土坑2基、不明遺構1基が確認された。

E区においては、配石を伴う土坑群が確認された。土坑は16基のうち土坑内に石のあるものや坑底部にベンガラが確認されたものもある。

F区では、Ⅱ層より土器片、石器片が多量に出土した。Ⅲ層においてほぼ完形に近い土器が出土した。泥炭層において、赤色塗彩の土器、木製品、骨片、クルミ、トチノキ、編布などが出土した。他にも、動物の下顎骨、樹皮製品、漆塗りの弓や櫛をはじめとする漆器類なども出土した。しかし、土層観察用ベルトが崩壊したことにより、より詳細な土層図を作成し得なかったことが述べられている。

この調査により、土坑18基、その他の遺構5基が検出された。土坑は配石を伴い楕円形ないしは円形を呈し、土坑内には人頭大の石を配したものや坑底面にベンガラが確認されたものがある。さらにこの土坑群が1組2～5基からなるグループによって、環状に連なること、配石は環状の中心部の広場に配されることなどが分かった。土坑内からは、土器片・フレイクが出土し、「明確な時期を決定する資料とはなかったが、一応時間的に幅はあるものの遺構外出土の遺物と同時期と考えたい」と述べられている。また、これらの土坑の形態はほぼ同時期の、湯出野・梨ノ木塚・上新城中学校・藤株・平鹿遺跡などの土坑墓と極めて類似するもので、中山遺跡検出の18基も土坑墓と考えられた。

土器は第Ⅰ群土器7類(十腰内V式併行)と第Ⅱ群土器5類(大洞C2式)が主体である。なお第Ⅱ群土器は大洞B式(第1類)、大洞BC式(第2・3類)、大洞C1式(第4類)、大洞C2式(第5類)に分類された。

石器は「縄文時代後期～晩期に伴う各種の石器は出土したものと考えられるが、石錘だけは2回にわたる調査でも出土しておらず、疑問を感じるところである」と述べられている。

木製品は樹皮製品・木製品・漆器等20余点が泥炭層のⅥ・Ⅶ層から出土したが、樹種は同定されていない。このうち、樹皮製品は直径30cmほどのドーナツ状をしたものであり、枝についたままの杉の葉を杉皮で巻き束ねたものである。ウサギの捕獲具であるワラダに類似することからワラダ状製品として注目を浴びた。木製品は全面を黒漆で仕上げたのちに赤漆を塗った丸木弓、棒状木製品が出土した。漆器は漆櫛、木胎漆器、樹皮胎漆器などが出土した。

編布は漆漉し布である。編布の編み方は宮城県山王岡遺跡(縄文晩期)出土のものと同じであることが述べられている。

平成2(1990)年の調査は、これまでの確認調査に基づき、湿地帯・泥炭層における遺物の出土状況と分布範囲、遺跡の性格等をより詳しく把握することを目的として行われた(五城目町教育委員会1991)。F区に隣接する10m×10mを仮にF'区として設定された。しかし、湧水・悪天候・土砂崩壊の危険性などの悪条件が重なり、最終的には北隅の36㎡の区画にしばらくこんで調査が行われた。そのため、土層調査も西側壁面のみの不完全なものになってしまったことが述べられている。

出土した遺物は土器・石器・木製品・クルミ・トチノキ・鹿角である。

土器は縄文時代後期後半から晩期前半までのものである。土器は昭和58(1983)年度報告書と同じく、後期後半を第Ⅰ群土器、晩期前半を第Ⅱ群土器として分類された。第Ⅰ群土器は瘤つきの深鉢形土器・壺形土器・注口土器(第1類)、入組帯状文に刻目が施された深鉢形土器(第2類)、大部分を深鉢形土器が占める、口縁部や入組帯状文の屈曲部等に三叉状陰刻や三叉文が施された土器(第3類)、磨消による無文部がひろがり、並行帯の縄文や口縁部だけに縄文のある土器(第4類)、比較的薄手で焼成が良い無文の土器(第5類)、条線文の施された土器(第6類)、縄文のみ施された土器(第7類)に分類された。

石器はフレイクを除いて50点ほどであり、石鏃・石匙・石錘・石棒・石斧・凹石・石皿である。

植物性遺物は木製品・漆器・樹皮製品等58点あるが、樹種は同定されていない。

以上の五城目町教育委員会による発掘調査（昭和57・58年、平成2年）により、丘陵部から谷部にかけて広い範囲に分布する縄文時代後期末葉～晩期中葉の遺跡であることが判明した。なお、谷部の低湿地から発掘された漆塗弓や漆漉し布などの植物質遺物などは、「中山遺跡出土漆工及び漆工関係出土品」として秋田県指定有形文化財となった。

（上條 信彦・田中 康貴）

第2節 82年度調査出土土器・土製品（図3-1～図6-131、図7-1～3、表1）

本章では、1982年に発掘調査されたA区とB区の資料について述べていく。遺構内出土土器、遺構外の順、遺構外はA区・B区で層位ごとに述べていく。

（1）A区遺構内出土土器（図3-1～18）

SKI01（図3-1～5）

深鉢は5点（1～5）図示した。すべて後期末葉である。器形は1のみわかり、器高の半分ほどでゆるく括れる。2は山形口縁で、肥厚する。4点（1・2・4・5）の頸部に入組帯状文がある。特に4・5は細分でき、段部が内側に入組む文様で、5は段部が互いに結合する。キザミは3・4につき、3が挟み取り、4が刻目である。瘤は1のみに二個一対でつく。

SK01（図3-6～9）

深鉢は4点（6～9）図示した。すべて後期末葉である。器形がわかるものはない。2点（6・7）で口縁部が残り、いずれも平口縁である。2点（6・7）の頸部に入組帯状文がある。8は体部片で縄文の帯のうえから沈線がある。9は口縁部片で、刻目の帯がある。7は82年報告書図19-13に掲載された。

SK04（図3-10）

ミニチュアの注口土器を1点（10）図示した。後期末葉である。器形は器高の中心付近で稜が作出される。底部は非常に小さく自立しない。注口部下部に若干の隆帯がある。文様はない。注口部は非常に小さく形骸化したと考えられる。

SK09（図3-11）

深鉢を1点（11）図示した。後期末葉に位置付けられる。頸部に入組帯状文があるとみられる。

SK11（図3-12）

深鉢を1点（12）図示した。後期末葉～大洞B1式である。平口縁で、頸部に無文帯がある。

SK12（図3-13～17）

鉢を1点（15）、浅鉢を2点（13・14）、注口土器を2点（16・17）図示した。

鉢（15）は大洞BC式である。器形は頸部で鋭く括れる。B突起がある。頸部は無文で、体部に羊歯状文のうち、方形のボジ文列（6f類）がある。

浅鉢は2点（13・14）ある。13は晩期前葉と考えられる、台付浅鉢の台部である。外面の全面に赤色顔料が付着する。底部付近に1条、台部に2条の沈線がある。14は大洞BC式である。器形が体部半分ほどで括れ、底部付近が平たい。平口縁である。頸部にはボジ文のみの羊歯状文が3段（6f類）あり、体部～底部には互いにクランクが結合する羊歯状文（6b類）がある。

注口土器は2点（16・17）ある。いずれも大洞BC式である。16は注口土器の頸部片である。傘がつかない。文様は2段構成で、上下ともに羊歯状文があるが、モチーフは不明である。17は注口部片である。ほぼ真横に注口部が伸びる器形が想定できる。注口部の上下にB突起があり、沈線文があるがモチーフは不明である。正面には菱形の挟みがある。

SK13（図3-18）

壺は1点（18）図示し、晩期前葉以降と考えられる。壺の口縁部である。A突起がつき、三角形の挟みが入る。

(2) B区遺構内出土土器 (図3-19～26)

SK20 (図3-19)

深鉢を1点(19)図示した。後期末葉に位置付けられる。口縁～頸部片である。突起がつき、断面は肥厚する。口縁～頸部に掛けて刻目がつく。頸部は、入組帯状文もしくは刻目による無文帯が想定される。

SK25 (図3-20)

深鉢を1点(20)図示した。口縁部もしくは頸部片である。三角形の挟りがある。

SK26 (図3-21・22)

深鉢を2点(21・22)図示した。後期末葉～大洞B1式である。ともに口縁部片である。21は地文縄文である。文様があるがモチーフは不明である。22は、山形口縁の山の部分である。口唇部にキザミがあり、口縁部に沿って弧線がある。断面は肥厚する。

SK32 (図3-23)

注口土器を1点(23)図示した。大洞B1式である。口縁～頸部片である。器形は傘のつかない器形、平口縁で、頸部に玉抱三叉文が施される。

SK35 (図3-24)

ミニチュア土器の深鉢を1点(24)図示した。大洞B1式である。B突起がある。器形は頸部下で鋭く括れる。口縁部と頸部下部に弧線が巡り、その間に頸部文様として玉抱三叉文が施される。

SK38 (図3-25・26)

深鉢を1点(25)、注口土器を1点(26)図示した。25は大洞B2式である。口縁～体部片である。器形は内湾し、小波状口縁である。頸部は無文の上に沈線が2条施される。補修孔がある。26は後期末葉～大洞B1式に位置付けられる。注口部片である。注口部下部に三角形の挟りがある。

(3) 遺構外出土土器 (図4～6)

遺構外出土土器について区ごと、層位ごとに土器の特徴を述べていく。なお、B区は資料のなかに、層位が分かるものがなかった。本項では器種ごとに掲載し、器種の中で時期ごとに並べた。なお、深鉢と鉢はその区別が明確でない時期であるため、一括した。

A区I層 (図4-27～6-96)

深鉢・鉢61点(27～87)、浅鉢6点(88～93)、壺1点(94)、注口土器1点(95)、香炉形土器1点(96)を図示した。

深鉢・鉢は61点図示した(27～87)。後期中葉末の深鉢・鉢は、1点(27)ある。27は口縁～頸部片で、羽状縄文が地文である。頸部は段部で折り返されたり、木の葉状に上下に展開したりする入組帯状文が推定される。

後期後葉の深鉢・鉢は9点(28～36)ある。器形がわかるものは少なく、2点(34・35)とも緩く括れる器形である。4点(28・29・31・36)が平口縁で、1点(30)は山形口縁である。頸部は無文帯2点(28・29)と、入組帯状文3点(32・33・36)がある。器面装飾は貼瘤とキザミが特徴的である。瘤は7点(28～30・32～35)、隆帯は3点(30・31・36)につく。瘤がつくもののうち、5点(28・29・32・33・35)には複数個つく。キザミは4点(32～35)につく。このうち3点(32～34)のキザミは爪により作出された細かい刻目、35のキザミは比較的太く、断面がアーチ状の工具による連続刺突が推察される。36の地文は縦条痕である。

後期末葉の深鉢・鉢は27点(37～63)ある。器形がわかるものは1点(38)で、ゆるく括れる器形である。突起口縁が12点(37・46・50ほか)と最も多く、平口縁5点(39・43～45・49)、大波状口縁4点(41・42・47・48)、山形口縁2点(52・60)と続く。口縁部断面形態は肥厚するものが14点(37・41・42ほか)と半分以上を占める。口縁部には2点(41・42)に入組帯状文がある。特に入組帯状文の中で、41は段部が結合する文様、42は段部が内側に入り組む文様である。頸部は入組帯状文が最も多く14点(37～46ほか)、次に無文帯が6点(55～57・61～63)ある。入組帯状文を細分すると、段部が内側に入り組むものが3点(43・45・59)、連続したZ字状のもの2点(37・38)、木の葉状に上下に展開するもの2点

(39・40)、段部が互いに結合するもの1点(41)、段部内側に入り組まないもの1点がある(44)。器面装飾は主にキザミであり、ほとんどに施文される(37・39・40～44ほか)。キザミの種類は刻目が17点と最も多く(37・39～41ほか)、連続刺突が5点(43・44ほか)、挟り取りが2点(42・43)ある。工具の種類は後期後葉と同じである。瘤は4点にみられ(38・41・48・61)後期後葉に比べて少ない。なお、43と44は同一個体である。

このうち特徴的な個体は、39・41・47である。39は口縁～頸部片である。頸部には刻目に区画された間に、入組帯状文の端部が木葉状に上に連なり、単位の間を三叉状の挟りがある。40も同じ文様であるが三叉状の挟りはない。41は口縁～頸部片である。大波状口縁で、波状の頂部に二つの突起、最も低い部分に突起がつく。口縁部と頸部に段部で結合する入組帯状文が幾段にわたる。段部等に貼瘤がある。刻目は口縁部に沿って2条、口縁部と頸部の区画に1条ある。42と同じ形態である。47は口縁部片で、大波状口縁が推察され、頭頂部に二個一対の円突起がある。突起は刻目で縁取られ、真中が指圧により凹む。刻目は口縁部に沿ってつく。口縁部は無文で、頸部との区画に刻目がある。

大洞B1式の深鉢・鉢は15点(64～78)ある。このうち器形がわかるものは1点(69)で頸部が長く、非常に緩く括れる。山形口縁8点(66～68ほか)、平口縁3点(70・71・73)、小波状口縁1点(69)、大波状口縁1点(64)である。口縁部には、弧線5点(64・69・75～77)、山形三叉文2点(75・76)である。頸部には、挟入組帯状文3点(64～66)、入組帯状文5点(67～69・70・72)、無文帯5点(73～77)がある。入組帯状文を細分すると、段部が内側に入り組むものが4点(67～70)ある。地文はすべて縄文である。器面装飾は74に貼瘤がある。

これらのうち特徴的な個体は64・69・78である。64は口縁～頸部片である。口縁部は肥厚し、大波状の山形口縁である。文様は口縁部と頸部にあり、共に挟入組帯状文である。口縁部は施文部位に制限されたためか、やや崩れる。キザミがなく、挟入組帯状文がある点から大洞B1式のなかでも古手に属す。69は口縁～体部片である。頸部が若干括れる。小波状口縁で、文様は口縁に波状に沿った連続した弧線、頸部に多段入組帯状文がある。器形や口縁部形態から64よりも新しいとみられる。78は口縁～頸部片である。口縁部直下で緩く括れる器形である。口縁部に正面1単位のみ突起がつく。頸部に沈線による入組文の間に玉がつき、それを三叉文が囲う。これは玉抱三叉文と入組三叉文の過渡期的文様とみられる。文様から大洞B1式の最も新しい段階に位置付けることができる。

大洞B2式の深鉢・鉢は2点(79・80)ある。79は口縁～頸部片で、口縁部直下で緩く括れる。口縁部には二個一対とみられる突起がある。頸部には入組三叉文がある。80は口縁～体部片である。器形は内湾する。小波状口縁で、口縁部に文様はない。頸部には入組三叉文がある。

大洞BC式の深鉢・鉢は7点(81～87)ある。器形は内湾する器形が3点(81～83)、頸部で鋭く括れる器形が4点(84～87)ある。微細小波状口縁が4点(81・83・84・87)とほとんどを占め、平口縁が1点(82)ある。84は細かい小波状口縁に突起がつく。口縁部には、山形三叉文が5点(81・83～85・87)につく。頸部には全て羊歯状文のうち方形のポジ文列(6d類)が施される。

浅鉢は7点(88～93)図示した。後期末葉～大洞B1式は1点(89)ある。89は無文で、内湾する器形、口縁部には突起がつく。大洞BC式は1点(93)ある。93は台部である。台は外開きで地面に接する部分がツマミ状に外に張り出す。台部に方形のポジ文列(6d類)がある。

大洞C1式は3点(90～92)ある。器形はいずれも内湾する。平口縁が2点(90・91)、92は微細な小波状口縁にB突起が併う。頸部・体部文様は3点とも同じで、頸部に羊歯状文のうち方形のポジ文列(6f)、体部に配置文がある。

大洞C2式は1点(88)ある。88は口縁部直下で括れる。B突起が連続する。頸部は無文で、体部に崩れた配置文がある。頸部無文かつ崩れた配置文は大洞C1式よりも新しい要素としてとらえることができ、大洞C2式に属する。

壺は1点(94)図示した。後期末葉である。頸部片で、無文帯が複数条あり、貼瘤が3個つく。

注口土器は1点(95)図示した。大洞B1式である。頸部と注口部周辺のみが残る。器形は口縁部に傘がつく。平口縁で、文様はない。注口部は2段づくりである。

香炉形土器は1点(96)図示した。後期末葉である。頭頂部片で、二個一対の突起が1単位つき、穿孔

がある。頸部には刻目が巡る隆帯がある。内面は調整がなく輪積み痕が明瞭に残る。

A区Ⅱ層（図6-97～100）

深鉢・鉢は3点（97～99）、注口土器は1点図示した（100）。後期末葉は2点（97・98）ある。いずれも突起口縁である。97は突起の口唇部に十字状のキザミがある。頸部は97に入組帯状文があるが、98は不明である。いずれも刻目がある。

大洞B2式は1点（99）ある。99は頸部片で渦巻文がある。

注口土器は1点（100）で大洞BC式である。100は口縁～頸部片である。器形は傘のつかない器形で、平口縁である。頸部は羊歯状文が複数段で構成する。上から方形のボジ文列2段（6e類）、クランクが端部で結合するもの（6b類）の順で施文される。

A区層位不明（図6-101～119）

深鉢・鉢14点（101～114）、浅鉢4点（115～118）、注口土器1点（119）を図示した。後期後葉は1点（101）ある。101は口縁～頸部片で、平口縁である、頸部は入組帯状文と考えられる。多数の貼瘤がつき、瘤密度は0.44である。

後期末葉は5点（102～104・107・113）ある。102は口縁～頸部片である。口縁部は肥厚し、突起がつく。頸部は入組帯状文で、刻目がすべての帯に充填される。瘤は口縁部にある。103は口縁～頸部片で、大波状口縁とみられる。口縁部は弧線の帯に連続刺突が充填される。頸部は入組帯状文が推定され、連続刺突が充填される。また、波状の谷部に細長い隆帯がある。104は頸～体部片で、頸部に挟入入組帯状文、体部に入組帯状文もしくは、玉抱三叉文がある。107は口縁～頸部片である。突起がつき、肥厚する。口縁部に挟り取りによる帯があり、頸部には入組帯状文がある。113は口縁～体部片で、頸部がわずかに残る。頸部と体部に入組帯状文がある。頸部と体部の間（区画）に無文帯がある。また、口縁部、区画に連続刺突の帯がある。刺突は右から左へ施される。

大洞B1式は5点（108～112）ある。108は口縁～頸部片である。口縁部は肥厚し、突起がつく。頸部は玉抱三叉文と考えられる。109～112の口縁部は似た属性が多い。いずれも山形口縁で、頂部がキザミにより三叉になる。口縁部には山形三叉文が施され、弧線が加わるものもある（111・112）。これらのうち、112は器形が緩く括れ、頸部に入組帯状文がある。

後期末葉～大洞B1式は2点（105・106）ある。105は頸部片で、入組帯状文がある。106は口縁～頸部片である。口縁部に突起がつき、それ以外は地文縄文のみである。

大洞B2式は1点（114）ある。器形は直立し、小波状口縁である。頸部文様は不揃いであるが入組三叉文とみられる。

浅鉢は5点（115～118）図示した。このうち後期末葉は1点（115）ある。115は口縁～底部付近まで残る。山形口縁で、三叉状の挟りがある。口縁部以下は無文で底部付近に沈線が1条ある。

大洞C1式は3点（116～118）ある。器形はいずれも直立する。116が平口縁で、117・118が小波状口縁である。117は口唇部に弧線の装飾、口縁部に山形三叉文がつく。117・118の頸部に沈線が2条ある。体部は3点すべてに配置文がつく。

注口土器は1点（119）で、大洞B2式である。口縁部（傘部）のみの残存で、器形は傘がつく。正面に1単位の突起がつく。口縁部文様は正面1単位の渦巻文である。

B区遺構外出土土器（図6-120～125）

深鉢を1点（120）、浅鉢を5点（121～125）図示した。うち深鉢は後期末葉である。120は頸部片で、入組帯状文がある。

浅鉢は5点（121～125）で、すべてが大洞C1式である。122・125は口縁～体部が残り、121・123は体部のみ、124は体部～底部片である。122は器形が内湾、平口縁である。頸部に刺突がめぐる。125は器形が内湾し、B突起がつく。頸部は連続する方形のボジ文（6f類）である。体部には121～125に配置文がある。124の底部形態は平底である。

区・層位不明（図 6-126～131）

深鉢・鉢は 4 点（126～129）、壺は 1 点（130）、ミニチュア土器は 1 点（131）図示した。

深鉢・鉢のうち後期末葉は 2 点（126・127）ある。126 は口縁～頸部片で、突起がつく。頸部は入組帯状文と考えられる。口縁部と頸部に刻目がある。127 は頸部～体部片で、入組帯状文がある。

大洞 B2 式は 1 点（128）で、口縁～頸部片である。器形はゆるく内湾し、微細小波状口縁である。口縁部には山形三叉文が弧状に施される。頸部は入組三叉文であるが、ポジで作出され、入組部にポジ文があり、羊歯状文への過渡期的な様相である。

大洞 BC 式は 1 点（129）で、口縁～体部片である。器形はゆるく内湾し、微細小波状口縁である。口縁部には山形三叉文を施す。頸部は羊歯状文のうち互いのクランクで分離する。

壺は 1 点（130）で大洞 C1 式である。130 は体部片である。体部には配置文がある。

ミニチュア土器（壺）は 1 点（131）で後期末葉である。器形が注口土器に酷似し、傘がなく体部はソロバン形である。だが、注口部がないため、器種は壺に分類される。文様は頸部中央の無文帯を挟んで上下に沈線が数条巡るのみである。ミガキ調整が丁寧になされている。

（4）82 年度出土土製品（図 7-1～3）

土偶が 1 点（1）、土玉が 2 点（2・3）ある。

土偶（1）は中実の脚部もしくは腕部片である。表裏に沈線があり、不規則に横に施文される。形態から後期末葉に比定される。

土玉（2・3）はいずれも中実である。2 は真中で括れる。刺突があり、横にキザミが 4 ヲ所入る。摩耗が激しい。3 は扁平で、上下から凹んでいる。横にキザミが巡り花卉状になる。

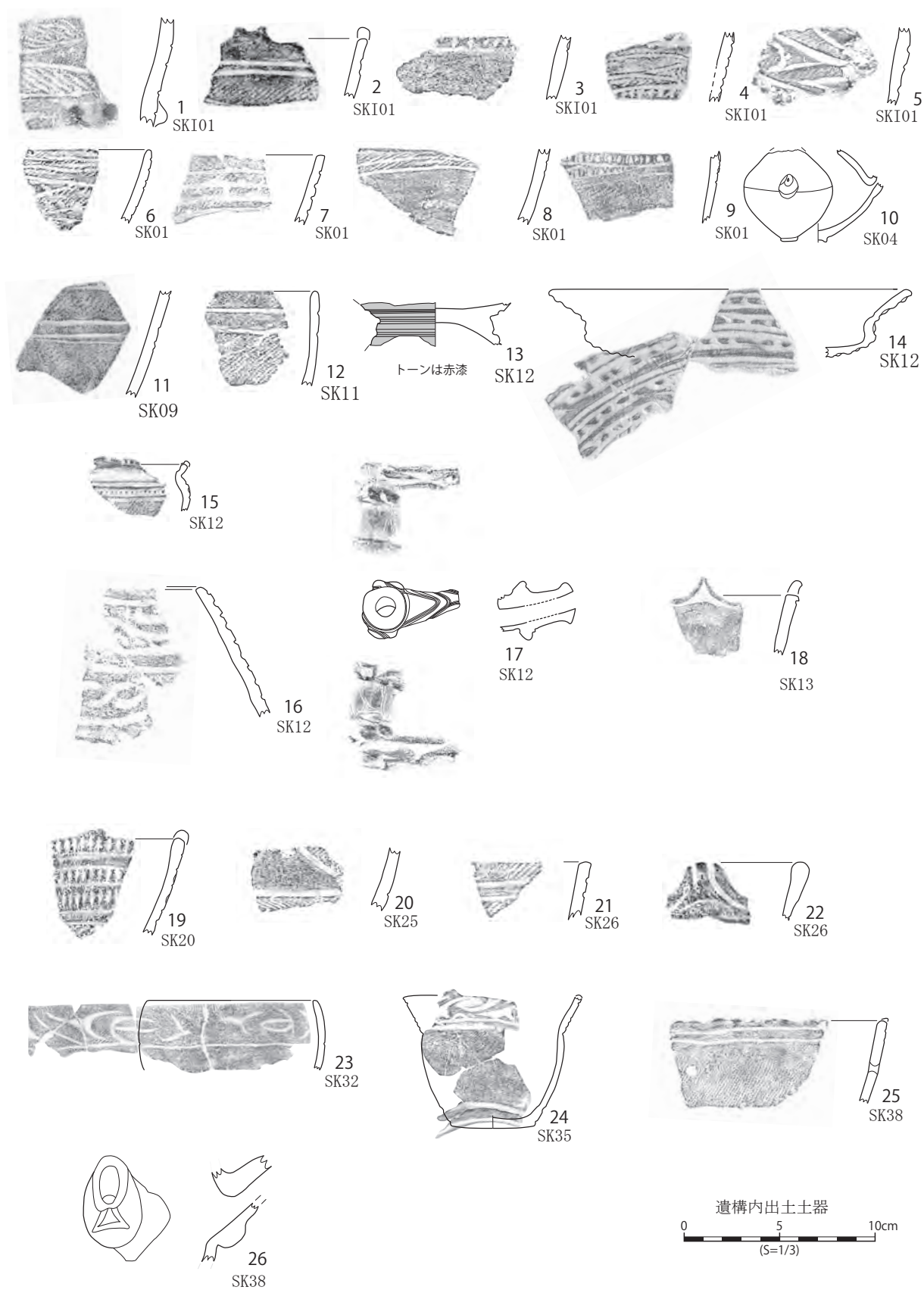


図 3 中山遺跡 1982 年度発掘調査出土資料・1

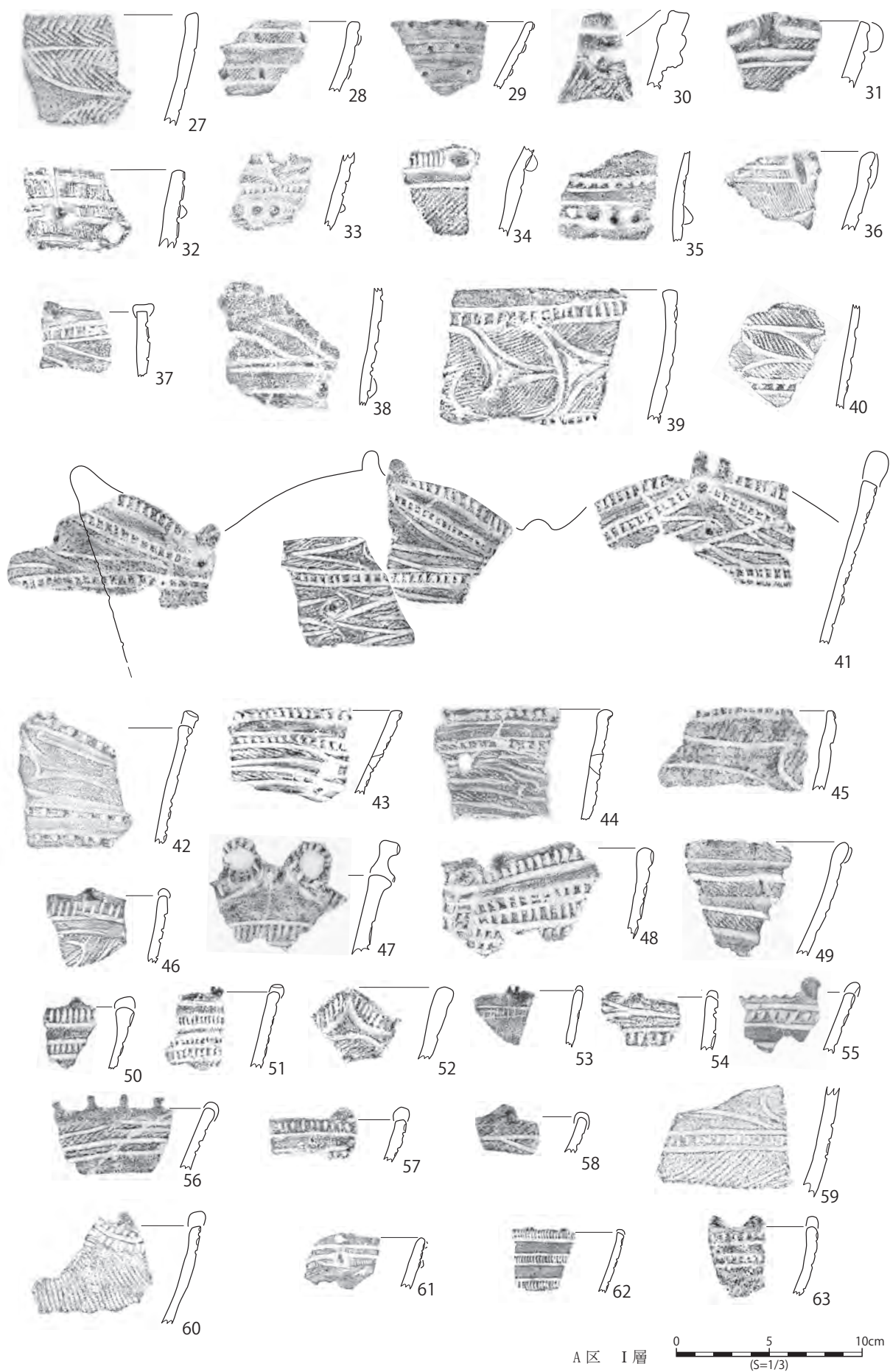


図 4 中山遺跡 1982 年度発掘調査出土資料・2

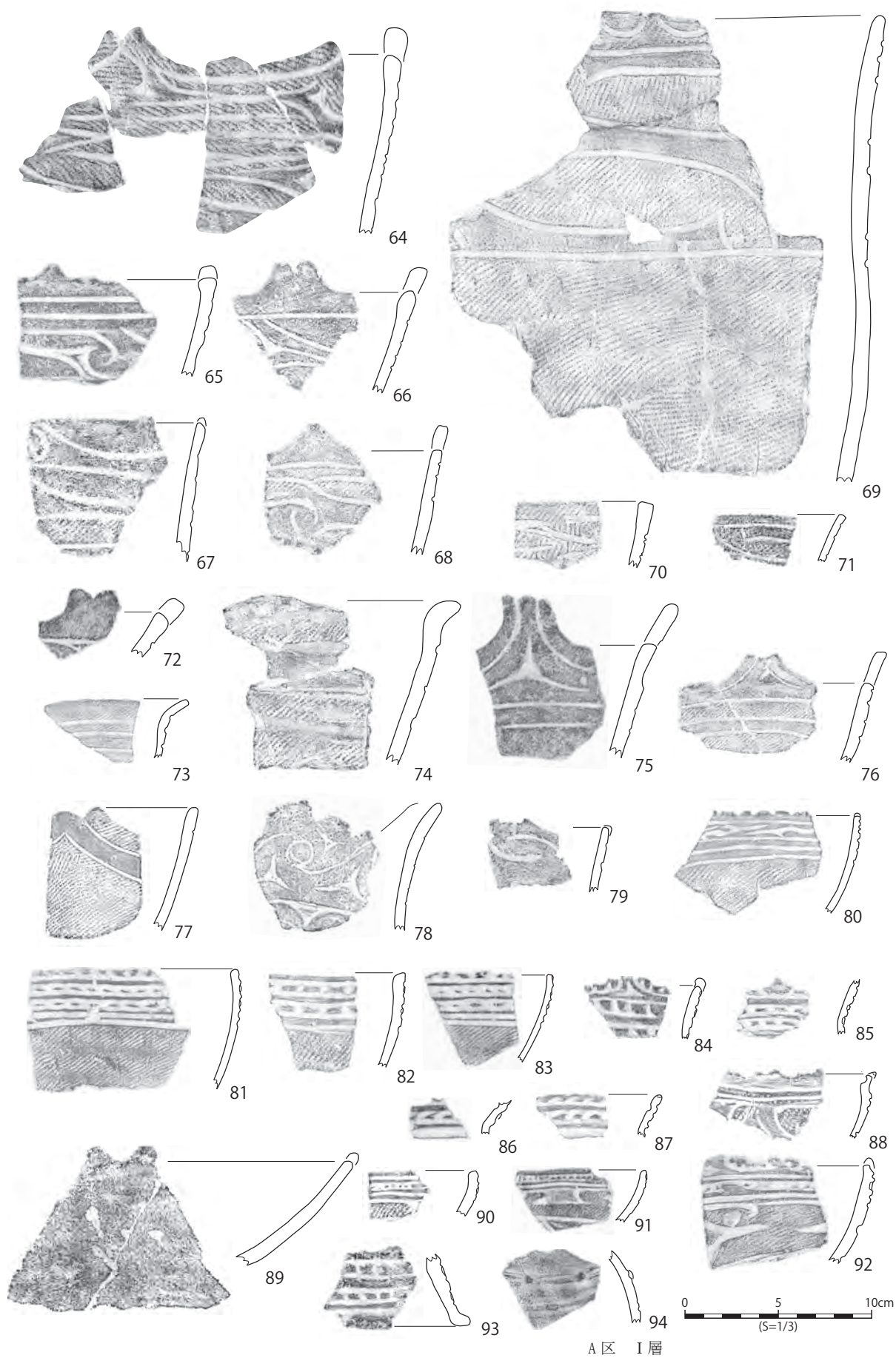


図 5 中山遺跡 1982 年度発掘調査出土資料・3

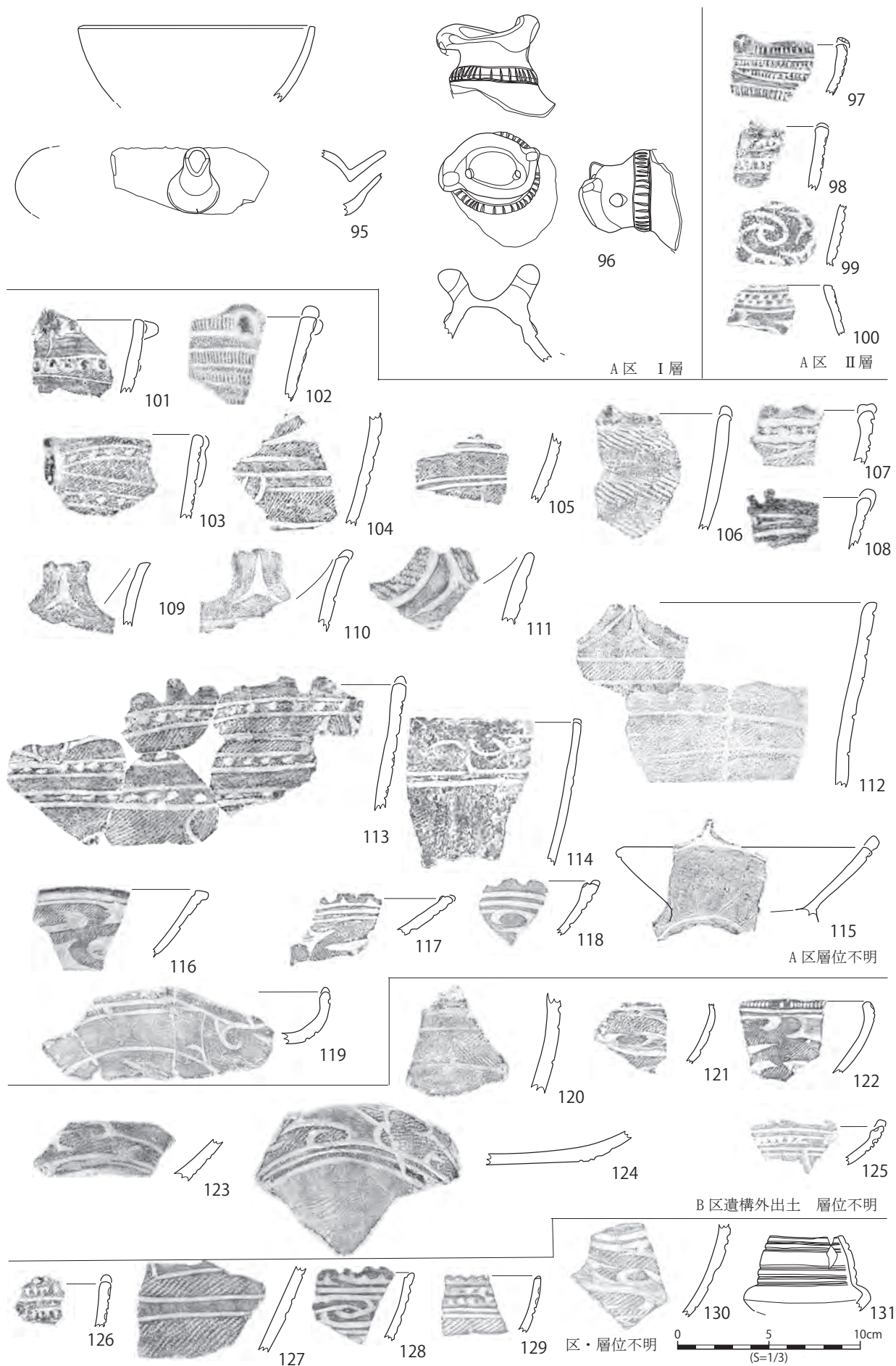


図 6 中山遺跡 1982 年度発掘調査出土資料・4

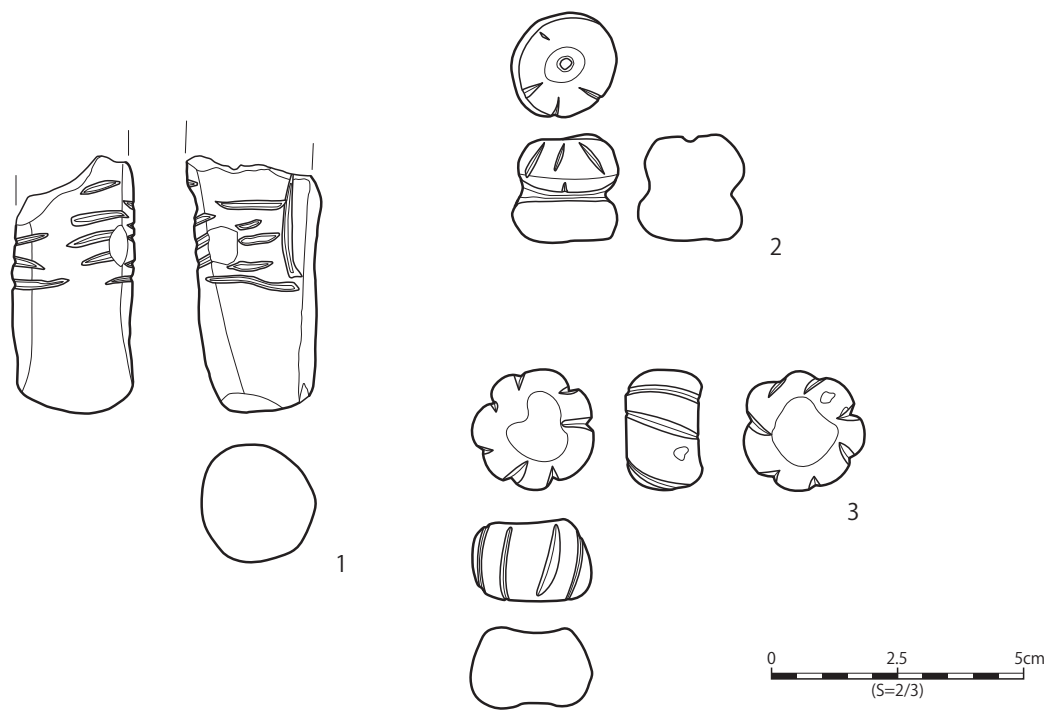


図 7 中山遺跡 1982 年度発掘調査出土資料・5

表 1 中山遺跡 1982 年度出土土器・土製品観察表

土器

図 番 区 号	グ リ ド /遺構	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 残存値		口縁		文様		底 形 態	キザミ 種類	地 文 種 類	方 向	混入物	調整		色調		炭化物		備考	
					器高 (cm)	口径 (cm)	厚さ (mm)	器形	断面形	口縁						頸	口縁	内面	外面	内面	外面		内面
1	A	SK101	深鉢	後末	頸	7	1a			1			LR	右斜	qu・ss	ナ	横	ナ	黄橙	10YR8/6	黄橙	10YR8/6	
2	A	SK101	深鉢	後末	口-頸	(120)	6	4	4	1			LR	左斜	ws・qu	ケ	横	ミ	褐	7.5YR4/3	明褐	7.5YR5/8	
3	A	SK101	深鉢	後末	頸	7				2		挾取			qu・ws	ナ	横	ナ	浅黄	2.5Y7/3	にぶい 褐	7.5YR5/3	
4	A	SK101	深鉢	後末	頸	5				1b		刻目			qu・ws	ナ	横	ナ	灰黄褐	10YR5/2	にぶい 黄橙	10YR6/3	
5	A	SK101	深鉢	後末	頸	7					頸：1b (段部分が接続)		LR	左斜	qu・ws	ナ	横	ミ	浅黄橙	10YR8/3	にぶい 黄橙	10YR7/3	
6	A	SK01	深鉢	後末	口-頸	(200)	6	1	1	1			LR	左斜	qu・ws・rm	ミ	横	ミ	褐灰	7.5YR4/1	にぶい 褐	7.5YR5/4	
7	A	SK01	深鉢	後末	口-頸	(120)	5	1	2	1			LR	左斜	qu	ナ	横	ナ	黒褐	10YR3/1	にぶい 赤褐	5YR5/4	体 厚
8	A	SK01	深鉢	後末	頸	6					細文帯 の上から沈線		LR	左斜	qu・ss	ナ ミ	横	ミ	橙	5YR6/6	にぶい 橙	7.5YR6/4	
9	A	SK01	深鉢	後末	口-体	5				2		刻目	LR	左斜	qu・ws	ミ	横	ミ	にぶい 黄橙	10YR4/3	にぶい 黄橙	10YR6/7	体 薄
10	A	SK04	注口	後末	体-底	4	1						上	無	qu・ws・ss	ミ	横	ミ	浅黄橙	10YR8/3	黒褐	10YR3/1	体 薄 ミニチュア
11	A	SK09	深鉢	後末	頸-体	6				1			LR	左斜	qu	ナ	横	ナ	にぶい 黄橙	10YR5/3	黒褐	10YR3/2	体 薄 体 薄
12	A	SK11	深鉢	後末- 大洞 B1	口-体	(180)	5	1	1	9			LR	左斜	qu・ws	ナ ミ	横	ミ	にぶい 褐	7.5YR5/3	にぶい 橙	7.5YR6/4	
13	A	SK12	台付 浅鉢	晩期 前葉	体-台	5							上		qu	ミ	縦	ミ	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR4/1	内・外： 赤漆
14	A	SK12	浅鉢	大洞 BC	口-体	(80)	4	1a	1	1	6f+ 6f+ 6f				qu	ミ	横	ミ	褐灰	10YR4/1	浅黄橙	10YR8/3	内： 体・赤漆
15	A	SK12	鉢	大洞 BC	口-体	(200)	4	1b	5	1			LR	左斜	qu	ナ ミ	横	ミ	褐灰	10YR4/1	褐灰	7.5UR5/1	内体黒漆
16	A	SK12	注口	大洞 BC	頸	(120)	5	B		1	6		LR	左斜	qu	ナ	横	ナ	にぶい 黄橙	10YR7/3	橙	5YR7/6	口 薄 頸
17	A	SK12	注口	大洞 BC	注口	10					注口： B突起				qu・ws				黒褐	10YR3/1	浅黄橙	10YR8/3	
18	A	SK13	壺	前葉 以降	口-頸	(120)	5	2 (A突起)	3	3					qu・ws・ss	横 ナ	斜	ナ	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/3	
19	B	SK20	深鉢	後末	口-頸	(140)	6	2	4	2	1or9				qu・bi	ナ	斜	ナ	黒褐	7.5YR3/1	にぶい 橙	7.5YR6/4	頸 薄
20	B	SK25	深鉢	後末	口or頸		7	2	1	6			RL	右斜	qu	ナ	横	ミ	黒褐	2.5Y3/1	灰黄褐	10YR5/2	
21	B	SK26	深鉢	後末- 大洞 B1	口-頸	(300)	6	1	2				LR	左斜	qu	ミ	斜	ミ	黒褐	10YR3/2	にぶい 黄橙	10YR7/4	
22	B	SK26	深鉢	後末- 大洞 B1	口	(220)	6	4	3	5					qu	ナ	斜	ナ	灰褐	7.5YR4/2	灰黄褐	10YR5/2	体 薄 口 薄

図 番 号	グリップ 区 / 遺構 層	器種	時期	残存 部位	計測値 () 残存値			文様			底 形 態	地文 種類	混入物 方 向	調整			色調		炭化物		備考					
					器高 (cm)	口径 (cm)	厚さ (mm)	器形	口縁					文 頭	その他	宿密度 ㎡/個	キザミ 種類	内 面	外 面	方 向		内面	外面	記号	内面	外面
									形態	断面形																
23 B SK32	注口	深鉢	大河 B1	口・頭	4	(90)	4	B	1	1	3		LR	左斜	qu	ナ	横	ナ	横	橙	75YR6/6	橙	75YR6/6	体	薄	ミニチュア
24 B SK35		深鉢	大河 B1	口・底	4		4	1a	5	1	5	3	平	左斜	qu・bi・ws	ナ	横	ミ	横	灰黄褐	10YR5/2	黒褐	75YR3/1	体	薄	
25 B SK38		深鉢	大河 B2	口・体	5	(140)	5	2	3	2		沈線	LR	左斜	qu・bi	ナ・ ミ	横	ナ・ ミ	横	黒	10YR2/1	浅黄橙	10YR8/4	薄	補修孔	
26 B SK38		注口	後末- 大河 B1	注口	7							注口： 三角形抉			qu	ナ	縦	ナ		灰白	10YR8/2	浅黄橙	10YR8/3			
27 A MG46	I	深鉢	後期 中葉 末	口・頭	6	(230)	6		1	6		頭：1 (段部で折り返し)	羽状 細文 LRRL		qu・ws	ナ	横	ナ	斜	にぶい 黄橙	10YR7/3	にぶい 黄橙	10YR6/3			
28 A MG45	I	深鉢	後口	口・頭	6	(120)	6		1	2	1	9	LR	左斜	qu・ws	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR5/1	褐灰	10YR4/1			
29 A MC46	I	深鉢	後口	口・体	4	(130)	4		1	2	1	9	LR	左斜	qu	ナ・ ミ	横	ナ・ ミ	横	褐	75YR4/3	にぶい 黄褐	10YR4/3	口	薄	
30 A MF46	I	深鉢	後口	口	6		6	4	2	2		隆帯+ 刺突	LR	左斜	qu・rm	ナ	横			にぶい 褐	75YR6/3	にぶい 褐	75YR7/4	口	薄	
31 A NI45	I	深鉢	後口	体	7	(120)	7		1			隆帯	LR	左斜	qu	ミ	横	ナ	横	灰褐	10YR5/1	にぶい 黄橙	10YR7/3			
32 A MG46	I	深鉢	後口	頭	8	(280)	8		1						qu	ナ	横	ナ	斜	浅黄橙	75YR8/4	浅黄橙	75YR8/6			
33 A MG45	I	深鉢	後口	口・頭	6		6		2	1					qu・ws	ナ・ ミ	横	ナ	横	褐灰	75YR4/1	にぶい 褐	75YR7/4	体	微厚	
34 A MG45	I	深鉢	後口	体	7		7	1a					LR	左斜	qu・ph・ss	ナ・ ミ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR7/4	にぶい 黄橙	10YR7/4			
35 A ME347	I	深鉢	後口	体	6	(220)	6	1a							qu・rm	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/3			
36 A MG85	I	深鉢	後口	口・頭	7	(270)	7		1	4		隆帯		右斜	qu・ws	ミ	横	ミ	横	にぶい 黄橙	10YR7/3	にぶい 褐	75YR7/4	体	薄	
37 A MC45	I	深鉢	後末	口・頭	6	(140)	6		2	4		1c			qu	ナ	横	ナ・ ミ	横	赤褐	5YR4/8	黒褐	10YR3/2			
38 A MG46	I	深鉢	後末	頭	5		5	1a				1c			qu	ナ	横	ミ	横	黒	10YR2/1	にぶい 黄橙	10YR7/3	体	微厚	
39 A MF46	I	深鉢	後末	口・頭	6	(320)	6		1	2	2	頭：1 (本葉状に上下)	LR	左斜	qu	ナ	横	ナ	横	にぶい 橙	75YR6/4	灰褐	75YR4/2	口	微厚	
40 A MC46	I	深鉢	後末	口	5		5					頭：1 (本葉状に上下)	RL	右斜	qu	ナ	横	ナ	横	黒	10YR2/1	にぶい 橙	75YR6/4	体	微厚	
41 A MH45	I	深鉢	後末	口・頭	7	(180)	7		大波状	4		口：1 (段部結合)+2+5 頭：1 (段部結合)			qu・ws・ph	ナ	横	ナ・ ミ	横	灰褐	75YR4/2	にぶい 橙	75YR5/4			
42 A MG45	I	深鉢	後末	口・頭	6	(300)	6		大波状	4	1b				qu・bi	ナ・ ミ	横	ナ・ ミ	横	灰黄褐	10YR5/2	にぶい 橙	75YR6/4	体	薄	
43 A MF47	I	深鉢	後末	口・体	6	(200)	6		1	3	2	1b		右斜	qu	ミ	横	ナ・ 斜	横	黒褐	10YR3/1	灰褐	75YR4/2	口	微厚	44と 同一個体
44 A MF46	I	深鉢	後末	頭	5	(210)	5		1	6	2	1a		右斜	qu	ナ	斜	ナ・ ミ	横	褐灰	10YR4/1	にぶい 黄橙	10YR6/3	体	微厚	43と 同一個体
45 A MG46	I	深鉢	後末	口・頭	6	(160)	6		1	2	2	1b		左斜	qu・ws	ナ	横	ナ・ 斜	横	にぶい 赤褐	5YR5/4	にぶい 橙	75YR6/4	体	薄	

図 番 号	グリッド 区 / 遺構	器種	時期	残存 部位	計測値 () 残存値		口縁		文様		底 形 態	地文 種類	方 向	混入物	調整		色調		炭化物		備考			
					器高 (cm)	口径 (cm)	器厚 (mm)	器形	断面形	口縁					口縁 形態	口縁 断面積	口縁 断面積	口縁 断面積	内面	外面		内面	外面	内面
46	A	MG47	I	深鉢	後末	口-頸	(110)	5	2	2	2	1	刻目	LR	左 斜	qu	ナ 横 ミ 横	にぶい 黄橙	10YR7/4	黒	2.5Y2/1			
47	A	NC46	I	深鉢	後末	口-頸	(27.0)	7	大波状	4		口縁：2 (刺突が巡る丸い突起二個 一対、真中凹)	刻目		ナ、 ミ	ナ 横 ミ	褐灰	10YR5/1	褐灰	10YR4/1	微 厚			
48	A	MD46	I	深鉢	後末	口	(300)	7	大波状	4	1+2		刻目		ナ	ナ 横	にぶい 黄橙	10YR6/4	にぶい、 橙	7.5YR6/4				
49	A	MG46	I	深鉢	後末	口-頸	(180)	6	1	4	1	0.10		RL	右 斜	qu	ナ 斜 ミ 横	灰褐	7.5YR4/2	にぶい、 褐	7.5YR5/3	微 厚	口 薄	
50	A	MG46	I	深鉢	後末	口-頸	(220)	5	2	4	2	1	刻目		ナ	ナ 横 ミ	にぶい 黄橙	10YR6/3	にぶい、 黄橙	10YR7/4				
51	A	MG45	I	深鉢	後末	口-頸	(90)	6	2	6			刻目		ナ	ナ 横	明赤褐	5YR5/6	明赤褐	2.5YR5/6	体 薄			
52	A	MC46	I	深鉢	後末	口	(120)	6	4	3	2+4		刻目	LR	左 斜	qu	ナ 斜 横 縦	にぶい 黄橙	10YR6/3	明褐	7.5YR5/6			
53	A	MC45	I	深鉢	後末	口-頸	(100)	5	2	1	2		連続刺突		ナ	ナ 横	にぶい 黄橙	10YR6/3	にぶい、 橙	7.5YR6/4	口 微 厚	体		
54	A	MH45	I	深鉢	後末	口	(190)	6	2	2			刻目		ナ	ナ 横	黒褐	2.5Y3/1	にぶい、 黄橙	10YR7/3				
55	A	MG45	I	深鉢	後末	口-頸	(260)	6	2	4	2	9	連続刺突		qu・ss	ナ 横 ミ	灰褐	7.5YR5/2	灰褐	7.5YR5/2				
56	A	MG46	I	深鉢	後末	口-頸	(190)	5	2	3	9			LR	左 斜	qu	ナ 横	灰褐	7.5YR4/2	浅黄褐	10YR8/3			
57	A	ME47	I	深鉢	後末	口-頸	(140)	6	2	4	2	9	刻目		qu	ナ 横	ナ 横	黒褐	7.5YR3/2	にぶい、 黄橙	10YR7/4	口 微 厚	体	
58	A	MC45	I	深鉢	後末	口	(90)	5	2	4	1			LR	左 斜	qu・ws	ナ 横	にぶい 黄橙	10YR7/3	褐灰	10YR4/1	口 薄	補修孔	
59	A	MC46	I	深鉢	後末	口		6			1b		刻目	LR	左 斜	qu	ナ、 ミ	ナ、 横 ミ	褐灰	10YR4/2	灰黄褐	10YR5/2	体 薄	
60	A	MG45	I	深鉢	後末	口	(80)	5	4	4	2+4		連続刺突	RL	右 斜	qu	ナ 横	ナ 横	黒褐	10YR3/2	灰黄褐	10YR5/2	体 微 厚	
61	A	ME46	I	深鉢	後末	口-頸	(120)	6	1	6	2	9	0.10	刻目		qu・ws	ナ 横	ナ 横	灰褐	7.5YR4/2	にぶい、 橙	7.5YR7/4		
62	A	MG45	I	深鉢	後末	口-頸	(120)	4	2	2	2	9	刻目		qu・ws	ナ 横	ナ 横	暗灰黄	2.5Y5/2	橙	5YR6/6			
63	A	MF48	I	深鉢	後末	口-頸	(160)	5	2	3	2	9	刻目		qu	ナ 横	ナ 横	にぶい 黄橙	10YR6/4	赤橙	10R6/6			
64	A	MC46	I	深鉢	大洞 B1	口-頸	(200)	7	大波状	3	口：2+弧線 頸：2			RL	右 斜	qu・ss	ナ 横 ミ	にぶい 橙	10YR6/4	にぶい、 黄橙	10YR6/4			
65	A	MG47	I	深鉢	大洞 B1	口	(260)	6	2	3	2	2			qu・ws	ナ 斜	ナ 斜	にぶい 黄橙	19YR7/4	灰黄褐	10YR4/2	口 薄	体	
66	A	MC45	I	深鉢	大洞 B1	口-頸	(200)	6	4	4	2	2			qu・ws	ナ 斜	ナ 斜	黒褐	10YR3/2	にぶい、 黄橙	10YR7/2	体 厚		
67	A	MH45	I	深鉢	大洞 B1	口-頸	(200)	7	4?	1?	1b			LR	左 斜	qu・ws	ナ 斜	灰黄	2.5Y6/2	にぶい、 黄橙	10YR7/2			
68	A	MC45	I	深鉢	大洞 B1	口-頸	(190)	7	4	2		1b		LR	左 斜	qu・ws	ナ、 ミ	ナ、 横 ミ	褐灰	10YR5/1	灰黄褐	10YR6/2		
69	A	MD45	I	深鉢	大洞 B1	口-頸	(200)	8	1a	3	1	5	1b		LR	左 斜	qu	ナ 横	灰黄褐	10YR5/2	にぶい、 黄橙	10YR7/3	体 薄	
70	A	MG46	I	深鉢	大洞 B1	口-体	(380)	6	1	4	1b			LR	左 斜	qu	ナ、 ミ	ナ 横	褐灰	10YR4/1	黒褐	7.5YR3/2	体 微 厚	

図 番 号	グリッド 区	層 /通構	器種	時期	残存 部位	計測値 () 残存値			口縁		文様	底 形 態	地文 種類	混入物	調整		色調		灰化物		備考
						器高 (cm)	口径 (cm)	厚さ (mm)	器形	断面形 形態	口縁 形状	密度 m/個	キザミ 種類		内 面	外 面	内 面	外 面	内 面	外 面	
71	A	MC46	I	深鉢	大洞 B1		(130)	5	1	2	1		LR	qu	ナ 横	ニ 横	黒褐	10YR3/2	にぶい 赤褐	5YR5/4	口 薄 ニ 頭
72	A	MC45	I	深鉢	大洞 B1		(170)	7	4	4	1?			qu・bi	ニ 横	ニ 横	黒	10YR2/1	にぶい 黄橙	10YR6/3	口 微 ニ 厚
73	A	MD45	I	深鉢	大洞 B1		(300)	4	1	1	9?		LR	qu・ws・ss	ニ 横	ナ 横	黒褐	10YR3/1	褐灰	10YR4/2	
74	A	MG46	I	深鉢	大洞 B1			7	2	3	9	0.01	LR	qu・ws	ナ 横	ナ 横	にぶい 橙	7.5YR6/4	にぶい 褐	7.5YR5/3	口 薄 ニ 頭
75	A	MC45	I	深鉢	大洞 B1		(160)	7	4	2	3+5	9	LR	qu・ws	ナ 斜	ナ 斜	にぶい 黄橙	10YR6/3	にぶい 黄橙	10YR6/3	口 薄 ニ 体
76	A	MD45	I	深鉢	大洞 B1		(220)	7	4	2	3+5	9	LR	qu	ニ 横	ニ 横	黒褐	10YR3/1	にぶい 黄橙	10YR6/3	口 薄 ニ 体
77	A	MC45	I	深鉢	大洞 B1		(150)	6	4	5	5	9	LR	qu・ss	ニ 横	ニ 横	黒褐	10YR3/2	にぶい 黄褐	10YR5/3	口 微 ニ 厚
78	A	MC45	I	深鉢	大洞 B1		(200)	6	1b	1	3-5 過渡期			qu	ナ 横	ナ 横	にぶい 黄橙	10YR6/3	灰黄褐	10YR5/2	口 微 ニ 厚
79	A	MC45	I	深鉢	大洞 B2		(130)	4	1b	2	1	2	5	qu	ナ 横	ナ 斜	にぶい 黄褐	10YR3/1	にぶい 黄褐	10YR5/3	口 微 ニ 厚
80	A	MF48	I	鉢	大洞 B2		(100)	4	2	1	3	5	LR	qu・ss	ニ 横	ニ 横	橙	7.5YR7/6	にぶい 褐	7.5YR5/4	
81	A	MF48	I	鉢	大洞 BC		(140)	4	2	3'	4	3	6d	qu・ss・ws	ニ 横	ニ 横	褐灰	10YR4/1	にぶい 黄褐	10YR5/3	
82	A	MF48	I	鉢	大洞 BC		(140)	5	2	1	2	6d	LR	qu	ナ 横	ナ 斜	オリ ニ 黒	5Y2/2	褐	7.5YR4/3	
83	A	MF48	I	鉢	大洞 BC		(140)	4	2	3'	1	3	6d	qu	ニ 横	ニ 横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	口 微 ニ 厚
84	A	MC45	I	鉢	大洞 BC		(150)	4	1b	3'+2	1	3	6d	qu	ニ 横	ナ 横	灰黄褐	10YR5/2	にぶい 黄褐	10YR6/4	
85	A	MG46	I	鉢	大洞 BC			4	1b	2	1	3	6d	qu・ss	ニ 横	ナ 横	褐灰	7.5YR4/1	にぶい 橙	7.5YR7/4	口 薄 ニ 体
86	A	MG47	I	鉢	大洞 BC			5	1b		6d			qu・ph・ws	ニ 横	ナ 横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	
87	A	MG47	I	鉢	大洞 BC		(240)	5	1b	3'	1	3	6d	qu	ニ 横	ニ 横	黒	10YR2/1	黒	10YR2/1	
88	A	MH45	I	浅鉢	大洞 C2		(160)	4	1b	5	1	9	LR	qu	ニ 横	ニ 横	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR4/1	口 微 ニ 厚
89	A	MC45	I	浅鉢	後ま 大洞 B1		(160)	9	2	2	1		無	qu・rm	ナ 斜	ナ 横	にぶい 黄橙	10YR7/3	にぶい 黄橙	10YR7/4	
90	A	MF48	I	浅鉢	大洞 C1		(120)	6	2	1	4	6f	LR	qu・ph・ws	ナ 横	ナ 斜	黒褐	10YR2/2	灰黄褐	10YR4/2	
91	A	MH45	I	浅鉢	大洞 C1		(130)	4	2	1	1	6f	LR	qu・ws	ニ 横	ニ 横	褐灰	10YR6/1	黒褐	10YR3/1	
92	A	MG46	I	浅鉢	大洞 C1		(220)	7	2	3'+5	6	3	6f	qu・ph	ニ 横	ニ 横	褐灰	10YR4/1	黒褐	7.5YR3/1	
93	A	ME46	I	台付 鉢or 浅鉢	大洞 BC		(80)	7						qu	ナ 横	ナ 斜	にぶい 黄褐	10YR5/3	にぶい 黄橙	10YR7/4	

図 番 号	グリッド 区 / 遺構	器種	時期	残存 部位	計測値 () 残存値		口縁		文様		底 形 態	地文 種類	調整		色調		灰化物		備考
					器高 (cm)	口径 (cm)	厚さ (mm)	器形	口縁 形態	断面形 態	口縁 断面積	口縁 断面積	口縁 断面積	口縁 断面積	口縁 断面積	口縁 断面積	口縁 断面積	口縁 断面積	
94	A MG47	I	壺	後後	頭	5		9	0.13				ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR7/4	黄橙	10YR8/6	
95	A ME47	I	注口	大洞 B1	口-体	(130)	6	A	1	2			ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR6/3			
96	A MG47	I	香炉	後末	頭頂部	6			穿孔 +2				ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR7/6	浅黄橙	10YR8/3	輪積痕
97	A MG47	II	深鉢	後末	口-頭	(150)	5	1	口唇： 十字に キザミ	2	2	1	ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR5/3	にぶい 黄橙	10YR6/4	頸 薄
98	A MF47	II	深鉢	後末	口-頭	(60)	6	2		3	2		ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR3/1	にぶい 黄橙	75YR7/3	
99	A NJ46	II	鉢	大洞 B2	頭	6		7					ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR7/4	にぶい 黄橙	10YR6/3	
100	A MJ46	II	注口	大洞 BC	口-頭	(80)	4	B	1	2	6e+6b		ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	25Y3/1	黄灰	25Y4/1	
101	A ME47		深鉢	後後	口-頭	7		1		2	1	1	ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	75YR7/4	黒褐	10YR3/1	口 微 厚
102	A MC45		深鉢	後末	口-頭	(210)	7	2		4	1+2	9	ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/4	
103	A MF47		深鉢	後末	口-頭	(120)	6	1	隆帯	1	1+5	1	ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	25Y2/1	にぶい 黄橙	10YR6/3	口 薄
104	A MD46		深鉢	後末	頭・体	6		2	体3or1				ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR3/2	にぶい 黄橙	10YR3/2	体 薄
105	A MH45		深鉢	後末- 大洞 B1	頭	5		1 ?					ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	75YR5/2	褐灰	75YR4/1	
106	A ME46		深鉢	後末- 大洞 B1	口-頭	(160)	6	2		4			ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR3/4	にぶい 黄橙	10YR7/5	口 微 厚
107	A ME45		深鉢	後末	口-頭	(140)	6	2		3	2	1	ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	25Y8/2	浅黄橙	10YR8/4	頸 薄
108	A M47		深鉢	大洞 B1	頭	(100)	5	5		4	3		ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR8/1	浅黄橙	10YR8/3	
109	A MD45		深鉢	大洞 B1	口	(180)	6	4	口唇： 三叉	2	3		ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	20YR5/2	褐灰	10YR4/2	微 厚
110	A MD45		深鉢	大洞 B1	口	(160)	6	4	口縁： 三叉	1	3		ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR3/1	黒褐	10YR3/2	
111	A MB45		深鉢	大洞 B1	口	(220)	7	4		2	5+3		ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR7/3	にぶい 黄橙	10YR6/3	口 微 厚
112	A MC45		深鉢	大洞 B1	口-体	(200)	7	1a		4	2	5+3	ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR3/1	にぶい 黄橙	75YR5/3	頸 微 厚
113	A MF47		深鉢	後末	口-体	(200)	6	1a	区画：9 体：1	2or 大波状	1	2	ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	25Y5/2	灰黄褐	10YR4/2	口 微 厚
114	A ME46		深鉢	大洞 B2	口	(180)	4	3		2	5 (不揃い)		ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR2/1	黒褐	10YR3/2	口 微 厚
115	A MH48		浅鉢	後末	口-体	(160)	5	2		4	2	3	ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	10YR6/3	にぶい 黄橙	10YR7/3	
116	A MF48		浅鉢	大洞 C1	口-体	(120)	4	2		1	3		ナ・横	ナ・横	にぶい 黄橙	75YR7/6	黄	75YR7/6	

図 番 号	グ リ ド 区 / 遺 構	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 残存値			口縁		文 様	キザミ 種類	底 形 態	地 文 種 類	方 向	混入物	調整		色調		炭化物		備 考		
					器高 (cm)	口径 (cm)	厚さ (mm)	器形	断面形							口縁	内面	外面	内面	外面	内面		外面	
117 A	MH45	浅鉢	大洞 C1	口-体	(180)	5	2	3	6	3	沈線	体:8	LR	左斜	qu・ws・ph	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	にぶい 7.5YR6/4	黄橙	10YR7/4	
118 A	MH45	浅鉢	大洞 C1	口-体	(160)	4	2	3	2		沈線	口唇: キザミ+ 弧線 体:8	LR	左斜	qu・ws	ナ・ 横	ナ・ 横	褐灰	10YR4/1	にぶい 黄橙		10YR6/3		
119 A	MH45	注口	大洞 B2	口	(130)	5	A	2	1	渦巻文					qu・ws・ph	ニ	横	黒褐	10YR3/2	橙	7.5YR7/6			
120 B	OB44	深鉢	後末	頭		8				1			RL	右斜	qu・ws		ナ	横	にぶい 黄褐	10YR6/3	褐灰	10YR5/1	内:アスファ?	
121 B	OA45	浅鉢	大洞 C1	体		5					体:8		LR	左斜	qu・ws	ナ・ 横	ナ・ 横	にぶい 黄橙	10YR7/3	にぶい 黄橙		10YR7/3		
122 B	BB44	浅鉢	大洞 C1	口-体	(120)	6	2	1	1	連続刺突	体:8		LR	左斜	qu・ss・ws	ニ	横	灰黄褐	10YR4/2	にぶい 褐		7.5YR5/4		
123 B	OB42	浅鉢	大洞 C1	体						5	体:8				qu・ss	ニ	ナ・ 横	にぶい 黄橙	10YR7/4	にぶい 黄橙		10YR7/4		
124 B	OB42	浅鉢	大洞 C1	体-底		6					体:8	平底	LR	左斜	qu・ws・ss	ナ・ 横	ナ・ 横	黒褐	2.5Y3/2	にぶい 黄橙		10YR6/3	体 薄	
125 B	OA45	浅鉢	大洞 C1	口-頭	(230)	4		5	1	6f	体:8				qu・ws	ナ	ナ・ 横	浅黄橙	10YR8/3	にぶい 黄橙		10YR7/3		
126	深鉢	後末	口-頭		(60)	6		3	2	2	1?	刻目			qu	ナ	ナ	にぶい 黄橙	10YR7/3	にぶい 褐		7.5YR6/3		
127	深鉢	後末	頭-体			7				1			LR	左斜	qu・ss・ph	ナ	ナ	浅黄橙	10YR8/4	にぶい 黄橙		10YR7/4	体 薄	
128	深鉢	大洞 B2	口-頭		(130)	5	2	3'	6	3+5	3				qu・ss・ws	ナ・ 横	ナ・ 横	褐灰	10YR4/1	灰黄褐	10YR5/2			
129	鉢	大洞 BC	口-体		(100)	4	2	3'	6	3	6a		LR	左斜	qu	ニ	横	黒	10YR2/1	黒	10YR2/1	口 薄 体	微 厚 体	
130	壺	大洞 C1	体			5					体:8		LR	左斜	qu・ph・ws	ニ	ナ・ 横	にぶい 黄橙	10YR7/2	褐灰	10YR6/1			
131	壺	後末	口-体		(40)	4	B-2a	1	2	9					qu	ナ	縦	黒	2.5Y2/1	黄灰	2.5Y4/1		ミニチュア	

土製品

図 番 号	区	グリッド	層	器種	時期	残存 部位	計測値			地文		調整				色調		付着物	備考	
							最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	種類	方向	混入物	内面	外面	方向	内面	外面			記号
1	A	MC45	1	土偶	後末	脚か腕	2.4	2.3		無	無	sa・qu・ph	ニ	縦	黄橙	10YR8/6	黄橙	10YR8/6		
2	A	ND45		土玉	完形	土玉	2.0	1.9	2.1	無	無		ナ	横	淡黄	25YR8/4	淡黄	25YR8/4		
3	A	NI45	1	土玉	完形	土玉	2.4	2.4	1.6	無	無	wa・si・ph	ナ	横	黄橙	10YR7/8	黄橙	10YR7/8		

第3節 83年度調査出土土器（図8～15、表2）

本章では、83年出土土器について述べていく。83年にはE区、F区が調査された。図示した遺物のほとんどがF区のものである。以下、層位（遺構）、器種、時期の順で述べる。

（1）E区出土土器（図8-1～6）

遺構内出土土器（図8-1）

SK52（図8-1）

大洞C1式の浅鉢が1点（1）ある。口縁～体部の残存で、器形は口縁部が内湾し、平口縁である。頸部に一段の方形ポジ文列、体部に配置文がある。五城目町教育委員会（1984）の第5図9に該当する。

遺構外出土土器（図8-2～6）

浅鉢を2点（2・3）、注口土器を3点（4～6）図示した。浅鉢（2・3）は、大洞C1式である。どちらも器形は口縁部が内湾し、微細小波状口縁である。頸部に方形のポジ文列、体部に配置文がある。

注口土器（4～6）は、大洞BC式である。いずれも傘のつかない器形の口縁～頸部片である。口縁部は、4が小波状口縁、5が平口縁、6が突起口縁である。文様は3個体とも同じで、頸部文様が3段構成で、一段の方形のポジ文列、端部で入り組む羊歯状文が二段で施される。

（2）F区遺構外出土土器（図8-7～図15-202）

2層（図8-7～11）

鉢が2点（8・9）、台付浅鉢の台部が1点（10）、注口土器が2点（7・11）ある。

鉢は2点（8・9）で、いずれも大洞BC式である。8は口縁～体部片である。器形は頸部で鋭く括れ、平口縁である。文様は頸部と体部にあり、頸部は羊歯状文のうちそれぞれの単位で分離するもの（6a類）、体部にも羊歯状文があるが欠損のため不明瞭である。9は口縁～体部片である。器形は直立し、口縁部にB突起がつく。頸部には方形のポジ文列（6f類）がある。地文縄文である。

台付浅鉢は1点（10）で、大洞C1式である。台は外開きで、内面に沈線がある。台部には、下から方形のポジ文列（6f類）、配置文が施される。

注口土器は2点（7・11）ある。7は、大洞B1式に属し、体部（肩部）片である。器形は肩が張り出さない。肩部に文様があり、小さい渦巻きが4つつく。この渦は体部に展開する玉抱三叉文に充填される文様構成が想定できる。11は大洞BC式で、器形は口縁部が内湾し、傘はつかない。頸部は羊歯状文の3段構成で、上から方形のポジ文列（6f類）、端部が入り組むもの（6c類）、方形のポジ文列（6f類）の順に施される。

3層（図8-12～40）

深鉢・鉢16点（12～27）、浅鉢9点（28～36）、注口土器4点（37～40）を図示した。

深鉢・鉢のうち後期末葉は1点（12）ある。口縁～頸部片で、口縁部は肥厚し、二股の山形突起がつく。頸部は入組帯状文である。口縁部と頸部に刻目がある。

大洞B1式は1点（13）ある。口縁～頸部片である。頸部に玉抱三叉文がつく。

大洞B2式は2点（14・15）ある。いずれも口縁～体部片で、器形は口縁部がゆるく内湾し、小波状口縁である。頸部は入組三叉文である。14は入組部が結合する。

大洞BC式は12点（16～27）ある。ほとんどが口縁部が内湾し括れないもので、25のみ頸部が括れる。すべて微細小波状口縁で、先述した大洞B2式の小波状口縁より相対的に単位が細かい。口縁部には、11点（17～27）に施文され、すべて山形三叉文である。頸部はすべてで施文され、羊歯状文である。細分すると、3点（16・19・27）が1段の方形のポジ文列（6f類）、3点（17・20・21）が2段の方形のポジ文列（6e・6d類）、2点（22・23）がクランクで分離するもの（6a類）、4点（24～26）がクランクの端部で入り組むもの（6c類）である。体部には27のみで施文され、縦区画の文様で、羊歯状文で区画された

中を祖形的な配置文が充填する。

浅鉢は9点(28~36)図示した。

このうち大洞BC式は4点(28~31)ある。器形はすべて口縁がゆるく内湾する。28・31が平口縁、30が微細小波状口縁である。文様については個別で述べる。28・31は、体部のみに文様があり、羊歯状文と配置文の過渡期的な文様が、縦に幅の広い文様帯となる。29は残存率が低いが、配置文の祖形的な文様とみられる。30は口縁部に山形三叉文、頸部に羊歯状文のうちクランクが入り組むもの、方形のポジ文列の順で施文される。

大洞C1式は5点(32~36)ある。器形は、3点(32~34)がゆるく内湾し、1点(35)が緩く外反する。2点(32・34)が平口縁、1点(35)が小波状口縁である。35は口唇部に弧線や挟りからなる装飾がある。2点(32・34)の頸部に方形のポジ文列(6f類)がある。体部にはすべて配置文がある。

注口土器は4点(37~40)図示した。個別に特徴を述べる。

大洞BC式は3点(38~40)ある。38は、口縁~頸部片である。口縁部に傘のつかない器形で、口縁部は内湾する。小波状口縁で、正面に1単位山形の突起がある。口縁部には山形三叉文である。頸部には、左右対称で1単位の渦巻文がある。39は、口縁~体部下半片である。器形は傘が付かず、肩部が張り出す器形である。平口縁である。頸部は羊歯状文が2段構成である。上から2段の方形のポジ文列(6d)、幅広の羊歯状文でクランクの端部で鍵状に入り組む文様の順で施文される。体部上半(肩部)には、羊歯状文のうち互いのクランクで分離するものがある。40は頸~体部下半の破片である。器形は肩部が張り出す。頸部は羊歯状文のうち、互いのクランクで分離するものである。体部上半(肩部)は摩滅で判別が難しいが、小単位の連続した渦巻文と考えられる。

大洞C1式は1点(37)ある。37は、注口~体部下半の残存である。器形は体部が扁平で、39と同じ肩部を持つとみられる。注口部の両側から三叉状のネガ文様が入り、注口部下部(体部下半)には、内側に伸びる山形の中に配置文が充填される。

3層下(図8-41)

大洞C1式の浅鉢1点(41)がある。器形は口縁部が内湾し、平口縁である。口唇部にキザミ、頸部に沈線が2条、体部に配置文がある。

4層(図9-42~図10-80)

深鉢・鉢25点(42~64)、浅鉢8点(65~72)、注口土器8点(73~80)がある。

深鉢・鉢のうち、大洞B1式は2点(42・43)ある。いずれも器形は頸部下半が緩く括れる。平口縁で、肥厚しない。頸部は、42が無文帯、43は入組帯状文で、後期末葉の文様よりもやや流線化がみられる。

大洞B2式は8点(47~52・54・55)ある。口縁部が内湾するもの6点(47~52)、鋭く括れるもの2点(54・55)がある。6点(47~50・52・55)が小波状口縁、1点(54)が平口縁である。口縁部文様がなく、頸部はすべてに入組三叉文がある。55は複数の沈線で施文され、複雑かつ崩れたような入組三叉文である。

大洞BC式は13点(44~46・53・56~63)ある。45と46は同一個体である。器形が直立し、小波状口縁である。口縁部は山形三叉文である。頸部は横に間延びした羊歯状文で、細いクランク文が二段に展開し、端部で玉を抱くように入り組む。文様間にはポジ文は充填されず、頸部文様帯の下部に楕円形のポジ文列が充填する。南東北の影響を受けたような文様である。53・56~63は、器形は8点(53・56~61・63)に括れがなく口縁部が内湾し、1点(62)が口縁部下で鋭く括れる。全て微細な小波状口縁で、62は加えてB突起がつく。63は正面一単位で三叉の突起がつく。口縁部は全て、山形三叉文で、62はB突起から弧線が伸び、その中に山形三叉文がある。頸部は63を除くすべてが羊歯状文である。細分すると、5点(56・58~61)が二段の方形ポジ文列(6d類)で最も多い。クランクを伴うものは2点で、57が互いのクランクで分離するもの(6a類)、53がクランクの端部で入り組むもの(6c類)である。62は頸部で破損するが、羊歯状文が二段構成であると考えられ、上が一段の方形ポジ文列(6f類)で、下にクランクを伴う羊歯状文が推察される。63は、口縁~体部が残り、器形はほぼ直立する。微細な小波状口縁で、

正面に突起がつく。口縁部は、突起下で三叉状に沈線が伸び、その上に山形三叉文が充填する。頸部には沈線が2条ある。本個体は小林圭一（2010）で指摘される、「平行線文装飾深鉢2類」と同じ特徴をもつ。本深鉢は、大洞BC式に位置付けられ、分布は仙北湖沼地帯とその周縁とされる（小林2010）。なお、五城目町教育委員会（1984）第13図92で報告された資料である。

時期不明は1点（64）ある。器形はゆるく内湾し、平口縁で地文縄文である。

浅鉢は8点（65～72）ある。

大洞BC式は2点（67・68）ある。いずれも口縁部が内湾し、平口縁である。体部のみに文様があり、配置文の祖形的文様である。大洞BC式のなかでも新しい時期に位置付けられる。

大洞C1式は4点（69～72）ある。69は器形が直線的で、体部から緩く外反する台形である。B突起がつく。口縁部は弧線である。体部～底部に一単位の雲形文がある。70は器形が直立し、小波状口縁で、体部に配置文がある。71・72は、器形が口縁部で緩く内湾し、平口縁である。口縁部には71が山形三叉文、72が連続刺突である。体部に配置文がある。

時期不明は2点（65・66）ある。65は無文の椀状の器形である。66は、台付浅鉢で、器形は口縁部で内湾し、台部は外に開く。正面に突起がつき、口唇部が挟りで二股になる。地文縄文で、口縁部付近は磨り消されて無文である。底部付近は地文がない。

注口土器は8点（73～80）ある。

このうち大洞BC式は、4点（74・75・78・79）ある。74は、口縁～体部上半が残る。全体的に摩耗が激しく、埋没時の土中の成分が固着するため文様等が非常に判別しづらい。器形は傘がなく、体部上半（肩部）が頸部より張り出し、平口縁である。頸部には3段構成の羊歯状文があり、上から、2段の区画されない四角形のポジ文列（6e類）、クランクの端部で入り組むもの（6c類）、1段の方形のポジ文列（6f類）の順で文様が施される。体部上半に互いのクランクで分離する羊歯状文（6a類）がある。75は頸部～注口部下部までが残る。器形は体部上半（肩部）が頸部より張り出す。頸部の残存率が低く細分できないが、羊歯状文である。体部上半は、互いのクランクで分離する羊歯状文（6a類）がある。注口部下部にも文様があるがモチーフは不明である。78は、口縁～体部下部が残る。傘がなく、肩部が頸部より張り出す。頸部には3段構成の羊歯状文が施され、上から、2段の区画されない四角形のポジ文列（6e類）、クランクの端部で入り組むもの（6c類）、1段の方形のポジ文列（6f類）の順で施文される。肩部は羊歯状文が突起状に張り出し、体部下部にも羊歯状文があるが細分はできない。79は口縁～頸部が残り、傘がなく、平口縁である。頸部には互いのクランクで分離する羊歯状文（6a類）が二段にわたる。

大洞C1式は4点（73・76・77・80）ある。73は傘部片である。B突起が上と外に向かってつく。口縁部文様は刻目である。刻目以下は無文である。76は注口部～体部下半片である。注口部下部にB突起がつき、注口部横は弧状に挟り取られる。肩部にB突起がある。体部下半に配置文がある。77は注口部片である。注口部の根本は幾重にも段がつけられ、B突起がめぐる。80は頸部～体部下半片である。器形は、体部上半が頸部より張り出す。頸部は沈線が2条ある。肩部は外に向かってB突起が張り出し、それを囲うように弧線が巡る。体部下半は配置文がある。

4層下（図11-81～89）

深鉢・鉢は5点（81～85）、浅鉢は2点（86・87）、注口土器は2点（88・89）図示した。

深鉢・鉢のうち大洞B1式は1点（82）ある。82は口縁部片で小波状口縁である。口縁部に山形三叉文の間を弧線が充填される。

大洞B2式は2点（81・83）ある。81は口縁～体部が残る。大型で推定口径は40cmである。器形はわずかに内湾し、微細小波状口縁である。頸部は入組三叉文で、20単位ほどある。83は、頸部片である。器形は頸部で括れ、入組三叉文がある。

大洞BC式は2点（84・85）ある。84は器形が内湾し、平口縁である。頸部は羊歯状文のうち、方形のポジ文列（6d）が区画される。85は器形が内湾し、微細小波状口縁である。口縁部には山形三叉文で、頸部に沈線が2条ある。

浅鉢は2点（86・87）で、いずれも大洞C1式である。86は体部～底部片で、体部に配置文がある。87

は口縁～体部片である。器形は内湾し、平口縁である。頸部は沈線と無文帯で縦に区画された中を連続刺突が充填しており、3～4単位ほどが想定される。体部は配置文がある。

注口土器は2点(88・89)で、いずれも大洞BC式である。88は頸部片である。端部で入り組む羊歯状文(6c類)がある。89は頸部～体部上半(肩部)片である。器形は肩部が張り出す。頸部には複数段構成の羊歯状文があるとみられるが、一段の方形のポジ文列(6f類)しか確認できない。肩部には単位で分離する羊歯状文(6a類)がある。

5層(図11-90～113)

深鉢・鉢は19点(90～92・94～101・103～110)、浅鉢は4点(93・102・111・113)、器種不明は1点(112)図示した。

深鉢・鉢のうち、時期不明は1点(90)で、粗製深鉢の体部である。残存が悪く、器面が剥離する。外面は全面にアスファルトと考えられる、タール状の付着物がある。内面は一部に同じく付着する。地文は付着物に覆われているため、確認できない。

後期後葉は2点(91・92)ある。91は体部片である。器形は頸部が長く器高の半分ほどで括れ、頸部との区画は沈線のうえに貼瘤がある。体部には入組帯状文があり、文様の上に多数の貼瘤がある。92は口縁部片である。波状口縁である。口縁部に大きな突起が外側に向かって伸び、頂部にキザミが加えられる。口縁部には口縁に沿うように、磨消によって作出された刻目の帯がある。

後期末葉は9点(94～101・103)ある。このうち器形がわかるものは1点(101)で、器高の半分ほどで緩く括れる。口縁部は残り全ての個体で肥厚する。山形口縁が4点(95・97～99)と多い。小波状口縁が1点(94)、突起口縁が1点(96)、波状口縁が1点(100)ある。頸部は入組帯状文が4点(96・97・99・100)と多い。101は、入組帯状文の段部に三叉状のネガ文様がつき、斜めに沈線による文様がはいる。器面装飾は、刻目が8点(94～99・101・103)に施される。このうち2点(95・97)は刻目が充填され、それ以外では口縁部につく。

大洞B1式は3点(104～106)ある。器形は1点(106)でわかり、頸部が長く、括れが緩やかである。3点すべてが平口縁とみられる。口縁部は全てで肥厚しない。頸部は全て入組帯状文である。1点(106)は、段が内側に入り組むものである。

大洞B2式は、3点(107～109)ある。器形は2点(107・108)でわかり、頸部が短く、鋭く括れる。108は微細小波状口縁である。109は山形口縁もしくは、突起口縁が考えられる。1点(108)は口縁部に山形三叉文がある。2点(107・108)の頸部が入組三叉文である。109には、1単位が2cmほどの渦巻文がつく。

大洞BC式は1点(110)ある。口縁～体部の残存で、器形は内湾し、微細小波状口縁である。口縁部には山形三叉文、頸部には羊歯状文のうち、2段の方形のポジ文列(6d類)が区画される。

浅鉢は4点(93・102・111・113)ある。

後期後葉は1点(93)ある。口縁部のみ残り、波状口縁で、横から穿孔された突起がつく。それ以下は無文である。

後期末葉は2点(102・111)ある。102は口縁～頸部片である。平口縁で若干肥厚する。口唇部に刻目がある。頸部に沈線が1条あるのみで他は無文のミガキ調整のみである。111は、体～台部が残る。体部は地文縄文のみで、台部は無文で外に開く。

大洞B2式は1点(113)で完形である。頸部が短く緩く括れる。B突起が正面に4もしくは5単位つく。頸部は磨消による無文帯がある。それ以外は無文である。112は、鉢、注口土器、壺の体～底部片で4単位の渦巻文と考えられる文様がある。底部は上げ底である。

6層(図12-114～図13-148)

深鉢・鉢22点(114～133・135・136)、浅鉢3点(134・137・138)、壺1点(142)、注口土器8点(139～141・143～147)、香炉形土器1点(148)を図示した。

深鉢・鉢は22点(114～133・135・136)図示した。

後期後葉は4点(114・116・117・120)ある。114は口縁～頸部片である。平口縁で肥厚し平坦である。口縁部には、刻目が一番上にあり、その下は頸部まで無文で、楕円状の貼瘤がつく。口縁部と頸部は刻目で区画され、その下にも無文帯がある。瘤には縄文があることから、地文縄文を施文し、瘤をつくり、その後頸部の地文を磨り消した施文順序が考えられる。116は口縁～頸部片である。山形口縁で、肥厚しない。口縁部には縄文の帯に貼瘤がつき、以下無文である。頸部との区画は縄文の帯に貼瘤でなされ、頸部は入組帯状文である。117は口縁部片である。突起口縁で、貼瘤がつく。120は口縁～頸部片である。平口縁で外に向かって瘤がつき、瘤はキザミで二股になる。頸部との区画は無文帯で、頸部は入組帯状文である。

後期末葉は6点(115・121・122・124・135・136)ある。115は頸部片である。頸部と体部の区画に刻目の帯があり、貼瘤が上からつく。体部には、挟入組帯状文である。121は口縁～体部片である。平口縁である。頸部は、刻目の帯に上下区画され、入組帯状文が施される。122は頸部片で、入組帯状文のなかで段部が内側に入り組む文様である。文様の中を刻目に充填される。124は口縁～頸部片である。口縁部下部の無文帯以下が残る。頸部との区画は刻目の帯でなされ、頸部は入組帯状文である。135は口縁～体部片である。器形は緩く内湾し、平口縁で、若干肥厚する。口縁部と頸部、頸部と体部の区画に横位の短い連続した横位挟りの帯がある。頸部は磨消により無文である。体部は地文縄文のうえから、沈線による矢羽状の文様が連続する。136は口縁～体部片である、器形は内湾し、平口縁である。口縁部、頸部と体部の区画に外側に向かって上から刺突のはいる突起がつく。頸部は無文で、体部に楕円状の磨消文様がある。

大洞B1式は3点(125～127)ある。125は頸部が短く、鋭く括れる器形で、広口壺に似た器形とみられる。体部に入組帯状文がある。126は体部片で、入組帯状文が施され、端部が弧状になる。127は頸部～体部片である。頸部は挟入組帯状文である。

後期末葉～大洞B1式は3点(118・119・123)ある。118は口縁～体部片である。器形は緩く内湾し、突起がつく。口縁部に沈線が1条はいり、それ以外は無文である。119は器形が口縁～頸部片で、器形は緩く外反する。緩い山形口縁で、地文縄文の帯があり、瘤がつく。それ以下は無文である。123は口縁～体部片で、器形はゆるく内湾する。突起がつき、口縁部突起は8～10単位が想定される。口縁部に沈線が2条あり、以下は無文である。

大洞B2式は5点(128～132)ある。128は口縁～頸部片である。小波状口縁で、口縁部に玉抱三叉文が施され、頸部に入組三叉文がある。129～131は、器形は2点(129・130)が直立し、1点(131)が内湾する。2点(129・131)がB突起で、1点(130)が平口縁である。頸部は全て入組三叉文で、三叉文の端部が結合する。132は頸～体部片で、器形は括れが鋭く、頸部が短い。頸部下部に連続した横位挟りがつき、体部に横線化した入組三叉文がつく。

大洞BC式は1点(133)で、口縁～体部片である。器形は緩く内湾し、微細小波状口縁である。口縁部には山形三叉文で、頸部は羊歯状文のうち互いの単位で分離(6a類)するものである。

浅鉢は3点(134・137・138)ある。

後期後～末葉は2点(137・138)ある。137は口縁～体部片である。器形は内湾し、山形口縁で、頂部がキザミで2股に分かれる。口縁部に横に穿孔される突起がつく。138は頸部片である。頸部に細長く外に2cmほど突起が伸び、穿孔が突起に横から入り、頂部は乳頭形のつまみがつく。突起の上下に沈線文があるがモチーフ等は不明である。

大洞BC式は1点(134)ある。口縁～体部が残る。器形は頸部が比較的長く、緩く括れる。B突起が連続し、間隔が狭く単位が多い。頸部は互いの単位で結合する羊歯状文(6b類)である。

壺は1点(142)で、大洞B式である。体部が残る、器形は、器高の1/2あたりで明瞭に最大径がつく。体部上半に文様がつき、三角形のネガ文様を三叉文が囲うような文様である。全体に赤漆が塗布される。

注口土器は8点(139～141・143～147)図示した。

後期後葉は2点(140・141)ある。140は体部下半片である。隆帯で円状のモチーフをもつ文様が描かれる。141は頸～体部片である。体部上半に微隆起施文で入組帯状文が描かれる。瘤が多数ある。

大洞B1式は1点(139)ある。体部片である。左右に並んだ同心円状のモチーフの間を三叉状のネガ

文様が充填される。

後期末葉～大洞B1式は3点(143～145)ある。すべて注口部片である。143は、注口部下部に隆帯がある。144は、注口部下部の隆帯が2股に分かれる。145は注口部下部が三叉文で2つに分かれ、上から刺突がある。

大洞B2式は2点(146・147)ある。146は体部、注口部片である。注口部下部に玉抱三叉文が、体部に磨消により文様があるがモチーフは不明である。147は口縁部(傘部)片である。口縁部に入組三叉文の三叉部が結合するモチーフがある。

香炉形土器は1点(148)で、頸部の窓部片と考えられる。直径3cmほどの窓が開く。内面の接合部にアスファルトが付着する。

7層(図13-149～167)

粗製深鉢は1点(149)、深鉢・鉢は13点(150～162)、注口土器は5点(163～167)図示した。

粗製深鉢(149)は、後期後～末葉である。器形は内湾し、横条痕である。

深鉢・鉢は13点(150～162)図示した。深鉢・鉢のうち後期後葉は7点(150～156)ある。150は口縁～頸部片である。平口縁で、口縁部に三本の非常に微細な刻目帯がある。その上から貼瘤があり、逆「し」字状の貼瘤もある。頸部には入組帯状文と考えられる文様がある。151は体部片で、地文は細い縦条痕である。器形は緩く括れ、頸部が長い。頸部と体部の区画部に貼瘤があり器面から1.5cmほど外に伸び、頂部から下部にかけて縦の切れ込みが瘤にはいる。体部に条痕を切るように斜めに沈線が2本はいるが、文様モチーフなどはない。152は口縁～頸部片である。平口縁で、口縁部と頸部の区画に貼瘤がある。3.5cmほどに3個の貼瘤が並ぶ。頸部は入組帯状文と考えられる。153は頸～体部片で、ゆるく括れる。地文は縦条痕である。頸部と体部の間の区画に沈線が3条あり、その上から貼瘤が3個ある。このうち左側の1個は横に1.5cmほどある大型の瘤で、指により上下から潰され楕円状になる。154は頸部片で、地文縄文である。入組帯状文があるが細分はできない。155・156は頸部片である。155は163のような注口土器の可能性もあるが、深鉢・鉢として報告する。いずれも頸部は、無文帯の上から沈線が入り、沈線の上に貼瘤がある。155の貼瘤は上から刺突が加えられる。

後期末葉は5点(157～161)ある。157は口縁～頸部片である。口縁部に貼瘤が突起口縁になっており、刻目がつく。頸部は入組帯状文であり、刻目が充填される。158は口縁部片で、山形口縁の山形の部分である。著しく肥厚し、頸部近くの器面の3倍ほどの厚さである。口唇部に刺突が加えられる。頭頂部のみ内外面に縄文が施され、口縁部は三角形の挟りがある。連続した縦の挟りが三角形を囲むようにつく。159は頸部片である。頸部は刻目による円文の左右に、入組帯状文がある。頸部と体部の区画に、上から刻目の帯、無文帯、刻目の帯が配される。160は頸～体部片で、磨消縄文の帯が1本ある。161は頸部片で、磨消縄文による縦に連続する「Z」字状の入組帯状文がある。

大洞B1～BC式は1点(162)ある。頸～体部片で、鋭く括れがつく。頸部は丁寧に磨かれ、玉抱三叉文もしくは、入組三叉文がある。

注口土器は5点(163～167)、すべて後期後葉である。163・164は頸部片である。163は平口縁である。163の頸部は、無文帯の上から沈線があり、その上に等間隔で貼瘤がある。164は縄文の帯の上に貼瘤がある。165～167は注口部片である。165は注口部の横に磨消で明確なモチーフは不明だが、横長の文様がある。貼瘤は注口部下部と磨消文の上にある。166は注口部の下に沈線で区画された無文帯に貼瘤が3個つき、その下に斜めに沈線3本入る。注口部上部の欠損部にアスファルトが付着する。167は無文で、注口部下半に最大径の稜がある。外面の左側、注口部内部をふさぐようにアスファルトが付着しており、注口部からアスファルト塊を押し込んでいる。

層位不明(図14-168～図15-202)

粗製深鉢は3点(168～170)、深鉢・鉢は16点(171～186)、浅鉢は9点(187～194・198)、台付浅鉢は1点(195)、壺が4点(196・197・199)、注口土器は3点(200～202)図示した。

粗製土器は3点(168～170)ある。いずれも、内湾する器形で、地文は横条痕である。168は炭化物が

多量に付着する。

後期後葉の深鉢は4点(171~174)ある。器形は171のみでわかり、ゆるく括れる。172・174は平口縁で、瘤がつく。174は口縁部のみ地文の縄文が残り、以下磨消により無文である。頸部は2点(171・173)が入組帯状文である。172は無文帯に沈線が加えられ、上から貼瘤がある。器面装飾は貼瘤が盛行し、すべてで貼瘤がある。特に173は多く、部位の区画や文様の上につき、瘤の密度は0.33である。

後期末葉の深鉢は4点(175~178)ある。器形がわかるものはない。176は小波状口縁である。頸部は4点すべてで入組帯状文である。178のみ細分でき、段部が内側に入り組むものである。器面装飾は、刻目が2点(175・176)ある。175は文様充填に用いられ、176は口縁部と頸部の区画に用いられる。

大洞B1式の深鉢は1点(179)ある。口縁~頸部が残り、器形は口縁部直下で緩く括れる。口縁は山形状の突起が連続し、頂部が二股に分かれる。口縁部には、口縁形態にそって弧線がある。頸部は無文で、体部に文様があるが、モチーフは不明である。

大洞B2式の深鉢・鉢は3点(180・181・183)ある。器形は3点すべてが内湾する。口縁部は、180が背の低い突起がつき、181はB突起が連続し、183は小波状口縁である。頸部は3点すべて入組三叉文である。183の頸部は、沈線で入組三叉文が描かれ、上下に沈線で小さい丸文が充填されており、羊歯状文への過渡期的様相が考えられる。

大洞BC式の深鉢・鉢は4点(182・184~186)ある。器形は、2点(182・185)が内湾し、2点(184・186)が口縁部のすぐ下で鋭く括れる。口縁部は3点(182・185・186)が微細小波状口縁で、1点(184)がB突起である。口縁部には3点(182・185・186)が山形三叉文、1点(184)が弧線に山形三叉文(5+3)がつく。頸部は4点すべてに羊歯状文がある。3点(182・184・185)は端部が入組み(6c類)、184は2段にわたる羊歯状文である。186は頸部が無文で、体部上部に方形のポジ文列(6f類)がある。

浅鉢は9点(187~194・198)図示した。このうち大洞B2式は1点(187)ある。187は体部~底部の残存で、全面に赤漆が塗布される。体部文様は複数段の構成が想定され、体部下部に入組三叉文がある。

大洞BC式は2点(188・198)ある。188は五城目町教育委員会(1984)に第16図136として掲載された。器形は内湾し、平口縁である。頸部は、羊歯状文のうち単位で分離する。地文は羽状縄文である。内外面に赤漆が塗布される。198は体部片で、器形は内湾する。体部には配置文の祖形的な文様がある。

大洞C1式は6点(189~194)ある。器形は6点すべて内湾する。口縁部は190のみ小波状口縁で、口唇部には連続する抉りがある。他は平口縁である。頸部は、1点(189)が連続刺突で、それ以外は1段の方形のポジ文列(6f類)である。体部には6点すべて、配置文である。

台付浅鉢は1点(195)ある。大洞B1式である。台部のみ残る。台部文様は二段構成で、上下に玉抱三叉文があり、下部の文様が透かしである。

壺は3点(196・197・199)で、196は後期後~末葉である。器形は体部が細長く、最大径は体部の真ん中付近につく。全体的に無文で、口縁部に穿孔がある。197は後期後葉である。口縁~頸部片である。口縁部は平口縁で、瘤がつく。199は大洞C1式である。体部片で、外面は黒漆の上から赤漆が塗布され、内面は頸部に近い部分のみ赤漆が付着する。体部には配置文がある。

注口土器は3点(200~202)でいずれも大洞BC式の口縁~頸部片である。200・201は傘のない器形で、平口縁である。200の頸部は、羊歯状文が複数段構成にわたるが文様の細分はできない。201も同じく複数段構成で、上から方形のポジ文列、端部で入り組むものの順で施文される。202は傘のつく器形で、傘部(口縁部)は羊歯状文が2段にわたる。上から方形のポジ文列(6f類)、端部で鍵状に入り組む文様(6c類)の順で施文される。

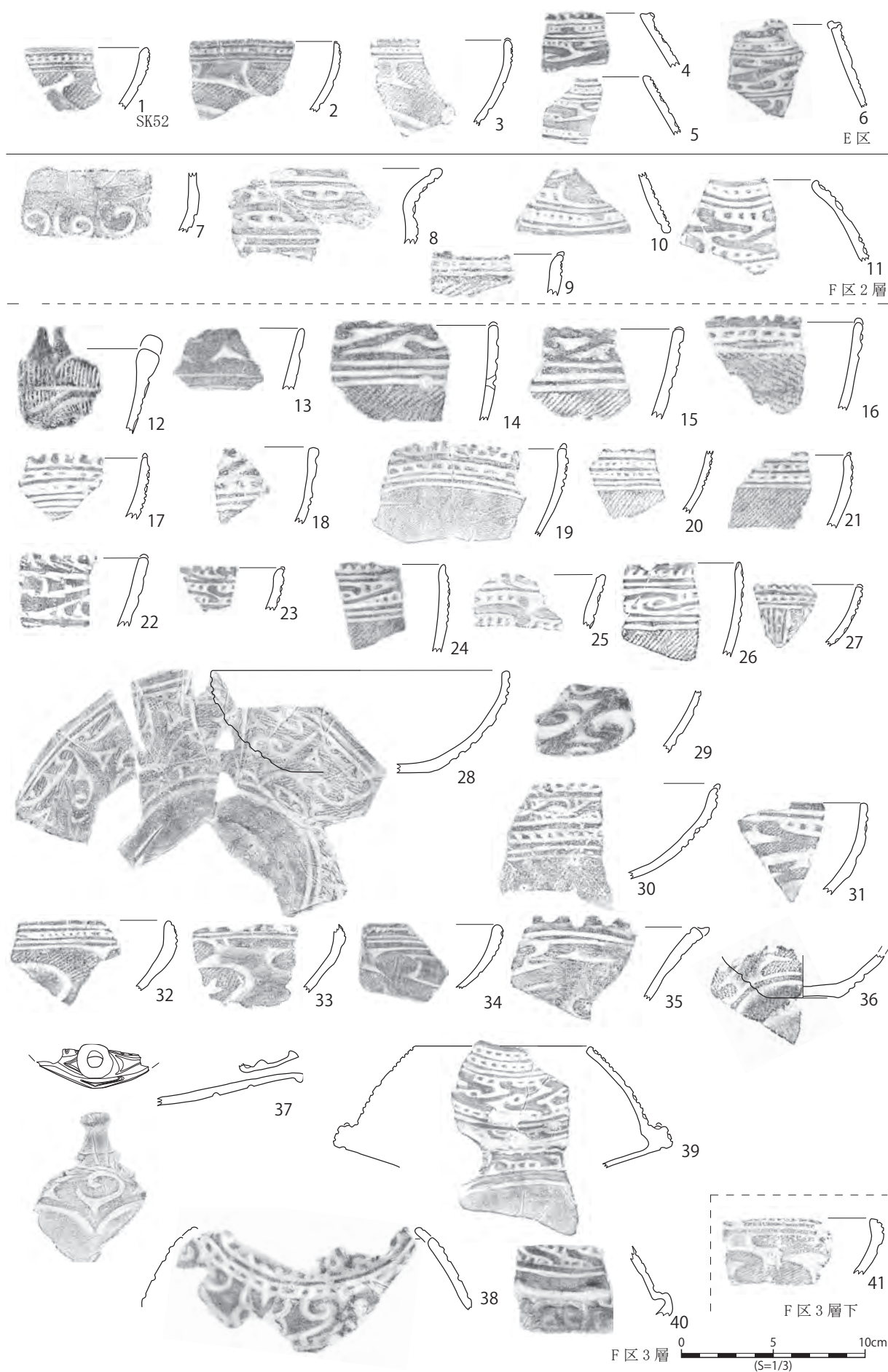


図8 中山遺跡 1983年度発掘調査出土資料・1

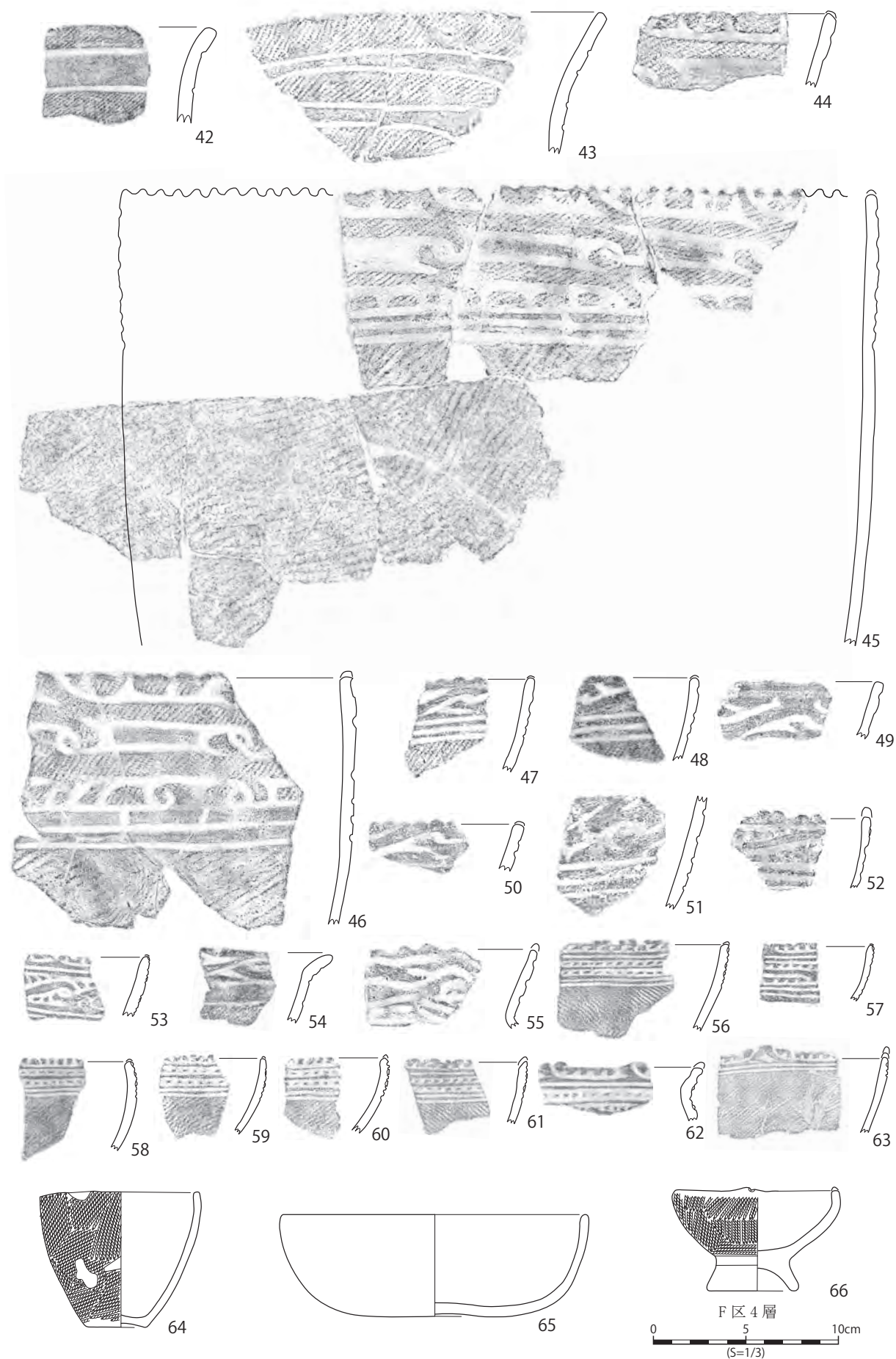


図9 中山遺跡 1983 年度発掘調査出土資料・2

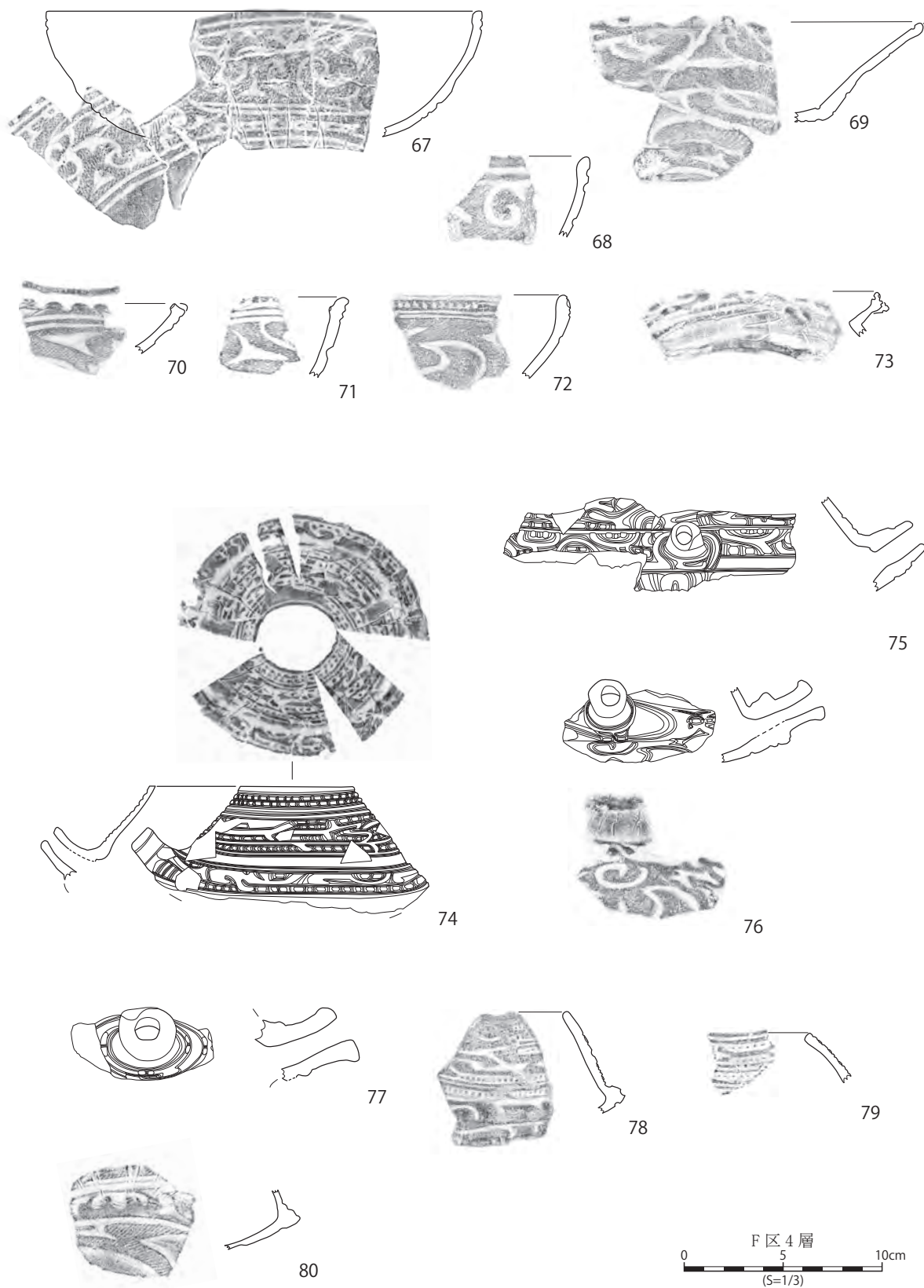


図 10 中山遺跡 1983 年度発掘調査出土資料・3

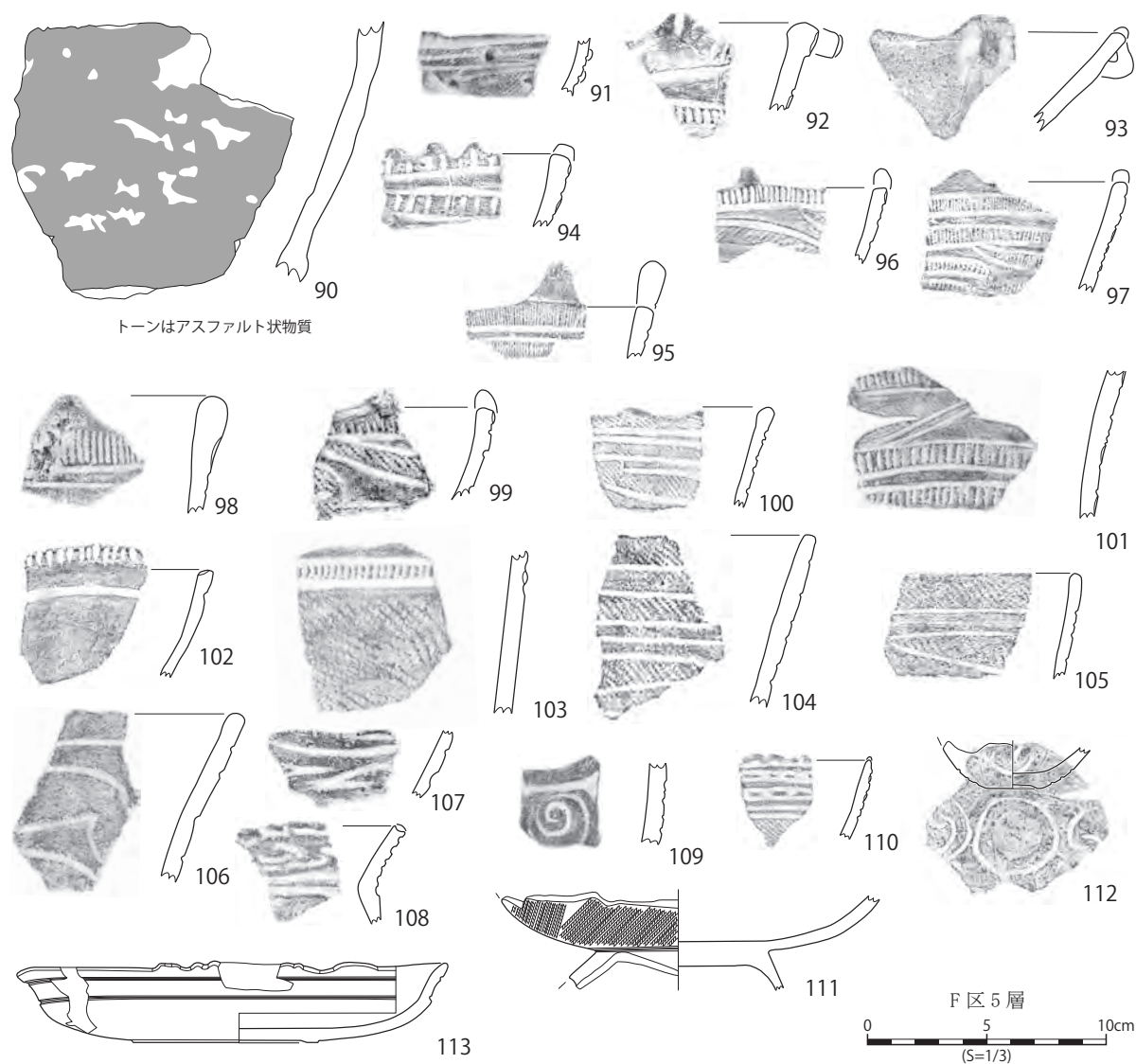
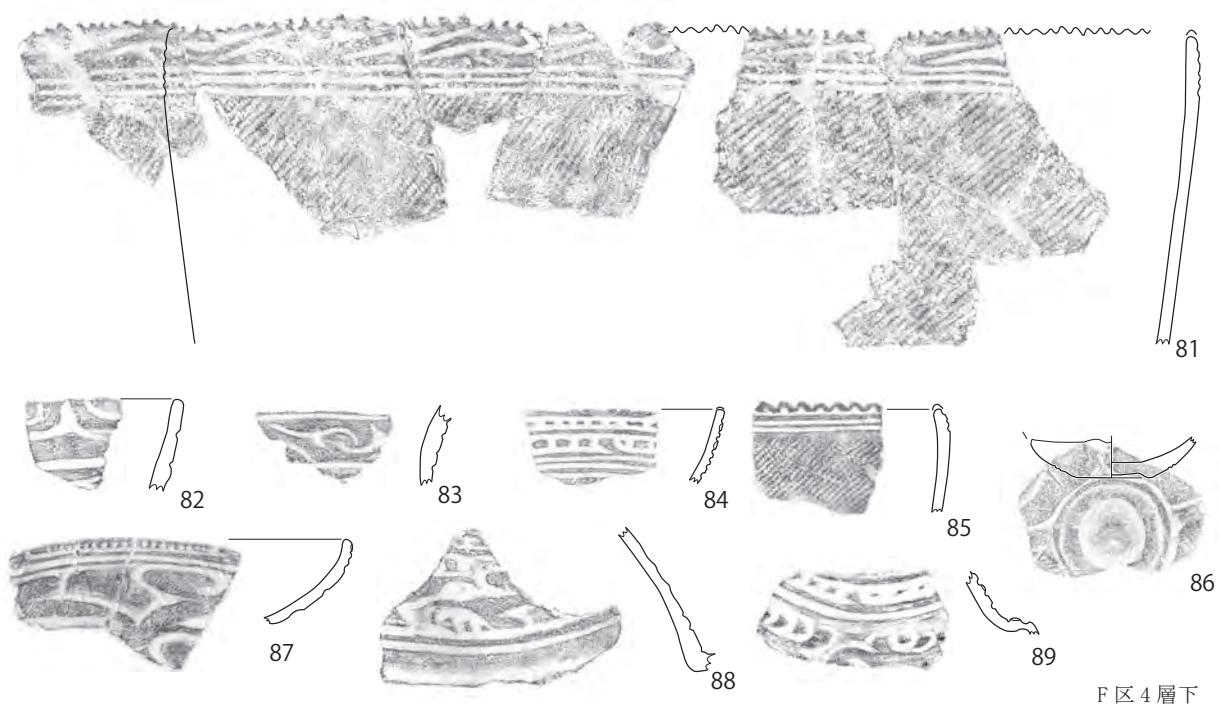


図 11 中山遺跡 1983 年度発掘調査出土資料・4

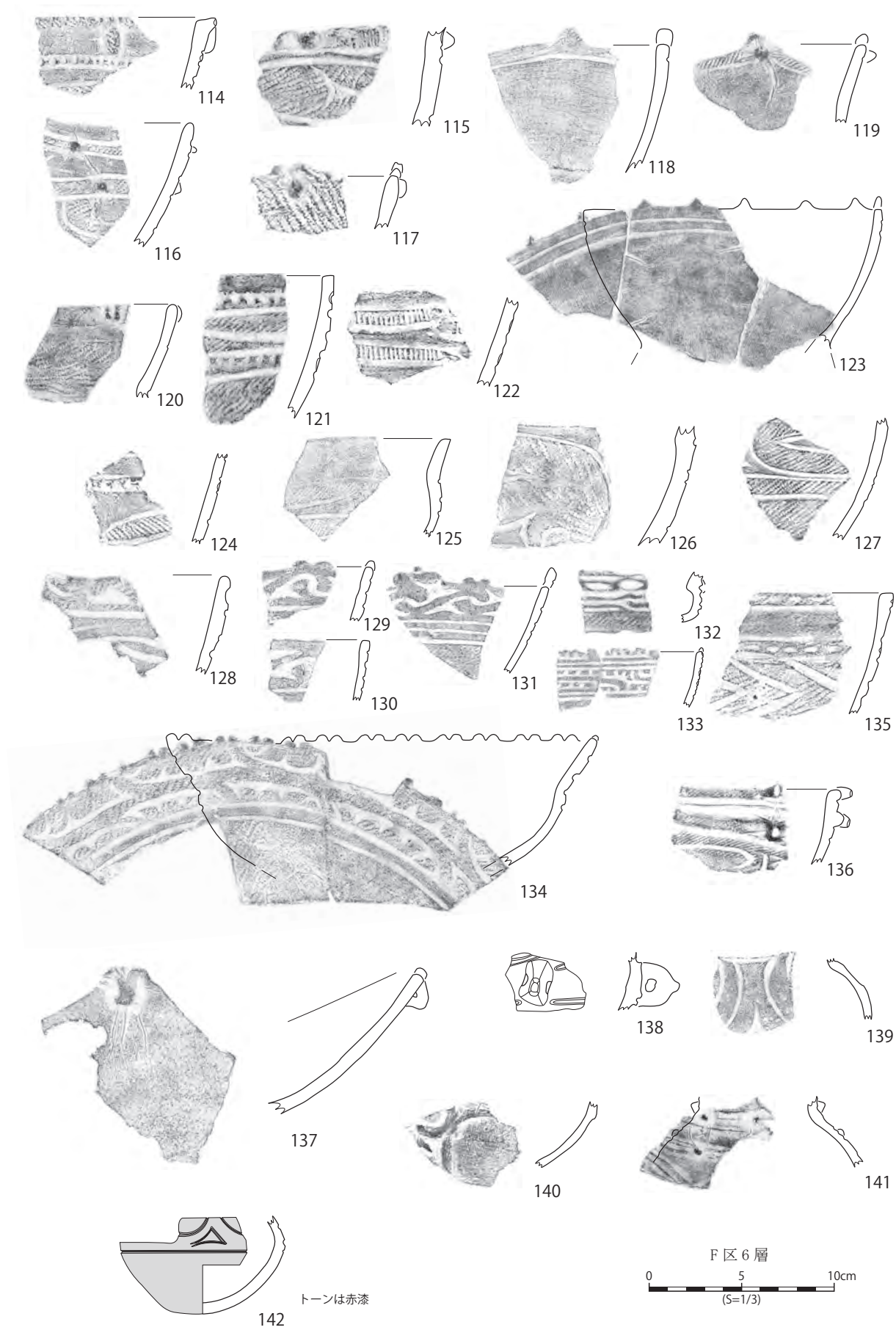
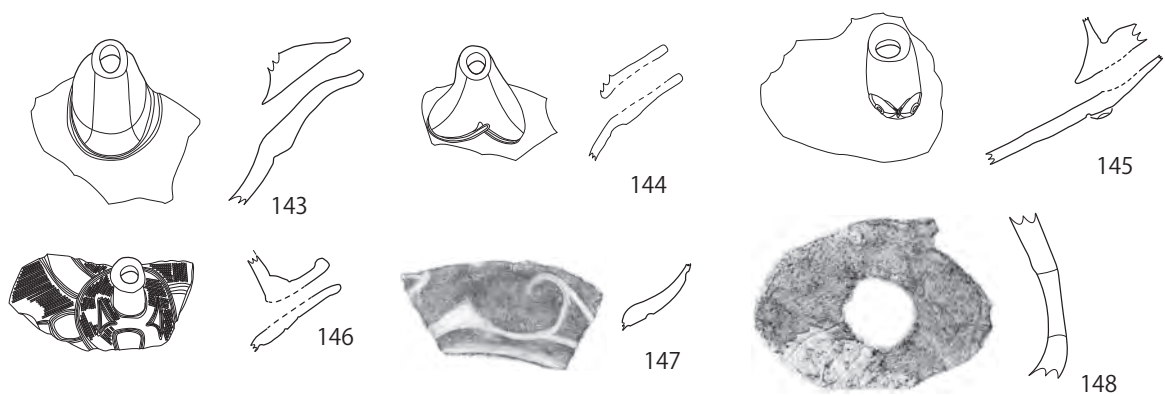
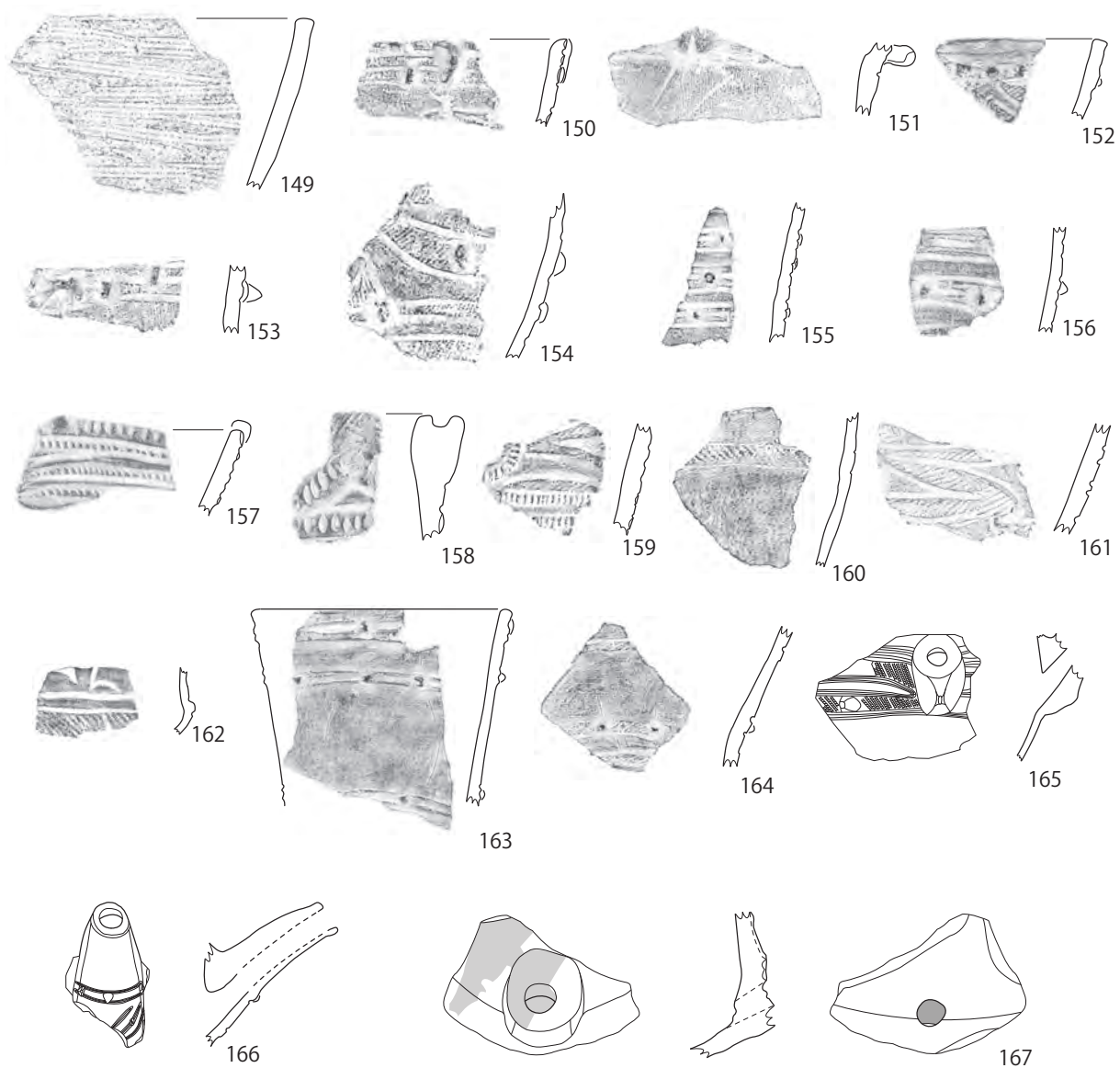


図 12 中山遺跡 1983 年度発掘調査出土資料・5



F区6層



トーンはアスファルト

F区7層

0 5 10cm
(S=1/3)

図13 中山遺跡 1983年度発掘調査出土資料・6

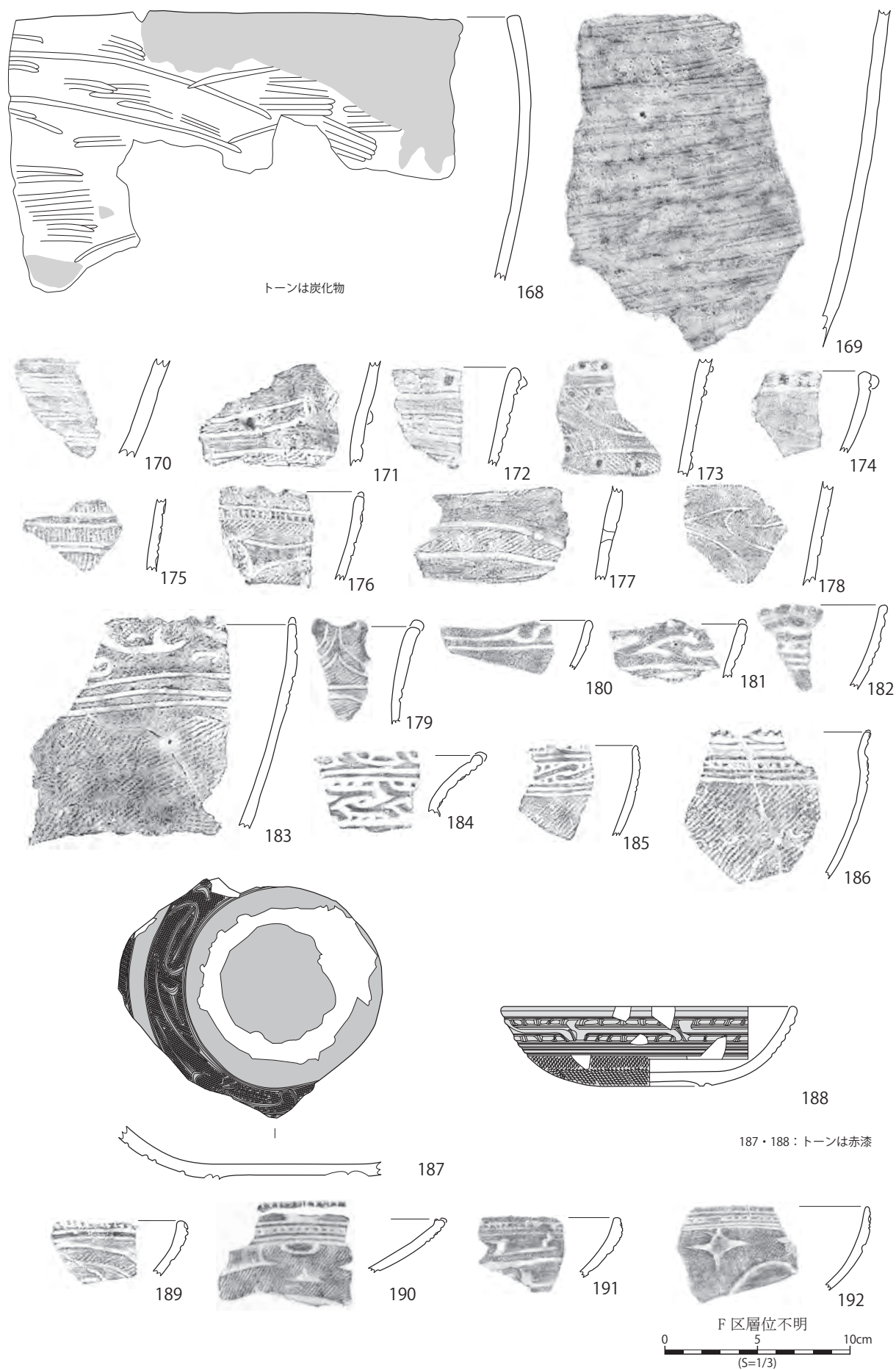


図 14 中山遺跡 1983 年度発掘調査出土資料・7

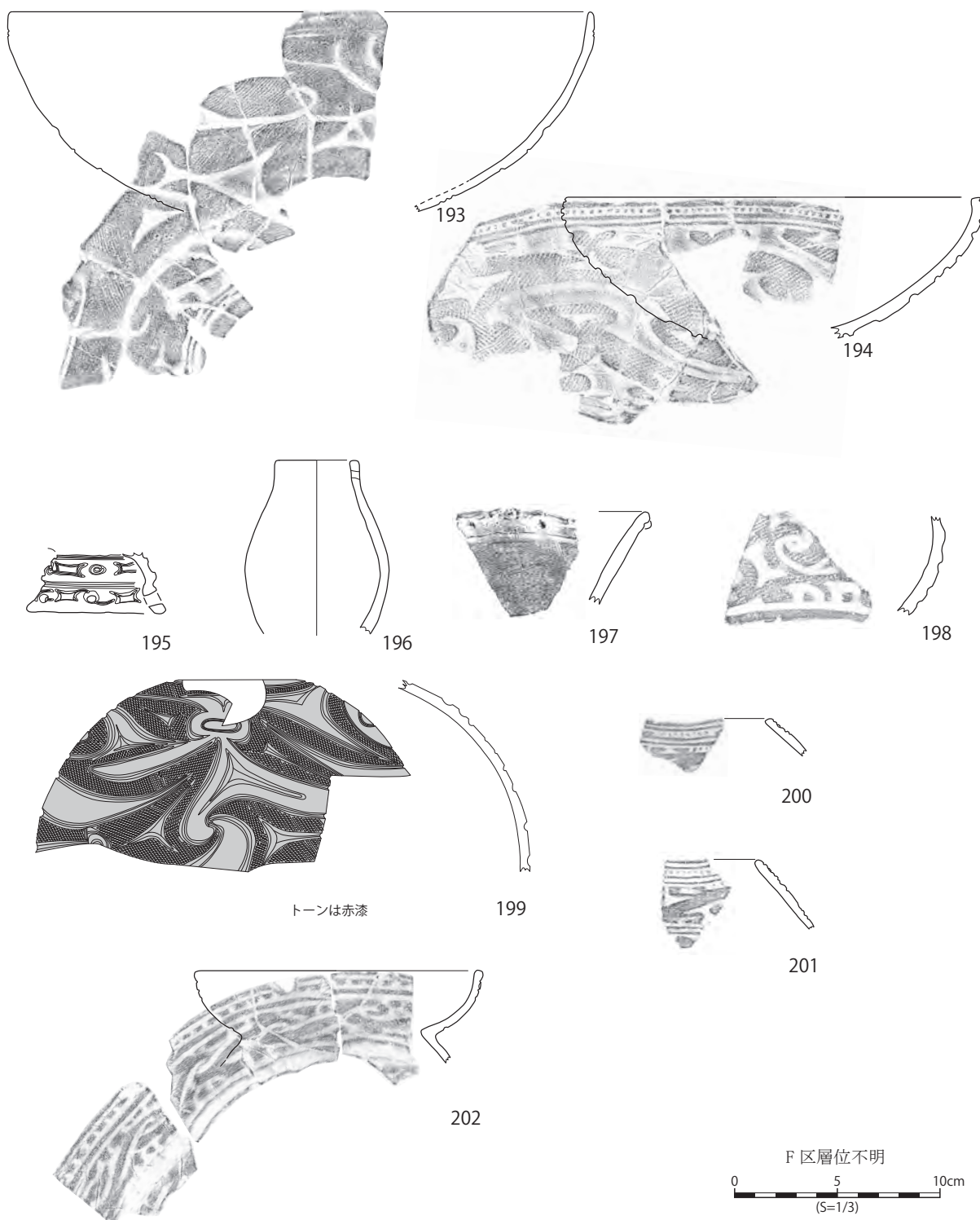


図 15 中山遺跡 1983 年度発掘調査出土資料・8

表2 中山遺跡1983年度出土土器觀察表

図 番 号	グ リ ド 区 違 い	層 器 種 類	時 期	残 存 部 位	計測値（）残存値				口縁			文様		底 形 態	地 文 種 類	方 向	混入物	調整		色調		炭化物		備考		
					器高 (cm)	口隆 (cm)	最大径 (cm)	底・ 台径 (cm)	器 厚 (mm)	器形	形態	断面形	口縁					文 頭	その他	箱密度 m ² /個	キザミ 種類	内 面	外 面		記 号	内 面
1	1	E SK52	浅鉢	大洞 C1	口-体	(280)	6	2	1	1	6f	体：8	LR	左 斜	qu・ws・ph	ナ	横	ナ	横	ナ	横	7.5YR6/4	褐灰	10YR5/1		
2	2	E MC51	浅鉢	大洞 C1	口-体	(180)	4	2	3'	1	6f	体：8	LR	左 斜	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR3/1	暗褐	10YR3/3	外面にタール状	
3	3	E MC51	浅鉢	大洞 C1	口-体	(220)	4	2	3'	1	6f	体：8	LR	左 斜	qu・ws・ph	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	ミ	10YR3/1	にぶい 黄橙	10YR6/3	口 微 厚	
4	4	E MC51	注口	大洞 BC	口-頭	(140)	5	B	3	2		頭：6f+6c+6c	無	無	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR4/1	褐灰	10YR4/1	口 微 厚	
5	5	E MC51	注口	大洞 BC	口-頭		5	B	1	1		頭：6f+6c+6c	無	無	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR4/1	灰黄褐	10YR5/2		
6	6	E MC51	注口	大洞 BC	口-頭	(180)	4	B	2	2		頭：6f+6c+6c	無	無	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR4/1	黒褐	10YR3/1		
7	7	F NF33 2	注口	大洞 B1	体		5					体：2b	無	無	qu・ws・fe・rm	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR7/3	灰白	10YR8/1		
8	8	F NF33 2	鉢	大洞 BC	口-体		4	1b	1	1	6a	体：6	無	無	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR5/1	褐灰	10YR4/1		
9	9	F NF33 2	鉢	大洞 BC	口-体	(180)	6	2	5	1	6f		LR	左 斜	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR6/1	灰黄褐	10YR5/2		
10	10	F NF33 2	台付 浅鉢	大洞 C1	台部	(120)	5				台：6f+8		無	無	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR7/1	灰白	10YR7/1		
11	11	F NE34 2	注口	大洞 BC	口-頭		5	B	1	2		頭：6f+6c+6f	無	無	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR7/3	灰黄褐	10YR5/2		
12	12	F NE35 3	深鉢	後末	口-頭		5	4	3	2	1		刻目	無	無	qu	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR5/2	灰黄褐	10YR4/2	
13	13	F NE34 3	深鉢	大洞 B1	口-頭		5	1	1	1	3		無	無	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR3/1	灰褐	7.5YR4/1	体 薄	
14	14	F ND35 3	深鉢	大洞 B2	口-体	(300)	5	2	3	1	5		LR	左 斜	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR4/2	にぶい 橙	7.5YR6/4	口 微 厚	
15	15	F NE35 3	深鉢	大洞 B2	口-体	(180)	5	2	3	1	5		LR	左 斜	qu	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR4/1	にぶい 橙	7.5YR6/4	口 微 厚	
16	16	F NE35 3	深鉢	大洞 BC	口-体	(180)	5	2	3'	1	6f		RL	右 斜	qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR5/4	にぶい 黄褐	10YR6/3		
17	17	F NC34 3	深鉢	大洞 BC	口-頭	(140)	6	2	3'	1	3	6e		無	無	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR7/1	灰黄褐	10YR6/2	
18	18	F ND35 3	深鉢	大洞 BC	口-体		5	2	3'	2	3	6		無	無	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR4/1	浅黄橙	10YR8/4	口 微 厚
19	19	F NE35 3	深鉢	大洞 BC	口-体	(140)	4	2	3'	1	3	6f	LR	左 斜	qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR3/1	黒褐	10YR4/1		
20	20	F NE35 3	深鉢	大洞 BC	口-体		4	2	3'	3	6d		LR	左 斜	qu・ws・rm	ナ	横	ミ	ナ	横	ナ	横	10YR4/1	褐灰	10YR4/1	
21	21	F NE35 3	深鉢	大洞 BC	口-体	(140)	5	2	3'	1	3	6d	LR	左 斜	qu・ph	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR4/2	灰黄褐	10YR5/2	口 微 厚	
22	22	F ND34 3	深鉢	大洞 BC	口-体	(260)	6	2	3'	1	3	6a		無	無	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR8/3	にぶい 黄橙	10YR7/3	
23	23	F NE35 3	深鉢	大洞 BC	口-頭	(200)	4	2	3'	1	3	6a		無	無	qu	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR4/1	黒褐	10YR3/1	
24	24	F NE35 3	深鉢	大洞 BC	口-体	(220)	5	2	3'	1	3	6c		LR	左 斜	qu・ws	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR5/4	にぶい 黄褐	10YR4/1	口 薄
25	25	F NE35 3	深鉢	大洞 BC	口-頭			1b	3'	2	3	6c		無	無	qu・ws・rm・ph	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR4/2	灰黄褐	10YR4/2	
26	26	F NE35 3	鉢	大洞 BC	口-体	(200)	4	2	3'	1	3	6c		LR	左 斜	qu・ws・ph	ナ	横	ナ	横	ナ	横	10YR3/1	褐灰	10YR4/1	体 薄

図 番 号	グ リ ド ・ 区 域 ・ 通 構	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 残存値				口縁		文様		底 形 態	底 種 類	キザミ 個/m ²	調整		色調		炭化物		備考			
					器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底・ 台径 (cm)	器形	断面形	口縁	頭				その他	内面 方向	外面 方向	内面 記号	外面 記号	内 面 量		外 面 量		
27	F NE34	3	鉢	大洞 BC			4	2	3'	2	3	6f	体：縦区 画6+8 (組型)	LR		qu・ws	ナ	横	ミ	灰白	10YR8/1	黒褐	10YR3/1		
28	F ND34	3	浅鉢	大洞 BC		(160)	4	2	1	1			体：8の 組型	LR		qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	にぶい 黄橙	10YR7/2	
29	F NC34	3	浅鉢	大洞 BC			4	2					体：8の 組型	LR		ws・ss・ph	ナ	横	文	灰黄褐	10YR6/2	浅黄橙	10YR8/3		
30	F ND34	3	浅鉢	大洞 BC		(160)	4	2	3'	1	3	6c+6f		LR		qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	にぶい 橙	7.5YR7/4	橙	7.5YR7/6	口 薄 体
31	F NE35	3	浅鉢	大洞 BC			5	2	1	3			体：8の 組型	LR		qu・ws・rm	ナ	横	ナ	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR4/1		
32	F ND35	3	浅鉢	大洞 C1		(240)	6	2	1	2		6f	体：8	LR		ws・ss・ph	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR6/3	褐灰	10YR6/1	
33	F NE35	3	浅鉢	大洞 C1			4	2				6f	体：8	LR		ws・ph	ナ	横	ナ	横	にぶい 褐	7.5YR5/4	にぶい 橙	7.5YR6/4	
34	F NC34	3	浅鉢	大洞 C1		(200)	5	2	1	1		6f	体：8	LR		qu・ws・bi	ミ	横	ミ	横	にぶい 黄橙	10YR7/2	灰黄褐	10YR6/2	
35	F NC35	3	浅鉢	大洞 C1		(280)	4	2	3				口唇：挟り 体：8	LR		qu・ws	ナ	横	ナ	横	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/2	
36	F ND34	3	浅鉢	大洞 C1			5						体：8	LR		qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	にぶい 黄橙	10YR6/3	
37	F NE35	3	注口	大洞 C1			6	2a					体：8			qu・ws・rm	ナ	横	ミ		にぶい 黄橙	10YR7/2	褐灰	10YR4/1	
38	F NE35	3	注口	大洞 BC			6	B	3	2	5	7				qu	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	浅黄橙	10YR8/3	
39	F NE35	3	注口	大洞 BC		(280)	5	B-2a	1	1		6d+6c	体：6a			qu・ws	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR5/1	灰黄褐	10YR5/2	
40	F ND34	3	注口	大洞 BC			5	2a				6a	体：7?			qu・ws	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	褐灰	10YR4/1	
41	F ND35	3 下	浅鉢	大洞 C1		(260)	5	2	3	3	5	沈線	口唇： キザミ 体：8	LR		qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR5/1	褐灰	10YR5/1	
42	F NE35	4	深鉢	大洞 B1			7	1a	1	1		9		LR		qu・ws・rm	ミ	横	ナ	斜 下	橙	7.5YR7/6	黄橙	7.5YR7/8	
43	F ND35	4	深鉢	大洞 B1		(360)	5	1a	1	1		1		LR		qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	にぶい 黄橙	10YR7/2	
44	F NE34	4	深鉢	大洞 BC		(280)	6	2	3	1	3	頭：横展開する 半圓状文	頭：横展開する半 圓状文・端部で主 にボジ文無し・頭 二段構成で間 部にボジ文	LR		qu・ws	ケ ズ リ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR6/3	にぶい 黄橙	10YR6/3	南東北系か
45	F ND34	4	深鉢	大洞 BC		(280)	6	2	3	2	3			LR		qu・ws	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR6/3	灰黄褐	10YR5/2	46と同一個 体
46	F ND34	4	深鉢	大洞 BC			6	2	3	2	3			LR		qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR7/3	褐灰	10YR6/1	45と同一個 体
47	F NC35	4	深鉢	大洞 B2		(240)	4	2	3	1		5		LR		qu・ws	ナ	横	ナ	横	褐灰	7.5YR4/1	にぶい 褐	7.5YR5/3	南東北系か
48	F NC34	4	深鉢	大洞 B2			4	2	3	1		5				qu	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	にぶい 黄橙	10YR7/4	口 厚 体
49	F NE34	4	深鉢	大洞 B2		(360)	6	2	3	3		5				qu・ws	ナ	横	ナ	横	浅黄	2.5Y7/3	にぶい 橙	7.5YR6/4	口 薄
50	F NE34	4	深鉢	大洞 B2			6	2	3	1		5				qu・ws・rm・ss	ナ	横	ナ	横	灰黄	2.5Y7/2	にぶい 橙	7.5YR7/4	

図 番 号	グ リ ド ・ 区 違 構	器 種 類	時 期	残 存 部 位	計測値 () 残存値			口縁		文様		底 形 態	地 文 種 類	調整		色調		灰化物		備考
					口径 (cm)	器高 (cm)	底・ 最大径 (cm)	断面形	口縁	器形	その他	密 度 m/個		内 面 方 向	外 面 方 向	内 面 記 号	外 面 記 号	内 面 量	外 面 量	
51	F NE35	4	深鉢	大洞 B2	□-頸		6	2		5				ナ	横	ナ	横	にぶい 黄	75YR6/4 浅黄橙 75YR8/4	
52	F NF34	4	深鉢	大洞 B2	□-頸		4	2	3	2	6			ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR5/3 10YR4/3	
53	F NC34	4	深鉢	大洞 BC	□-頸		5	2	3'	1	3	6c		ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR6/3 75YR6/4	
54	F NE34	4	鉢	大洞 B2	□-体		5	1b	1	1	5		LR	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄	75YR4/2 75YR5/3	
55	F NE34	4	鉢	大洞 B2	□-頸		5	1b	3	1	3	5 (崩)		ナ	横	ナ	横	灰黄褐 10YR5/2 灰黄褐 10YR6/2		
56	F NE34	4	鉢	大洞 BC	□-体		5	2	3'	2	3	6d	RL	ナ	横	ナ	横	黒褐 10YR3/1 浅黄橙 10YR8/3	微厚 体薄	
57	F NF34	4	鉢	大洞 BC	□-頸		4	2	3'	1	3	6a		ナ	横	ナ	横	灰黄褐 10YR4/2	にぶい 黄褐	10YR5/3
58	F NE34	4	鉢	大洞 BC	□-体		5	2	3'	1	3	6d	LR	ナ	横	ナ	横	黒褐 10YR3/1 灰黄褐 10YR4/2	微厚 口薄	
59	F NE34	4	鉢	大洞 BC	□-体		5	2	3'	1	3	6d	LR	ナ	横	ナ	横	黒褐 10YR3/2 黒褐 10YR3/1	口薄 体	
60	F NE34	4	鉢	大洞 BC	□-体		4	2	3'	1	3	6d	LR	ナ	横	ナ	横	黒褐 10YR3/1 黒褐 10YR3/2	口微厚 体	口微厚
61	F NE34	4	鉢	大洞 BC	□-体		5	2	3'	1	3	6d	RL	ナ	横	ナ	横	黒褐 10YR3/1 灰黄褐 10YR6/2	口薄 口薄	
62	F NE34	4	鉢	大洞 BC	□-頸		5	1b	3+5	1	3	6f+6?		ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR6/3 褐灰 10YR4/1	
63	F ND35	4	深鉢	大洞 BC	□-体		4	2	1	5+3	平行縦文裝飾深鉢 2類		LR	ナ	横	ナ	横	黒褐 10YR3/1	にぶい 黄橙	10YR7/3 体薄
64	F MC35	4	深鉢	晩期	□-底		4	2	1	1	1		上	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR6/3	
65	F ND35	4	浅鉢	晩期	□-底		5	2	1	1	1		上	無	無	無	無	灰白 10YR7/1 黒褐 10YR3/1		
66	F ND35	4	台付 浅鉢	晩期	□-底		5	2	2	1	1		上	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄褐	10YR5/3	
67	F ND35	4	浅鉢	大洞 BC	□-体		4	2	1	2	8の 祖型		LR	ナ	横	ナ	横	黒褐 10YR3/2 暗灰黄 25Y5/2		
68	F ND34	4	浅鉢	大洞 BC	□-頸		4	2	1	1	8の 祖型		LR	ナ	横	ナ	横	褐灰 10YR4/1 褐灰 10YR6/1		
69	F NC35	4	浅鉢	大洞 C1	□-底		5	台形	5	2	5	体・底：8		ナ	横	ナ	横	にぶい 黄	75YR7/4 75YR7/4	
70	F NC35	4	浅鉢	大洞 C1	□-体		4	2	3	2	3	口唇： 刻目 体：8	LR	ナ	横	ナ	横	灰黄褐 10YR5/2	にぶい 黄橙	10YR7/3
71	F NC34	4	浅鉢	大洞 C1	□-体		5	1	1	1	3	体：8		ナ	横	ナ	横	灰黄褐 10YR5/2 灰黄褐 10YR6/2		
72	F NC35	4	浅鉢	大洞 C1	□-体		5	1	1	3	連続 刺突	体：8	LR	ナ	横	ナ	横	褐灰 10YR4/1 褐灰 10YR5/1		
73	F NC35	4	注口	大洞 C1	□		A	5	1	2		刻目		ナ	横	ナ	横	黄灰 25Y5/1 黄灰 25Y6/1		
74	F NE35	4	注口	大洞 BC	□-体		5	B2b	1	1	6e+6c +6f	体：6a	無	ナ	横	ナ	横	灰黄褐 10YR5/2		
75	F NE34	4	注口	大洞 BC	頸- 体下		2b			6	体：6a			ナ	横	ナ	横	黒褐 10YR3/1	にぶい 黄橙	10YR7/3

図 番 号	グランド ・ 区 域 ・ 通 構	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 残存値				口縁		文様		底 形 態	地 文 種 類	混入物	調整		色調		灰化物		備考		
					器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底・ 口径 差 (mm)	器形	形態 断面形	口縁	頭				その他	幅 深 度 mm/個	キザミ 種類	内 面 方 向	外 面 方 向	内面 記号		外面 記号	内 面 量
76	F ND35	4	注口部 C1	注口部									体下：8 注口： 弧状決り +B突起		qu・ws	ナ	横	ナ	横	灰黄	25Y6/2	黄灰	25Y4/1	
77	F NE34	4	注口部 C1	注口部									注口：段 +B突起		qu・ws・ph	ナ	横	ナ	横	黄灰	25Y4/1	褐灰	10YR4/1	
78	F NC34	4	注口部 BC	口-体			(270)	5	B-2b	1	1	6e+6c +6f	体：6+6		qu・ws	ミ	ミ	ミ	黒褐	10YR3/1	褐灰	10YR6/1		
79	F NC35	4	注口部 BC	口-頭		(140)		5	B	1	2	5	6a+6a		qu・ws・ph	ナ	横	ナ	横	黄灰	25Y4/1	褐灰	10YR4/1	
80	F NC35	4	注口部 C1	頭-体				5	2b				体上： B突起+ 弧線 体下：8	LR	ws・ph	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	黒褐	10YR3/2	
81	F NC35	$\frac{4}{下}$	深鉢 B2	口-体		(400)		5	2	3	2	5*20?		LR	qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄	75YR6/4	にぶい 黄	75YR6/4	体 薄
82	F NC35	$\frac{4}{下}$	深鉢 B1	口		(200)		7		3	1	3+5			qu・rm・ss	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄褐	10YR6/3	にぶい 褐	75YR5/3	
83	F NC34	$\frac{4}{下}$	鉢 B2	頭				7	1b			5			qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄	75YR6/4	黄灰	25Y5/1	
84	F NC34	$\frac{4}{下}$	深鉢 BC	口-頭		(120)		4	2	1	2	2	6d		qu・ws	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	にぶい 黄	10YR7/3	
85	F NC35	$\frac{4}{下}$	深鉢 BC	口-体		(200)		4	2	3	1	3	沈線	LR	qu	ナ	横	ナ	横	明褐	75YR5/6	黒褐	10YR3/1	
86	F NC34	$\frac{4}{下}$	浅鉢 C1	体-底				5					体：8	LR	ws・qu	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	黒褐	10YR3/1	
87	F NE34	$\frac{4}{下}$	浅鉢 BC	口-体		(240)		4	2	1	1	連続刺 突	体：8	LR	qu	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	にぶい 黄褐	10YR5/3	
88	F NE3	$\frac{4}{下}$	注口部 BC	頭				3				6c			qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	灰黄	25Y6/2	
89	F NC34	$\frac{4}{下}$	注口部 C1	頭-体 上				5	2b			?+6f	体：6a		qu・ws・rm	ナ	横	ミ	褐灰	10YR5/1	褐灰	10YR5/1		
90	F ND35	5	深鉢 晩期	体				5							ナ				にぶい 黄	10YR6/3			内・外：アス	
91	F NE35	5	深鉢 後後	体				5	1a				体：1	LR	ws	ミ	ミ	ミ	灰黄褐	10YR6/2	褐灰	10YR4/1		
92	F NE35	5	深鉢 後後	口				8	波状	3	1+2+5		011		qu・rm・ss	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	灰白	10YR7/1	
93	F NE35	5	浅鉢 後後	口-体				7		2	$\frac{1}{(穿孔)}$		002		qu・ws	ナ	横	ナ	横	灰白	10YR8/1	灰白	25Y8/1	外：アス？
94	F NE35	5	深鉢 後末	口-頭		(360)		6	3	4	2	1			qu・ws・bi	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄	10YR7/2	にぶい 黄	75YR7/4	
95	F NE34	5	深鉢 後末	口-頭				6		4	4	2	1		qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	にぶい 黄	10YR7/2	
96	F NE35	5	深鉢 後末	口-体				5		2	4	2	1		qu	ナ	横	ナ	横	黒	10YR2/1	黒褐	10YR3/1	口 薄 体
97	F ND35	5	深鉢 後末	口-体				6		4	4	2	1		qu・ws・bi	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄褐	10YR5/3	灰黄褐	10YR4/2	
98	F ND35	5	深鉢 後末	口-頭				8		4	4	2			qu・ws・ss	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	灰白	10YR7/1	
99	F NE35	5	深鉢 後末	口-体				7		4	4	2	1		qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	灰黄褐	10YR4/2	
100	F NE35	5	深鉢 後末	口-体		(140)		5		波状	4	1		LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	にぶい 黄	10YR5/3	微 体 厚
101	F NE35	5	深鉢 後末	頭				7	1a				2+斜 めの文 様		qu	ナ	横	ナ	横	黒	10YR2/1	褐灰	10YR6/1	体 薄

図 番 号	グ リ ド 区 域 ・ 遺 構	層	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 残存値				口縁		器 形	文様		底 形 態	底 種 類	地 文	調整		色調		炭化物		備考					
						器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底・ 口径 (cm)	厚さ (mm)	断面形		口縁	頭				その他	槽密度 m/個	キザミ 種類	混入物	内 面 方 向	外 面 方 向		内面	外面	記号	記号	内 面 量
102 F NE35 5		5	浅鉢	後末	口-体		5	1	3							刻目		ナ	横	ナ	横	灰褐	75YR6/2	にぶい、 橙	75YR7/3				
103 F NE35 5		5	深鉢	後末	頭-体		8									刻目	刻目	qu・ws・rm・ss	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR6/1	灰黄	25Y7/2			
104 F NE35 5		5	深鉢	大洞 B1	口-体		6	1	2	1							刻目	刻目	qu	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	黒褐	10YR3/1		
105 F NE35 5		5	深鉢	大洞 B1	口-体		5	1	2	1							刻目	刻目	qu	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/2	黒褐	10YR3/1	口 微 厚 体	
106 F NC35 5		5	深鉢	大洞 B1	口-体		8	1a	1	2	1b						刻目	刻目	qu・ws	ミ	横	ミ	横	黒褐	10YR3/1	にぶい、 黄橙	10YR7/4	体 薄	
107 F NF33 5		5	深鉢	大洞 B2	口-頭		5	1b			5						刻目	刻目	qu・ws	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	にぶい、 黄橙	10YR6/3	体 微 厚	
108 F NE35 5		5	鉢	大洞 B2	口-体		6	1b	3	2	3	5					刻目	刻目	qu・ws	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	灰黄褐	10YR5/2		
109 F NF33 5		5	深鉢	大洞 B2	体		6	4or2			7						刻目	刻目	qu・ws・ss	ナ	ナ	ナ	斜	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR4/1		
110 F NE34 5		5	深鉢	大洞 BC	口-頭		4	2	3	1	3	6d					刻目	刻目	qu・ws	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	黒褐	10YR3/1	口 薄	
111 F NF33 5		5	浅鉢	後末	体-台		6.5	7									刻目	刻目	qu・bi・ws	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	灰褐	10YR4/1		
112 F NE35 5		5	鉢 or 注口 or 皿		体-底		5							体：7*4			上	ナ	ナ	ナ	ナ	褐灰	10YR4/1	黒褐	10YR3/1				
113 F NF33 5		5	浅鉢	大洞 B2	口-底		35	187	187	79	4	1b	5*4.5	1	9			無	無	qu・ws・ rm・fe	ナ	横	ナ	横	灰白 黄灰	10YR8/2 25Y4/1	灰白 黒褐	10YR8/2 10YR3/1	
114 F NE35 6		6	深鉢	後後	口-頭			(240)			6	1	4	2+1	9			LR	LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/2	灰褐	10YR5/2	
115 F NF33 6		6	深鉢	後末	頭		8							2				LR	LR	qu・ws	ミ	横	ミ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	
116 F NF33 6		6	深鉢	後後	口-頭			(400)			6	4	1	縄文帯 +1	1			LR	LR	qu	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	灰黄褐	10YR4/2	
117 F ND35 6		6	深鉢	後後	口		7		2	2	1						LR	LR	bi	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	口 厚	
118 F NE35 6		6	鉢	後末- 大洞 B1	口-体		5	(280)			5	2	2	1	1					qu・ws・ss	ミ	ミ	ミ	ミ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	
119 F NF33 6		6	鉢	後末- 大洞 B1	口-頭		5	(80)			5	2	4	1	1+5			LR	LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	浅黄橙	10YR8/3	灰白	10YR8/2	
120 F NE34 6		6	鉢	後後	口-頭		6	1	1	1(2股)	1	1	1		区画：9	0.07		LR	LR	qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	灰白	10YR8/1	浅黄橙	10YR8/4	
121 F NE35 6		6	深鉢	後末	口-体		8	1	2	1				1	区画：刻 目			LR	LR	qu	ミ	横	ミ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	体 微 厚
122 F NF34 6		6	深鉢	後末	頭		6							1b					qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/2		
123 F NE35 6		6	鉢	後末- 大洞 B1	口-体		5	(160)	(160)		5	2	2	2	5*8-10			無	無	qu・ws・ss	ナ	横	ナ	横	にぶい、 黄橙	10YR7/3	褐灰	10YR5/1	口 薄 体
124 F NE35 6		6	深鉢	後末	口-頭		5				5			1	区画：刻 目			LR	LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐	75YR3/1	褐	75YR4/3	
125 F NE34 6		6	鉢	大洞 B1	口-頭		5	1b	1	3	1							LR	LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR5/1	褐灰	10YR4/1	
126 F NE34 6		6	深鉢	大洞 B1	体		9							1 (端部 弧状)				LR	LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	
127 F NE34 6		6	深鉢	大洞 B1	頭-体		6							2				LR	LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	にぶい、 黄橙	10YR7/2	灰黄褐	10YR6/2	

図 番 号	グランド ・ 区 域 ・ 遺構	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 残存値			口縁		文様		底 形 態	底 文 種 類	ミ ヤ ミ 種 類	密 度 m / 個	混入物	調整		色調		灰化物		備考
					器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底・ 口径 (cm)	底・ 口径 (cm)	器 高 (cm)	断面形 態	口縁 形 態					内 面 方 向	外 面 方 向	内 面 記 号	外 面 記 号	内 面 量	外 面 量	
128 F NF33 6	深鉢	大洞 B2	口-頭	口-頭	8	3	1	4	5 (端部結合)							qu・ws-ss	ナ 横 ナ 横	縹灰	10YR4/1	にぶい 黄橙	10YR7/2		
129 F NF33 6	深鉢	大洞 B2	口-頭	口-頭	6	2	5	1	4	5 (端部結合)						qu・ws	ナ 横 ナ 横	縹灰	10YR3/1	にぶい 黄橙	10YR7/2	口 厚	
130 F NF33 6	深鉢	大洞 B2	口-頭	口-頭	4	2	1	2	5 (端部結合)							qu・ws	ナ 横 ミ	縹灰	10YR3/1	縹灰	10YR4/1		
131 F NE33 6	深鉢	大洞 B2	口-体	口-体	4	2	5	2	4	5 (端部結合)			LR	左 斜	qu	ナ ミ	縹灰	10YR2/1	縹灰	10YR2/1	縹灰	口 薄 体	
132 F NE33 6	鉢	大洞 B2	頭-体	頭-体	4	1b			11	体：5 (横線化)			LR	左 斜	qu・ws-ss	ナ 横 ナ 横	縹灰	10YR3/1	縹灰	10YR3/1			
133 F NF34 6	深鉢	大洞 BC	口-頭	口-頭	4	2	3	2	3	6a						qu・ph	ナ 横 ナ 横	縹灰	10YR3/2	にぶい 縹	75YR5/3		
134 F NF33 6	浅鉢	大洞 BC	口-体	口-体	5	1a	5	2	6b				LR	左 斜	qu・ws	ナ 横 ナ 横	縹灰	10YR5/1	縹灰	10YR4/1			
135 F NE35 6	深鉢	後末	口-体	口-体	5	2	1	4	横位 決り	体：矢羽 状文様			LR	左 斜	qu・bi・ws	ナ 横 ナ 横	暗縹	10YR3/3	縹灰	10YR3/2	体 薄		
136 F NE35 6	深鉢	後末	口-体	口-体	5	2	1	1	1	横位決り 消文			LR	左 斜	qu・rm	ナ 横 ナ 横	灰黄	25Y6/2	灰黄	25Y7/2			
137 F NE35 6	浅鉢	後後- 後末	口-体	口-体	4	2	4	2	穿孔 突起				無	無	qu・ws-rm	ナ 横 ナ 横	灰白	10YR8/1	灰白	25YR8/1	外：アス微		
138 F NE33 6	浅鉢	後後- 後末	頭	頭	4				頂部乳 頭形突 起に穿 孔						qu	ナ 横 ナ 横	縹灰	10YR4/1	縹灰	10YR3/2			
139 F NF33 6	注口	大洞 B1	体	体	4				体：同心 円状モ チーフ+ 三叉文			LR	左 斜	qu・ws	ナ 横 ナ 縦	にぶい 黄橙	10YR6/3	灰黄縹	10YR4/2				
140 F NE31 6	注口	後後	体	体	4				体：隆帯 で円状モ チーフ						qu・bi・ws	ナ 横 ナ 横	浅黄縹	10YR8/3	縹灰	10YR4/1			
141 F NE33 6	注口	後後	頭-体	頭-体	5				体：1 (微隆起 縦文)	021					qu・ws	ナ 横 ナ 横	にぶい 黄橙	10YR6/3	縹灰	10YR4/1			
142 F NE33 6	壺	大洞 B1+B2	体-底	体-底	7				体：三角 形の挟り に三叉文				丸	無	ws・qu	ミ 横	縹灰	10YR3/1 75YR3/2	赤縹	10R4/4	内面：漆 外面：赤漆		
143 F ND35 6	注口	後末- 大洞 B1	注口	注口	5				注口：隆帯						qu・rm	ナ 横 ナ 横	灰白	10YR8/2	にぶい 黄橙	10YR7/2			
144 F NF33 6	注口	後末- 大洞 B1	注口	注口	4				注口：2 隆帯						qu・ws	ナ 横 ナ 横	縹灰	10YR5/1	縹灰	10YR4/1			
145 F ND34 6	注口	後末- 大洞 B1	注口	注口	4				注口：三 叉文によ り2股+ 刺突						qu・ws	ナ 横 ナ 横	縹灰	10YR4/1	縹灰	10YR5/1			
146 F NF33 6	注口	大洞 B2	体	体	3				体：磨消文 注口：3				LR	左 斜	ws-qu	ナ 横 ナ 横	灰黄	25Y6/2	縹灰	10YR4/1			

図 番 号	グ リ ド 区 域 選 構	層	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 残存値			口縁		文様		底 形 態	底 種 類	地 文 方 向	混入物	調整		色調		炭化物		備考		
						器高 (cm)	口径 (cm)	底・ 最大径 (cm)	厚さ (mm)	器形	形態	断面形					口縁	頭	その他	槽密度 m/個	キザミ 種類	内 面 方 向		外 面 方 向	内面
147 F	NE33	6	注口	大河 B2	口		6	B		5					qu・ws	ナ	横	ナ	横	10YR6/1	褐灰	10YR4/1			
148 F	NF33	6	香炉	後後?	頭		8								qu・rm・bi	ナ	回 転	ナ	回 転	75YR7/6	橙	5YR7/6	接合面：アス		
149 F	NF33	7	粗製 深鉢	後後- 後末	口-体	(160)	6	2	1	1					qu・ws	ナ	条 痕	ナ	条 痕	25Y6/2	黒褐	10YR3/1			
150 F	NF35	7	深鉢	後後	口-頭		6		1	1	1		0.11	微細刻目	qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	10YR4/1	にぶい 黄橙	10YR7/2	体 薄		
151 F	NF33	7	深鉢	後後	体		7	1a				区画：牆	0.05		qu・ws	ナ	条 痕	ナ	条 痕	10YR2/2	にぶい 黄橙	10YR7/2			
152 F	NF33	7	深鉢	後後	口-頭		5		1	2	1		0.37		qu・ws	ナ	横	ナ	横	10YR5/2	黒褐	10YR3/1			
153 F	NF35	7	深鉢	後後	頭-体		7	2				区画：沈 線+牆 (大型)	0.23		qu	ナ	条 痕	ナ	条 痕	10YR3/1	にぶい 黄橙	10YR6/3	体 薄		
154 F	NF33	7	深鉢	後後	頭		7				1		0.07		qu・ws	ナ	左 斜	ナ	左 斜	10YR3/1	灰褐	7.5YR5/2			
155 F	NF33	7	深鉢 口	後後	頭		5				9+沈 線+牆		0.33		qu・ws	ナ	横	ナ	横	10YR3/1	黒褐	2.5Y3/1			
156 F	NF33	7	深鉢	後後	頭		6				9+沈 線+牆		0.16		qu	ナ	横	ナ	横	10YR3/1	褐灰	10YR4/1	体 微 厚		
157 F	NF33	7	深鉢	後末	口-頭	(260)	5		2	2	1			刻目	qu	ナ	縦	ナ	縦	10YR5/3	にぶい 黄褐	10YR6/2			
158 F	NF33	7	深鉢	後末	口		11		4	1	表裏縄文+三角形 の挟り+刻目			刻目	qu・ws	ナ	羽 状	ナ	横	10YR4/1	灰黄褐	10YR4/2			
159 F	NF33	7	深鉢	後末	頭		7				刻目円 文+1				qu	ナ	左 斜	ナ	横	10YR3/1	灰黄褐	10YR5/2			
160 F	NF33	7	深鉢	後末	頭-体		4								qu・ws・ss	ナ	右 斜	ナ	右 斜	10YR3/2	暗灰黄	2.5Y5/2			
161 F	NF33	7	深鉢	後末	頭		7				1c				qu・ws・rm・ss	ナ	左 斜	ナ	横	10YR7/2	にぶい 黄橙	10YR7/2			
162 F	NH33	7	鉢	大河 B1	頭		4	1b			3or5				qu	ナ	横	ミ	ナ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1		
163 F	NF33	7	注口	後後	頭	(130)	5		1	2	9+沈 線+牆		0.12		qu・ws	ナ	横	ナ	横	10YR3/1	黒褐	10YR3/1			
164 F	NF33	7	注口	後後	頭		6				縄文帯 +牆		0.10		qu・ws	ナ	横	ナ	横	10YR7/2	にぶい 黄橙	10YR5/1			
165 F	NF33	7	注口	後後	注口		4					注口：横 の磨消文			qu・ws	ナ	横	ナ	横	10YR3/1	にぶい 黄褐	10YR5/3	体 薄		
166 F	NF33	7	注口	後後	注口		3					注口：斜 め文様牆			ws・ss・bi	ナ	横	ナ	横	10YR6/3	褐灰	10YR4/1	接合面：アス		
167 F	NF33	7	注口	後後	注口		4								ws・rm	ナ	横	ナ	横	10YR5/3	にぶい 黄橙	10YR6/3	外・注口部内 面：アス多		
168 F	NF33		粗製 深鉢	後後	口-体	(280)	5	2	1	2					qu・ws	ナ	条 痕	ナ	条 痕	10YR6/1	にぶい 黄橙	10YR7/2	口 厚		
169 F			粗製 深鉢	後後	体		7	2							qu・ws	ナ	条 痕	ナ	条 痕	10YR6/3	灰白	10YR8/1			
170 F			粗製 深鉢	後後	体		8	2							qu・ws	ナ	条 痕	ナ	条 痕	7.5YR8/4	灰黄褐	10YR6/2			

図 番 号	グ リ ド 区 域 構 造	層	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 残存値					口縁		文様		底 形 態	地 文 種 類	混 入 物	調 整		色 調		炭化物		備 考		
						器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底・ 台径 (cm)	器形	形態	断面形	口縁	頭				その他	橋梁度 ㎡/個	キザミ 種類	内 面 方 向	外 面 方 向	内 面 記 号		外 面 記 号	内 面 量
171 F		深鉢		後後	体				6	1a				1		LR	qu	ナ	横	ナ	横	75YR3/3	黒褐	10YR3/1	体 微厚	
172 F	NF33	深鉢		後後	口-体				4		1	1	1	9			qu・ws	ナ	横	ナ	横	10YR3/1	褐灰	10YR4/1	体 薄	
173 F		深鉢		後後	体				5					1		LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	10YR4/1	浅黄橙	10YR8/3	体 薄	
174 F	NE33	深鉢		後後	口-体				4		1	1	1	9			qu・ws	ナ	横	ナ	横	灰白	10YR7/1	灰黄褐	10YR5/2	
175 F		深鉢		後未	頭				5					1			qu・ws	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR6/3	褐灰	10YR5/1	
176 F	NE33	深鉢		後未	口-体				5		3	1	2	1		LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒	10YR2/1	にぶい 黄橙	10YR7/2	口 微厚
177 F	NF33	深鉢		後未	体				7					1		LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	10YR3/1	灰黄褐	10YR4/2		補修孔
178 F	NF33	深鉢		後未	体				6					1b		LR	qu	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	
179 F	NE35	深鉢		大洞 B1	口-頭				6	1b	4	3	5			LR	qu	ナ	横	ナ	横	褐灰	75YR4/1	にぶい 橙	75YR6/4	体 薄
180 F	ND35	鉢		大洞 B2	口-頭				4	2	2	1		5			qu・ws	ナ	横	ナ	横	にぶい 橙	75YR6/4	にぶい 黄橙	10YR6/3	
181 F	NF35	深鉢		大洞 B2	口-頭				4	2	5	1		5			qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	にぶい 黄橙	10YR6/3	口 薄
182 F		深鉢		大洞 BC	口-体				5	2	3	1	3	6c		LR	qu	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR6/4	にぶい 黄橙	10YR6/4	口 微厚
183 F	NF33	深鉢		大洞 B2	口-体				5	2	3	1	4	5-6 過渡期		LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/2	褐灰	10YR4/1	体 薄
184 F	NE35	深鉢		大洞 BC	口-頭			(240)		1b	5	1	3+5	6c (2段)			ws・ph	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	にぶい 黄褐	10YR5/3	
185 F	NE34	深鉢		大洞 BC	口-体				5	2	3	1	3	6c		LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	灰黄褐	10YR6/2	口 薄
186 F	ND35	深鉢		大洞 BC	口-体			(200)		1b	3	2	3	9	体上：6f	LR	qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/2	にぶい 黄褐	10YR5/4	口 厚
187 F		浅鉢		大洞 B2	体-底			8.2		6					体下：5	LR	qu・ws・rm	ミ	横	ミ	横	漆： 暗赤	10R3/6	漆： 暗赤	10R3/6	外面に赤漆
188 F		浅鉢		大洞 BC	口-体			17.8	6.5	6	2	1	1	6a			ph・ws・礫	ナ	横	ミ	横	にぶい 黄褐	10YR4/3	にぶい 黄褐	10YR5/4	内：赤漆 外：赤漆
189 F		浅鉢		大洞 C1	口-体			(180)		5	2	1	3	連続刺 突	体：8	LR	qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	灰白	10YR8/2	灰白	10YR7/1	
190 F		浅鉢		大洞 C1	口-体			(180)		5	2	3	1	6f	体：8 口唇： 共り	LR	qu・ws	ナ	縦	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	にぶい 黄褐	10YR6/7	
191 F		浅鉢		大洞 C1	口-体			(220)		5	2	1	3	6f	体：8	LR	ws・ss	ミ	横	ミ	横	にぶい 黄橙	10YR6/3	灰黄褐	10YR6/2	
192 F		浅鉢		大洞 C1	口-体			(180)		4	2	1	1	6f	体：8	LR	qu・ws・ph	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR4/2	灰褐	10YR5/2	
193 F	ND35	浅鉢		大洞 C1	口-体			(240)	(240)	5	2	1		6f	体：8	LR	ws	ナ	横	ナ	横	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2	
194 F	NC35	浅鉢		大洞 C1	口-体			(180)	(180)	5	2	1	2	6f	体：8	LR	qu・ws・rm	ナ	横	ミ	横	灰黄褐	10YR5/2	灰黄褐	10YR6/2	
195 F		台付 浅鉢		大洞 B1	台部			6.0		4	2				台：3+3 (透かし)		qu・ws・ss	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR5/1	

図 番 号	グリップ ・ 遺構	層	器種	時期	残存 部位	計測値 () 残存値			口縁			文様	瘤密度 m/個	キザミ 種類	底 形 態	地文 種 類	方 向	混入物	調整		色調		炭化物		備考	
						器高 (cm)	口径 (cm)	底・ 最大径 (cm)	厚さ (mm)	器形	形態								断面形	口縁	頸 頭	内 面 方 向	外 面 方 向	内 面 方 向		外 面 方 向
196 F ME34			壺	後後- 後末	口-体		4.0	7.0		5	細長形	1	1	穿孔		無	無	qu・ws・rm	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR7/2	10YR6/3	
197 F			壺	後後 BC	口-頸	(160)			5		1	2	1		無	無	qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	灰黄褐 10YR5/2		
198 F			浅鉢	大洞 BC	体				6	2				体：8 (粗型的)	LR	左 斜	qu・ws	ニ	ナ	横	灰黄褐 10YR5/2	にぶい 黄褐	10YR6/3			
199 F NF33			壺	大洞 CI	体				5					体：8	LR	左 斜	qu・ws・fe	ナ	横	ニ	横	黒褐 10YR3/1	にぶい 漆： 暗赤褐 ・黒色	5YR3/6 10YR2/1	外：全面黒漆→赤漆 内：頸部付近 黒漆→赤漆	
200 F MC51			注口 BC	大洞 BC	口-頸				4	B	1	1					qu・ph	ナ	横	ナ	横	灰黄褐 10YR4/2	にぶい 黄橙	10YR6/3		
201 F MC51			注口 BC	大洞 BC	口-体				4	B	1	1	6f+6c				qu・ws	ナ ニ	ニ	ニ	黒褐 10YR3/1	黄灰 2.5Y4/1				
202 F NE34			注口 BC	大洞 BC	口-体				5	A	1	3	6f+6c				qu・ws	ナ	横	ナ	横	黒褐 10YR3/1	暗灰黄 2.5Y5/2			

第4節 90年度調査出土土器（図16・17、表3）

本節では、中山遺跡90年度調査で出土した縄文時代後期後葉から晩期中葉までの土器31点について述べる。器種構成は深鉢・鉢19点（図16-1～図17-19）、壺2点（図17-20・21）、注口土器9点（図17-22～30）、ミニチュア土器（壺）が1点（図17-31）ある。グリッド、層位は不明であり、器種、型式の順に分類した。器種、型式ごとに述べていく。

深鉢・鉢（図16-1～図17-19）

深鉢・鉢は19点図示した（1～19）。このうち後期後葉は13点（1～11・13・19）、大洞B1式は1点（15）、大洞B2式は4点（14・16～18）ある。このほか、時期不明が1点（12）ある。

後期後葉の深鉢・鉢は13点（1～11・13・19）ある。このうち7点（1～6・11）が粗製深鉢、6点（7～10・13・19）が精製深鉢または鉢である。粗製深鉢（1～6・11）は、全て口縁～体部片で、器形は口縁部が内傾する。平口縁で、口縁部断面は内削ぎが3点（1・2・6）、平坦な調整4点（3～5・11）である。地文は横方向の条痕5点（2～6）、LR縄文2点（1・11）である。1・2の体部外面には炭化物が付着する。

精製深鉢・鉢は6点（7～10・13・19）ある。このうち4点（7～10）が深鉢、2点（13・19）が鉢である。このうち口縁部が残るものは2点（7・8）あり、平口縁で、断面は平坦に調整され、7のみ肥厚する。口縁部装飾のあるものは1点（7）で、貼瘤が1単位ある。頸部文様があるのは3点（8～10）あり、無文帯が数段作出され、7に施文された瘤よりも小さな瘤が多数貼り付けられる。また、頸部にアスファルトが付着するのが1点（10）ある。13は鉢の頸部～体部である。LR縄文が施文され、体部上半には貼瘤がある。19は体部が括れずに口頸部が強く内湾する広口壺に似た器形の鉢である。平口縁で、リング状の突起が1単位つく。口縁部断面は内削ぎである。体部には対向する弧線が沈刻される。入組帯状文の入組部が形骸化したモチーフと考えられる。底部形態は丸底で、器面調整はミガキである。

大洞B1式の深鉢・鉢は1点（15）ある。口縁～頸部片であり、頸部の下で括れる器形と考えられる。小波状口縁で、口縁部断面は緩やかな丸みをもつ。頸部は玉抱三叉文が施される。

大洞B2式の深鉢・鉢は4点（14・16～18）ある。このうち3点（14・16・17）が深鉢で、1点（18）が台付鉢もしくは浅鉢である。深鉢は3点とも、口縁部が内傾する器形と考えられる。小波状口縁が2点（14・16）あり、1点（17）にB突起がつく。口縁部断面は緩やかな丸みをもつものが2点（14・16）、平坦に調整されるものが1点（17）ある。口縁部文様は山形三叉文が1点（14）、口縁部に沿う弧線が2点（16・17）ある。頸部文様は3点（14・16・17）とも入組三叉文である。17は、入組三叉文と、羊歯状文の過渡的な文様である。18は台付鉢もしくは浅鉢である。台部に玉部を透かしにした玉抱三叉文が施される。地文はRL縄文である。

時期不明の深鉢・鉢は1点（12）ある。12は口縁部を欠いた台付鉢である。地文のみがある。後期後葉である可能性が高い。

壺形土器（図17-20・21）

壺は2点図示した（20・21）。20は時期不明である。体部が球状の器形で、無文である。底部形態は上げ底であり、器面調整はミガキである。21は大洞C1式の口縁～頸部片である。平口縁であり、口縁部断面は平坦に調整される。頸部には貼り付けによる隆帯が交差し、交差部には穿孔と刻目がある。器面外面に赤漆、内面に黒漆が塗布される。

注口土器（図17-22～30）

注口土器は9点図示した（22～30）。このうち後期後葉6点（22～27）、後期末葉2点（28・29）、大洞BC式1点（30）がある。

後期後葉の注口土器6点（22～27）のうち、口頸部～頸部片1点（22）、頸部～体部片3点（23～25）、体部～注口部片2点（26・27）がある。器形のわかるものは2点（22・25）ある。1点（22）が傘のつか

ない器形で、1点(25)が肩部が頸部よりも張り出す器形である。口縁部の残るものは1点(22)のみで、平口縁で、断面は平坦に調整される。頸部文様は4点(22～25)にある。全てで無文帯が多段に作出され、瘤が多数つく。25は無文帯に刻目がある。注口部下部の装飾は注口部が残る2点(26・27)でみられ、貼瘤である。このうち26は二袋状の瘤があり、上からキザミを入れる。器面調整は全て、外面がミガキである。内面は1点(22)を除いてナデである。24の頸部には微量のアスファルトが付着する。体部の接着に使用されたと考えられる。

後期末葉の注口土器は2点(28・29)ある。2点とも無文である。28は器形が球状で、頸部～体部下半が残る。注口下部には隆帯に縦方向の弧線の沈刻が入り、二股状になる。後期後葉の貼瘤が変化したものと考えられる。欠損のため、口縁部形態、底部形態は不明である。器面調整はナデで、内面は一部ケズリである。29は注口土器の口縁～頸部片である。傘のつかない器形である。平口縁で、断面形態は内削ぎである。器面調整は外面がミガキ、内面がナデである。

大洞BC式の注口土器は1点(30)ある。肩部が頸部よりも張り出す器形である。頸部は二段構成で、上からC字文、横位の抉りの順で施文される。肩部には、かぎ状に入組むクランクを四角形のポジ文で充填する羊歯状文がある。

ミニチュア土器(壺)(図17-31)

31は無文のミニチュア土器の壺である。後期末葉の頸部～底部片である。頸部の下が強く張り出して最大径となり、体部は椀状である。底部形態は上げ底である。頸部下の張り出した部分には刻目列があり、突起が4単位配される。突起にはそれぞれ1単位の穿孔がある。器面調整はミガキである。

(落合 美怜)

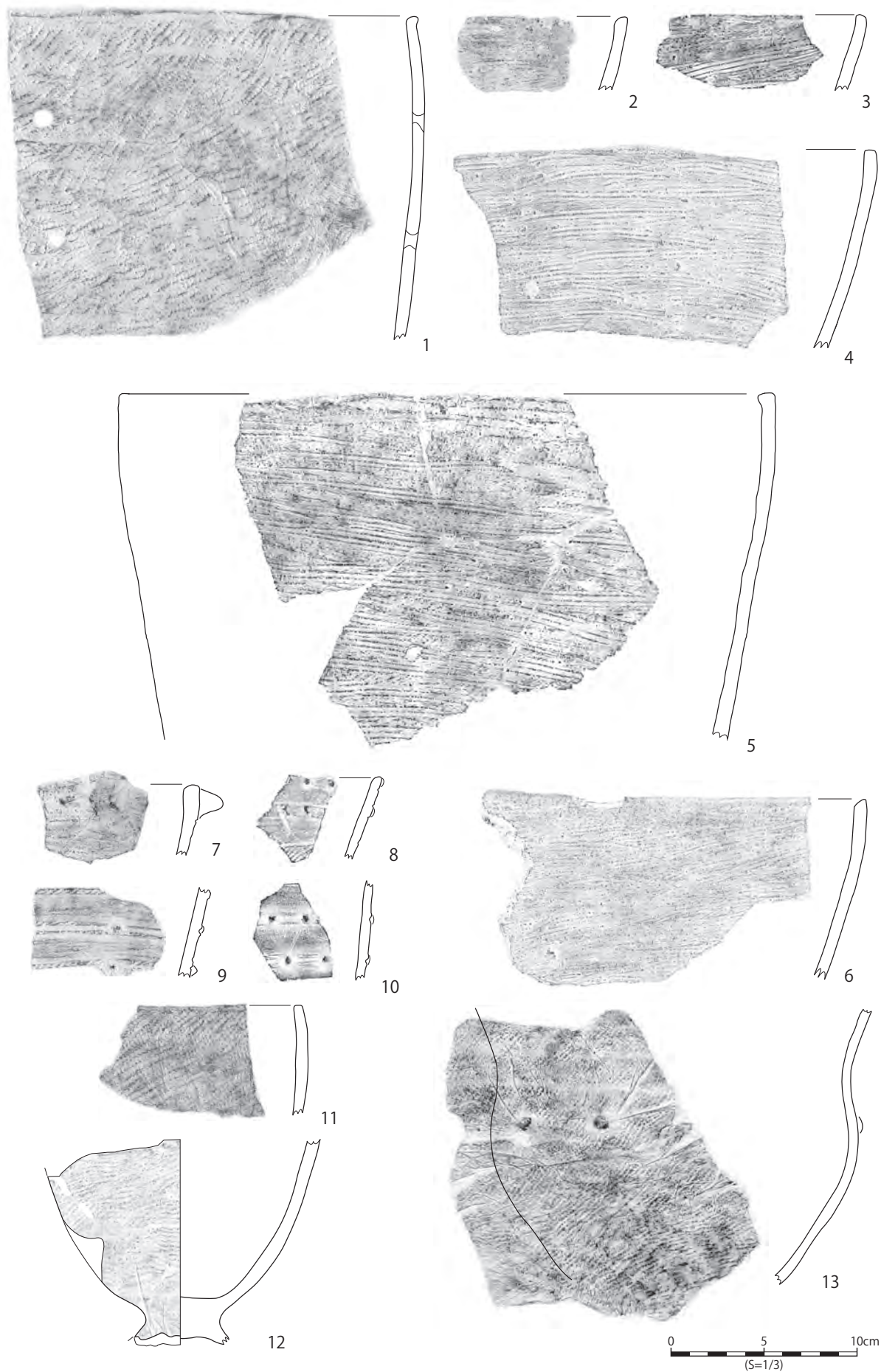


図 16 中山遺跡 1990 年度発掘調査出土資料・1

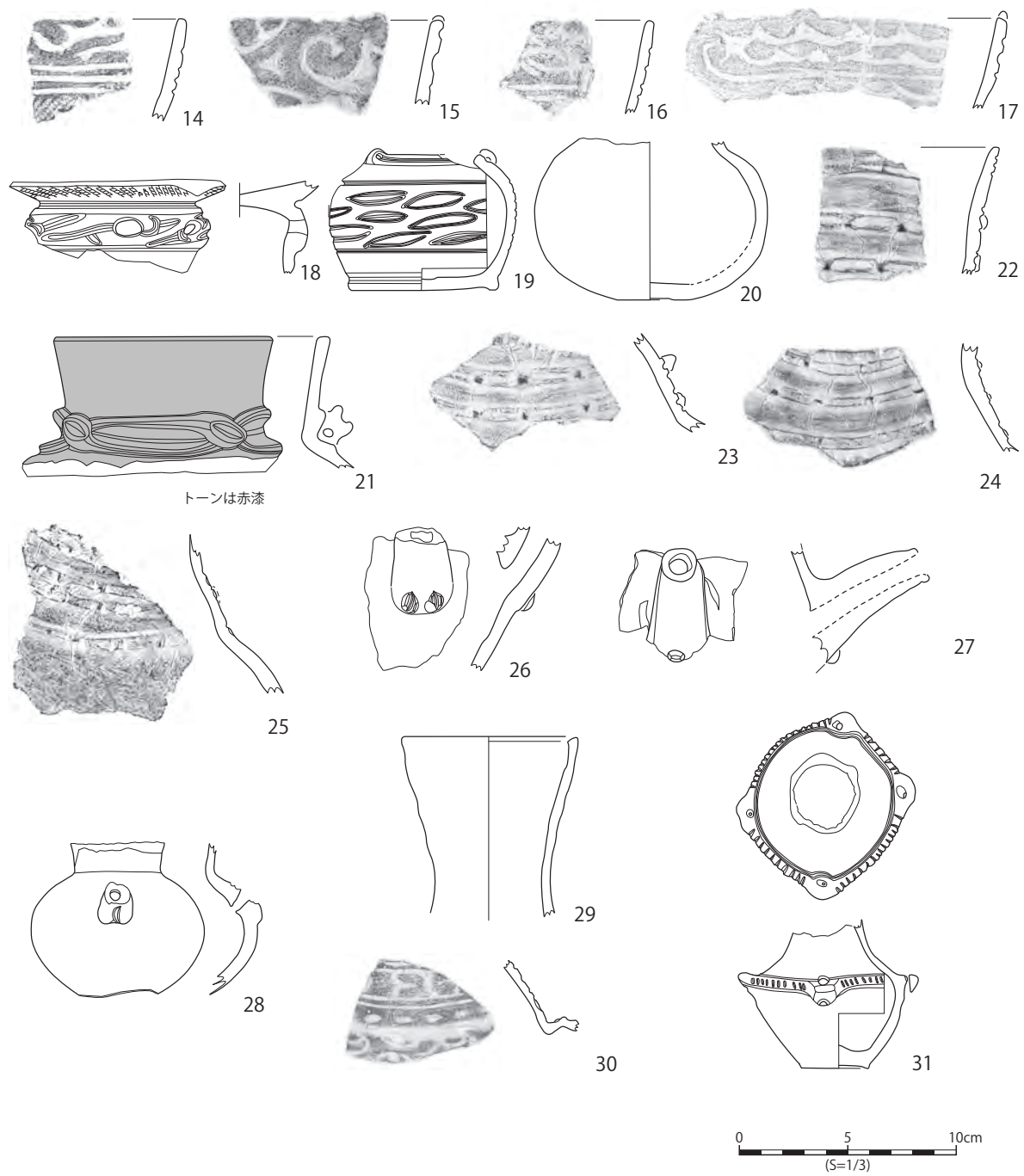


図 17 中山遺跡 1990 年度発掘調査出土資料・2

表 3 中山遺跡 1990 年度出土土器観察表

図番 号	器種	時期	残存 部位	計測値 () 残存値			口縁		文様		底 形態	地文 種類	混入物 方向	調整		色調		炭化物		備考	
				器高 (cm)	口径 (cm)	底・ 口径 (cm)	高さ (mm)	器形	断面 形態	口縁				その他	密度 m ² /個	内 面 方 向	外 面 方 向	内面 記号	外面 記号		内面 量
1	粗製 深鉢	後後	口-体		5	2	1	6			LR	左斜	qu・ss	ナ	横	灰黄橙	10YR6/2	にぶい 黄橙	10YR6/3	微 厚 体	同側穿孔・ 補修孔
2	粗製 深鉢	後後	口-体	(36.0)	6	2	1	6			条痕	横	qu・bi	ナ	横	褐灰	10YR4/1	黒	10YR2/1	微 厚 体	
3	粗製 深鉢	後後	口-体	(30.0)	6	2	1	2			条痕	横	qu	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	褐灰	7.5YR4/1		
4	粗製 深鉢	後後	口-体	(32.0)	7	2	1	2			条痕	横	qu・ph	ナ	横	灰白	10YR8/2	黒褐	10YR3/1		
5	粗製 深鉢	後後	口-体・ 底	(38.0)	7	2	1	2		上	条痕	横	qu・rm	ナ	横	にぶい 黄褐	10YR6/4	にぶい 黄橙	10YR7/3		
6	粗製 深鉢	後後	口-体	(37.0)	6	2	1	6			条痕	横	qu・bi	ナ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1		
7	深鉢	後後	口-体	(35.0)	8		1	4	1	0.11			qu	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	黒褐	10YR3/1	口 厚	
8	深鉢	後後	口-頸	(12.0)	5		1	2	9	0.36	LR	左斜	qu	ニ	斜	黒	2.5Y2/1	黄灰	2.5Y4/1	口 薄 体	
9	深鉢	後後	頸-体		6				9	0.15			qu	ニ	横	黒	10YR2/1	灰白	10YR8/1	体 薄 体	
10	深鉢	後後	頸		5				9	0.26			qu・rm	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	にぶい 黄橙	10YR7/3		アス：頸・薄
11	粗製 深鉢	後後	口-底	(10.0)	6	2	1	2			LR	左斜	qu	ニ	地	にぶい 黄橙	10YR7/2	褐灰	10YR4/1		
12	台付 鉢		体-台		6	2					上	LR	qu・ws	ナ	横	にぶい 黄褐	10YR7/2	黒褐	10YR3/1	体 薄	
13	鉢	後後	頸-体	(19.0)	5					0.01	LR	左斜	qu・bi・ph	ナ	横	灰黄褐	10YR4/2	にぶい 黄橙	10YR4/3	頸 薄	
14	深鉢	大洞 B2	口-体	(14.0)	7		3	1	3	5	LR	左斜	qu・bi	ナ	横	浅黄橙	10YR8/3	にぶい 黄橙	10YR7/3		
15	深鉢	大洞 B1	口-頸	(28.0)	6	1b	3	1	3	3			qu・ws・rm	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	10YR6/2	頸 薄	
16	深鉢	大洞 B2	口-体	(16.0)	5		3	1	5	5			qu・bi	ナ	横	黒	10YR2/1	灰白	10YR8/2	口 微 厚	
17	深鉢	大洞 B2	口-体	(40.0)	5	1b	3+5	2	5	5-6 過渡期			ss・qu	ナ	横	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/1		
18	台付 鉢	大洞 B2	体-台		6					台：3	上	右斜	qu・rm・ss	ナ	横	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3		
19	鉢	後後	口-底	(4.0)	6.4	2	1+2	6		丸			qu・bi・ws	ナ	横	黒	10YR2/1	灰褐	10YR4/1		
20	壺		体-底	2.8	6	1				頸：交差する隆帯	上		qu・ph	ナ	横	黒褐	10YR3/1	にぶい 黄橙	10YR7/2		
21	壺	大洞 C1	口-頸	10.1	4		1	2					qu・sa・ws	ナ	横	黒	10YR2/1	暗赤	10YR3/4	外：赤漆 内：黒漆	
22	注口	後後	口-頸		5	B	1	2	9	0.18			qu・bi	ニ	横	灰黄褐	10YR6/2	灰白	10YR8/1		
23	注口	後後	頸-体		6				9	0.17			qu・bi・rm	ナ	横	灰白	10YR7/1	褐灰	10YR5/1		
24	注口	後後	頸-体		9				9	0.16			ws・rm・ss	ナ	横	にぶい 黄褐	10YR7/4	褐灰	10YR4/1	外：アス・頸・ 薄	
25	注口	後後	頸-体		7	2a			9				qu・ph・wsss	ナ	横	にぶい 黄褐	10YR6/3	褐灰	10YR4/1		
26	注口	後後	体-注 口		5					0.08			qu・fe・ph	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	黒褐	10YR3/1		

図 番 号	器種	時期	残存 部位	計測値 () 残存値				口縁		文様		底 形 態	底 種 類	地文 方 向	混入物	調整			色調		灰化物		備考	
				口径 (cm)	器高 (cm)	口径 (cm)	底・ 最大径 (cm)	厚さ (mm)	器形	断面 形態	口縁 形態					文 頭	その他	内 面	外 面	方 向	内 面	外 面		記 号
27	注口	後口	体-注口				5								qu	ナ	横	ミ	横	黄灰	25YR5/1	黄灰	25YR4/1	
28	注口	後末	頸-体			8.0			B-1						qu・sa	ナ、 ケ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	褐灰	10YR4/1	
29	注口	後末	口-頸	(80)			4	B	1	6					qu・bi・ws・rm	ナ	斜	ミ	横 にふい 黄褐	10YR6/4	にふい 橙	10YR7/3		
30	注口	大洞 BC	頸-体				4	2a		C字文	11	体上：6c			qu・ph・ws	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR5/1	
31	壺	後末	頸-底	(68)		8.4	3.2	4				体：キザ ミ・突起 →穿孔 ×4	上		qu・sa・ws	ミ	横	ミ	横	暗オ リーブ	5Y4/4	オリー ブ黄	5Y6/4	ミニチュ ア

第5節 出土位置不明資料（図18、表4）

注記のない資料は6点である。深鉢1点（1）、壺2点（2・6）、注口土器2点（3・4）、浅鉢1点（5）がある。器種、型式の順に分類した。

深鉢（図18-1）

深鉢は1点ある。粗製深鉢であり、口頸部を欠く。底部形態は上げ底である。実測図に表われない部分でわずかにLR縄文があるが、ほとんどが無文である。土器内面に多量の漆が付着する漆容器である。時期は不明である。

壺（図18-2・6）

壺は2点ある（2・6）。2は体部上半に最大径をもつ球形である。B突起が2単位、正面のみにある。断面は外側が削り落される。体部上半に突起が縦に2つ並び、1単位つく。底部形態は丸底である。器面調整はミガキである。時期は不明である。

6は90年報告書の扉絵にカラー図版が掲載されており、90年度調査出土資料と分かる。ほぼ完形の広口壺である。器形は体部に段がつき球状で、底部は四脚である。口縁部は平口縁である。文様は、頸部に一段の方形ポジ文列、体部の上半に入組三叉文、体部下半に配置文の祖形的な文様、底部には四脚に沿って渦巻文が施される。内面には全面に黒漆、外面には全面に赤漆が塗布されている。大洞B2式である。

注口土器（図18-3・4）

注口土器は2点ある（3・4）。3は体部に最大径がある三段構成の注口土器である。器形は傘がつく器形である。平口縁で、口縁部断面は緩やかな丸みをもつ。底部形態は球底で自立しない。全体が無文で、注口部下部に二袋状突起がある。後期末葉～大洞B1式である。

4は傘がなく肩部が頸部よりも張り出す器形である。B突起があり、頸部と体部の下部には磨消文の配置文が施される。口縁部に刻目と弧線、体部上部にはB突起、弧線が連続する。底部形態は丸底であり、器面調整はミガキである。大洞C1式である。

浅鉢（図18-5）（GN No.34）

81年の試掘調査で出土したとみられる完形の浅鉢である。器形は、頸部で緩く括れ、口縁部にはB突起がつく。文様は頸部に2段の方形のポジ文列が付く。体部の地文はLR縄文で、上半が横位、下半が縦位に施され、羽状を呈する。大洞BC式である。

（落合 美怜）

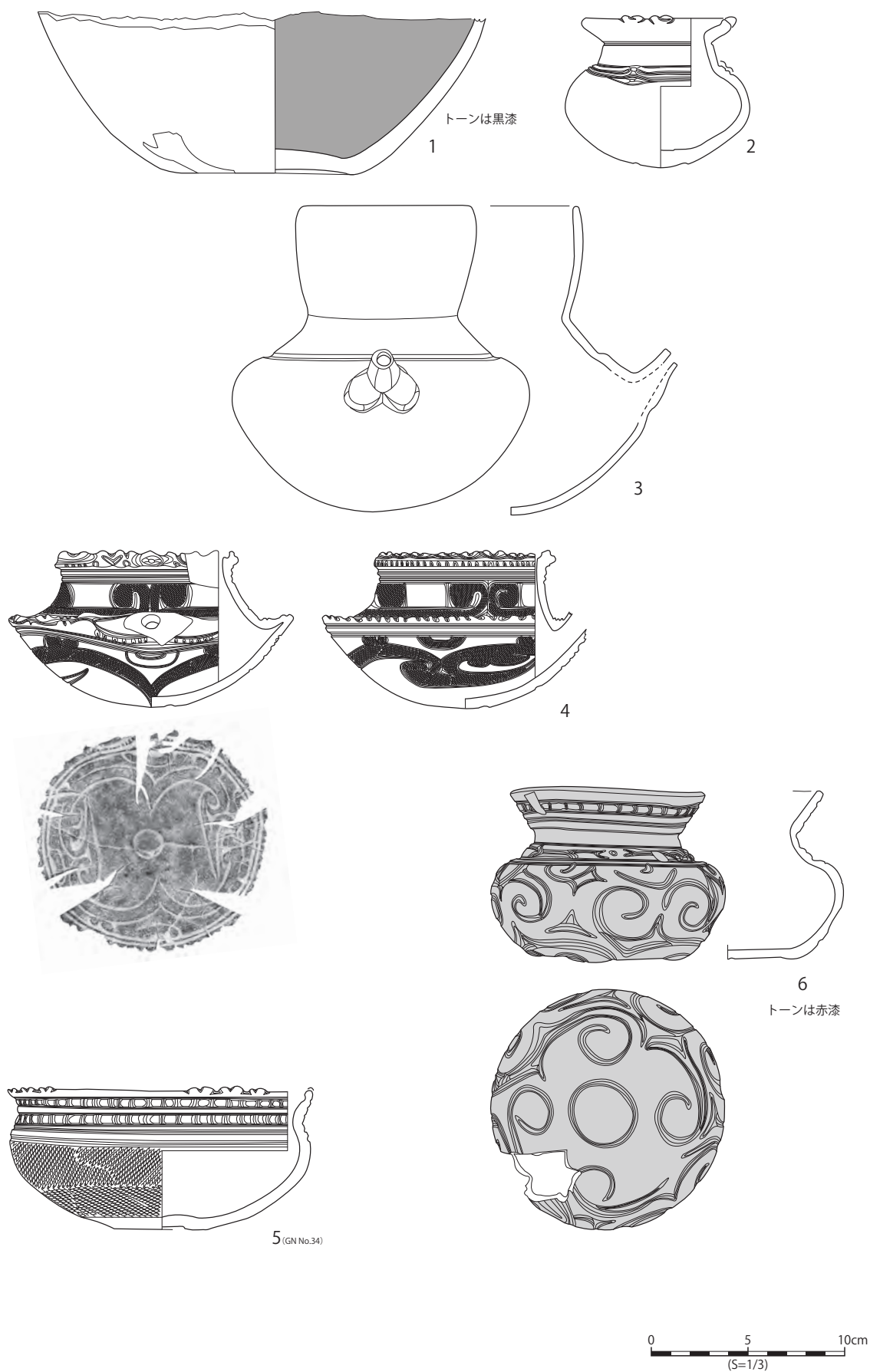


図 18 中山遺跡 発掘調査出土資料（未注記）

表 4 中山遺跡未注記資料観察表

図 番 号	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 残存値				口縁		文様	底	地文		混入物	調整		色調		炭化物		備考
				器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底・ 台径 (cm)	器形	形態		形 態	種 類	方 向		内 面	外 面	記 号	外 面	記 号	内 面	
1	粗製 深鉢		体-底				10.0				上	LR	左斜	sa	ナ	横	黒	10YR2/1	暗灰色	25Y5/2	内：黒漆 漆容器
2	壺		口-底	7.6	7.8	9.6	2.8	1	5	5	丸			ws・qu	ニ	横	にぶい 黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/3	
3	注口 大洞 B1	後表-	口-底	15.8	9.3	15.4	2.0	A-1	1	1	球				ニ	横	にぶい 黄	25Y6/3	にぶい 黄	25Y6/3	
4	注口 大洞 C2		口-底	9.5	11.2	17.5	2.0	B-2a	5	4	8	LR	左斜	ws・qu	ニ	横	黒褐	10YR3/1	にぶい 黄褐	10Y5/3	
5	浅鉢 大洞 BC		口-体	7.2	15.7	15.7	4.2	1b	5	1	6e	LR	斜	sa	ニ	横	黒褐	10YR3/1	にぶい 黄橙	10YR7/3	GN NO34 81527 81年出土か
6	広口壺 大洞 B2		口-体	9.1	10.1	12.2	7.7	5	1	1	5	脚		qu・sa	ニ	横	黒	10YR2/1	暗赤	10R3/4	90年報告書 の刷絵写真 内：口-頸・黒漆 外：口-頸・赤漆 図版

第6節 遺構内出土土器

本節では、遺構内出土土器について本報告と過去の報告を含めて、遺構の時期を検討する（図19・20）。過去の調査では、遺構精査時に埋土の層位的な調査や、床面や埋土の分層は行われていないため、遺構の時期の推定は、遺構から出土した土器の時期別の多寡に依った。なお、本報告と過去の報告書で掲載が重複する場合は、過去の報告書掲載の実測図を転載した。

（1）1982年調査A区

SKI01（図19-1～12）

12点のうち、精製深鉢は8点（1～8）ある。このうち文様は4点（2・3・7・8）で分かり、全て入組帯状文である。このうち2・7・8は多段入組帯状文で、7は入組部が互いに接続する文様である。器面装飾は、貼瘤、刻目がある。貼瘤は2点（1・3）、刻目は3点（4・5・8）にある。口縁部が残るものは1点（6）で、二股の山形突起で肥厚する。器形は2点（1・2）が緩く括れがつく。浅鉢は1点（9）で、器形は内湾し、口縁部は波状口縁、体部に配置文がある。粗製深鉢は3点（10～12）で、いずれも地文が条痕である。よって、後期末葉は11点（1～8・10・11・12）で、大洞B2式は1点（9）あることから、本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SKI02（図19-13・14）

2点とも精製深鉢である。13は頸部片で、多段入組帯状文が施され、文様を細かい刻目が充填する。14は頸部片で多段入組帯状文が施され、文様を貼瘤が充填する。よって後期後葉は1点（14）、後期末葉は1点（13）あることから、本遺構は後期後～末葉に位置付けられる。

SK01（図19-15～22）

全て精製深鉢である。15は口縁～頸部片である。口縁部は肥厚し、頸部は多段入組帯状文で刻目が充填され、その上に刺突の加えられた貼瘤がつく。16は口縁～頸部片で、頸部は地文縄文の上から沈線を施文する。17は頸部片で、多段入組帯状文がある。18は頸部片で、帯状文を刻目が充填する。18は口縁部片で、刻目の帯がある。19は口縁～頸部片で、入組帯状文がある。20は体部片で縄文の帯を切るように沈線がある。21は体部片で、刻目の帯がある。22は頸部～体部片で、くびれがある器形で、無文帯に沈線が一本はいり、その上から多数の瘤がつく。よって、後期後葉は1点（22）、後期末葉は7点（15～21）あることから、本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK04（図19-23・24）

精製深鉢1点（23）、注口土器1点（24）ある。23は頸部片で、多段入組帯状文が施され、文様を刻目が充填する。24はミニチュア土器の注口土器で、器高の半分ほどで稜が作出される。無文で、注口部の下にわずかに隆帯がある。よって、2点ともに後期末葉であることから、本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK05（図19-25）

注口土器が1点のみである。体部～底部が残り、無文で、底部は小さく、上げ底である。よって、本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK06（図19-26・27）

注口土器が2点である。26は頸部片で連続した横位の袂りが施文され、その下に磨消文があるようだが、モチーフ等の確認はできない。27は体部片で、配置文の粗形と考えられる文様がある。よって、2点ともに大洞B2式であることから、本遺構は大洞B2式に位置付けられる。

SK08（図19-28）

精製深鉢が1点である。頸部片で、多段入組帯状文がある。よって本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK09（図19-29・30）

精製深鉢が2点である。29は頸部片で、多段入組帯状文の下に刻目の帯がある。30は頸部～体部片で、多段入組帯状文が想定される。2点ともに後期末葉であるため、本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK10 (図19-31)

精製深鉢が1点である。31は頸部片で、多段入組帯状文が施され、文様を刻目が充填する。よって、本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK11 (図19-32・33)

精製深鉢が1点(32)、粗製深鉢が1点(33)ある。32は、口縁～体部片で、頸部に無文帯がある。33は体部片で、縦方向の条痕がある。2点ともに後期末葉であることから、本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK12 (図19-34～39)

精製深鉢が2点(34・35)、浅鉢が2点(36・37)、注口土器が2点(38・39)ある。34は精製深鉢の頸部片で、多段入組帯状文と想定される文様に、刻目が充填される。35は精製深鉢の口縁～体部片で、口縁部直下で鋭く括れる。口縁部はB突起がつき、括れの下に方形ポジ文列からなる羊歯状文がある。36は、浅鉢の台部で、全面に赤色顔料付着痕があり、台部に沈線がある。37は浅鉢の口縁～体部片である。器高の半分ほどでくびれ、頸部はポジ文のみの羊歯状文が3段にわたり、体部は互いにクランクが接続する羊歯状文がある。38は注口土器の頸部片で、文様が互いに入組むように沈線文が二段構成で施文され、入組三又文が想定される。39は注口部片である。注口部上下にB突起と沈線文があるが残存率が悪くモチーフは不明である。よって、後期末葉は1点(34)、大洞BC式が5点(35～39)あることから、本遺構は大洞BC式に位置付けられる。

SK13 (図19-40～42)

精製深鉢が1点(40)、粗製深鉢が1点(41)、壺が1点(42)ある。40は口縁～頸部片で、口縁部は山形で、肥厚する。頸部には刻目の帯がある。41は半截竹管文による刺突文が連続する。42は口縁部で、A突起がある。よって、後期末葉が1点(40)、晩期中葉以降が1点(42)で、41は明確な時期が不明で、縄文時代早期～前期の可能性がある。本遺構の時期は、出土土器の時期のまとまりがなく不明である。

SK16 (図19-43)

精製深鉢が1点ある。頸部片で、多段入組帯状文が想定される。本遺構は後期末葉に位置付けられる。

(2) 1982年調査B区

SK20 (図19-44・45)

精製深鉢が2点である。44は、頸部片で、横位の連続する袢りの上から、刺突が加えられた貼瘤がつき、その下に入組帯状文がある。45は口縁～頸部片で、口縁部は肥厚し、低い突起がつく。頸部は入組帯状もしくは無文帯で、刻目が充填される。よって本遺構は後期後～末葉に位置付けられる。

SK21 (図19-46)

壺が1点(46)ある。46は壺の頸～体部片で、頸部は無文で、体部に配置文が崩れたような文様がある。よって、本遺構は大洞C1式に位置付けられる。

SK25 (図19-47・48)

精製深鉢が1点、粗製深鉢が1点である。47は精製深鉢の口縁部もしくは頸部片で、三角形の袢りがある。48は粗製深鉢の体部で地文縄文である。よって、47は後期末葉、48は縄文時代後半期であり、本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK26 (図19-49～51)

精製深鉢が3点である。49は口縁～頸部片である。口縁部は肥厚し、山形の突起がつく。頸部には多段の入組帯状文が施され、刻目が充填される。50は口縁部片で、地文縄文の上から無文帯がつく。51は口縁部片で、肥厚し、山形の突起部である。後期末葉が2点(49・51)、50は後期後葉～晩期であることから、本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK27 (図19-52)

精製深鉢が1点である。52は口縁～頸部片で、口縁部は三角形の袢りがつき、頸部は入組帯状文である。本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK28 (図19-53)

精製深鉢が1点である。53は口縁～頸部片で、口縁部は肥厚する。頸部には刻目の帯がある。本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK29 (図19-54)

粗製深鉢が1点である。体部片で地文縄文がある。縄文時代晩期に位置付けられる。

SK30 (図19-55)

粗製深鉢が1点である。体部片で、横位の条痕が地文である。本遺構は後期後～末葉に位置付けられる。

SK31 (図19-56～58)

精製深鉢が3点である。56は頸部片で、入組帯状文が想定でき、刻目が充填される。57も頸部片で、多段入組帯状文が施され、刻目が充填される。58は口縁～頸部片で、口縁部は刻目の帯がつき、頸部は多段入組帯状文がある。3点とも後期末葉であることから本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK32 (図19-59・60)

注口土器が1点(59)、壺が1点(60)ある。59は口縁～頸部片である。頸部には玉抱三叉文がある。60は大型の精製壺の体部である。体部上半と下半に二段にわたり入組帯状文が形骸化し、三叉文へ移る過渡期的な文様がある。2点とも大洞B1式であることから本遺構は大洞B1式に位置付けられる。

SK35 (図19-61～64)

精製深鉢が2点、粗製深鉢が2点である。61はミニチュアの精製深鉢の口縁～底部片である。器形は頸部下で鋭く括れ、口縁にB突起がつき、頸部に玉抱三叉文がある。62は精製深鉢の口縁～頸部片である。口縁部に刻目の帯が2条あり、頸部に文様があるが不明瞭である。63は粗製深鉢の口縁～体部片で、地文は条痕である。口縁部付近は横位の条痕、体部付近は左斜めに下がる斜位の条痕である。64は粗製深鉢の体部片で、地文は右斜めに下がる斜位の条痕である。大洞B1式は1点(61)、後期末葉は1点(62)、後期後～末葉は2点(63・64)あることから、本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK36 (図19-65)

粗製深鉢が1点(65)ある。65は体部片であり、地文は横位の条痕である。本遺構は後期後～末葉に位置付けられる。

SK38 (図19-66～69)

精製深鉢が3点(66～68)、注口土器が1点(69)ある。66は精製深鉢の口縁部片で、刻目の帯が2条つく。67は精製深鉢の頸部片で、地文縄文の上から貼瘤がつく。68は精製深鉢の口縁～体部片である。小波状口縁で、頸部に沈線が2条ある。69は注口部で、注口部下に隆帯がつき、三角形の挟りがある。後期末葉は2点(66・68)、後期後～末葉は1点(67)、大洞B2式が1点(68)あることから、本遺構は後期末葉に位置付けられる。

SK39 (図19-70)

浅鉢が1点(70)ある。70は口縁～体部片で、口縁部が連続するB突起で、頸部は無文である。体部には配置文がある。よって、本遺構は大洞C1式に位置付けられる。

(3) 1983年調査E区

SK48 (図19-71～74)

鉢が2点(71・72)、浅鉢が2点(73・74)ある。71は口縁～頸部片で波状口縁、頸部は入組三叉文がある。72は頸部片で、73と同じ文様が頸部にある。73は口縁～体部片である。B突起があり、頸部には連続する方形のポジ文による羊歯状文、体部には配置文と充填文がある。74は体部片で、73と同じ文様がある。大洞B2式が2点(71・72)、大洞BC式が2点(73・74)である。よって、本遺構は大洞B2～大洞BC式に位置づけられる。

SK51 (図19-75～78)

鉢が2点(75・76)、粗製深鉢が2点(77・78)ある。75は頸部片で、頸部文様に入組三叉文がある。76は頸～体部片で、頸部に連続する方形のポジ文による羊歯状文、体部に雲形文(配置文のみか)がある。77・78はいずれも体部片で斜縄文が地文である。大洞B2式が1点(75)、大洞BC式が1点(76)ある。よっ

て、本遺構は大洞B2～大洞BC式に位置づけられる。

SK52 (図19-79～82)

鉢が1点(79)、浅鉢が1点(80)、粗製土器が2点(81・82)ある。79は口縁～頸部片である。平口縁で口唇部が平らに調整されており、頸部に入組三叉文がある。80は浅鉢で、頸部に方形のポジ文による羊歯状文、体部に配置文と充填文がある。81・82は体部片で地文が斜縄文である。79は大洞B2式、80は大洞BC式である。よって、本遺構は大洞B2～大洞BC式に位置づけられる。

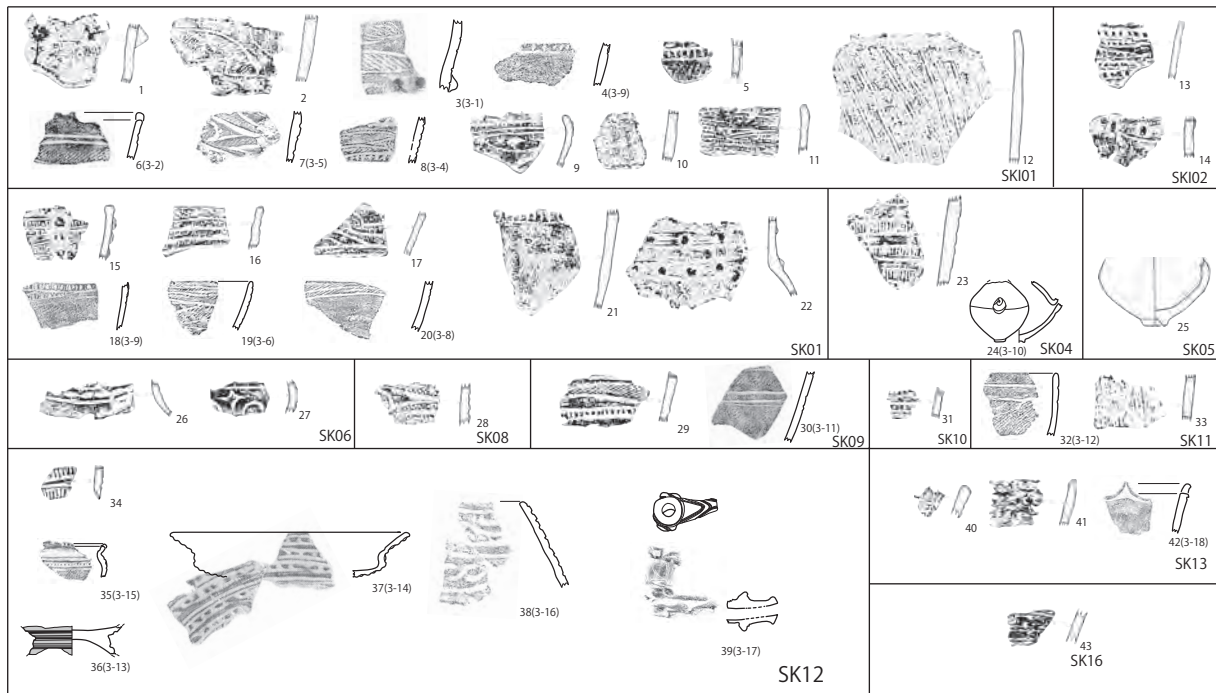
SK54 (図19-83・84)

浅鉢が2点である。83は体部片、84は体～底部片でいずれも配置文の祖型的文様があり大洞BC式である。よって、本遺構は大洞BC式に位置づけられる。

(4) 2011年調査A区(弘前大)

土坑1

晩期とみられる土器片、剥片が出土したが、詳細な時期は不明である。



1982 年度調査 A 区遺構出土土器



1982 年度調査 B 区遺構出土土器



1983 年度調査 E 区遺構出土土器

凡例：図中「(3-7)」は本報告に掲載されている資料で、図 3 - 図番号 7 を示す。
() のない個体は、既報告である。

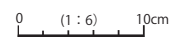


図 19 中山遺跡遺構内出土土器

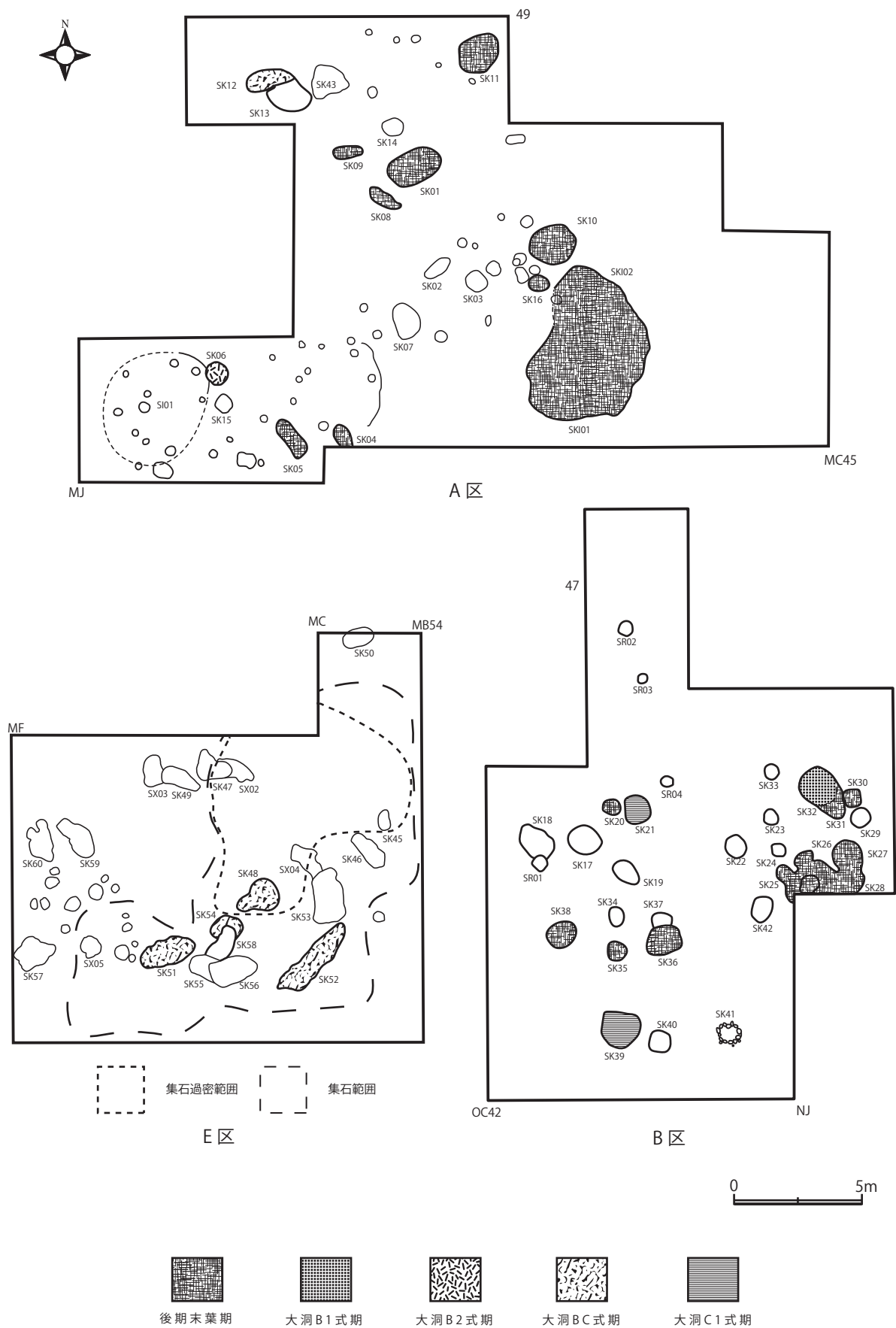


図 20 五城目町教育委員会調査区の遺構と型式分布

第7節 出土土器からみた中山遺跡における空間利用

前節の土器の観察結果をもとに、本節では中山遺跡におけるこれまでの発掘調査やボーリング調査等の成果をふまえた遺跡の変遷について述べる。時期別の遺物の平面分布と、それに伴う遺構から、遺跡の空間利用の変化を考察する（図21）。なお、D区の北側には遺構はないとされており（五城目町教育委員会1983）、遺跡の外縁にあたる可能性が高い。

（1）後期後葉段階

中山遺跡では、後期中葉末の土器が五城目町教委A区から1点〔図4-27（P14）〕出土しており、この頃から人が進出し始めたとみられる。後期後葉段階になると、人の活動が活発になりはじめる。

後期後葉の土器は、五城目町教委A区・F区・F'区、弘前大A区から出土している。後期後葉の遺構と考えられるものはない。台地南側の低地部に捨て場が広がる。弘前大のA区では流路沿いのトチノキ種皮・オニグルミ殻の集中廃棄域のほか、貯木場的な利用が推定された。居住域は、五城目町教委A区よりも東側にある可能性がある。なお、弘前大C区は、後期末葉の層を検出した段階で中断したため、下層から後期後葉の捨て場が検出される可能性がある。

（2）後期末葉段階

後期末葉段階になると、捨て場の範囲が丘陵の西側に伸び、丘陵の西裾に墓域、居住域を形成する。人の活動は後期後葉に比べさらに活発になる。

後期末葉の土器は、五城目町教委A・B・C・F・F'区、弘前大A・B・C区から出土した。後期末葉の遺構は、五城目町教委A区から竪穴住居跡および土坑、B区から土坑が検出された。土坑は、A区西側とB区から検出されたことから、その分布は弧状または馬蹄状になる可能性がある。土坑をその規模から墓とした場合、墓域は丘陵の南西側に広がる。居住域は、A区の東側から検出され、E区からは検出されなかったことから、墓域の南東側に展開する。捨て場は弘前大C区の南斜面にもあることから、後期後葉より北東側および南側に拡大し広範囲に及ぶ。しかし、この捨て場の遺物は土器が多く、流路が埋まりつつあったことから、後期後葉まであったトチノキ種皮・オニグルミ殻の集中廃棄域や貯木場的機能は無くなり、その場所が変わった可能性が高い。

（3）大洞B1式段階

大洞B1式段階は、丘陵上は後期末葉と同じ範囲に遺物が分布しており、おおよそ前段階と同じ範囲での空間利用が推定される。ただし、遺構は五城目町教委B区の土坑1基のみで、遺物の密度も、前段階に比べて減少する。大洞B1式の土器は、五城目町教委A・B・F・F'区、弘前大A区から出土した。低地の捨て場もより丘陵側のF・F'区、弘前大A区周辺のみ限定され規模が縮小する。

（4）大洞B2式段階

大洞B2式段階は大洞BC式が混入するが多い。前段階と同じ範囲での空間利用が推定される。大洞B2式段階は、本遺跡において後期末葉にならび活動が活発になる時期の一つである。土器は全ての区より検出された。遺構は五城目町教委A・E区から土坑、E区から集石が検出された。これらは墓域あるいは祭祀域と推定され、丘陵の南東、後期末葉よりやや南側に位置する。丘陵の頂部に位置する集石から五城目町教委B区まで、楕円形もしくは馬蹄状になる可能性がある。居住域は不明であるが、丘陵頂部か丘陵の東側に展開する可能性がある。捨て場は遺物の密度から五城目町教委F・F'区、弘前大B区周辺へと移動しつつあり、すでに陸地化していた弘前大A区より西側に展開する。

（5）大洞BC式段階

大洞BC式段階は、丘陵上は前段階とはほぼ同じ範囲で展開するが、低地では、弘前大A区よりも南側には分布しない。また、遺構は五城目町教委E区で土坑1基が検出されている。したがって、墓域や居住域は、移動した可能性が高い。捨て場は前段階と同じく、弘前大A区より西側が中心である。したがって、

この段階の資料が多い館岡コレクションや佐藤初太郎旧蔵資料に含まれる土偶等の優品が出土した地点もこの範囲に含まれる可能性が高い。なお、弘前大B区では、粗製土器よりも精製土器の方が多く出土しており、なおかつ完形率が高い土器が廃棄されていることから、ただの廃棄場ではなく、モノ送りのような祭祀的な捨て場の可能性も指摘できる。

(6) 大洞C1式段階

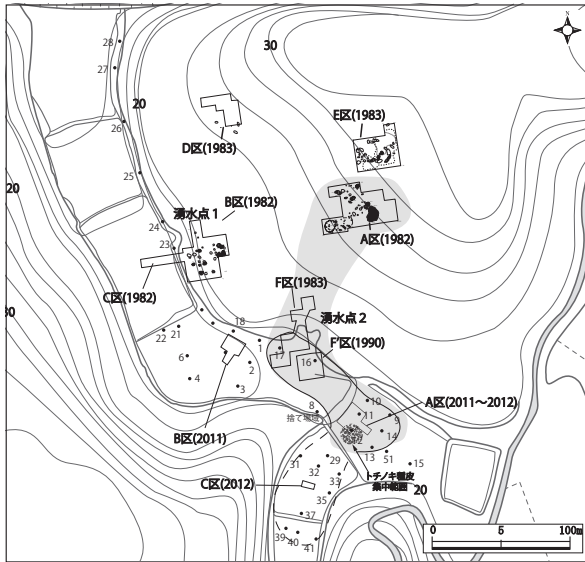
大洞C1式段階は、縄文時代の遺物が出土する最後の時期である。遺物が出土する範囲は、前段階に比べ縮小する。出土した調査区は、五城目町教委A・B・E・F区、弘前大B区である。本段階の遺構は五城目町教委B区で土坑2基が検出されている。捨て場の範囲は前段階よりも縮小し、五城目町教委F区からB区までの範囲となる。

(7) まとめ

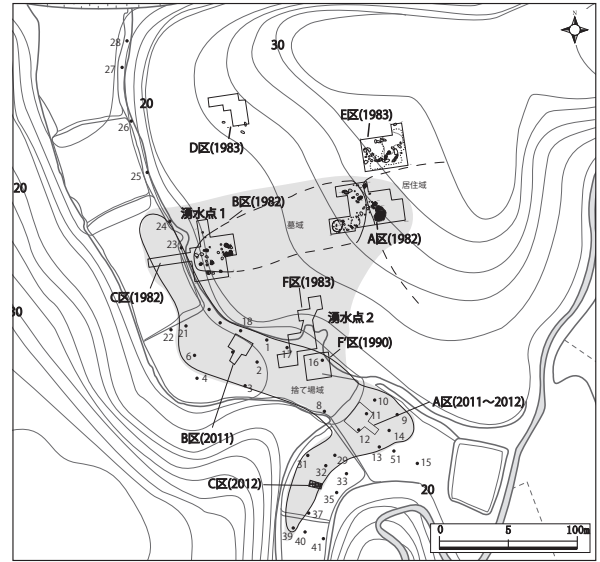
中山遺跡では、これまでの調査により後期末葉から晩期中葉の大洞C1式までの遺物が主に出土した。丘陵部では南西側の既調査域から、遺構が検出された。後期末葉段階では、土坑、竪穴住居跡、大洞B2式段階では、土坑、集石遺構が検出された。墓域の範囲は、後期末葉と大洞B2式段階ともに丘陵の南西にのびる。一方、居住域は、北東側に伸びる可能性が高い。後期末葉・大洞B2式段階以外の時期に属する遺構は少なく、捨て場の位置から未調査域である丘陵東側に展開していた可能性が高い。

また、丘陵の南側から南西側に伸びる谷部低湿地の斜面を、全段階を通じて捨て場としていた。特に、後期末葉を中心に、低地部の流路を利用しつつ、その脇で食料加工の際に出た残渣の廃棄域、加工木製品の貯木場的機能として利用されていた。大洞B2～BC式段階になると谷の埋没と共に、捨て場の位置が移動する。したがって、中山遺跡は後期末葉から晩期前半にかけて継続する集落であるものの、大洞B1式段階に空間利用上の一つの画期があることが指摘できる。

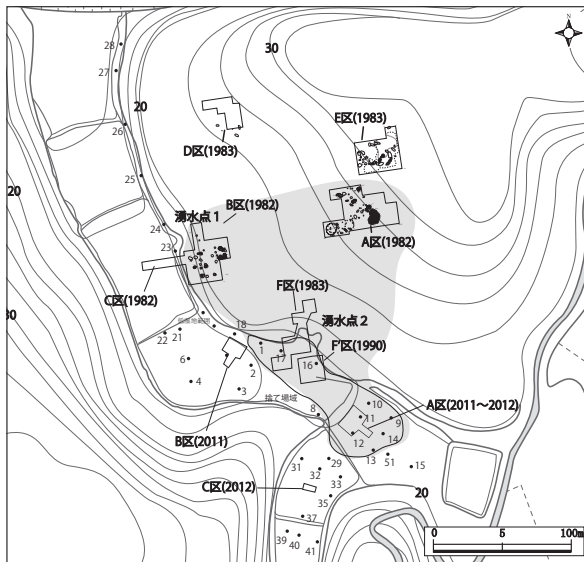
(長谷川 大旗)



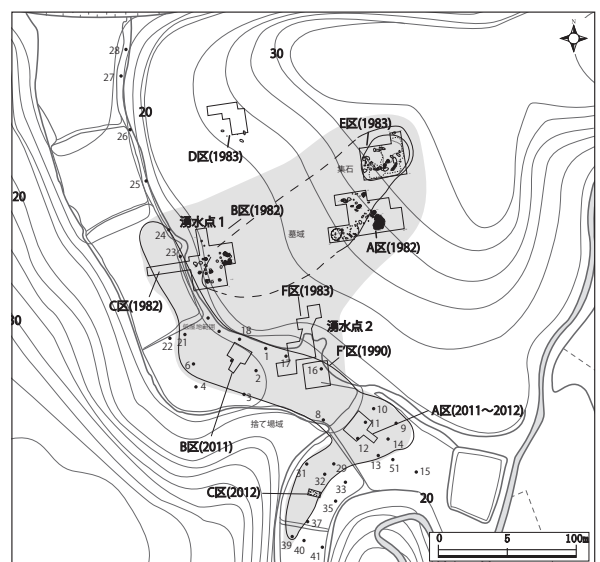
後期後葉



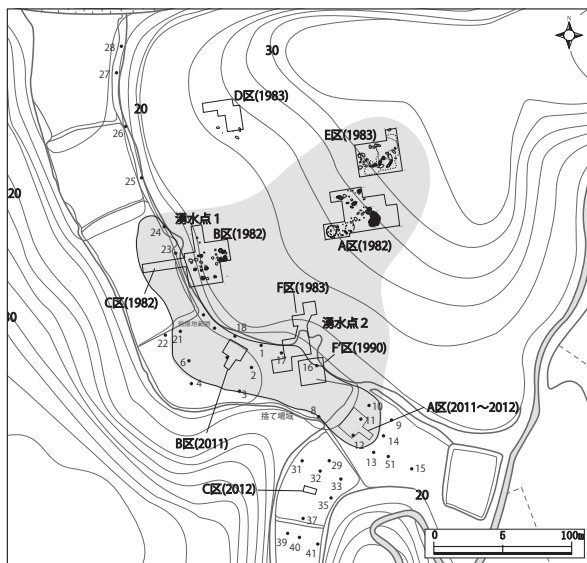
後期末葉



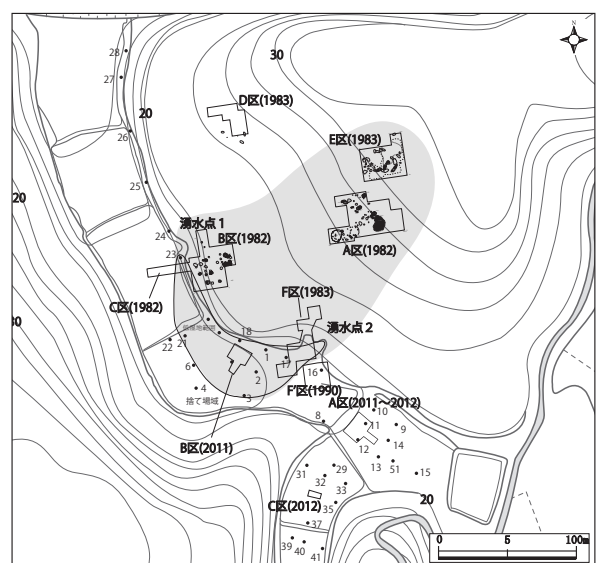
大洞 B1 式



大洞 B2 式



大洞 BC 式



大洞 C1 式

図 21 中山遺跡の空間利用の変遷

第3章 東京大学総合研究博物館所蔵の中山遺跡出土遺物

本章は東京大学総合研究博物館との共同調査により東京大学総合研究博物館蔵の中山遺跡出土遺物について2012年10月9日～11日に調査を行った成果である。成果については、2015年1月12日より上條信彦（弘前大学）・佐宗亜衣子・諏訪元（東京大学総合研究博物館）『東京大学総合研究博物館 人類先史部門所蔵 中山遺跡出土標本データベース』<http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DJinruis/nakayama/hajime.php>として公開されている。資料の来歴についての検討などは、本データベースを参照していただきたい。

本章ではデータベース作成の際に、『石器 中山』掲載資料を中心に図化を行った資料を掲載した。なお、本章第1節と第2節は上條信彦・佐宗亜衣子・諏訪元（2012）のデータベースを一部修正したうえで再掲載した。

第1節 調査の背景

中山遺跡は、真崎勇助により明治20（1887）年に東京人類学会に紹介された（真崎1887）。その後、東京人類学会会員で当時馬川小学校教員であった佐藤初太郎によって発掘が行われた。東京人類学会1906掲載の武田安之助の弔詞を参考にすると、佐藤初太郎（生年不明－1906）は、秋田師範学校の出身で、明治17（1884）年より13年ほど脇本小学校訓導を勤める。そのなかで10年間、脇本小学校訓導校長であった。東京人類学会会員で明治27（1894）年に蓑虫山人とも会っており、その際の様子絵日記に描かれている。この頃の資料は秋田図書館に保管陳列されていた。東京人類学会を通じて男鹿地域の遺跡・遺物・民俗の紹介を行った。その後、山本麻生地域に転勤し、麻生遺跡、中山遺跡の調査に携わる。この頃の遺物の一部は東京帝国大学人類学教室付属の倉庫に陳列されたとあり、本章で検討する中山遺跡の資料もこの頃に移動した可能性がある。なお、同文章には「発掘採集せる土器石器類頗る多く之が為に業を得るものあり某々両村の如きは永年間反目せる感情土器石器採集の利益のために和合したるの奇談あり」とある。この点が、後に述べる土器に発掘関係者が記載された札がついていた理由とみられる。

さらに佐藤は踏査の際に見かける動植物・鉱石などに興味をもち、独学で博物学の研究に入る。この頃、遺物に付着するベンガラやアスファルトの論考もみられる。秋田県第一中学校で日本歴史植物学を教授、明治36（1903）年には植物学科の教員免許を得る。明治37（1904）年には函館中学校に赴任した。佐藤が収集した資料は、佐藤の死後明治42（1909）年4月県立図書館におさめられた。昭和51（1976）年に県立図書館から県立博物館に考古資料が移管された。

なお、武田安之助の弔詞には佐藤の容態が変わる前に佐藤を深く信頼していた石川理紀之助からの和歌が贈られた。このことから佐藤初太郎と石川理紀之助の関係が分かる。ちなみに、弔詞を捧げた武田安之助（生年不明－1918）は広島県出身で、佐藤初太郎が秋田県にいた頃は、秋田県図書館館長（秋田県第一尋常中学校校長を兼任）、佐藤が亡くなった当時は函館中学校校長であった。

中山遺跡発掘時期については、以下に紹介する『石器 中山』及び栗田（1951）を検討した結果、正確には明治33（1900）年4月と分かった^{*}。また、これまで中山遺跡の大型尖頭器（八幡1948）の寄贈者である渡辺由蔵と佐藤初太郎の発掘との関連が不明であったが、これに関する記述も確認することができた。

栗田（1951）の「中山石器時代遺跡発掘記事」によると、「歴史考古に関する実地の資料として明治33年4月14日午後1時より、職員生徒20余名及び五城目町渡邊由蔵を伴って発掘を行い、遺物が大量に出土したため作業を延長した。16日午後3時に出張のため、渡邊氏のほか村上嘉七・横山安整・佐々木熊次郎・中村徳松の補助を得て、佐藤出張中は掘削のみを行い、出張後精査を行った。しかし、見学者が多くなり、よくない噂を立てるなど作業が妨害されたため、19日に作業を中断した」という。この記述から渡邊・村上・横山・佐々木・中村、そして調査者である佐藤初太郎全員が佐藤の中山遺跡発掘調査に関わっていたことが明らかである。

その後は、五城目町教育委員会による3度に渡る発掘調査（昭和57・58年、平成2年）が行われ、丘陵部から谷部にかけて広い範囲に分布する縄文時代後期後葉～晩期中葉の遺跡と判明した。さらに谷部の

低湿地からは、漆塗弓や漆漉し布などの植物質遺物が発掘され「中山遺跡出土漆工及び漆工関係出土品」として秋田県指定有形文化財に指定された。また、平成24・25（2012・2013）年に、弘前大学人文学部と五城目町の協定締結に基づく中山遺跡の発掘調査が実施された。

佐藤初太郎調査の出土資料については、五城目町関係の書籍には掲載されておらず、佐藤初太郎関連資料を所蔵する秋田県立公文書館や秋田県立博物館でも見出すことはできなかった。また、大館市中央図書館蔵の真崎勇助旧蔵資料（真崎文庫）にも中山遺跡出土資料があるものの、佐藤調査時の出土資料は見出せなかった。唯一、町内の館岡家所蔵の遮光器土偶については、分銅・小野（1955）に佐藤調査時に出土したものとの記載がある。この土偶頭部は「館岡コレクション」として五城目町に寄託された（第4章）。

第2節 『石器 中山』（複製）の再発見

高橋（1984）に『石器 中山』と題する佐藤初太郎の報告があることが記載されている。所蔵元に問い合わせたところ、原本は行方不明となっていた。しかしその後、五城目町教育委員会の中山遺跡調査時に作成された書類『中山遺跡調査綴』のなかにコピーが残されていることが分かった（図22～25）。

『石器 中山』はコピーから分かる範囲でその概要を述べると、32頁の和装本で、表紙に『石器 中山』の原題箋が付され、内題に「羽後國南秋田郡馬川村高崎字中山石器時代遺跡發掘記事（明治三十三年四月）」「佐藤初太郎しるす」とある。柱に「適産調」とある用紙を使用し、はじめから5頁に地勢・地質・遺物について記載され、あと27頁に出土品を描く。「適産調」とは石川理紀之助による各地区の土壌の種類、田畑面積、人口、戸数、生産物、収入、農作業、生活習慣などに至るまで細かく調べた農村調査である。

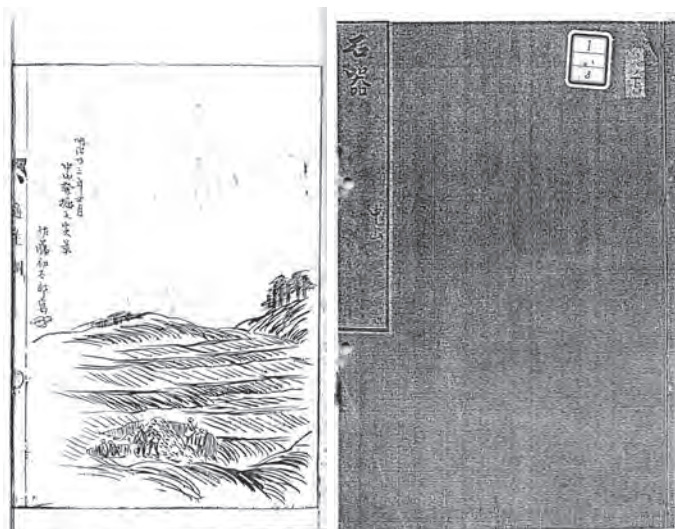
地勢・地質の文章について検討したところ、栗田（1951）に掲載された内容の一部と一致した。栗田（1951）の出典は不明であるが、『石器 中山』はこの栗田（1951）の出典元からの抜粋であると考えられる。石川は多くの写本を残し、かつ本書には「適産調」の用紙が用いられ、記事の「地勢・地質」部分のみ抜粋された点をふまえると、本書は佐藤初太郎が記した正式な報告を石川理紀之助が模写した可能性が高い。石川理紀之助は、出羽国秋田郡小泉村（秋田市金足小泉）出身の農村指導者で、その功績から「老農」あるいは「農聖」と敬称されている人物である。ちょうど佐藤の発掘と同じ時期にあたる、明治29年～35年に農村調査「適産調」を行った。栗田（1951）の文章を見る限り、この頃までは、おそらく報告書原本が存在していたことがうかがえるが、現在その行方は不明である。

第3節 考古学的視点からみた『石器 中山』の内容（図22～25）

『石器 中山』は地勢、地質、遺物の順で構成される。地勢の項目（図22-3・4）では遺跡の位置と地形について述べられている。「石器時代人種が此斜なる丘陵状に居を占めたりし頃は此一望の田勝村里はいまだ沖積新層の成生せざりし以前にして満月只水界を以て満せしならん」とあり、当時は斜面地に居住域があった点、沖積層ができる以前で海岸線が近くまで来ていたと推測されている。

地質の項目（図22-4・5）においては層序と遺物の包含状態とその形成過程について述べられる。挿図から、層序は上から耕土、黒色泥土層、礫土層、砂土層、褐色粘土層、黒色泥土層、灰色泥炭土層、褐色粘土層の8層からなり、遺物の多くが「黒色泥土」「灰色泥炭土」より出土した。この2つの層は2・6・7番目の層にあたる。2番目の黒色泥土層は地表面から30cm程、6・7番目の黒色泥土層、灰色泥炭土層は地表面から約3尺3寸位（1m）の深さにある。5・6番目の褐色粘土層と黒色泥土層の厚さは3尺位（90cm）、灰色泥炭土層の厚さは1尺位（30cm）であることから、遺物包含層はおおよそ120cmほどと推定される。包含層の成因については居住域であった丘陵上からの流れ込みとする。またその流れ込みは層序から少なくとも2度あったと推定する。掘削は深さ7尺3寸（2.2m）に及ぶ点や遺物包含層の性質からみて、発掘はちょうど五城目町教育委員会と弘前大学が行った谷部にあたる場所と推定される。

『石器 中山』には53点の資料（土器31点、石器9点、土製品6点、石製品7点）が描かれている。比較的粗い筆遣いではあるものの、外形や寸法、文様構成、破損状況など個体を識別するには十分な精密さをもつ。



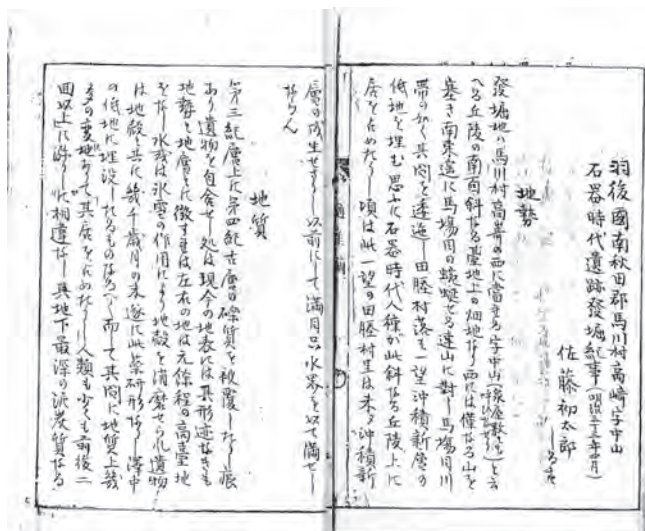
【書き下し文】

石器 中山

明治三十三年四月 中山発掘之実景
佐藤初太郎 写

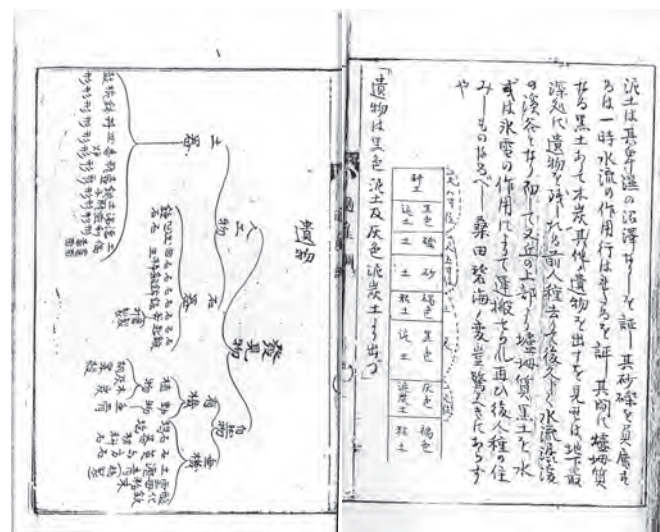
2

1



4

3



6

5

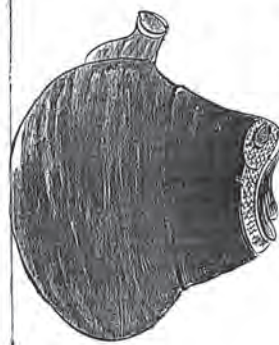
図 22 『石器 中山』 1



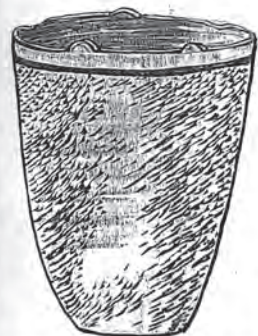
1



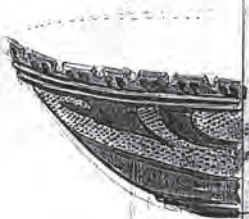
2



3



4



5



6



7



8



9

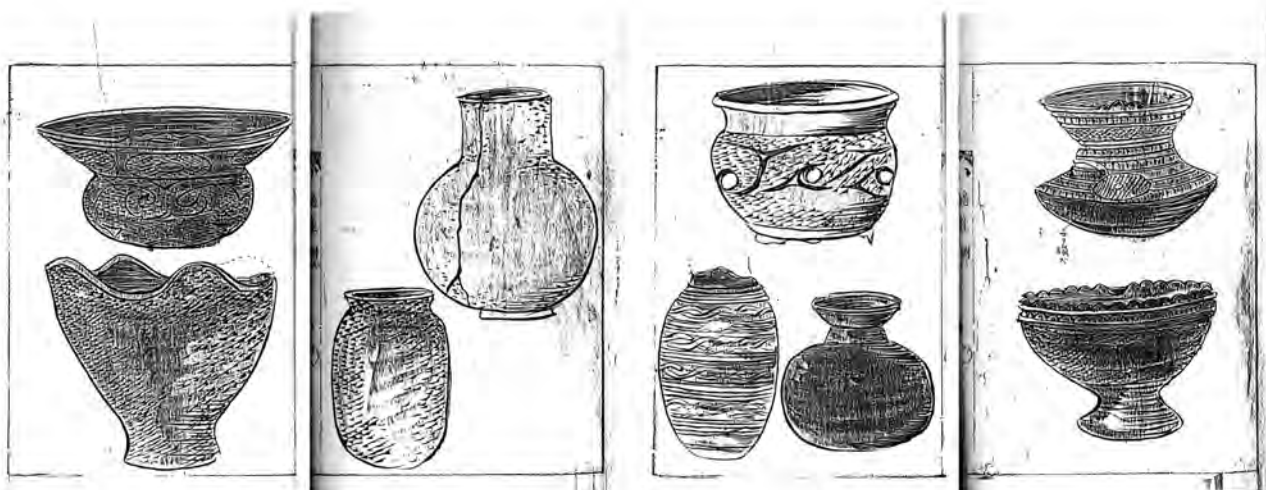


10



11

图 23 『石器 中山』 2

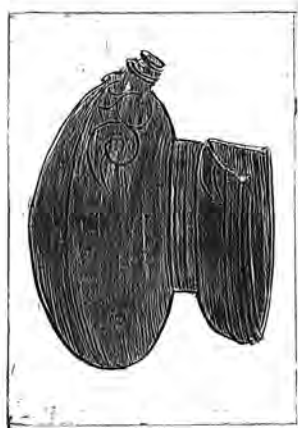


12

13

14

15



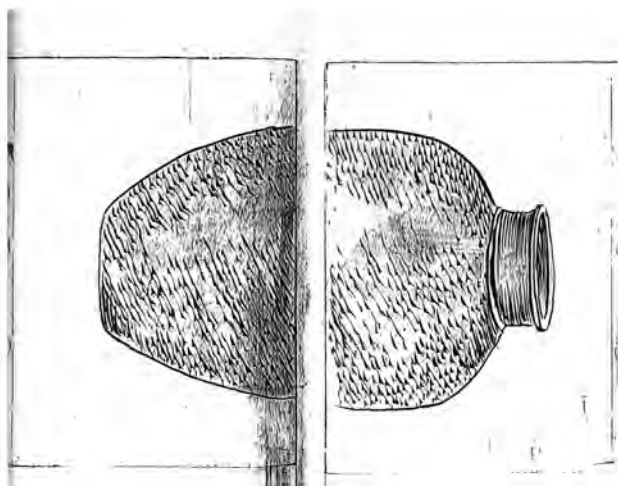
16



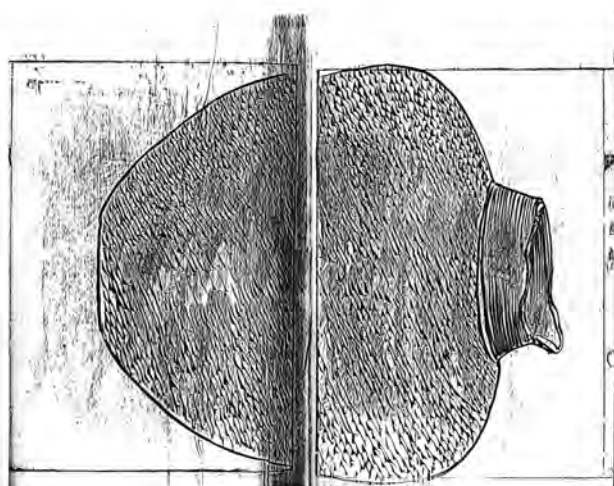
17



18



19



20

图 24 『石器 中山』 3

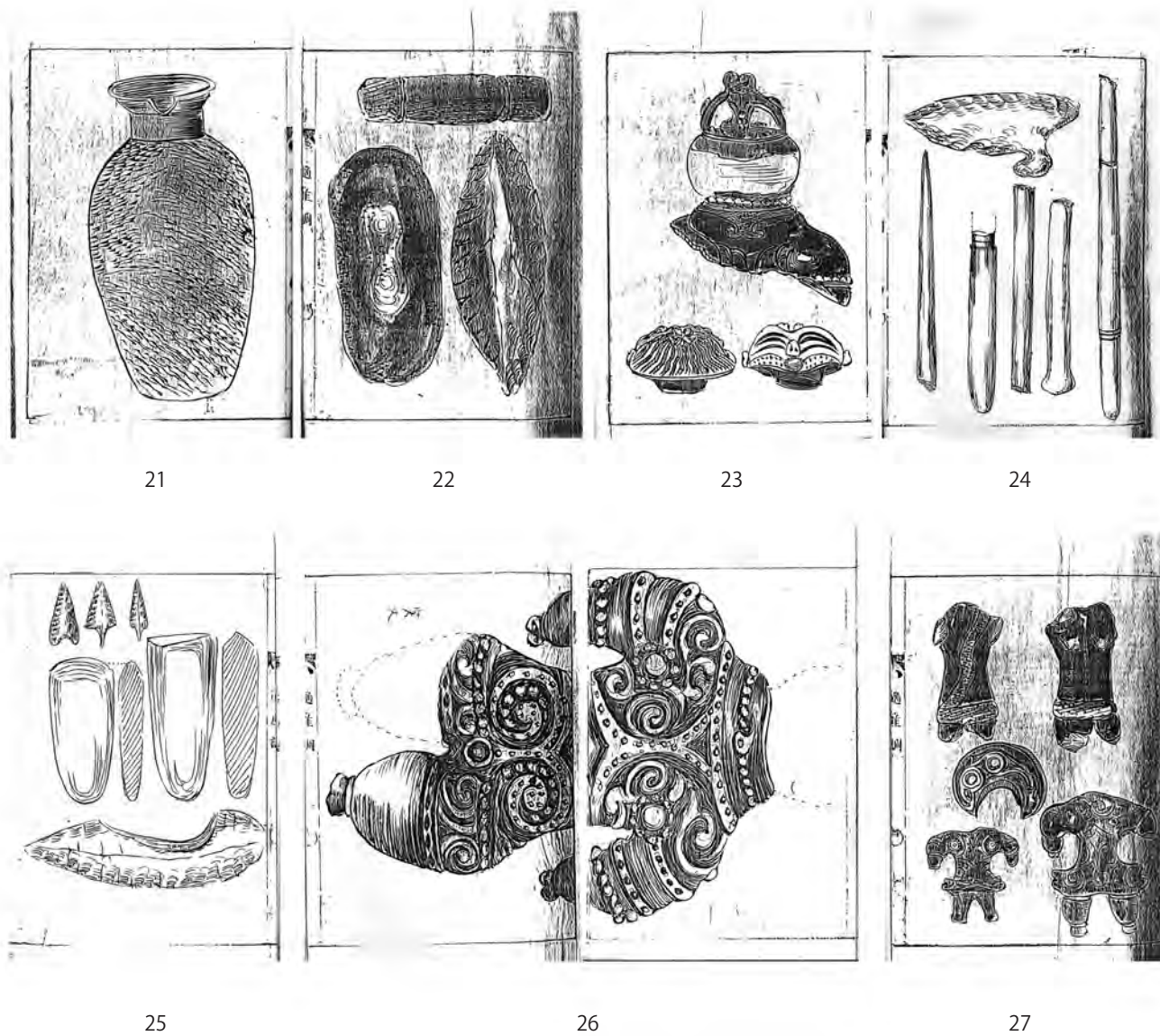


图 25 『石器 中山』 4

第4節 東京大学総合研究博物館所蔵標本の再検討（図26～28、表5）

実物が確認された出土資料51点（土器29点、土偶7点、石器・石製品15点）のうち、『石器 中山』に掲載と判明したのは33点（土器21点、土偶5点、石器・石製品7点）であった。さらに、『石器 中山』を参考に、出土地不明とされる資料を探索したところ、新たに深鉢1点（図26-9）・香炉形土器1点（図27-23）・土偶1点（図28-35）、計3点を確定することができた。したがって、『石器 中山』の掲載資料55点中36点、6割以上が東京大学総合研究博物館に収蔵されていることが判明した。これらの資料にはすべて「人類学教室原番号」がふられており、大正・昭和期に登録されたと推定される。付属する人類学教室札には、表面に地名欄に「羽後国南秋田郡馬川村大字高崎村字中山」記事欄に「秋田縣廳ヨリ預リ」、裏面に「渡邊由蔵」「中村徳松ヨリ」「佐々木熊次郎ヨリ」「村上嘉七ヨリ」「横山安整ヨリ」と書かれたものがある。また「佐藤」「初太郎」印の貼紙があるものもある。これらから資料の来歴がある程度推測できる。

図化を行った各標本について時期別に述べる（図26～28）。

後期末葉の資料としては壺（10）、注口土器（25）を各1点、計2点を確認した。うち『石器 中山』掲載資料は、壺1点（10）である。壺（10）は無文で口頸部が直立する。その底部はボタン状に突出する。なお10には「佐藤」と「初太郎」と押印された貼紙が付いており、佐藤初太郎の旧蔵品であったことが確実である。注口土器（25）は無文の壺形でやや尖った底部をもつ。

大洞B1式は注口土器1点（26）のみである。これは『石器 中山』掲載資料である。26はいわゆる二段作りで内傾する口縁部と張り出した体部で構成される。文様は口縁上部に区画沈線が施され、正面に玉抱三叉文を施す。また注口部下にも玉抱状三叉文を施す。文様の構成から大洞B1式でも新段階に属すとみられる。

大洞B2式は、鉢・台付鉢3点（1・2・7）、注口土器1点（27）、計4点がある。うち、『石器 中山』掲載資料は、7・27の計2点である。

台付鉢（1）の頸部は、菱形磨消文と弧線で構成され、台部に玉抱三叉文を巡らす。鉢（2）の頸部には入組三叉文、体部に渦卷文がある。台付鉢（7）は膨らみをもった台部である。菱形、円形の透かしが入る。なお、『石器 中山』掲載の図は上下逆さまでである。

注口土器（27）は三段作りで口縁部正面を核が体部上半と同じく巴状文も正面のみに施されることから、大洞B2式でも古相に位置づけられる。

大洞BC式は、本資料の中でも最も多く、鉢・台付鉢3点（3・4・8）、壺5点（6・12・13～15）、香炉型土器2点（23・24）、注口土器1点（28）の計11点ある。このうち7点（3・4・6・12・13・15・23・24）が『石器 中山』掲載資料である。

鉢（3）や台付鉢（4）は沈線で区画された波状口縁をもち、その下に載痕列を伴う羊歯状文がめぐり、鉢（3）は体部下半1/3ほどに無文帯を巡らす。鉢（8）は微細小波状口縁、口縁部無文、頸部に横位挟りが4段にわたって施文される。

広口壺（6）は体部上半に載列痕を伴う羊歯状文が巡る。壺（12）は、肩が張った長胴の器形で、頸部と肩部に横線化した羊歯状文、体部中央に羊歯状文（磨滅により不明瞭ではあるが）が施文される。壺（13）は、長胴の器形であるが、肩は（12）よりなで肩である。文様は頸部に連続した横位挟り、体部に沈線により描かれた端部が入り組む羊歯状文が4段にわたって施文される。壺（14）は体部が丸い器形で、頸部に隆帯が巡り、体部には羊歯状文（1段のボジ文）の下に雲形文の祖型的文様が施文される。壺（15）は、三角形型の器形で、体部文様は、入組三叉文の下に、雲形文の祖型的文様が羊歯状文に挟まれる構成である。

香炉形土器（23・24）はこの時期にまとまる。いずれも2つの窓があり、透かし付きの菱形玉抱三叉文がある。屈曲が強く肩部が隆帯化する。台部の地文は無文である。

注口土器（28）は二段作りで文様は全て全周展開する。口縁上部の正面には退化した三山状突起があり、その下には複数の沈線上に載列痕が巡る。口頸部と肩部の間は強く屈曲し、体部上半には羊歯状文、下半には隆帯化の弱いC字状文を巡らす。注口部の欠損部にアスファルトが付着する。

これらのほか、大洞B2～BC式に属するとみられる壺7点（11・16～18・20～22）がある。16・17・20～22が『石器 中山』掲載資料であるが21は口縁部が欠けるため、可能性にとどめる。壺（11）は頸部が無文で短く山形突起がある。口縁部と体部に同じ地文をもつ。壺（16・20）は口頸部が無文で短い胴長壺である。壺（17）は丸みをもった大型壺で、口縁上部を欠く。16・17・20の体部は地文のみである。壺（18・21・22）は球型で無文の壺である。外面が丁寧に磨かれる。

大洞C1式には浅鉢2点（5・東大5086）、壺1点（19）がある。うち5・19は『石器 中山』掲載資料である。浅鉢（5）の体部には上下対称的な4単位の大きな配置文が展開する。東大5086は未実測の浅鉢の突起である。壺（19）は口頸部が細く内傾し、口縁部は小さく、受け皿状に内折する。体部は球状に膨らむ。頸部と体部の境界を巡る2条の隆帯があり、その間を縦方向の隆帯がつなぐ。よって浅鉢と壺双方とも大洞C1式の古段階に属すとみられる。壺（19）には「佐藤」「初太郎」押印の貼紙がある。そのほか大洞BC～C1式に属すとみられる深鉢1点（9）がある。これは『石器 中山』掲載資料である。口縁に山形突起を伴う粗製深鉢である。

今回確認された中山遺跡出土土偶は7点ある。後期末葉2点（29・30）、大洞BC式3点（31・34・35）、大洞C1式2点（32・33）と推定される。これらのうち、『石器 中山』掲載資料は30・31・32・34・35の5点である。29は腹部が長楕円状に突き出し、細く鋭い沈線に間に細かい列点が施される。30は背面に入組帯状文がある。土偶（32）はC字状の眼をもち頬に刺突を入れる。裏面には鋸歯文が施される。大洞BC式の土偶（31・35）は中空の遮光器土偶で眼が巨大化する。土偶（35）は大型中空土偶で、体部には刺突を加えた渦巻文が巡る。土偶（34）は35が小型化、簡略化されたもので、表面に入組文、渦巻文、裏面に羊歯状文、入組文がある。33はX字型の小型である。

石器・石製品に関しては中村（2008）に詳しい。中山遺跡出土品は15点ある。うち『石器 中山』掲載資料は、石槍（大型打製石器）2点（人類学教室原番号5074・5075、以下同）、石棒1点（5078）、石剣3点（375・434・456）、石製装飾品1点（5082）、計7点ある。石槍は2点（22右下・25下？）掲載されており、博物館蔵のものと数が一致する。しかしながら、掲載された図と比較すると、5074は、22右下の石槍図と外形は類似するものの、剥離面は一致しない。また5075の欠損範囲は25下の石槍図に類似するが、外形は異なる。したがって、5074・5075が『石器 中山』掲載資料かどうかについては、あくまでその可能性にとどめておきたい。石棒（5078）は、細形小型で把部に1条の凹線または複数の沈線を巡らし、先端部が鋭く尖るタイプと見られる。このタイプは晩期前葉の東日本に分布しており、土器の所属時期と整合する。石製装飾品（5082）は三日月形で孔部が2カ所あり、これを囲うように三叉文が施される。

第5節 まとめ

このように、時期別にみると大洞BC式が最も多く、大洞B2式、大洞C1式、後期末葉と続く。五城目町教育委員会と弘前大学の調査結果をふまえると、大洞B2～BC式がまとまって出土したのは、中山丘陵西南部にあたる五城目町教育委員会C区から弘前大学B区の範囲である。また、『石器 中山』2頁に描かれた発掘風景や5頁の層序ともよく一致する。したがって、当時発掘が行われたのはこの範囲と推定される。

※発掘調査の時期については明治34年（分銅・小野1955）と、明治40年（小野1975）があるが、『石器 中山』（佐藤1900）により正確には明治33年4月であることが分かる。

（上條 信彦）

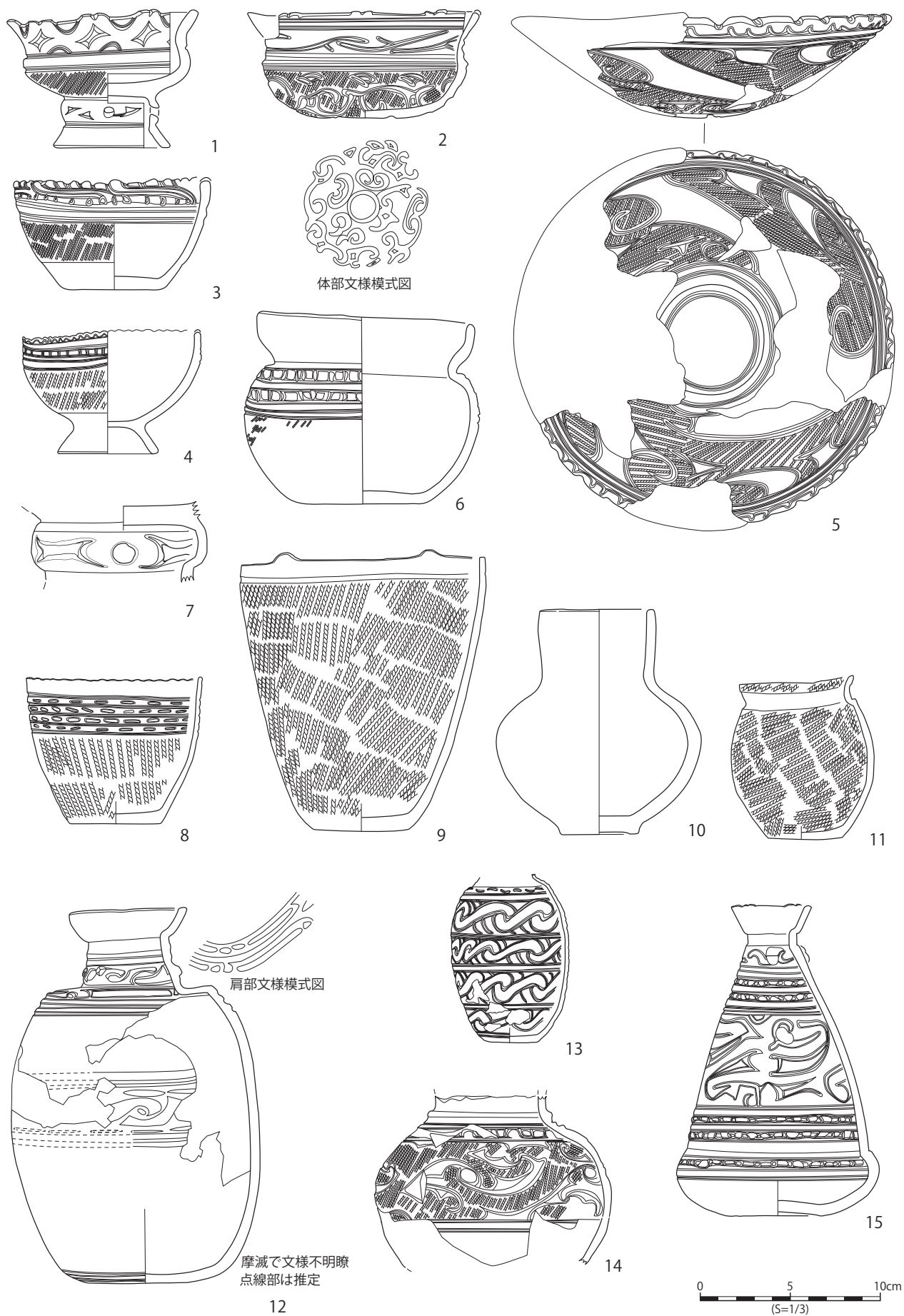


図 26 東京大学総合研究博物館所蔵中山遺跡出土資料・1

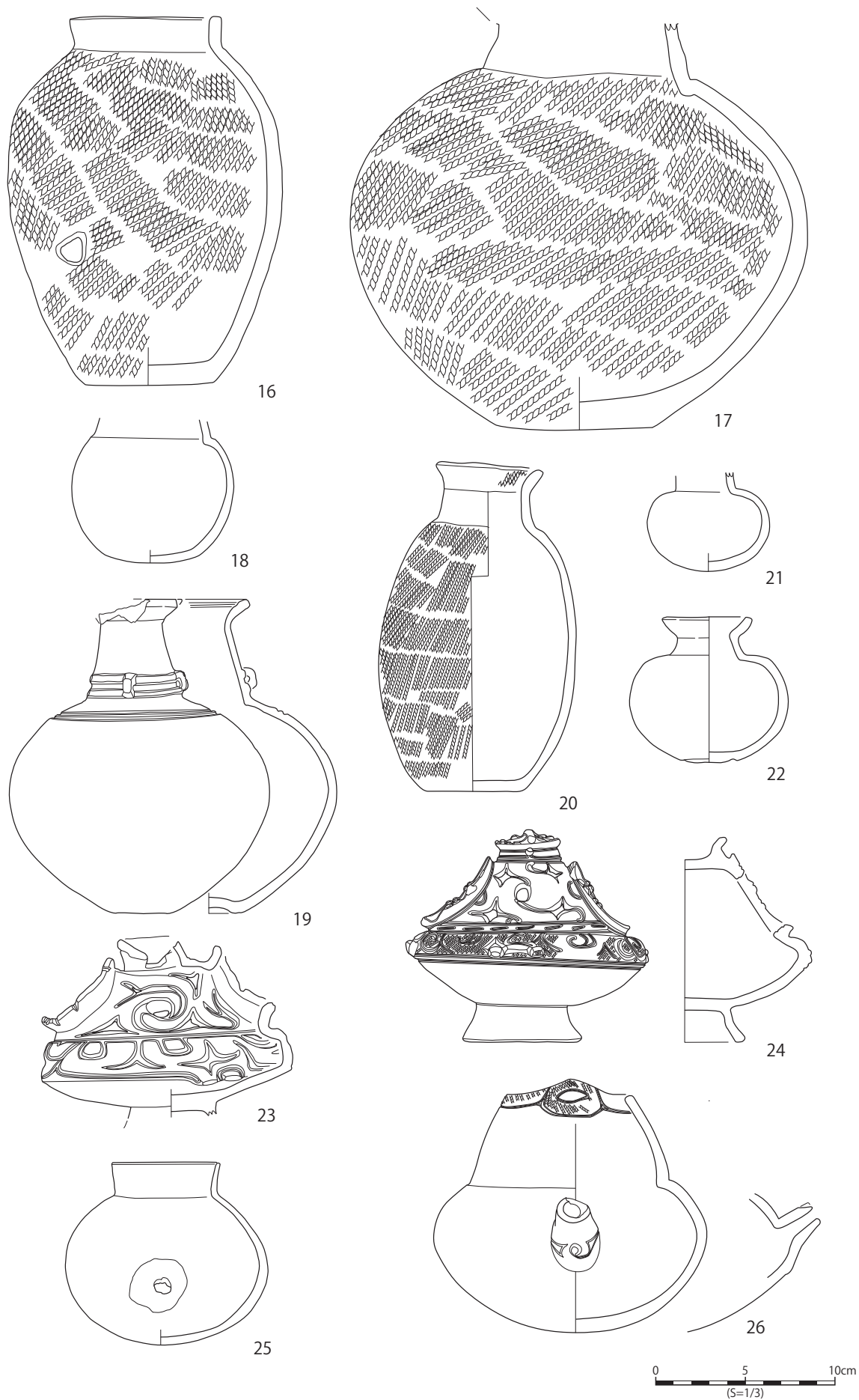


図 27 東京大学総合研究博物館所蔵中山遺跡出土資料・2

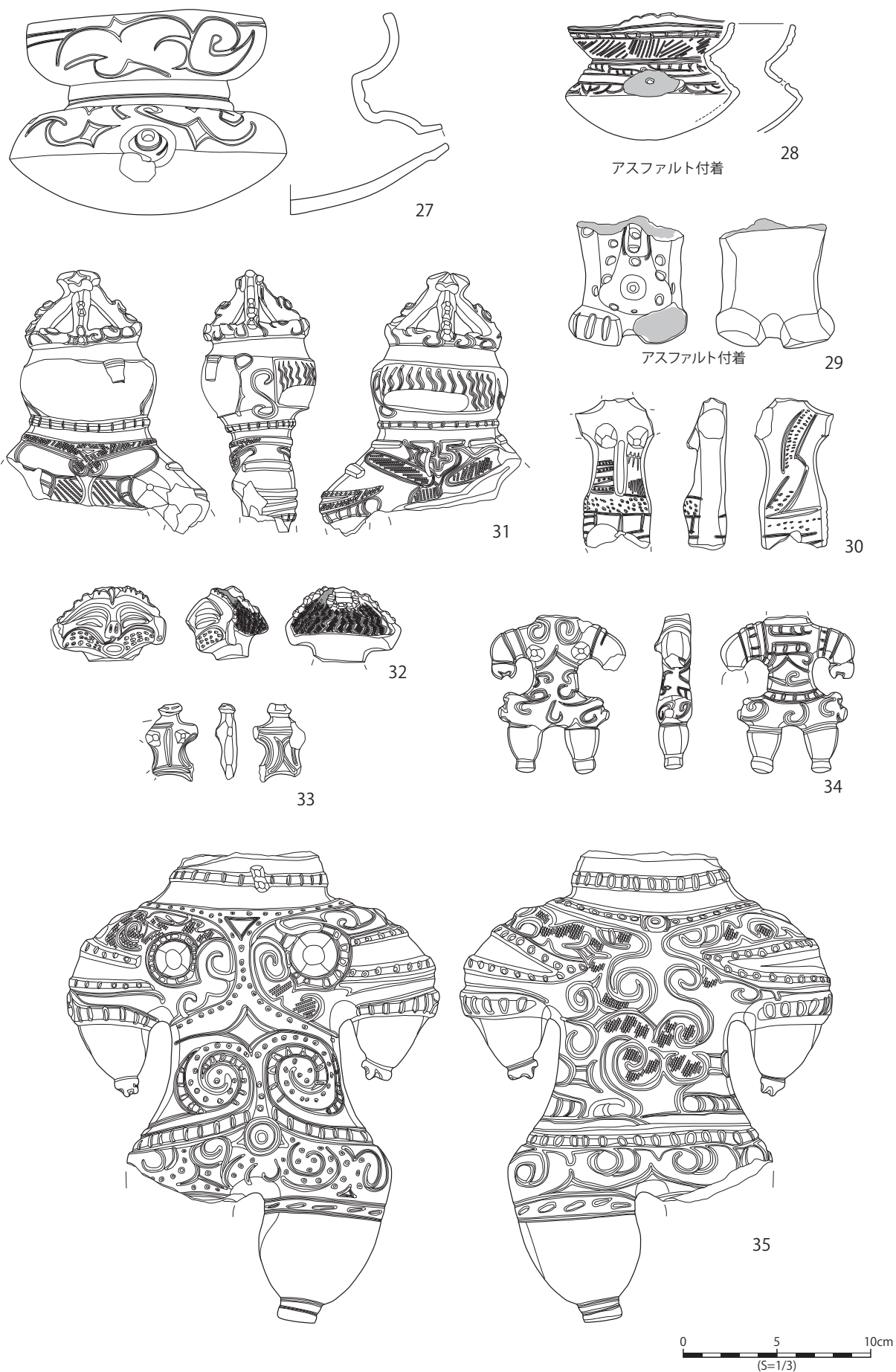


図 28 東京大学総合研究博物館所蔵中山遺跡出土資料・3

表 5 東京大学総合研究博物館所蔵中山遺跡資料観察表

土器

図 号	人類「石器 学教 中山」 番号 原 掲載 番号	器種	時期	残存 部位	計測値 () 残存値			口縁			文様	底 形態	地文 種類	調整			色調	来歴情報				
					器高 (cm)	口径 (cm)	底・ 最大径 (cm)	器形	断面形	口縁				頭	その他	内 方 外 方 面 面 面 向		混入物 向	内面 記号	外面 記号	付着物	A 番号
1	5061	台付鉢	大洞 B2	口・底	7.9	10.5	10.5	4.6	1a	5	1	無	菱形磨消文 +弧線	台 : 3 (透かし)	平	LR	斜	≡ 横 ≡ 横	A1831	PD-3-7-5		「秋田縣瀧ヨリ預 リ」(佐々木熊次郎 ヨリ)」
2	5552	鉢	大洞 B2	口・底	6.0	13.0	13.0	6.0	1a	5	1	無	5	体 : 7	平	LR	斜	qu ws ≡ 横 ≡ 横	A1091	PD-3-7-4		
3	7830	7上 鉢	大洞 BC	口・底	6.2	11.0	11.0	5.5	2	3	1	無	6a		平	LR	斜	ws ss ≡ 横 ≡ 横	A1835	PD-3-7-5	「佐藤」	「初太郎」印
4	5065	15下 台付鉢	大洞 BC	口・底	6.7	10.0	10.0	5.7	2	3'	1	3	6f		平	RL	斜	ws qu ≡ 横	A1076	PD-3-7-5		「秋田縣瀧ヨリ預 リ」
5	5943	5 浅鉢	大洞 C1	口・底	5.5	25.4	25.4	6.1	2	3	1	3	無	体 : 8	上	LR	斜	ws qu ≡ 横	A1079	PD-3-7-4		
6	2170	11上 広口壺	大洞 BC	口・底	10.6	12.0	13.0	7.0	1	1	1	無		体 : 6d	平	RL	斜	ws qu ≡ 横	A1039	PD-3-7-4		「秋田縣瀧ヨリ預 リ」
7	5063	11下 台付鉢	大洞 B2	台部	4.5		9.8							台 : 3 (透かし)	平				A4608	PD-3-7-5		「秋田縣瀧ヨリ(中 村徳松ヨリ)」
8	5562	深鉢	大洞 BC	口・底	8.1		9.1		2	3'	1	無	11		平	LR	斜		A1061	PD-3-7-5		
9	5025	4 深鉢	大洞 BC- C1	口・底	15		13		2	4	2	無			平	LR	斜		A1883	PD-3-7-5		「秋田縣瀧ヨリ預 リ」
10	7826	13上 壺	後末	口・底	12.7	11.7	11.7	4.4	1	1	1	無			上	無	無	qu wa rm ≡ 横	A1007	PD-3-7-4		「秋田縣瀧ヨリ預 リ」
11	7827	壺	大洞 B2- BC	口・底	8.7		7.8		1	1	2	無	9		平	LR	斜		A959	PD-3-7-5	「佐藤」	「初太郎」印
12	7112	10 壺	大洞 BC	口・底	20.8	6.7	13.8	6.0	細長形	1	2	無	6?	肩 : 6? 体部 : ?	平	無	無	qu sa ≡ 横	A1792	PD-3-7-5		
13	7828	14 壺	大洞 BC	口・底	9.2		6.3		細長形				11+6c × 4		平	無	無		A930	PD-3-7-5	「佐藤」	「初太郎」印
14	5059	壺	大洞 BC	口・底			13.0		1			LR	無	体 : 6f+8 (粗型)	斜	斜	qu ss ≡ 横	A4591	PD-3-7-5		「秋田縣瀧ヨリ預 リ」	
15	5555	2 壺	大洞 BC	口・底	18.0	4.5	11.3	5.5	細長三 角形	3	1	無		体 : 3+6d+8 (粗型)+ 6d+6f	上	無	無	qu ss ≡ 横	A1801	展示ケース		「秋田縣瀧ヨリ(中 村徳松)」
16	7823	19 壺	大洞 B2- BC	口・底	20.6		15		1	1	2	無			平	LR	斜		A1796	PD-3-7-5		「秋田縣瀧ヨリ預 リ」
17	7111	20? 壺	大洞 BC	口・底	22.5		20.8		1			無			平	LR	斜		A1815	PD-3-7-4		
18	7825	壺	大洞 BC	口・底	8.2		9.5		1			無			球	無	無		A936	PD-3-7-4		
19	5196	17 壺	大洞 C1	口・底	17.7		14.7	3.5	1	1	1	無	穿孔隆帯		上	無	無	ws ≡ 横	A1787	PD-3-7-5	「佐藤」	「初太郎」印

図 番 号	人類学教室 中山規 劃番号	石器	器種	時期	残存 部位	計測値（）残存値				口縁		文様		底		地文		調整				色調		来歴情報		
						器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底・ 台径 (cm)	器形	形態	断面形	口縁	頭	その他	形態	方 向	混入物 方 向	内 面	外 面	記号	付着物	A 番号	収蔵位置	標本付随の札等	遺物カード
20	5556	21	壺	大洞 B2- BC	口-底	179	(6)	11.0	5.5	細長形	1	1	無	無	平	斜	qu ws	横	横	10YR6/3	10YR6/3	A1807	PD-3-7-4	「秋田縣瀨ヨリ預リ」 「渡邊田蔵ヨリ」人 類学教室札	「秋田縣瀨ヨリ」 「初太郎」印	
21	5066	18 下?	小型壺	大洞 BC	口-底	52		6.2		1			無	無	球	無					A1154	PD-3-7-5	「佐藤」「初太郎」印	「秋田縣瀨ヨリ」(佐 藤初太郎)」		
22	7829	14 右下	壺	大洞 B2- BC	口-底	8.1	5.1	8.8	1.6	1	1	1	無	無	丸	無	ws	横	横	7.5YR4/3	7.5YR4/3	A928	PD-3-7-4	「秋田縣知事ヨリ預 リ」 「佐藤初太郎ヨリ」 人類学教室札	「秋田縣瀨ヨリ」 「初太郎」印	
23	2192	9上	香炉形	大洞 BC	口-体	8.2		14			1		無	窓*2、菱 形玉拍三叉 (透かし)	平	無					A1038	PD-3-7-4			「秋田縣知事ヨリ預 リ」 「佐藤初太郎ヨリ」 人類学教室札	「秋田縣瀨ヨリ」 「初太郎」印
24	5127	1	香炉形	大洞 BC	口-底	11.8	3.4 (窓部)	13.4	6.6		1		無	窓*2、菱 形玉拍三叉 (透かし)	平	斜	qu ws	横	横	10YR7/3	10YR7/3	A1879	展示ケース	「秋田縣瀨ヨリ」(佐 藤初太郎)」		
25	12675		注口	後末	口-底	10.3		11.4		B-2b	1	1	無	無	球	無					A1684	PD-3-7-5			「秋田縣瀨ヨリ預リ」 「佐々木熊次郎ヨリ」 人類学教室札「和 歌山縣那賀郡粉河町 六百五拾三番地佐々 木熊次郎 当時秋田 県秋田郡五城目町菅 生與七万寄留入」貼 紙	
26	5370	3	注口	大洞 B1	口-底	14.2	6.7	18.0	2.0	B-1	1	1	LR+3*1	無	注口：3	球	無	qu	横	横	2.5YR4/1	2.5YR4/1	A1889	PD-3-7-4	「秋田縣知事ヨリ 預リ」(佐藤初太郎 ヨリ)」	
27	2152	16	注口	大洞 B2	口-底	20.0	12.5	14.8	2.0	A-2a	1	1	3	無	体上：7 注口：3	球	無	qu ws	横	横	2.5YR4/1	2.5YR5/2	A1841	PD-3-7-4	「秋田縣瀨ヨリ預 リ」	
28	5060	15上	注口	大洞 BC	口-底	6.7	8.9	9.4	1.0	A-2b	5/3	1	6f	6a	体上：6a	球	無	ws ss	横	横	10YR7/2	10YR7/2	A1024	PD-3-7-5	「秋田縣瀨ヨリ預リ」 人類学教室札「渡邊 由蔵」貼紙	
未 実 測	5086		浅鉢	大洞 C1	突起	7		6.4	1.5													PD-3-7-4		「秋田縣瀨ヨリ」(中 村徳松)」 人類学教室札「秋田縣 村徳松」 南秋田郡五城目町中 村徳松」貼紙	「秋田縣瀨ヨリ」 「中村徳松ヨリ」人 類学教室札「秋田縣 村徳松」 南秋田郡五城目町中 村徳松」貼紙	

土偶

図 番 号	人類「石器 中山」 学教 室原 掲載 番号	器種	時期	残存 部位	計測値（ ） 残存値			地文		混入物	調整				色調			付着物	備考	A 番号	収蔵位置	来歴情報		
					最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	種類	方向		内面	方向	外面	方向	内面	記号	外面							記号
29	291	土偶	後末	腰	(74)	(66)	(49)	無	無	≡	≡	≡	≡	≡	≡	≡	欠損部：アス	中実	A3957	P1-1-6	「秋田縣瀧ヨリ預り」 「秋田縣瀧ヨリ預り」 「中村徳松ヨリ」人 類学教室札			
30	8436	土偶	後末	胸-腰	(80)	(42)	24	無	無	sa	≡	横	≡	横	≡	横	右腕欠損部：アス	縦に穿孔 中実	A3962	P1-1-6				
31	292	土偶	大洞 BC	頭-胸	(139)	(104)	(62)	LR	左斜	ws qu	ユビオサエ	≡	≡	≡	≡	≡	褐灰	10YR6/1	褐灰	10YR6/1	A3958	P1-1-6	顔面部欠損	
32	293	土偶	大洞 C1	頭	(39)	(63)	44	LR	左斜	ws qu	≡	≡	≡	≡	≡	≡	にぶい黄	2.5Y6/3	にぶい黄	25Y6/3	A3959	P1-1-6		頭頂部に穿孔 中空
33	5085	土偶	大洞 C1	頭-脚	(44)	(29)	12	無	無	無	≡	横	≡	横	≡	横	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	A3961	P1-1-6	中実 X字型	「秋田縣瀧ヨリ預り」 「秋田縣瀧ヨリ」 「村上嘉七ヨリ」人 上嘉七」人 類学教室札
34	301	土偶	大洞 BC- 下 C1	頭-脚	(84)	(73)	19	w s	無	無	ナ	横	ナ	横	ナ	横	橙色	5YR7/6	褐色	5YR7/6	A3960	P1-1-6	中実	「秋田縣瀧ヨリ預り」
35	290	土偶	大洞 BC	頭-脚	(25.5)	(19.7)		無	無	ws・mi	ユビオサエ	≡	横	横	≡	横	にぶい橙	7.5YR7/4	にぶい橙	7.5YR7/4	A3960	P1-2-6	中空	「佐藤初太郎献」

石器・石製品

図 書 号	人類「石器 中山」 学教 室原 掲載 番号	器種	石材	計測値			中村他 (2008) 図版	A 番号	収蔵位置	来歴情報	
				最大長 (cm)	最大幅 (cm)	重さ (g)					
375	24 左1	石剣	片岩	166	31	22	178.5	26-27	PA66	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札「佐藤」「初太郎」印	
434	24 右1	石剣	泥岩	336	27	25	393.2	26-27	PA66	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札	
456	24 右2	石剣	片岩	181	32	22	179.3	26-27	PA66	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札	
472		石剣	泥岩	21.5	3.1	23	289.1	26-27	PA66	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札「佐藤」「初太郎」印	
5074	22 右下 ?	大型 打製石器	珪質 頁岩	162	64	21	187.3	6-12-13	PE71211	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札「佐藤」	
5075	25 下?	大型 打製石器	珪質 頁岩	168	92	35	412.5	7-12-13	PE71211	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札「渡邊由蔵」札	
5076		石鐔	珪質 頁岩	12.1	4.7	1.2	67.8	22-23	PE1186	「佐藤」「初太郎」印	
5077		磨製石斧	砂岩	108	6	29	338.7	22-23	PE11314	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札「佐藤」「初太郎」印	
5078	22上	石棒	片岩	11.1	2.7	2	105.8	26-27	PA66	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札	
5079		「加工セシル化 石」		2	37				PD375	「秋田縣瀧ヨリ」(村上嘉七)	
5080		石匙	珪質頁 岩	48	6.7	1.1	20.4	22-23	PJ26D	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札「佐藤」「初太郎」印	
5081		石錐	珪質 頁岩	5.7	2.6	1.1	11.3	22-23	PJ26G	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札「佐藤」「初太郎」印	
5082	27中	石製裝飾品	滑石	5.2	4	0.8	13.8	22-23	PE11415	「秋田縣知事ヨリ預り」人類學教室札「渡邊由蔵」札	
5083		石器	チャ－ ト	44	26	0.8	4.4	22-23	PE11415	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札	
5084		石製裝飾品	凝灰岩	63	29	2	34.8	22-23	PE11415	「秋田縣瀧ヨリ預り」人類學教室札	

※上條・佐宗・諏訪2015『東京大学総合研究博物館 人類先史部門所蔵 中山遺跡出土標本データベース』http://umdb.umn-tokyo.ac.jp/Djiruis/nakayama/hajime.phpをもとに器種・時期・計測値を一部変更・修正した。器形から備考までの観察所見は上條が追記した。

※炭化物の顕著な付着は無かったため、この項目を略した。

第4章 館岡コレクション

第1節 館岡コレクションの内容

五城目町文化の館には発掘調査の出土品のほかに、中山遺跡の出土品が保管されている（図29）。このなかには、五城目町有形文化財（昭和51年4月1日指定）の土偶1点（図29-9）と、同じく五城目町有形文化財（昭和57年3月29日指定）の土器8点（図29-1～8）がある。これらの資料は地元の館岡氏によって発見されたものである。すでに昭和50年代には指定文化財となっていたものの、資料化されていなかったため、学界でその存在があまり知られていないが、完形土器や遮光器土偶を含み、本地域の亀ヶ岡文化を知るうえで貴重な資料といえる。

出土場所については、同時に出土したとされるサクラ樹皮（図版11-10）やクルミ殻があることから、佐藤初太郎の調査と同じく、おそらく遺跡の谷部の低地で発見された資料とみられる。

第2節 館岡コレクションの中山遺跡出土資料（図29、表6）

台付鉢1点（1）、壺6点（2～7）、注口土器1点（8）、土偶1点（9）、計9点を図化した。

1は台付鉢である。器形は頸部と体部の間でゆるく括れる。山形突起が連続し、頂部がキザミにより3つに分かれる。口縁部には突起部に三角形の袢り、平坦部に弧線が施され、頸部には入組三叉文、体部と頸部の間に横位の袢りがあり、大洞B2式に属する。

2～7は壺である。2～6は器形が球形で、最大径が5は体部上半にあり、それ以外は体部の中心にある。6・7は細長形である。6は最大径が体部下半につき、三角形を呈する。7は明確に最大径がなく胴長となる。全て平口縁である。文様は、2のみ施され、頸部に入組三叉文、体部に渦巻文がある。地文は、2・5・6が縄文で、他は無文である。文様から、2は大洞B2式とみられる。それ以外は口頸部の形から大洞B2～BC式に属すとみられる。

8は注口土器である。傘がなく肩部が頸部よりも張り出す器形である。文様は口縁部が無文で、頸部文様がそれぞれのクランクが分離する羊歯状文、それぞれのクランクがかぎ状に入り組む羊歯状文の2段構成である。肩部もそれぞれのクランクが分離する羊歯状文である。よって8は大洞BC式である。

9は土偶である。金子（1991）における大型（20cm以上）の遮光器土偶の頭部である。中空で、頭頂部は窓が4つあき、頂点に突起が1単位ある。顔は目が磨消文で描かれる。後頭部には波状の沈線が配され、頸部には渦巻文が施される。全体に赤色顔料が付着する。以上の特徴から、金子（1991）の分類に従えば石名館系統の大洞BC2式に併行する。類例として恵比須田遺跡例（金子1991 第3図-4）がある。

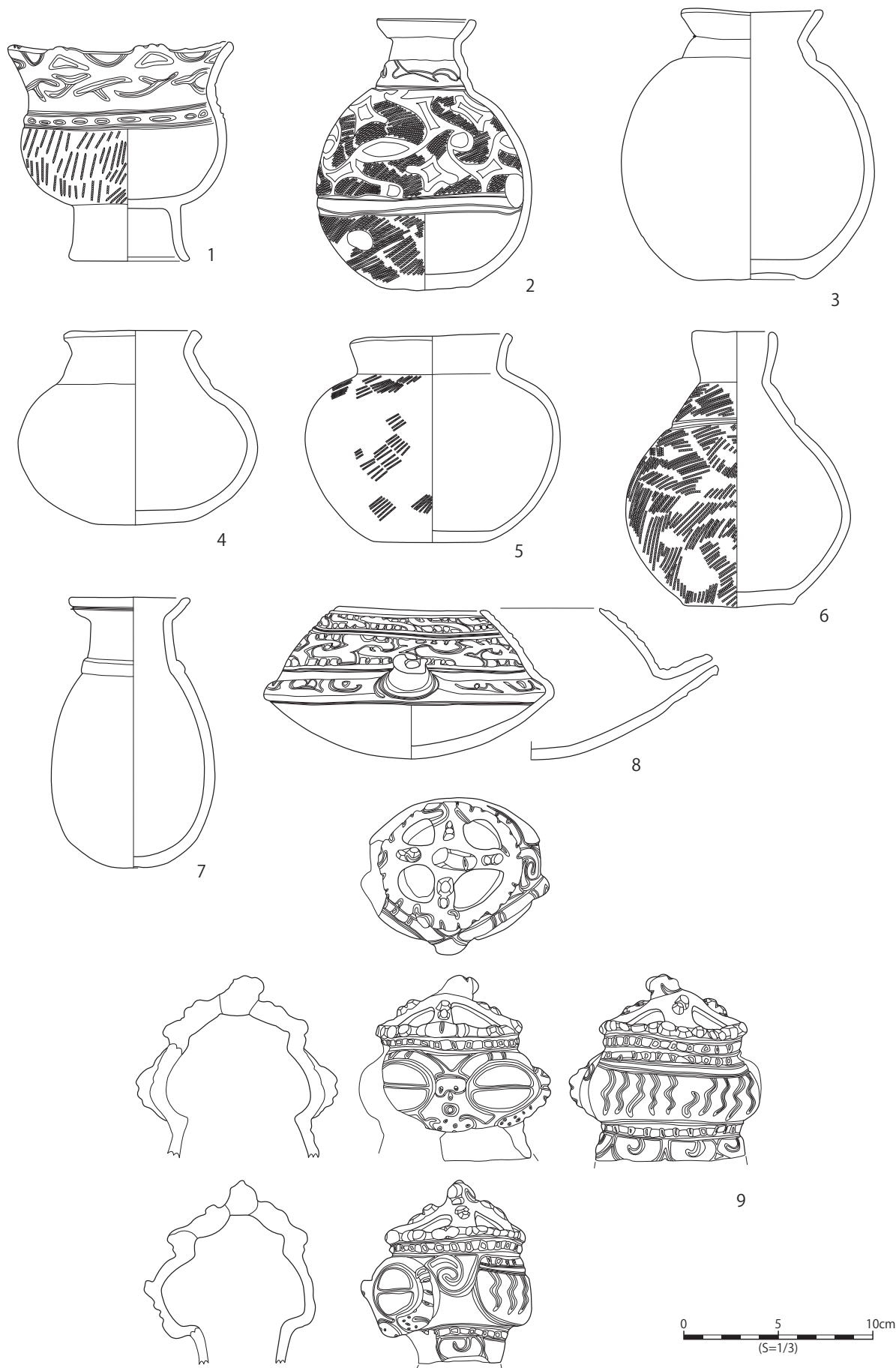


図 29 館岡コレクション

表 6 館岡コレクション中山遺跡出土資料観察表

土器

図 番 号	指定文化財 番号	器種	時期	残存部位	計測値 () 残存値				底・ 口径 (cm)	器形	口縁		文様		底	地文		調整		色調		炭化物		備考	
					器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底・ 台径 (cm)			断面形	口縁	頸	その他		形態	種類	方向	混入物	内 面	外 面	方 向	方 向		内 面
1	55	台付鉢	大洞 B2	口 - 底	11.7	12.2	12.2	6	1a	4 (山が3に分 れる)	1	弧線 + 三角 形状り	5	区画 : 11	平	LR	斜	qu ws rm	ナ	横	ナ	横	灰黄褐色	灰黄褐色	
2	48	壺	大洞 B2	口 - 底	14.4	5.8	11.4	5.0	1	1	1	無	3	7	平	RL	斜	qu ws	≡	横	≡	横	灰黄褐色	灰黄褐色	赤 内 : 口 - 頸 外 : 口 - 底
3	55	壺	大洞 B2- BC	口 - 底	14.2	7.6	13.4	5.8	1	1	2	無	無	上	無	無	qu rm	ナ	横	≡	横	灰色	灰黄褐色		
4	51	壺	大洞 B2- BC	口 - 底	10.3	7.4	12.2	4.5	1	1	2	無	無	平	無	無		ナ	横	ナ	横	茶褐色	茶褐色		
5	53	壺	大洞 B2- BC	口 - 底	11.0	8.4	13.4	6.0	1	1	2	無	無	平	RL	斜	qu ws	ナ	横	ナ	横	灰黄色	灰黄色		
6	54	壺	大洞 B2- BC	口 - 底	4.6	4.3	11.8	5.7	細長形	1	1	無	無	平	LR	斜	rm	ナ	横	ナ	横	灰黄褐色	灰黄褐色		
7	50	壺	大洞 B2- BC	口 - 底	14.4	6.3	8.6	3.0	細長形	1	1	無	無	脚	無	無	ws qu ss	ナ	横	ナ	横	灰黄色	灰黄色		
8	54	注口	大洞 BC	口 - 底	8.1	7.8	15.4	1.5	B-2a	1	1	無	6a+6c	体上 : 6a	球	無	qu ph	ナ	横	ナ	横	黒褐色	黒褐色		

土偶

図 番 号	指定文化財 番号	器種	時期	残存部位	計測値 () 残存値			地文		混入物	調整				色調		付着物	備考	
					最大長 (cm)	最大幅 (cm)	厚さ (cm)	種類	方向		内面	方向	外面	方向	内面	記号			外面
9	9	土偶	大洞 BC	頭部	(9.7)	(10.0)	9.0	無	無	ws+qu	ユビオサエ	ミ	横	灰黄褐色	10YR6/2	灰黄褐色	10YR6/2	全面：赤	中空

第 5 章 中山遺跡出土寄贈石製品

2012年度の発掘調査の際、地元の方より石剣1点を寄贈いただいた（図30）。50年ほど前、中山遺跡の斜面の畑地を所有していた際、表面採集されたものである。石剣の頭部であり上下部を欠く。残存長さ15.6cm、幅3.0cm、厚さ1.6cmで、石材は緑色凝灰岩である。

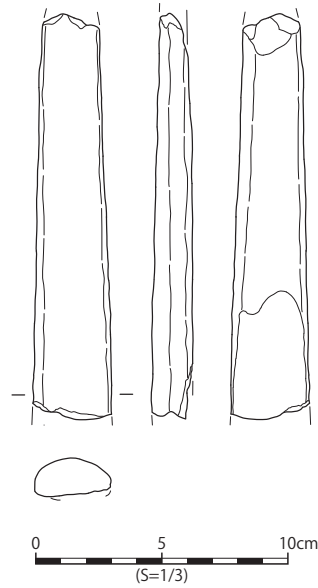


図 30 中山遺跡寄贈石製品

第6章 石川理紀之助旧蔵資料

第1節 資料について

潟上市郷土文化保存伝習館（石川理紀之助翁資料館）には、土器7点、土偶1点が保管、展示されている。これらの資料は石川理紀之助が所蔵していたもので、全て縄文時代後期末葉～晩期中葉の資料である。石川理紀之助については第3章で述べたとおりである。おそらく、適産調の活動中に秋田県内で入手したとみられる。『適産調』には旧跡についても触れられている。考古学関連の旧蔵書には先述した『石器 中山』のほかに、石川貞直（石川理紀之助）編纂の『古代百形』がある。『克己』（石川理紀之助翁日記一）によると、明治33（1900）年に編纂された。ちょうど、中山遺跡発掘の年にあたる。この書は、一. 土偶、二上. 土器、二下. 埴輪、三. 石鏃、雑の五部構成で東京人類学会雑誌などに掲載された土器・土偶などの出土品を筆写し集成したものである。また佐藤初太郎とは親友であった。このことから、石川理紀之助が考古学に関心を寄せていたことがうかがえる。本章で紹介する資料は、石川理紀之助の足跡から推定すると、その出土地として秋田市戸平川遺跡、五城目町中山遺跡、能代市麻生遺跡などが考えられる。

第2節 石川理紀之助旧蔵資料の検討（図31、表7）

鉢1点（1）、壺3点（2～4）、注口土器2点（5・6）、土偶1点（7）がある。他に未実測の土器（図版12-8）がある。

1は、大洞BC式の鉢である。器形は括れがない。小波状口縁である。口縁部文様はなく、頸部は方形のボジ文の連続による羊歯状文、その下部に沈線が3条巡る。2・3は大洞B2～BC式の壺である。2は長胴の体部をもち、平口縁で、外側に開く。口縁部内面に沈線が巡る。無文である。3は体部が球状で、最大径が体部の中央にある。無文で肩部にB突起を付す。4は大洞BC式の壺で体部が球状で、最大径は体部の中央にある。体部に配置文の祖形的なモチーフが施され、地文に縄文をもつ。

5・6は注口土器である。5は傘がなく、体部が球形の器形で、底部が急な上げ底である。平口縁である。文様や装飾はなく、無文である。後期末葉～大洞B1式である。6は傘があり、体部が頸部より張り出す器形となる。正面にB突起が3つつく。磨滅が著しいものの、文様は頸部、体部（肩部）に施される。頸部文様は、入組三叉文と羊歯状文の過渡期的な文様である。体部はそれぞれのクランクが分離する羊歯状文である。この特徴から大洞BC式である。

7は小型の遮光器土偶である。右腕の一部と左腕および両脚が欠損する。顔は簡素に表現される。胸部に乳房形の突起がある。表面は沈線が体部の中心、外形に沿うように施文される。裏面は体部に文様があったことを示す沈線がある。大洞BC式に並行すると考えられる。

（石川 世将）

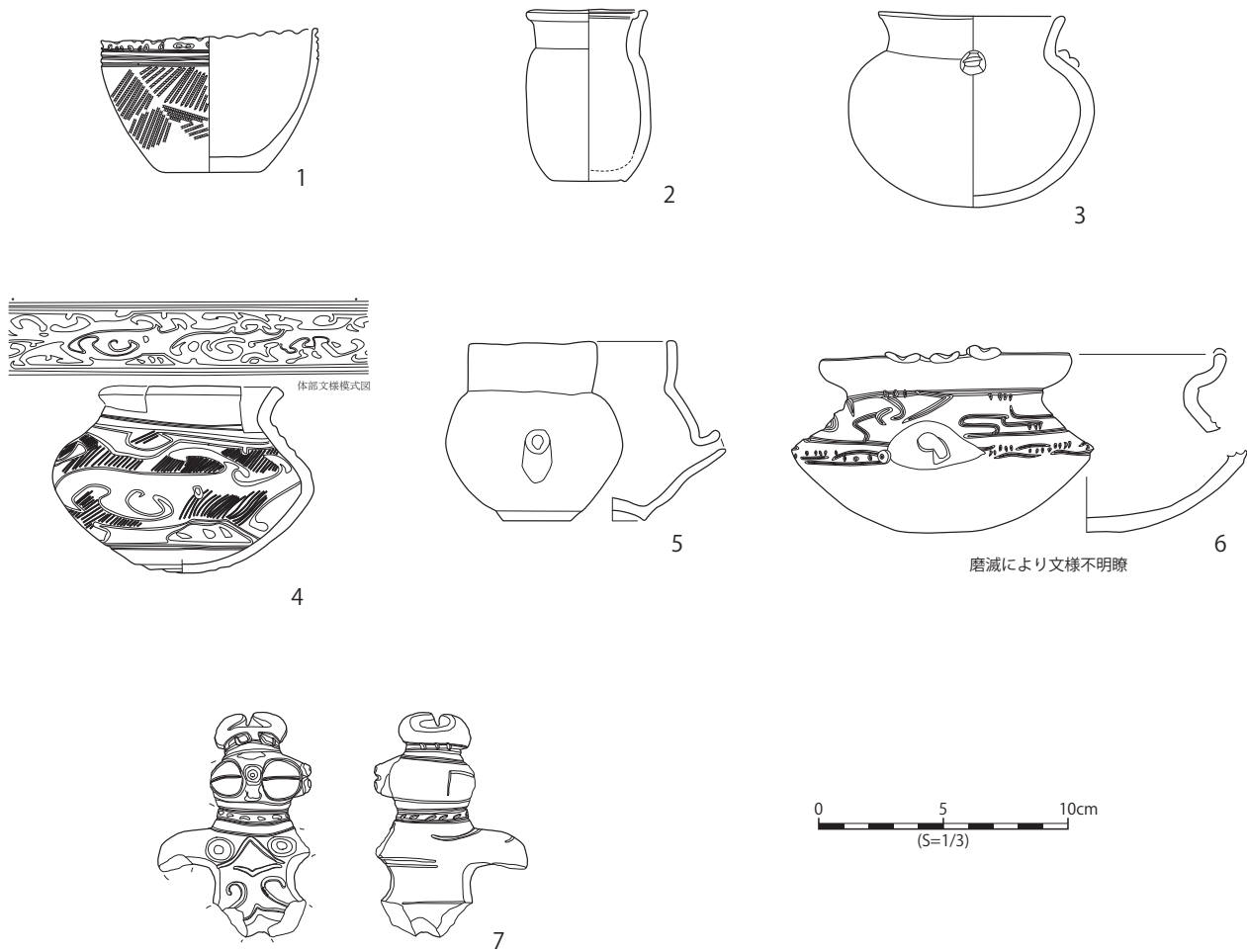


図 31 潟上市郷土文化保存伝習館所蔵資料

表 7 石川理紀之助旧蔵考古資料観察表

図 番 号	器種	時期	残存部位	計測値 ()			口縁		文様		底	地文		混入物	調整		色調		炭化物		備考
				器高 (cm)	口徑 (cm)	最大徑 (cm)	底・台徑 (cm)	器形	形態	断面形	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	口縁	
1	鉢	大洞BC	口 - 底	5.7	8.6	8.6	4.2	1	3	1	無	5	平	LR	斜	ws qu		黒灰色	黒灰色	有 薄	
2	壺	大洞B2-BC	口 - 底	6.3	4.8	5.0	3.2	細長形			無	無	上	無	無	ws qu	ナ	灰色	灰黄褐色		
3	壺	大洞B2-BC	口 - 底	7.8	7.4	9.6	3.0	1	1	1	無	突起	球	無	無	ws qu	ナ	灰色	灰黄褐色		
4	壺	大洞BC	口 - 底	7.6	7.5	10.4	3.1	1	1	1	無	無	体 : 8 (組型)	丸	LR	斜	qu ws	ナ	黄褐色	にぶい黄橙	磨減
5	注口	後末 - 大洞B1	口 - 底	7.2	5.2	9.0	2.8	B-1	1	1	無	無	上	無	無	qu ws	ナ	黒灰色	赤橙色		
6	注口	大洞BC	口 - 底	7.2	10	12	1.5	A2a	1	1	無	5-6 過渡 期	丸	-	-	qu ws	ニ	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	外 : 赤	磨減
7	土偶	大洞BC	頭 - 体	(87)	(60)		1.5														磨減

第7章 高石野遺跡出土遺物

第1節 高石野遺跡の概要

高石野遺跡（現 高石野Ⅰ遺跡）（遺跡地図番号348-18-7）は山本郡三種町鹿渡字高石野に所在する。昭和56（1981）年、畑の整地中に遺物が出土したことからその存在が明らかとなり、翌57（1982）年に琴丘町教育委員会によって2525m²の発掘調査が行われた（琴丘町教育委員会 1983）。

層位は1a・1b層（黒色土層）、2層（黒褐色土層）、3層（暗褐色土層）、4層（黄褐色土層；地山）に区分される。層厚は1a層18～30cm、1b層10～22cm、2層17～35cm、3層10～20cmで、1b層～3層が主たる遺物包含層である。4層において、多数の柱穴様ピット、土坑あるいは竪穴状遺構と考えられる遺構が確認された。なお遺物は1b層を包含Ⅰ層、2層を上下層二分して、包含Ⅱ層と包含Ⅲ層、3層～4層を包含Ⅳ層として整理された。

遺物は注口土器・壺など縄文時代後期後半から晩期中葉を主体とする土器、土偶・土版・土笛と思われる中空土製品・赤色顔料が塗布された土面等の土製品、石鏃・石錐・磨製石斧・凹み石といった石器、石刀といった石製品など多岐にわたり、豊富である。縄文時代晩期後葉は少ない。特に注目を浴びたのは土笛である。そのうち2点は海獣（アザラシかアシカ）を模ったとみられている。笛としての穴は背後の上部に吹口があり、穴はそこから胴部の中心を通して尾部に至る。遺跡のあった場所は現在、道の駅「ことおか」土笛の里となっており、地域住民に親しまれている。

第2節 検討の方法

平成4（1992）年刊行の報告書では、遺物写真と実測図が掲載されたが、発掘調査報告書刊行時点で遺物の9割が未洗浄となっていた。そこで、三種町教育委員会の協力のもと、調査・実測を2014年度に実施した。掲載の写真と実測図が関連付けられていなかったため、まず写真と実測図の照合作業を行った。

報告書の写真図版には土器129点、土製品36点、石器242点、石製品36点、計443点が掲載されている。土器の器種内訳は注口土器38点、壺形28点、鉢形17点、深鉢形7点、浅鉢形15点、台付鉢形8点、台付浅鉢形7点、香炉形4点、皿形2点、台付浅鉢形1点、釣手付皿形1点、把手付浅鉢形1点である。土製品は土偶13点、土面1点、土製円板3点、土錘3点、土版1点、耳栓7点、土笛4点、ミニチュア土器4点である。

石器は石鏃20点、石槍29点、磨製石斧13点、打製石斧2点、石錐61点、石匙60点、石錘18点、搔器26点、篋状石器1点、石皿7点、砥石2点、くぼみ石2点、磨石1点である。石製品は石冠9点、独鈷石1点、刀剣形石製品12点、浮子1点、異形石器3点、線刻石2点、石版2点、丸玉6点である。

報告書の実測図には土器48点、土製品29点、石器37点、石製品12点、および中期の円筒上層式土器片3点、計129点が掲載されており、上記写真図版のおよそ三割が図化されている。

実測図掲載の器種別内訳は注口土器11点、壺形13点、鉢形6点、深鉢形3点、浅鉢形4点、台付鉢形3点、台付浅鉢形4点、香炉形2点、皿形1点、台付皿形0点、釣手付皿形0点、把手付浅鉢形1点である。土製品は土偶12点、土面1点、土製円板3点、土錘2点、土版1点、耳栓6点、土笛4点、ミニチュア土器0点である。石製品は石冠1点、独鈷石1点、刀剣形石製品5点、浮子1点、異形石器0点、線刻石1点、石版1点、丸玉2点である。

ただし、実測図がある一方、写真がない資料が土器10点、土製品2点、石製品8点ある。石器の照合は困難であった。さらに保管施設で確認したところ、写真図版も実測図もない資料も見つかった。

以上の照合作業と保管施設での検討の結果、実測図がなく写真のみの土器16点、土製品1点、石製品2点のほか、新たに所蔵が確認できた資料のうち土器29点、土製品4点、石製品1点を図化した。さらに、洗浄済みの土器片のなかから197点を抽出し図化した。

またグリッドと層位については土器の注記をできる限り判読した。

第3節 高石野遺跡出土完形土器（図32～35、表8）

本節では出土完形土器（接合の結果、全体形が復元可能な個体）を分類し、器種ごとに述べていく。再整理した資料は、未注記が多く、層がわかるものの方が少ない状態であった。加えて、注記等から層位の判別ができる資料から、各層の様相を分析しても型式がかなり混在してしまう。このため、層位よりも型式を優先させて整理を行った。時期は後期末葉～大洞A式で大洞B2式が比較的多い。

（1）深鉢・鉢（図32-1～図33-14）

深鉢、鉢は14点（1～14）ある。後期末葉は4点（1～4）、大洞B1式は1点（5）、大洞B2式は3点（6～8）、大洞BC式は2点（9・10）、大洞C2式は2点（11・12）ある。13は、大洞C1～2式である。14は、地文のみで時期不明である。

後期末葉は4点（1～4）ある。括れがあり頸部が長いものが2点（3・4）、括れがないものが2点（1・2）ある。山形口縁2点（3・4）、平口縁1点（2）、突起口縁1点（1）で口縁部文様はキザミがあるものの1点（1）、弧線状の縄文帯1点（3）がある。頸部文様は入組帯状文3点（1・2・4）と多く、山形の沈線1点（3）がある。入組帯状文を細分すると、段部が内側に入組む多段入組帯状文1点、段部が発達し弧状になる多段入組帯状文1点（1）、単段の入組帯状文1点（2）がある。体部には、多段入組帯状文が1点ある（3）。

大洞B1式は1点（5）ある。括れがあり頸部が長い器形で、突起口縁である。口縁部と頸部に玉抱三叉文が配され、体部は連弧文が入組む。

大洞B2式は3点（6～8）ある。器形は括れがあり頸部が長いもの2点（6・8）、頸部が短いもの1点（7）がある。3点（6～8）全て突起口縁である。頸部文様は入組三叉文2点（6・8）がある。6には二段の入組三叉文が施される。7の体部には入組三叉文がある。6は台部に括れがあり、そこに沈線が施される。

大洞BC式は2点（9・10）ある。9は括れがない器形で、細かい小波状口縁である。口縁部には山形三叉文が配され、頸部には方形のポジ文列から成る羊歯状文が三段にわたり施文される。体部には、クラシクの端部が結合する羊歯状文（6b）とかぎ状に入組む羊歯状文（6c）がある。10は括れがあり頸部が短い器形で、細かい小波状口縁とB突起の組み合わせである。口縁部には山形三叉文が、頸部にはそれぞれの単位で分離する羊歯状文（6a）と下部にノ字文がある。

大洞C2式は2点（11・12）ある。11の器形は直立し、突起口縁である。口縁部にはキザミが施され、体部には流水形の工字文がみられる。12は括れがあり頸部が短い器形で、平口縁である。口縁部にはキザミ、頸部は無文帯、体部には横位決りがある。

13は大洞C1～2式である。括れがない器形で、平口縁である。頸部文様は規則性が見受けられず、明確なモチーフも不明である。口縁部にはキザミが施される。体部は沈線と刺突によって縦の区画が成され、中に沈線文があるが、モチーフ等は不明である。体部の縦区画から大洞C1～2式に並行すると考えられる。

14は括れがない器形で、小波状口縁である。地文のみである。

（2）浅鉢（図33-15～図34-28）

浅鉢は、14点（15～28）ある。後期後葉は1点（15）、後期末葉は4点（16～19）、大洞B1式2点（20・21）、大洞B2式は2点（22・23）、大洞BC式は3点（24～26）、大洞C1式は2点（27・28）ある。

後期後葉は1点（15）ある。括れを有しない器形で、大波状口縁である。波状口縁の頂部に凹形の突起、谷部に瘤がつく。体部には円文がある。台部には磨消縄文と刺突があり、下部に切れ込みが入る。

後期末葉は4点（16～19）あり、すべて無文である。器形は全て括れがない。平口縁2点（17・18）、突起口縁1点（19）、波状口縁1点（16）がある。

大洞B1式は2点（20・21）ある。20は括れがあり頸部が短い器形で、小波状口縁である。頸部には玉抱三叉文、体部には入組文がある。体部文様は、底部からみると磨り消しによる縄文帯が弧状に入組み、円が4単位巡る。21は括れがない器形で、平口縁である。頸部には玉抱三叉文がある。

大洞B2式は2点（22・23）ある。いずれも括れがあり頸部が長い器形である。23は突起口縁、22にはB突起がある。22の口縁部には瘤がつく。22は頸部に、23には頸部と体部に入組三叉文がある。

大洞BC式は3点(24~26)ある。24は括れがあり頸部が長い器形で、平口縁である。頸部に入組三叉文から羊歯状文への過渡期的文様、体部に渦巻文がある。赤色顔料が内面と外面の全面に付着する。25は括れがあり頸部が長い器形で、平口縁である。頸部と体部にはクランクが端部で結合する羊歯状文がある。底部には雲形文の祖形がある。赤色顔料が内面と外面に少量付着する。26は、括れない器形で、細かい小波状口縁である。体部に配置文の祖形があるが、体部中央には未だ羊歯状文がみられることから、大洞BC式に併行すると考えられる。

大洞C1式は2点(27・28)ある。いずれも器形は括れがなく、平口縁である。頸部にはいずれも羊歯状文がある。27の羊歯状文は二段、28は一段である。体部はいずれも配置文である。

(3) 壺 (図34-29~31)

壺は3点(29~31)ある。大洞BC式2点(30・31)、晚期中葉1点(29)がある。31は壺形のミニチュア土器である。

大洞BC式は2点(30・31)ある。いずれも体部が球状である。体部にはそれぞれの単位で分離する羊歯状文(30)、入組三叉文(31)が各1点ある。

晚期中葉に位置づけられるものは1点(29)ある。体部は丸味をおび、平口縁である。頸部を除き地文のみであるため詳細な帰属時期は不明であるが、器形から晚期中葉に併行すると考えられる。

(4) 注口土器 (図34-32~図35-40)

注口土器は9点(32~40)ある。後期後葉1点(32)、後期末葉3点(33~35)、大洞B1式1点(36)、大洞BC式3点(37~39)、大洞C1式1点(40)がある。

後期後葉は1点(32)ある。器形は体部上半と下半の比率が1:3以上のものである。頸部と体部に連弧文と瘤が施される。

後期末葉は3点(33~35)ある。全て傘がつかず体部上半が頸部よりも張り出さない。いずれも平口縁である。33の口縁部には瘤と横位袂りがある。沈線が2点(34・35)ある。35の注口部の付け根には、沈線が一周する。

大洞B1式は1点(36)ある。傘がなく、山形口縁である。口縁部には山形三叉文、体部には渦巻状の入組三叉文がある。

大洞BC式は3点(37~39)ある。器形は傘がつかず体部上半が頸部よりも張り出すもの(B-2a)が2点(37・38)、体部上半が頸部よりも張り出すものが1点(39)ある。平口縁が2点(37・38)ある。頸部は、一段の羊歯状文に挟まれた渦巻文が3点(37~39)ある。体部には3点全てにそれぞれの単位で分離する羊歯状文、注口部にはノ字文がある(37~39)。

大洞C1式は1点(40)ある。器形は体部上半が頸部よりも張り出し、頸部には一段の羊歯状文(6f)がある。体部には配置文が施され、B突起が付される。

(5) 香炉形土器 (図35-41~43)

香炉形土器は3点(41~43)あり、41は大洞BC式、42・43は大洞C1式に位置づけられる。41と42は体部上半が頸部よりも張り出し、頸部に窓が2個つく。41の頸部には透かしによる入組三叉文、体部には一段の羊歯状文とB突起がある。体部下半に沈線が巡る。42は頂部や体部に隆帯とB突起があり、体部に配置文を上部に二段、下部に一段施文する。43は口縁が開き、窓がない。上部と下部に各一段、配置文が展開する。口縁中央にA突起がある。

(6) 皿形土器 (図35-44)

皿形土器は1点(44)ある。底部に四つの突起があるのが特徴で、無文である。蓋形になる可能性もある。

(7) 異形土器 (図35-45)

異形土器は1点(45)あり、後期末葉に位置づけられる。環状で、注口部の痕跡がみられる。器形は、環の内側が急激に落ち込み、断面が三角形を呈する。体部には隆帯による菱形文が施され、注口部下部に瘤が貼付される。注口部の180度反対側には楕円状の破損部があり、なにか後ろに続いていたか、楕円状の開口部があったことが示唆される。

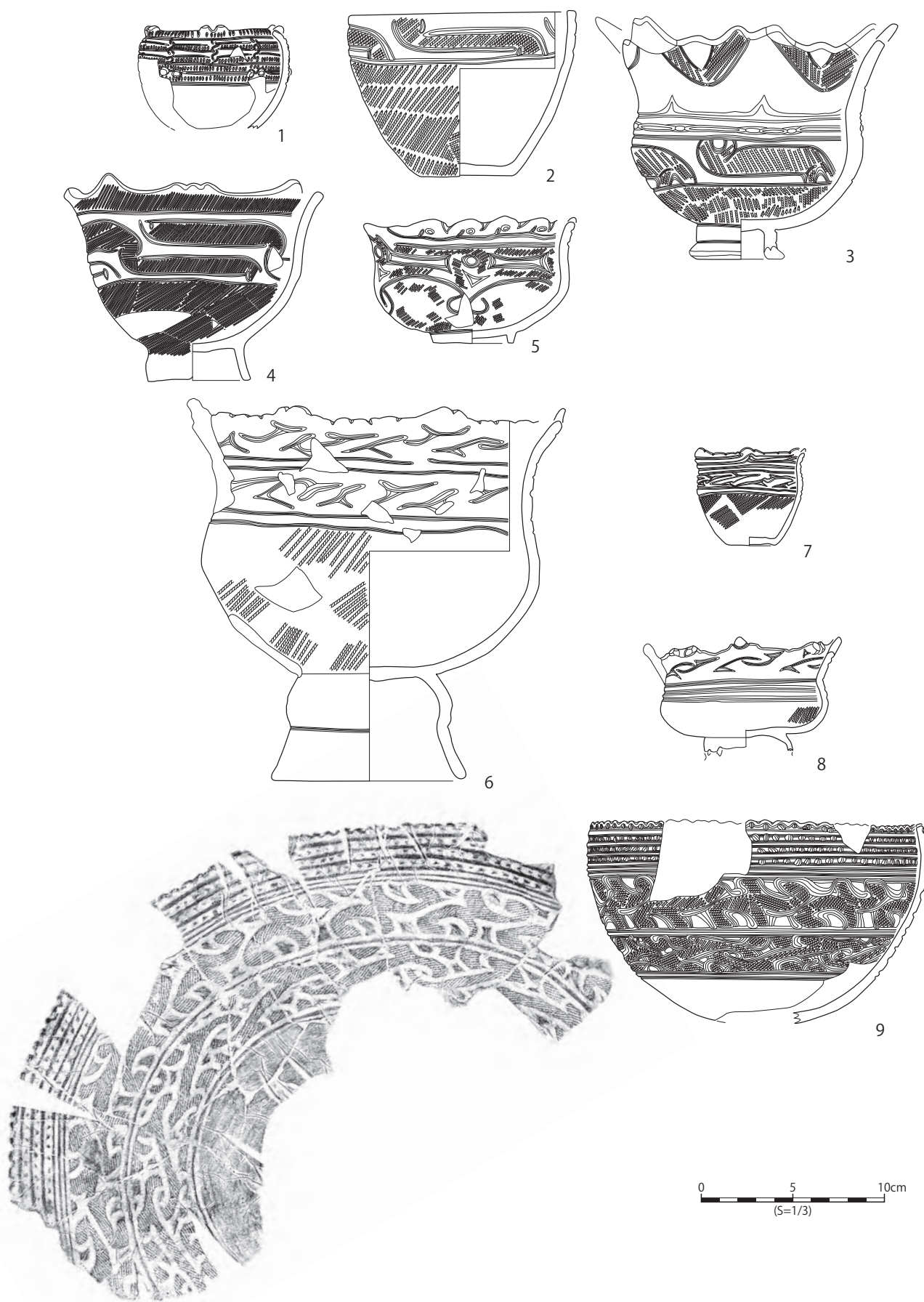


图 32 高石野遺跡出土土器・1

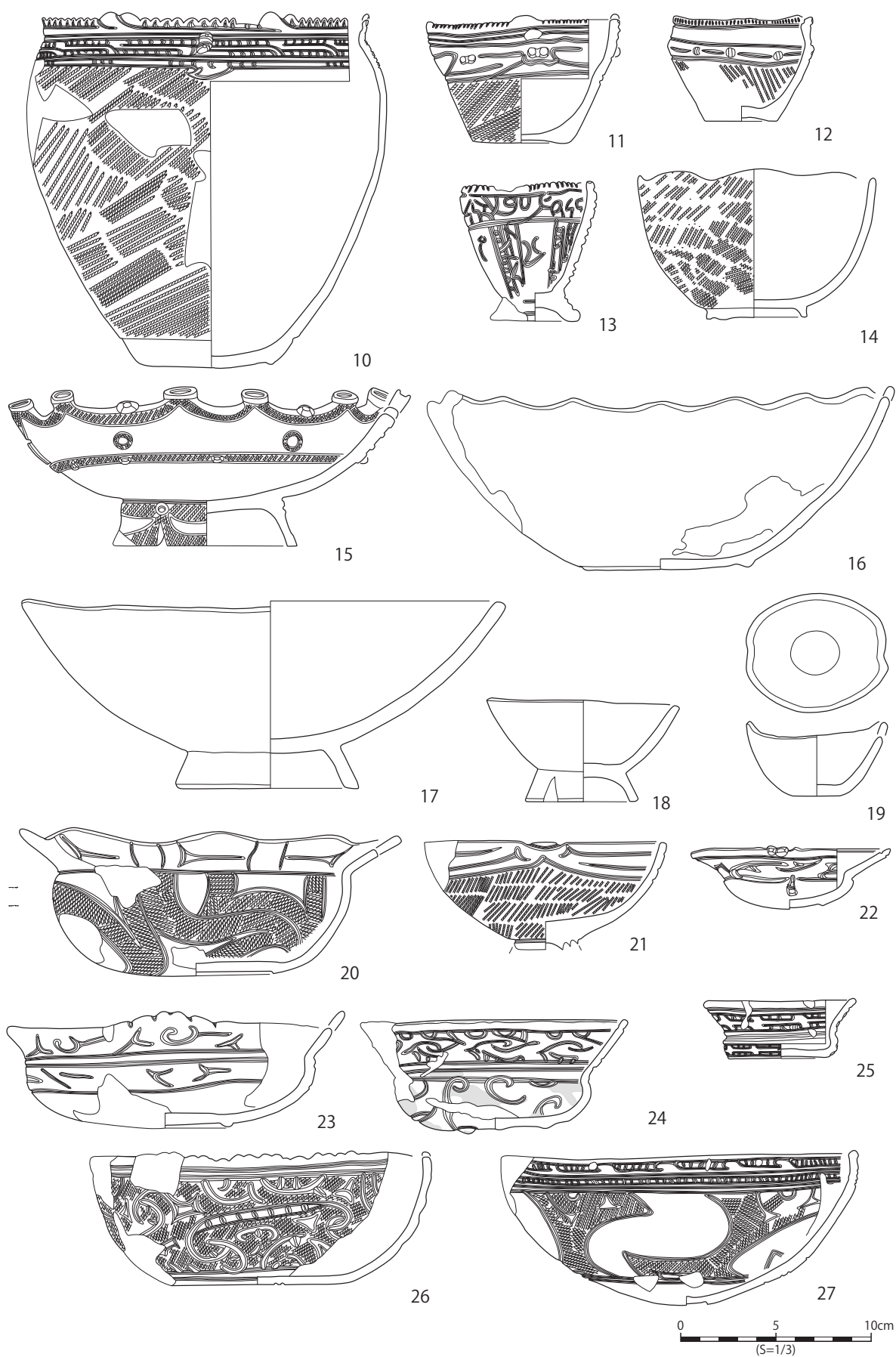


図 33 高石野遺跡出土土器・2

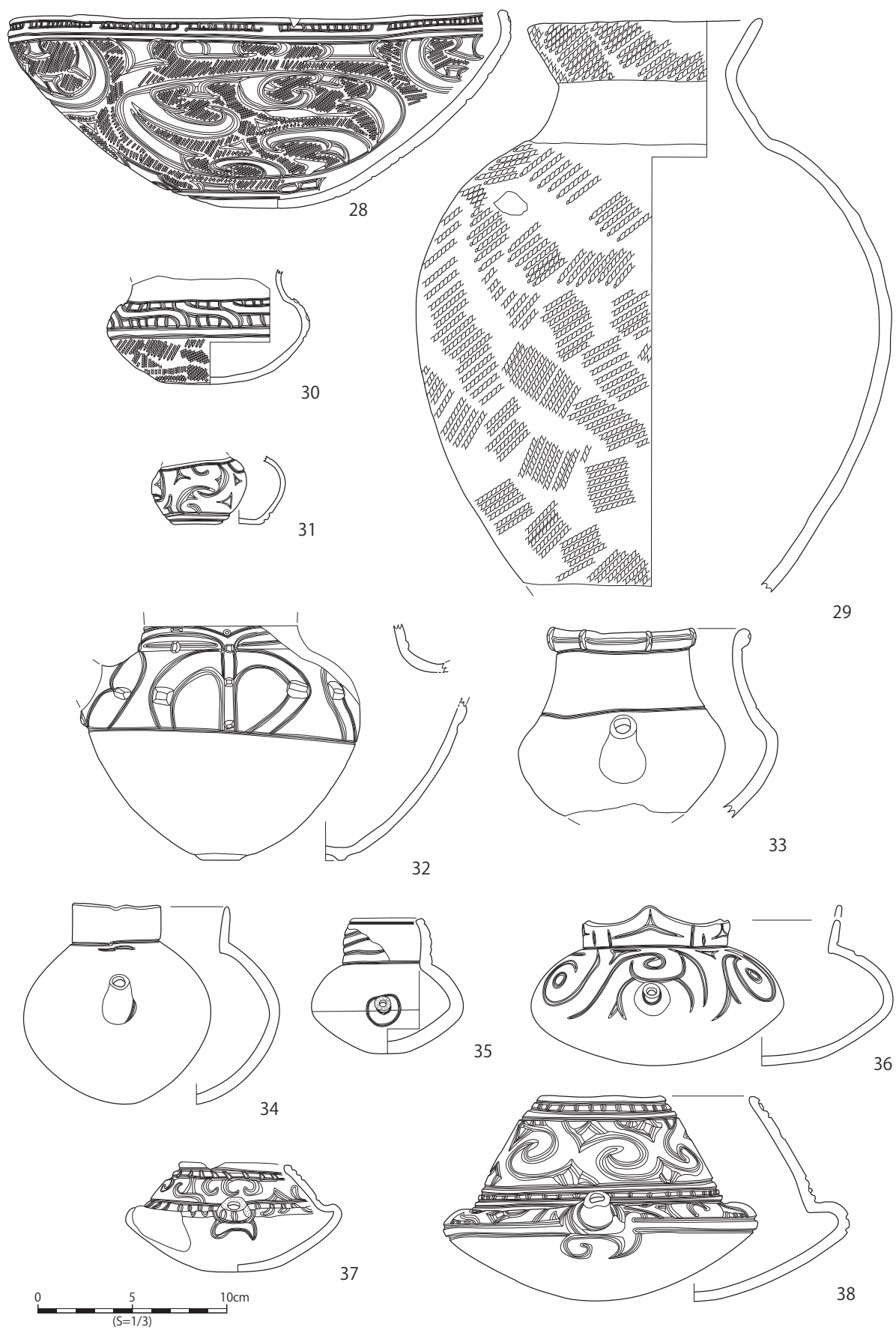


图 34 高石野遺跡出土土器・3

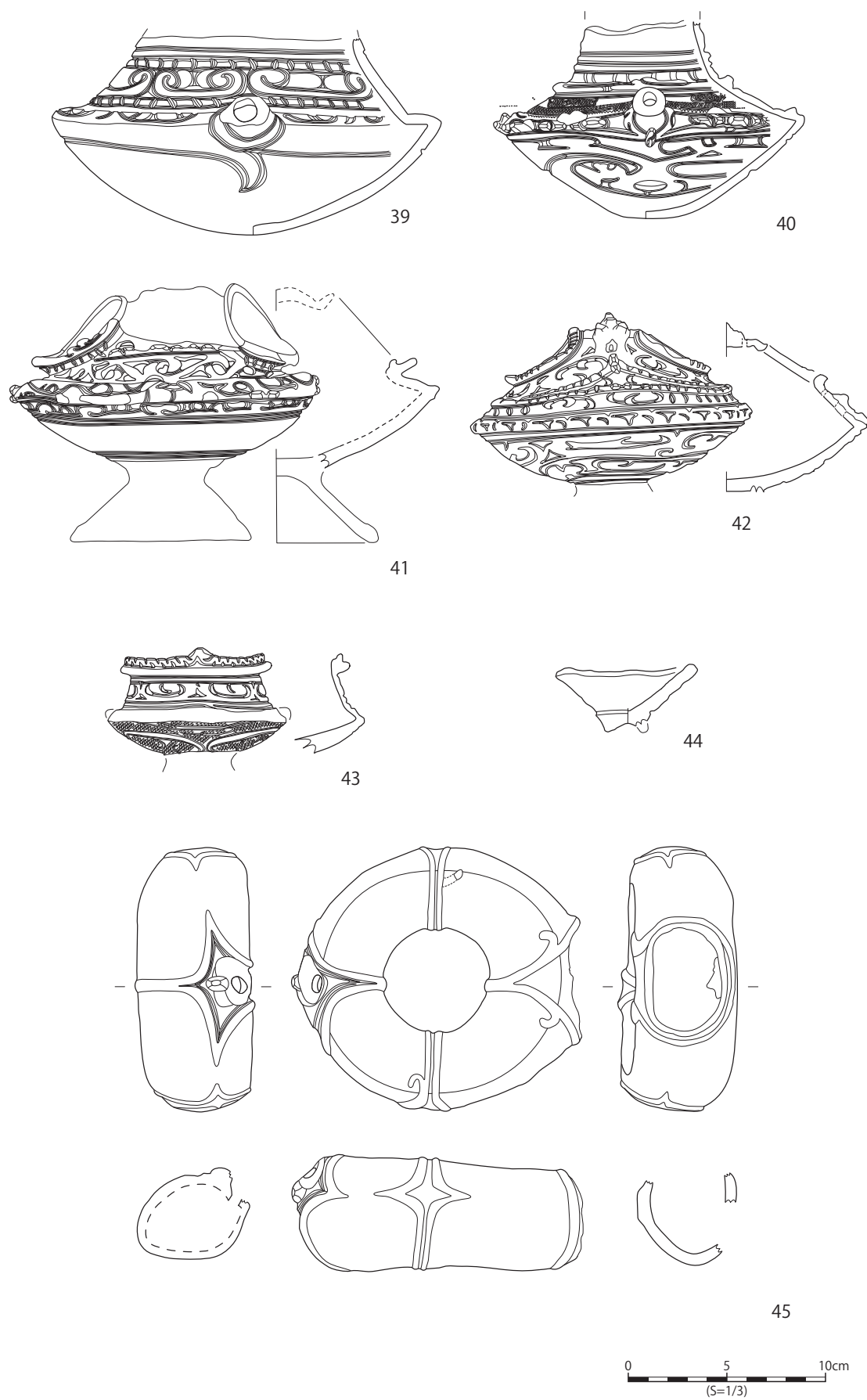


图 35 高石野遺跡出土土器・4

表 8 高石野遺跡出土土器 (完形) 観察表

図 番 号	注記 層	器種	時期	残存 部位	計測値 () 残存値				文様		底 形 態	ミ 種 類	地文		混 入 物	調整		色調		炭化物		付 着 物	町報告書 写真図版 掲載					
					器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底・台 厚さ (mm)	器 形	口縁 形態			口縁	体		その他	種類	方向	内 面	外 面	記号			内面	外面	内面	外面	
1		鉢	後末	口・体	8.5	9.7	4.0	2	2	1d		刻目	無	無	sa・qu	ナ	横	ナ	横	褐灰色	10YR4/1	橙色	7.5YR6/6	未掲載				
2		鉢	後末	口・底	9.5	12.8	12.8	6.1	2	1 (単段)	平		LR	右斜	sa・qu・fe	ミ	横	ミ	横	にぶい・橙	10YR5/4	にぶい・黄橙色	10YR7/3	未掲載				
3	6-H	II層	台付鉢	後末	口・台	13.0	15.7	5.0	7.0	1a	4	弧線の帯	山形沈線	1d	LR	右斜	sa・qu	ナ	横	ナ	横	にぶい・黄橙	10YR7/4	浅黄橙	10YR8/4	39-4		
4	LJ53	台付鉢	後末	口・台	11.5	15.3	15.3	5.5	6.0	1a	4	1b	LR	右斜	qu・sa	ナ	横	ナ	横	にぶい・黄橙色	10YR7/4	にぶい・黄橙	10YR7/3	未掲載				
5	8461 西側	台付鉢	大河B1	口・台	7.2	12.6	12.6	5.9	5.2	1a	2	3	4	LR	右斜	ws・qu	ナ	横	ナ	横	にぶい・橙	10YR6/3	にぶい・黄	2.5YR6/4	未掲載			
6	4-J 3-J	II層	台付鉢	大河B2	口・台	21.1	21.7	11.1	6.0	1a	2	5 (二段)	台：括れに沈線	LR	右斜	ws・ph・fe	ケ	横	ミ	黄灰	2.5Y4/1	暗灰黄	2.5Y5/2	口・体下厚 口・体下厚	未掲載			
7	5-J RP7	鉢	大河B2	口・底	10.6	12.7	12.7	5.8	5.7	1b	2	5	上	LR	右斜	fe・qu	ミ	ミ	ミ	黄灰	2.5YR4/1	にぶい・橙	7.5YR6/4	口・体厚 口・底 薄	25-6			
8	LQ57	II層	台付鉢	大河B2	口・台	7.1	12.2	12.2	5.4	5.0	1a	2	5	LR?		ss・qu	ケ	横	ミ	黒褐	10YR3/2	黒褐	10YR3/2	未掲載				
9	4-J	II層	鉢	大河BC	口・底	11.2	18.1	18.6	4.2	2	3'	3	6f+6f+6f	LR	右斜	ws・ss	ミ	ミ	ミ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	口 薄	未掲載			
10	5-B	II層	深鉢	大河BC	口・底	19.3	17.7	19.6	7.3	4.0	1b	3	6a+10	LR	右斜	ph・ss・ws	ケ	横	ミ	にぶい・橙	10YR7/4	にぶい・橙	10YR7/4	29-2				
11	II層	鉢	大河C2	口・底	7.1	10.3	10.3	5.4	-	2	2	2	12 (流水形)か	上	刻目	LR	右斜	qu・fe	ケ	横	ナ	横	浅黄橙	10YR8/4	黄橙	10YR8/6	体・底 薄	未掲載
12	LJ51	III層	鉢	大河C2	口・底	6.2	8.3	8.7	4.3	5.0	1b	1	11	刻目	RL	左斜	fe・bi	ナ	横	ナ	横	にぶい・橙	7.5YR6/4	にぶい・橙	7.5YR6/4	口・体 薄 口・体 薄	未掲載	
13	3-G	台付鉢	大河C1C2	口・台	7.7	7.4	7.4	5.0	5.5	2	1	2	縦区画、沈線文(モチーフ不明)	挾取	無	無	sa・qu	ケ	横	ナ	横	にぶい・黄橙	10YR7/3	にぶい・橙	7.5YR7/4	38-3		
14	8348	台付鉢	大河C2	口・台	8.6	13.6	13.6	5.8	5.0	2	3		口唇：頂部凹・瘤台：磨消文+刺突	LR	右斜	ss・ph	ケ	横	ケ	横	にぶい・黄橙	10YR7/4	にぶい・黄橙	10YR6/4	口・体 薄 口・体 薄	未掲載		
15	4-F	I	浅鉢	後後	口・台	7.9	21.3	21.3	6.0	2	大波状	円文		LR	右斜	ws	ケ	横	ナ	横	にぶい・黄橙色	10YR5/3	明赤褐色	5YR5/8	報告書実測図：P117第11図 4-F II 写真図版：37-2			
16		浅鉢	後末	口・底	9.1	25.8	25.8	9.5	6.0	2	波状		無	無	ws	ナ	横	ナ	横	にぶい・黄橙	10YR6/4	にぶい・黄橙	10YR6/4	未掲載				
17	1-F	II層	台付浅鉢	後末	口・台	7.0	18.0	18.0	6.5	5.0	2	1		無	無	fe・bi・ws	ケ	横	ケ	横	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	底 薄	42 c 4		
18	LP56	II層	台付浅鉢	後末	口・台	5.6	10.6	10.6	6.7	5.8	2	1		無	無	ws・qu	ミ	ミ	ミ	褐	7.5YR4/4	褐	7.5YR4/4	未掲載				
19		浅鉢	後末	口・底	4.1	8.7	8.7	2.4	4.0	2	2		無	無	fe・ws・qu	ケ	横	ケ	横	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	未掲載				
20	1-G	II層	浅鉢	大河B1	口・底	7.8	20.4	20.4	10.5	5.0	1b	3	入組文×4	LR	多方向	qu	ケ	横	ケ	横	灰黄褐	10YR6/2	にぶい・黄褐	10YR7/3	体 薄	36-14		
21	67	台付浅鉢	大河B1	口・台	5.7	13.0	13.0	2.7	5.0	2	1	3		LR	右斜	qu・ws・mi	ミ	ミ	ミ	にぶい・黄橙	10YR7/4	明黄褐	10YR7/6	未掲載				
22	8-F	土層断面	浅鉢	大河B2	口・底	3.3	10.7	10.7	2.9	5.0	1a	5	1	無	無	ph・fe・ws	ケ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR4/1	32-1			
23	LQ56	III層	浅鉢	大河B2	口・底	6.7	17.3	17.3	7.3	6.0	1a	2	5	LR	右斜	ws・qu・bi	ケ	横	ナ	横	灰白	7.5YR8/2	褐灰	7.5YR6/1	未掲載			
24	4-J RP11	浅鉢	大河BC	口・底	7.0	16.1	16.1	10.0	5.1	1a	1	5	7	無	無	ss・fe	ミ	ミ	ミ	灰黄褐	10YR6/2	にぶい・黄橙	10YR7/2	内・外：赤・全面	33-4			
25		浅鉢	大河BC	口・底	3.2	8.7	8.7	5.7	4.5	1a	1	6b	底：雲形文(祖形)	無	無	qu・ws	ミ	ミ	ミ	にぶい・黄橙	10YR7/3	にぶい・黄橙	10YR7/3	内・外：赤・全面	未掲載			

[illegible]

第4節 高石野遺跡出土土器片（図36～42、表9）

本章では、出土破片を分類し時期ごとに述べていく。なお、深鉢と鉢は破片では明確に区別することができないものが多いためひとくくりにした。

（1）後期末葉（図36-1～26）

器種構成は、深鉢・鉢25点（1～13・15～26）、壺1点（14）である。

深鉢・鉢は、25点（1～13・15～26）ある。器形が判別できる13点のうち12点（1・2・5～8ほか）に括れがあり、1点（26）のみ頸部が比較的長く、括れがない。突起がつくものが9点（1・6～8・13ほか）と最も多く、次いで山形口縁が6点（5・19・21～24）、平口縁が5点（2～4・9・17）、波状口縁は26のみである。口縁部には、キザミが3点（2～4）、山形三叉文が1点（24）、瘤が1点（8）ある。5の口縁部には、刻目のキザミで作出された円文がある。頸部は、入組帯状文が21点（1～11・15～21ほか）、挟入入組帯状文が1点（22）ある。入組帯状文のうち最も多いのが段部で内側に入組まない多段入組帯状文で、8点（1・2・5・16～20）ある。他は段部で内側に入組むものが2点（7・26）、縦に連続しZ字状に展開するものが1点（6）、段部が発達し弧状になるものが1点（8）ある。体部には多段入組帯状文が3点（2・10・20）ある。13は無文である。瘤は、口縁部1点（8）、頸部と体部の区画に6点（1・5～7・11・12・16）に貼り付けられる。瘤がないものが多い。

壺は1点（14）ある。平口縁である。口縁部と頸部には、隆帯が貼付される。

（2）大洞B1式（図36-27～37・39・40）

器種構成は、深鉢・鉢11点（27～32・34・36・37・39・40）、注口土器2点（33・35）である。

深鉢・鉢は11点（27～32・34・36・39）ある。器形は括れがあるものが6点（28～32・39）で、そのうち頸部が短いものが4点（30～32・39）、頸部が比較的長いものが2点（28・29）ある。括れがないものが2点（27・36）ある。山形口縁4点（30～32・37）、突起口縁2点（29・40）のほか、平口縁（36）、B突起（39）、波状口縁（34）が各1点ある。口縁部文様は、山形三叉文が3点（30・31・37）、玉抱三叉文が2点（39・40）ある。31の山形突起の頂部には凹形の瘤が貼付される。32は山形三叉文と玉抱三叉文がある。29は、突起の頂部にキザミが施され、穿孔される。頸部は、挟入入組帯状文3点（28～30）、玉抱三叉文2点（34・36）、入組帯状文1点（27）、入組三叉文1点（39）がある。28は、玉抱三叉文が頸部と体部の間にある。30～32は横位挟りが頸部と体部の間に施され、31は横位挟りに加え、瘤を交互に配置する。体部文様は単段の入組帯状文2点（28・32）、多段のもの1点（31）である。

注口土器は2点（33・35）で、口縁部片（35）と体部上半破片（33）である。35は平口縁で、口縁部には玉抱三叉文がある。33の体部には、挟入入組帯状文がある。

（3）大洞B2式（図37-38・41～47）

器種構成は、深鉢・鉢7点（38・41～45・47）、浅鉢1点（46）である。

深鉢・鉢は7点（38・41～45・47）ある。器形は括れを有しないものが5点（41～44・47）、括れを有し頸部が比較的長いものが1点（38）ある。小波状口縁が3点（42～44）と最も多く、突起口縁2点（41・47）、B突起1点（38）である。口縁部文様は、口縁部に沿って弧線のみがあるものが2点（41・47）、弧線と山形三叉文の組み合わせが2点（42・43）、入組三叉文が1点（44）ある。頸部文様は入組三叉文6点（38・39・41～43・47）が最も多い。玉抱三叉文1点（44）がある。45には穿孔のある突起が貼付される。47には矩形の入組三叉文がある。

浅鉢は1点（46）ある。器形は括れを有し頸部が比較的長い器形で、平口縁である。頸部には入組三叉文がある。

（4）大洞BC式（図37-48～図38-77）

器種構成は、深鉢・鉢24点（48～71）、浅鉢1点（72）、注口土器5点（73～77）である。

深鉢・鉢は24点（48～71）ある。器形は括れがないものが10点（48～50・53～57ほか）と最も多く、括れがあり頸部が短いものが8点（51・52・58ほか）、頸部が長いものが4点（66～69）ある。微細小波状口縁が6点（51・55・57ほか）と多く、微細小波状口縁とB突起の組み合わせ4点（52・58・59・63）、平口縁4点（54・56・66・67）、B突起4点（50・53・65・68）、突起のみ2点（48・49）、小波状口縁2

点(62・69)がある。口縁部文様は、口縁部に沿って弧線があるものが10点(50・52・53ほか)で、山形三叉文2点(49・51)、立体的な突起部分にネガの菱形文を配するもの2点(70・71)がある。頸部は羊歯状文が19点(48～66)ある。これを細分すると、それぞれの単位で分離するもの(6a)が6点(53・58・60・61・64・65)、端部がかぎ状に入組むもの(6c)が2点(57・59)、クランクが端部で結合するもの(6b)が1点(50)、二段のポジ文が直線のポジ文に区画されるもの(6d)が2点(48・55)、二段のポジ文が区画なしで配置されるもの(6e)が1点(51)、一段であるもの(6f)が1点(49)ある。59はB突起がつく。2種類の羊歯状文が組み合わさるものは4点(52・54・56・66)ある。52は6f+6a、54は6f+6e、56は6c+6f、66は6a+6fである。上下に入組三叉文、ネガの菱形文が2点(67・68)ある。体部文様は配置文が2点(63・66)、渦巻文が1点(68)ある。横位挟りが頸部と体部の間に施されるものが2点(67・68)ある。

浅鉢は1点(72)ある。器形は括れがなく、口縁部にはB突起がつき、口唇部には鋸歯文がある。頸部文様はクランクが端部で結合する羊歯状文(6b)であり、体部には配置文がある。

注口土器は5点(73～77)ある。口縁部が残るものは2点(73・74)あり、いずれも傘は付かず、平口縁である。残り3点(75～77)は体部片である。3点とも体部上半が頸部より張り出す。頸部文様は3点(73～75)全てが羊歯状文である。これを細分すると、2段のポジが区画なしに配置されるもの(6e)と端部でかぎ状に入組むもの(6c)が各1点(74)、一段のものに挟まれた端部で結合するもの(6b)が1点(75)ある。76の体部上半には方形のポジ文列の羊歯状文が施され、B突起が貼付される。77の体部上半にはそれぞれの単位で分離する羊歯状文(6a)、体部下半には配置文の粗形的文様がみられる。

(5) 大洞C1式(図38-78～84・87～図39-122)

器種構成は、深鉢・鉢6点(78～82・87)、浅鉢・台付浅鉢33点(83・84・88～118)、壺3点(119～121)、注口土器1点(122)である。

深鉢・鉢は6点(78～82・87)で、器形は括れを有しないもの4点(78～81)がある。平口縁1点(78)、特に細かい小波状口縁1点(79)、細かい小波状口縁にB突起が付いたもの3点(80～82)、B突起1点(87)がある。そのほか口唇部に弧線があるものが1点(87)ある。口縁部文様は口縁部に沿う弧線が3点(80・81・87)、Z字沈線1点(82)がある。頸部文様は沈線3点(78・80・81)、一段の羊歯状文1点(79)がある。81の地文は、LR綾絡文である。配置文が1点(87)、沈線で連続する矩形状のモチーフを描くものが1点(82)ある。

浅鉢・台付浅鉢は、33点(83・84・88～118)ある。浅鉢は31点で、器形は括れがないものが29点(83・84・88～94など)と最も多く、括れがあり頸部が短いものは1点(95)ある。B突起が21点(88・89・98・103～105ほか)と多く、平口縁が6点(83・84・90ほか)、細かい小波状口縁とB突起の組み合わせが1点(100)ある。口唇部には、陽刻の装飾が19点(97～116)にある。このうち陽刻装飾とキザミがあるものが4点(99・107・111・115)、陽刻装飾と一段の羊歯状文3点(102・105・106)がある。口縁部には山形三叉文1点(102)、頸部には羊歯状文11点(83・84・89・91～93ほか)がある。これを細分すると、一段が9点(83・84・89・91～93ほか)、二段のポジ文が直線のポジ文に区画されるものが3点(100・103・104)ある。体部には、配置文が31点(83・84・88～100ほか)全てにある。体部に補修孔があるものが2点(109・113)あり、109には1個、113には2個ある。台付浅鉢は2点(101・118)ある。101は括れがなく、小波状口縁で、口唇部に陽刻の装飾が施される。118の台部には配置文がある。赤色顔料が付着するものは4点(95・109・116・118)ある。95と118は内面と外面、109は内面と外面の口縁部から体部、116は内面の口唇部と外面に塗布される。

壺は3点(119～121)ある。頸部には、櫛掛け状隆帯による環状突起が3点(119～121)全てにある。

注口土器は1点(122)ある。器形は体部上半が頸部よりよりはり出さない。体部上半にはキザミとB突起がつけられ、体部下半には配置文がある。

(6) 大洞C2式(図38-85・86・図40-123～図42-187)

器種構成は、深鉢・鉢55点(123～176・181)、浅鉢6点(85・86・177～180)、壺1点(182)、注口土器5点(183～187)である。

深鉢・鉢は55点(123～176・181)、ある。器形は、括れがなく頸部が短いものが31点(123～127・

129～133・135ほか)、括れがないものは16点(128・134・137～139ほか)、括れがあり頸部が長いものが5点(141・143・144・146・174)ある。平口縁が28点(123・124・126～131ほか)と最も多く、次いでB突起が10点(125・132・150・151ほか)、細かい小波状口縁が5点(140・156～158・176)である。突起口縁が13点(141～143・145ほか)ある。これを細分すると、A突起が3点(145・146・170)、A突起+B突起3点(141・142・181)、二個一対の突起2点(161・163)、三個一対の突起1点(165)、三突起一単位1点(143)、二個一対の突起とB突起の組み合わせ1点(164)がある。口唇部に沈線が巡るものが1点(143)ある。口縁部文様は、口縁部に沿う弧線1点(176)、Z字沈線1点(147)、内外面に山形三叉文3点(168～170)、内外面に三角形挟り1点(181)、内面のみに三角形の挟り6点(141・142・145ほか)、連続する三角形の挟りとキザミ1点(173)、内面に沈線と弧線があるもの1点(174)がある。頸部文様は、沈線24点(125・126・128～139ほか)と最も多く、無文帯が21点(141・143～146・148ほか)、配置文が3点(174～176)ある。沈線に加え刺突列が巡るものが2点(124・127)、刺突列のみのものは2点(123・140)ある。体部には、配置文が10点(147～152・154・155・159・170)にある。これを細分すると、配置文のみが2点(148・154)、配置文にB突起がつくものが8点(147・149～152・155・159・170)ある。147には縦のB突起がある。工字文の祖形は10点(160～169)あり、このうち磨消縄文による工字文の祖形モチーフが7点(160～164・167・169)ある。これを細分すると、工字文の祖形のみが4点(161・164・167・169)、工字文の祖形モチーフとB突起が1点(160)、工字文の祖形とB突起、横位挟りが2点(162・163)ある。入組C字文が3点(156～158)にある。頸部と体部の間に横位挟りが施され瘤がつくものが1点(146)、突起がつき沈線に挟まれた刺突列が巡るものが1点(173)ある。体部にB突起のみが貼付されるものは8点(133～140)ある。頸部から口縁部へ突起が伸びるものが2点(171・172)ある。171の突起には三叉状のネガ文様が施され、B突起がつく。172の体部には円文がある。181には、赤色顔料が内面と外面の口縁部から体部に付着する。地文は羽状縄文6点(125～127・132・138・142)、縦縄文7点(128・131・139ほか)がある。

浅鉢は6点(85・86・177～180)ある。器形は括れがないもの4点(177～180)、括れがあり頸部が短いもの2点(85・86)がある。細かい小波状口縁が5点(85・86・178～180)と多く、A突起がつくものが1点(177)ある。口唇部に陽刻装飾が施されるものが3点(177～179)ある。口縁部文様は、内面に山形三叉文があるものが1点(180)ある。頸部は、一段の羊歯状文(6f)が2点(86・177)ある。体部には配置文が6点(85・86・177～180)全てにある。このうち崩れた配置文は5点(86・177～180)ある。胴部の内面に縄文が充填された隆帯がつくものが2点(177・180)ある。

壺は1点(182)ある。体部に連繫入組文が施され、B突起がつく。

注口土器は5点(183～187)ある。傘がつくもの1点(183)、傘がつかないもの1点(184)がある。口縁部にA突起(183)、B突起(184)が各1点ある。体部上半が頸部よりも張り出すものは5点(183～187)ある。頸部文様は配置文が1点(184)、磨消縄文による工字文の祖形モチーフが1点(183)ある。体部文様は、配置文とキザミ、B突起が施されるものが2点(183・184)、体部上半に透かし、体部(ツマミ部)に三角形の挟りとB突起、キザミが施されるものが1点(185)、体部上半に三角形のネガ文様、上下にB突起、体部下半に配置文が1点(186)、体部下半に工字文とキザミ、突起がつくものが1点(187)ある。漆が付着するものは1点(186)あり、外面の体部に赤漆が付着する。

(7) 大洞A1式(図42-188～197)

器種構成は、深鉢・鉢3点(191・192・195)、浅鉢5点(188～190・193・194)、壺1点(196)、蓋1点(197)である。

深鉢・鉢は3点(191・192・195)ある。器形は括れがあり頸部が短いもの1点(191)、括れがないもの1点(192)がある。平口縁1点(192)のほか、A突起2点(191・195)がある。口縁部には内面に三角形の挟りが施されるものが1点(191)ある。頸部文様は無文帯が1点(192)ある。体部は匹字文(191)、工字文に粘土粒(192)が各1点ある。地文は縦縄文が1点(191)ある。

浅鉢は5点(188～190・193・194)ある。器形は括れがないもの4点(188・189・193・194)がある。平口縁2点(189・190)、突起口縁2点(193・194)、B突起1点(188)がある。194はA突起である。口縁部の内面に沈線があるもの1点(188)、三角形の挟りが施されるもの1点(194)がある。頸部文様は、

無文帯が3点（188・190・194）ある。体部文様は、工字文3点（188・189・194）、匹字文に粘土粒がついたもの1点（190）、匹字文の下部に眼鏡状浮文があるもの1点（193）がある。漆が付着するものは2点（188・189）ある。188は内面の頸部から体部に掛けて黒漆、口唇部に赤漆がつき、外面の頸部に黒漆、体部全面に赤漆が塗布される。189は内面、外面ともに全面に赤漆が塗布される。

壺は1点（196）ある。口縁にはA突起がつく。口縁部には、三角形の抉りが施される。

蓋は1点（197）ある。平口縁で、体部には工字文がある。

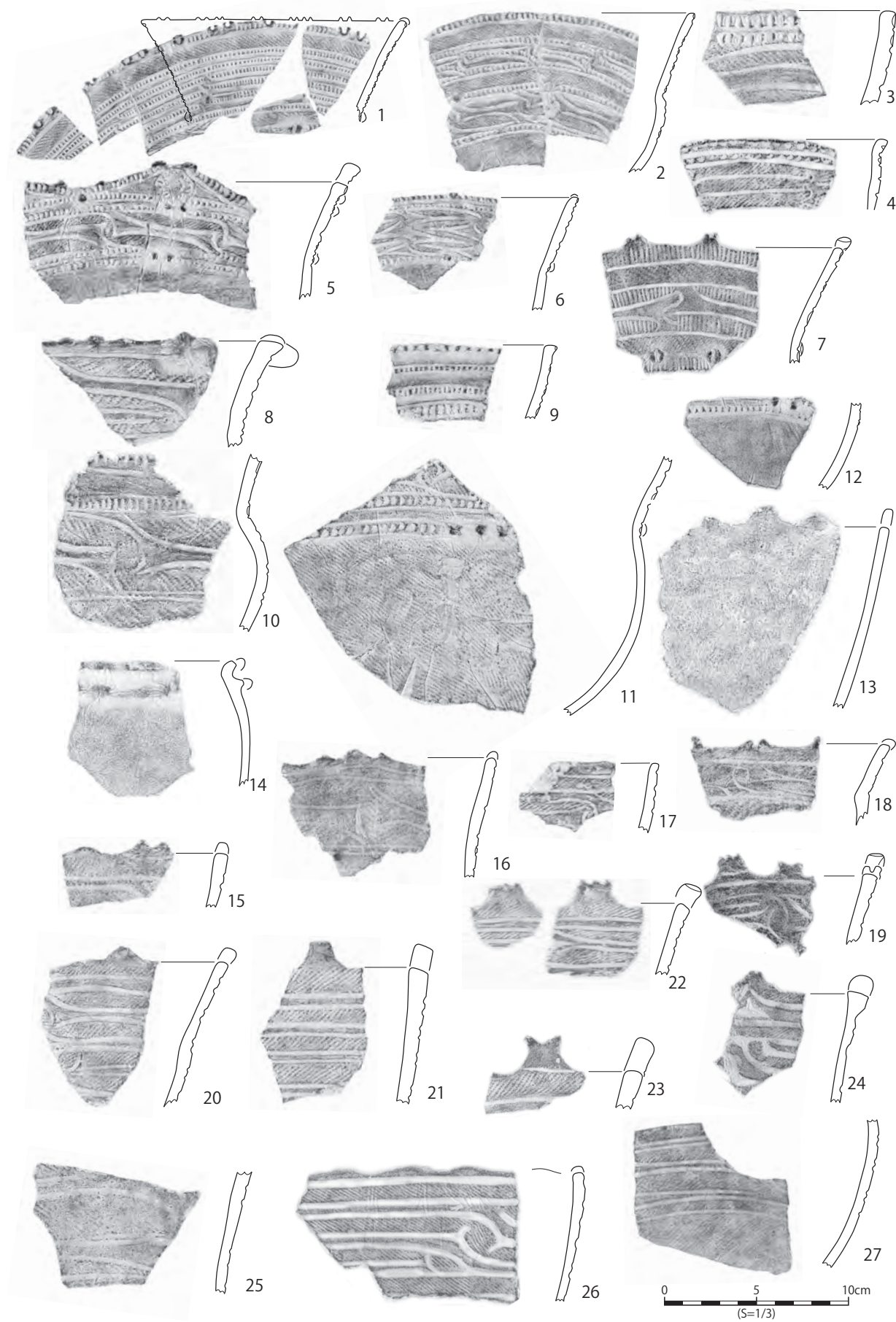


図 36 高石野遺跡出土土器・5

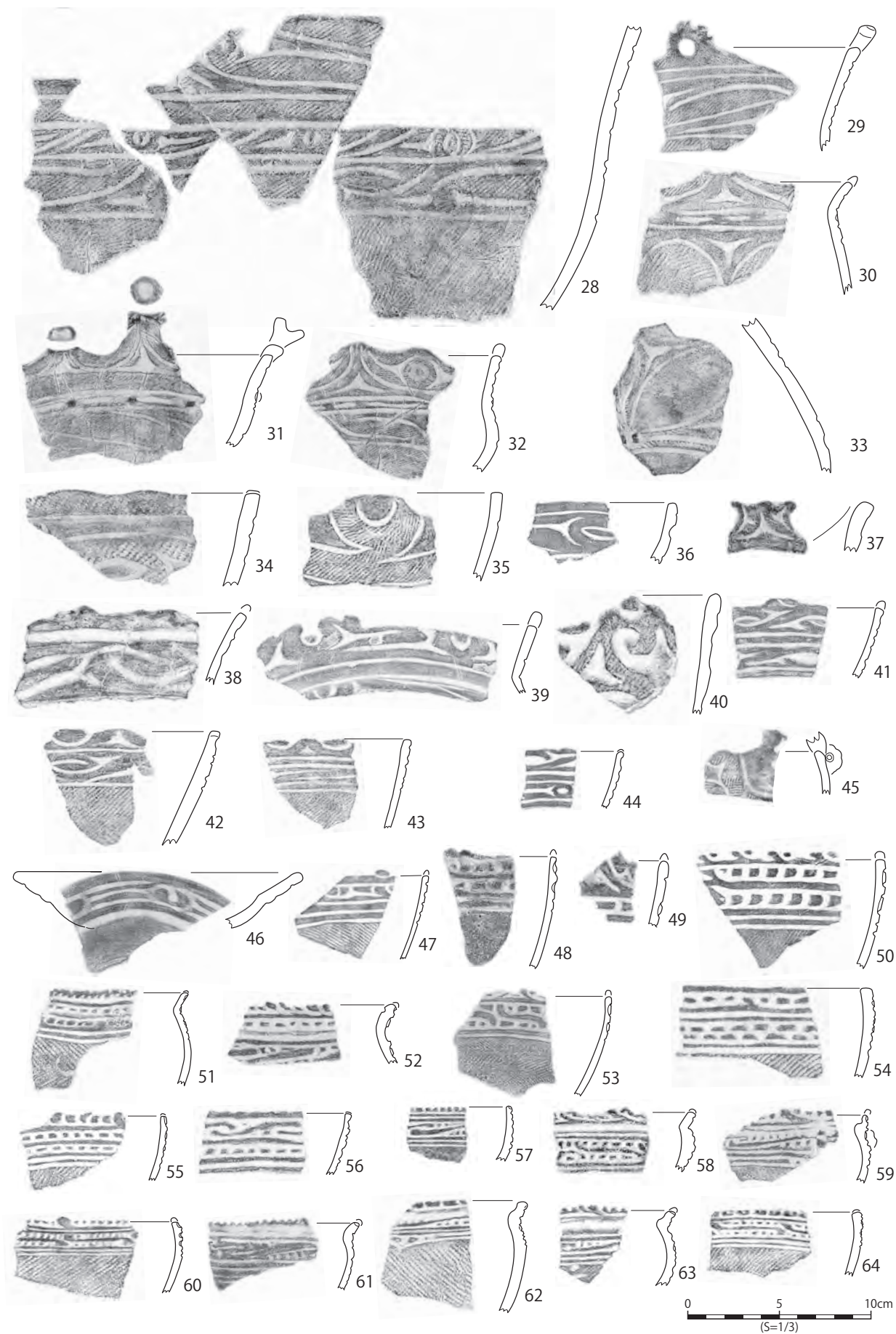


図 37 高石野遺跡出土土器・6

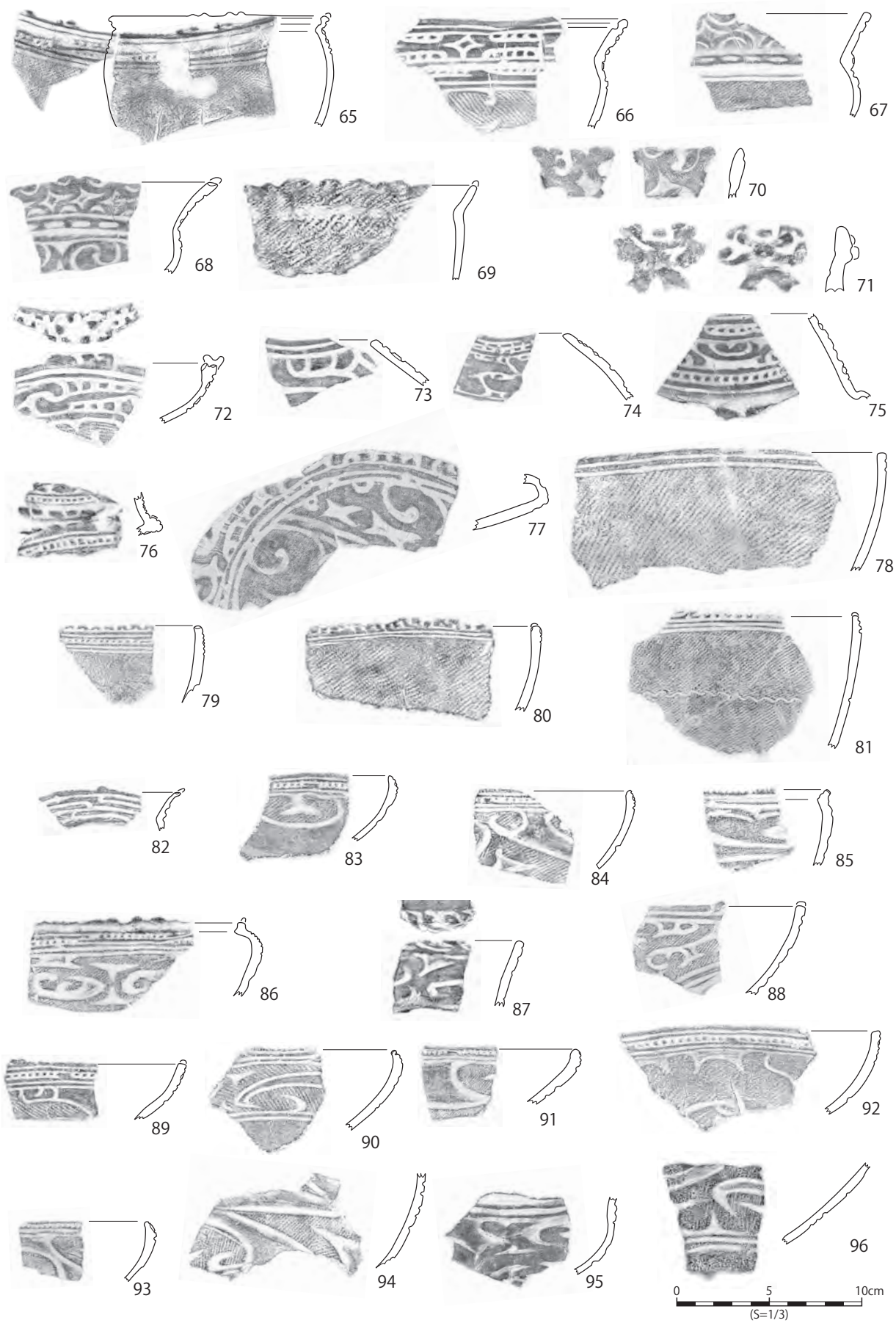


图 38 高石野遺跡出土土器・7

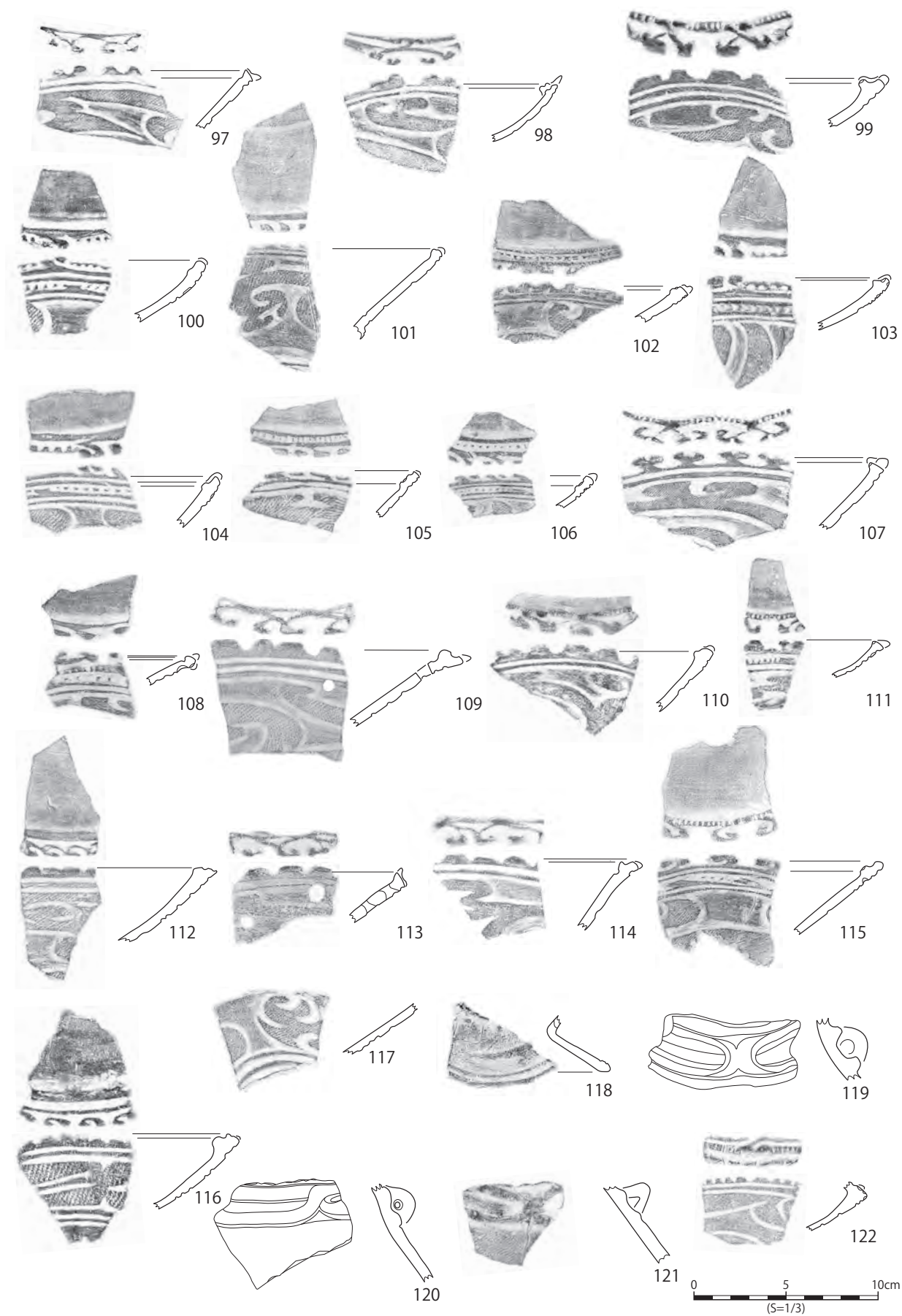


図 39 高石野遺跡出土土器・8

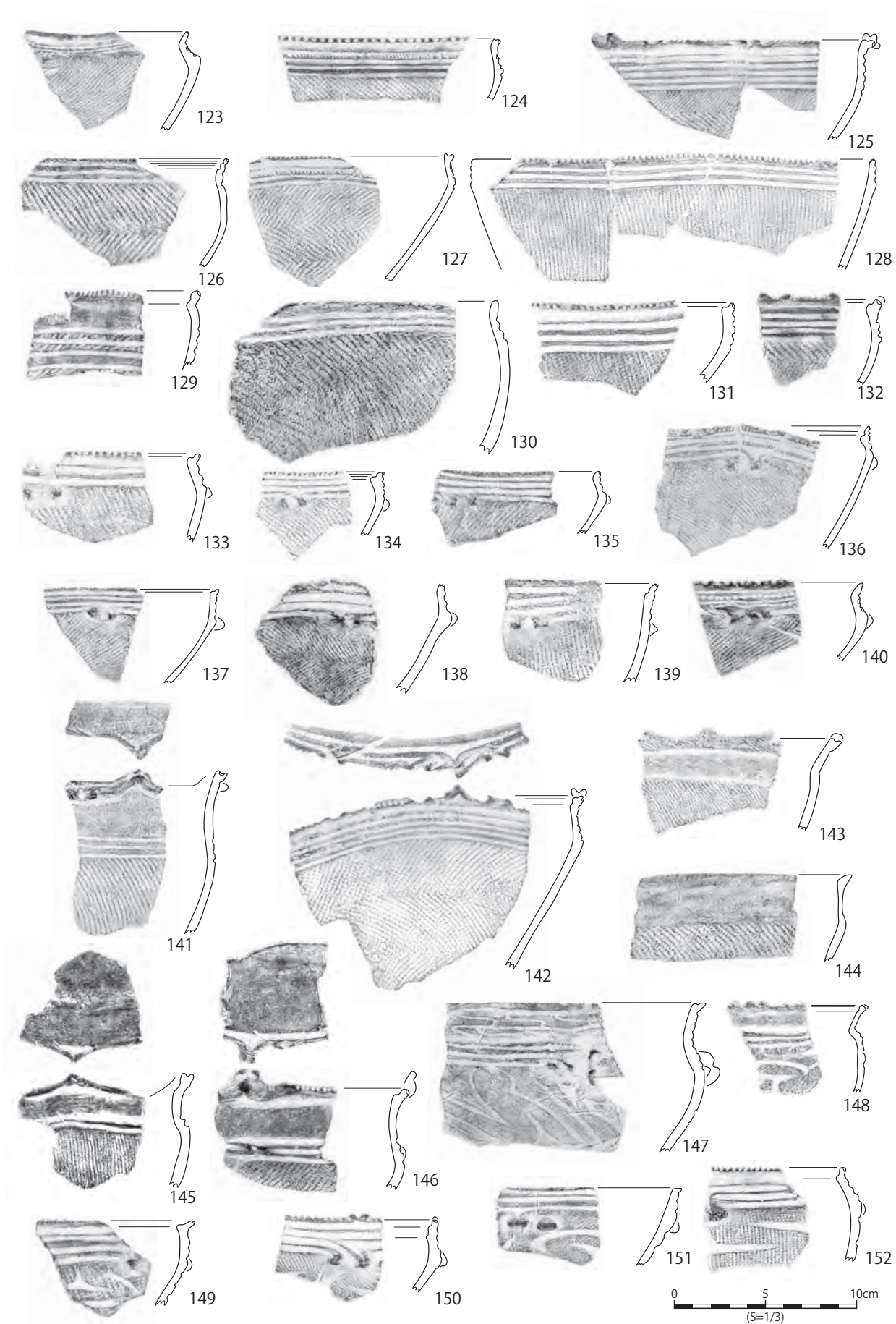


图 40 高石野遺跡出土土器・9

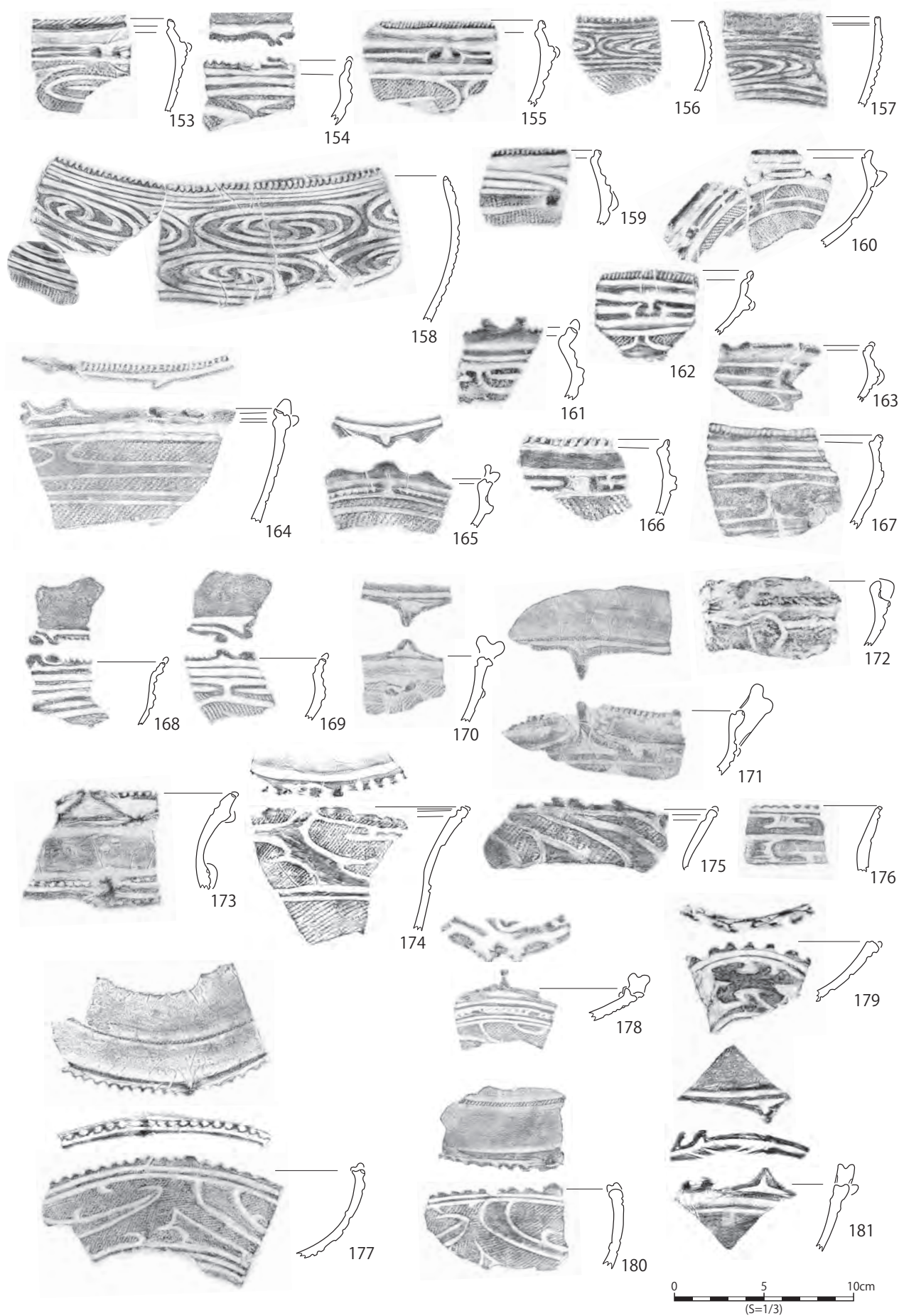


図 41 高石野遺跡出土土器・10

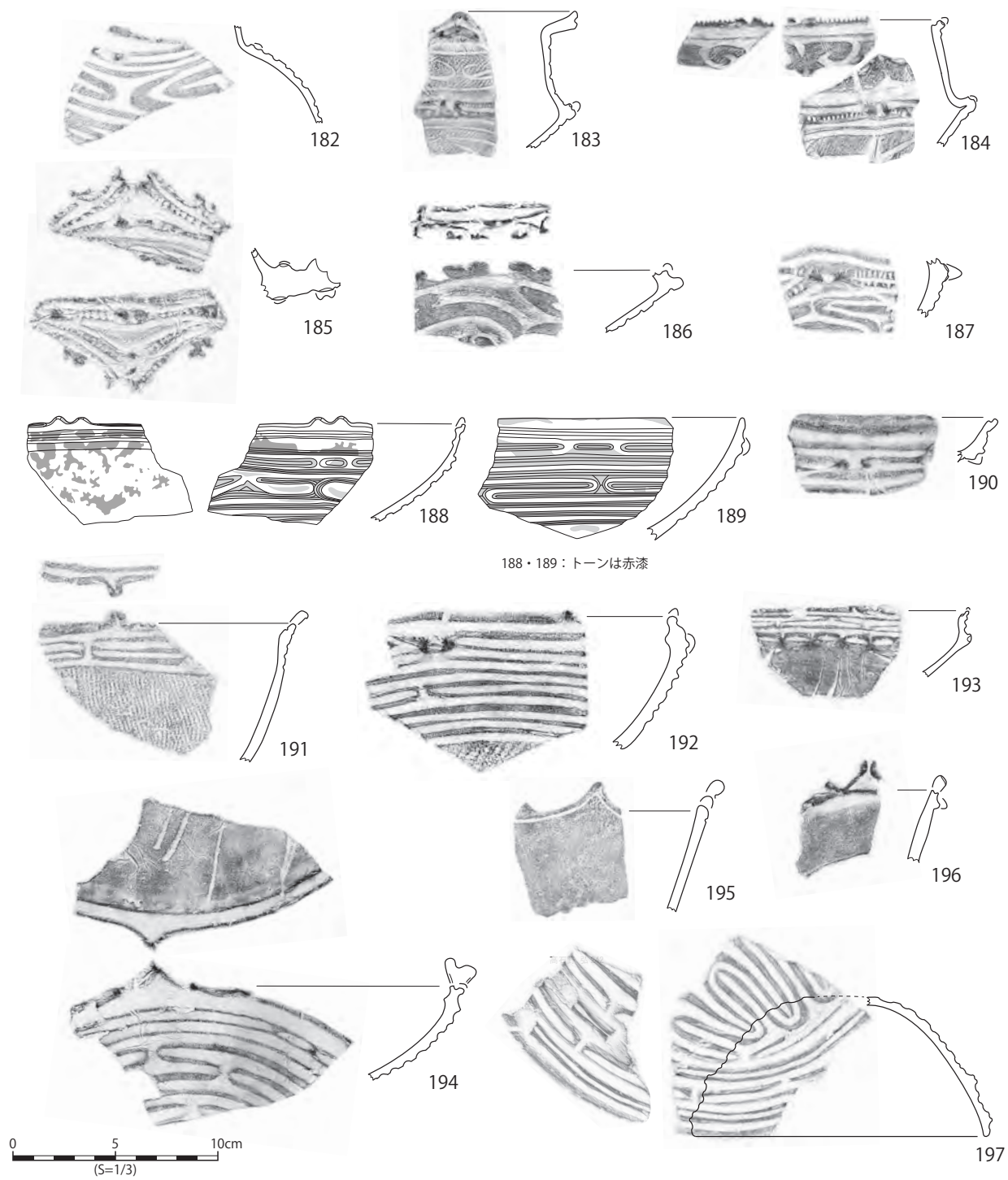


図 42 高石野遺跡出土土器・11

表 9 高石野遺跡出土土器（破片）観察表

図 書 号	整 理 番 号	グ リ ッ ト	層	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 復元値			口縁 形 態	文 様		ミ ザ ミ 種 類	地 文 種 類	調 整		色 調		炭化物		備 考			
							口 径 (cm)	最大径 (cm)	厚さ (mm)		口縁	体			その他	内 面	外 面	方 向	方 向	内 面		外 面	記 号	記 号
1	97	4-F	Ⅱ層 下部	深鉢	後末	口・体	(14.0)	(14.0)	4.0	1a	2	1a	区画：瘤	刻目 RL	左斜 sa・qu	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	浅黄橙	10YR4/8	
2	95	3-F	Ⅱ層 下部	鉢	後末	口・体	(10.0)	(10.0)	3.5	1a	1	2	1a	1a		ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	にぶい黄橙	10YR5/3	
3	81			深鉢	後末	口・頸	(20.0)	(20.0)	7.0	1	2	1		挾取 LR	右斜 sa・qu	ケ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
4	73			深鉢	後末	口・頸	(16.0)	(16.0)	3.0	1	2	1		挾取 LR	右斜 sa・qu・ph	ナ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR5/3	にぶい黄橙	10YR6/3	
5	96	3-G	Ⅲ	深鉢	後末	口・体	(13.0)	(13.0)	4.5	1a	4	刻目で 口文	区画：瘤	刻目 LR	右斜 sa・qu・fe	ナ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	
6	87			深鉢	後末	口・体	(12.0)	(12.0)	5.0	1a	2	1c	区画：瘤	刻目 LR	右斜 sa・qu	ナ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR7/3	灰黄橙	10YR4/2	
7	69			深鉢	後末	口・体	(6.8)	(6.8)	4.0	1a	2	1b	区画：瘤	刻目 RL	左斜 sa・qu・ph	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/2	
8	88			深鉢	後末	口・頸	(28.0)	(28.0)	8.0	1a	2	1d		LR	右斜 sa・qu・rn	ケ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	にぶい黄橙	10YR7/3	
9	85			深鉢	後末	口・頸	(16.0)	(16.0)	4.0	1	1			刻目 無	無 sa・qu	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	
10	93	9ライン トレンチ		深鉢	後末	頸・体		5.5	1a	1	1a			刻目 RL	左斜 sa・qu	ケ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/3	
11	91	2-F	Ⅱ	深鉢	後末	頸・体		4.5	1a	1	1	区画：瘤		刻目 RL	右斜 sa・qu・fe	ケ	横	ケ	横	明黄褐	10YR7/6	黄褐	10YR5/8	
12	74			深鉢	後末	体		3.5				区画：瘤		刻目 無	無 sa・qu	ケ	横	ミ	横	褐灰	10YR5/1	褐灰	10YR4/1	
13	245	8-H	Ⅲ層	深鉢	後末	口・頸		7.0	2	2				無	無 qu・ws	ケ	横	ケ	横	にぶい橙	7.5YR6/4	褐灰	7.5YR4/1	
14	201	4-F	Ⅱ層 下面	壺	後末	口・頸		5.0	1	隆帯	隆帯			無	無 sa・qu	ナ	横	ミ	横	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	7.5YR8/4	
15	103			深鉢	後末	口・頸	(10.0)	(10.0)	4.0	2	1			LR	右斜 sa・qu	ナ	横	ナ	横	明黄褐	10YR7/6	にぶい黄橙	10YR5/3	
16	79			深鉢	後末	口・頸	(14.0)	(14.0)	5.0	1a	2	1a	区画：瘤	LR	右斜 sa・qu	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	灰黄褐	10YR5/2	
17	84			深鉢	後末	口・頸	(10.0)	(10.0)	5.0	1	1a			LR	右斜 sa・qu	ミ	ナ	横	ナ	黒褐	10YR3/1	にぶい黄橙	10YR7/3	
18	72			深鉢	後末	口・頸	(10.0)	(10.0)	5.0	1a	2	1a		LR	右斜 sa・qu	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	灰黄橙	10YR4/2	
19	70			深鉢	後末	口・頸	(12.0)	(12.0)	4.0	4	1a			LR	右斜 sa・qu・rn	ミ	ナ	横	ナ	にぶい黄橙	10YR6/4	にぶい黄橙	10YR7/4	
20	86			深鉢	後末	口・体	(11.5)	(11.5)	5.0	1a	2	1a	1a	LR	右斜 sa・qu	ケ	横	ナ	横	にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい褐	7.5YR5/4	
21	80	3-G	Ⅱ	深鉢	後末	口・頸		6.5		4	1			LR	右斜 sa・qu・ph	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	
22	89	8-H	Ⅲ	深鉢	後末	口・頸	(16.0)	(16.0)	6.0	4	2	2		LR	右斜 sa	ミ	横	縦 文	横	黒褐	10YR3/1	にぶい黄橙	10YR5/3	口・頸 薄
23	71			深鉢	後末	口・頸		7.0		4	1?			LR	右斜 sa・qu・ph	ミ		ミ	横	灰黄褐	10YR4/2	灰黄橙	10YR5/2	
24	68			深鉢	後末	口・頸		4.0		4	3	1		LR	右斜 sa・qu・ph	ケ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	にぶい黄橙	10YR7/3	
25	82	2-F	Ⅱ	深鉢	後末	頸		5.6	1a	1	1			RL	左斜 sa・qu	ミ	ナ	横	ナ	浅黄橙	10YR8/4	にぶい黄橙	10YR7/4	
26	67			深鉢	後末	口・体	(21.0)	(21.0)	4.0	2	波状	1b		RL	左斜 sa・qu・ph	ケ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	灰黄橙	10YR4/2	口 薄
27	78			深鉢	大洞 B1	頸・体		4.0	2	2	1	1		LR	右斜 ws・qu	ミ	ナ	横	ナ	にぶい黄橙	10YR4/3	にぶい黄橙	10YR7/3	口・体 薄
28	94	5-J	I	深鉢	大洞 B1	頸・体		6.0	1a	1a	2	2	1 (単段)	LR	右斜 sa・qu	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR5/6	黒褐	10YR3/2	
29	75			鉢	大洞 B1	口・頸	(18.0)	(18.0)	4.0	1a	2	2	穿孔、 キザミ	LR	右斜 sa・qu・ss	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR 3/1	にぶい黄橙	10YR7/4	
30	100	2-G	Ⅱ	鉢	大洞 B1	口・体	(20.0)	(20.0)	4.0	1b	4	3	2	LR	右斜 sa・qu	ナ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR5/4	

図番 整理番号	グ リ ッ ト	層	器種	時期	残存 部位	計測値 () 復元値			口縁 形態	文様	キ ザ ミ 種類	地文 種類	調整			色調		炭化物			備考								
						口径 (cm)	最大径 (cm)	厚さ (mm)					内 面	外 面	方 向	混 入物	内 面	外 面	記号	外面		記号	内面	量	外面	量			
31 92	5-J	I	鉢	大洞 B1	口・体	(100)	4.5	1b	4	3	1	区画：11+ 瘤	LR	右斜	sa・qu	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR5/6	黒褐	10YR3/2	口	薄	体	微薄		
32 102			鉢	大洞 B1	口・体	(90)	5.0	1b	4	4+3	1 (車段)	区画：11	LR	右斜	sa	ナ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR5/3	口・体	薄				
33 77			注口	大洞 B1	体上 半		5.5			2	区画：瘤	LR	右斜 め	sa・ qu・ph	ケ	横	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR5/1	灰黄橙	10YR5/2					
34 101			深鉢	大洞 B1	口・頸	(240)	6.5	波状		3		LR	右斜	sa・ qu・m	ケ	横	ナ	横	ナ	横	浅黄橙	10YR4/1	浅黄橙	10YR8/3					
35 107	5-H	II層	注口	大洞 B1	口		6.0		1	4		LR	右斜	qu・sa	ケ	横	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	口	薄	口	薄	
36 112			鉢	大洞 B1	口・頸		5.0	2	1	3		無	無	ws・ qu	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	褐灰	10YR4/1	灰黄褐	10YR4/2	頸	薄			
37 76			鉢	大洞 B1	口縁		6.0		4	3		RL	左斜	sa・ qu・fe	ナ	横	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR 3/1	にぶい黄橙	10YR6/3					
38 134	4-J RP-10		深鉢	大洞 B2	口・頸	(130)	5.0	1a	5	5		無	無	qu・ss	ケ	横	ケ	横	ケ	横	黄灰	25Y4/1	暗灰黄	25Y5/2	頸	薄			
39 114			深鉢	大洞 B1	口・頸	(11.5)	5.0	1b	5	4	5?	無	無	sa・ qu・ph	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1					
40 106	4-J KP	II層	鉢	大洞 B1	口		5.0		2	4		LR	右斜	qu・ ws	ケ	横	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1					
41 110	4-H	II層	鉢	大洞 B2	口・体	(120)	4.0	2	2	5	5	無	無	ws・ qu	ナ	横	ニ	ニ	ニ	ニ	黒褐	10YR2/1	黒褐	10YR3/1	体	薄			
42 109			鉢	大洞 B2	口・体	(220)	7.0	2	3	3+5	5	LR	右斜	qu・ sa・ ws・m	ケ	横	ケ	横	ケ	横	灰黄褐	10YR6/2	にぶい黄橙	10YR7/2					
43 99	4-H	II層	鉢	大洞 B2	口・体	(120)	4.0	2	3	3+5	5	LR	右斜	sa・qu	ケ	横	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR6/1	灰黄褐	10YR5/2					
44 105			鉢	大洞 B2	口・頸		3.5	2	3	入組三又 文	3	無	無	ph・sa	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	黒褐	25Y3/1	黒褐	25Y3/1					
45 148			鉢	大洞 B2	口・頸	(200)	4.0					突起に 穿孔	LR	右斜	qu・ ws	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄橙	10YR6/3					
46 108	2-F	I層	浅鉢	大洞 B2	口・体	(150)	5.5	1a	1	5		無	無	ws・ qu	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	灰黄	25Y7/2	灰黄	25Y7/2						
47 118			深鉢	大洞 B2	口・体		3.0	2	2	5	5	RL	左斜	ph・ ws	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	にぶい黄褐	10YR6/4	黒褐	10YR3/1	体	薄				
48 129			深鉢	大洞 BC	口・体	(200)	4.0	2	2	6d		無	無	sa・ph	ナ	横	ナ	横	ナ	横	灰黄	25Y7/2	黄褐	25Y5/3					
49 122			深鉢	大洞 BC	口・頸		5.0	2	2	3	6f	無	無	sa・qu	ナ	横	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	灰褐	7.5YR4/2					
50 151	5-J	III層	深鉢	大洞 BC	口・体	(160)	5.0	2	5	5	6b	LR	右斜	ws・bi	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	体	薄				
51 120	5-J	II層	鉢	大洞 BC	口・体	(80)	4.0	1b	3'	3	6e	羽状		ph・sa	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	黒褐	25Y3/1	黒褐	25Y3/1	口・頸	薄	厚			
52 130	6-G	I層	鉢	大洞 BC	口・頸	(140)	4.5	1b	3'+5	5	6f+6a	無	無	ph・sa	ケ	横	ケ	横	ケ	横	浅黄橙	7.5YR8/6	灰褐	7.5YR6/2					
53 136			鉢	大洞 BC	口・体	(170)	4.0	2	5	5	6a	羽状		sa	ニ	ニ	ナ	横	ナ	横	黄灰	25Y4/1	灰黄	25Y7/2					
54 117	5-H	II層	深鉢	大洞 BC	口・体	(220)	6.0	2	1	6f+6e		LR	右斜	ws qu	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	黄灰色	25YR4/1	褐灰	10YR4/1						
55 119			鉢	大洞 BC	口・体		3.0	2	3'	5	6d	LR	右斜	ss・qu	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	にぶい黄褐	10YR6/4	黒褐	10YR3/1						
56 124			深鉢	大洞 BC	口・頸	(180)	4.0	2	1	6c+6f		無	無	ws・ qu	ニ	ニ	ナ	横	ナ	横	黒色	7.5YR2/1	黒褐	7.5YR3/1	体	薄			
57 128			深鉢	大洞 BC	口・体		4.0	2	3'	5	6c	無	無	sa・qu	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1						

図番 番号	整理 番号	グ リ ッド	層	器種	時期	残存 部位	計測値 () 復元値			口縁 形態	文様		ミ ザ メ ニ シ ン	地文		混 入 物 種 類	調整			色調			炭化物			備考				
							口径 (cm)	最大径 (cm)	厚さ (mm)		口縁	頭		体	その他		種 類	方 向	内 面	外 方 向	方 向	内 面	記号	外面	記号		内面	量	外面	量
58	121		鉢	大洞 BC		口・頸	5.0	1b	3'+5	5	6a			ws・ qu・ph	ナ	横	ナ	横	ナ	横	浅黄橙	10YR8/4	にぶい・黄橙	10YR7/4						
59	123		鉢	大洞 BC		口・体	4.0	1b	3'+5	5	6a+B 突起			RL	左斜	ph・sa	ケ	横	ミ	にぶい・橙	10YR7/2	にぶい・橙	10YR7/4							
60	125		鉢	大洞 BC		口・体	4.0	2	3'		6a			LR	右斜	qu・ ws	ミ	ナ	横	灰黄褐	10YR4/2	灰黄褐	10YR6/2				体	薄		
61	115		深鉢	大洞 BC		口・体	3.0	1b	3'		6a			無	無	sa・ ph・bi	ナ	横	ナ	横	にぶい・橙	75YR6/4	にぶい・黄橙	10YR6/4						
62	116		鉢	大洞 BC		口・体	6.0	1b	3	5	6			RL	左斜	ws・ qu	ケ	横	ミ	褐	10YR5/1	灰黄褐	10YR5/2							
63	133		鉢	大洞 BC		口・体	5.0	1b	3'+5	5	6	8?		LR	右斜	qu・ ws	ミ	ミ	ミ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1							
64	127		鉢	大洞 BC		口・体	5.0	2	3'	5	6a			LR	右斜	ws・ qu・sa	ケ	横	ミ	黒褐	75YR3/1	黒褐	5YR3/1		体	薄	体	薄		
65	150		鉢	大洞 BC		口・体	4.0	1b	5		6a			羽状	sa・qu	ミ	ミ	ミ	ミ	黒褐	75YR3/1	黒褐	75YR3/1		体	薄	体	薄		
66	137	3-H	鉢	大洞 BC		口・体	4.5	1a	1		6a+6f	8		RL	右斜	ws・ ph	ミ	ミ	ミ	褐灰	75YR4/1	褐灰	75YR4/1							
67	135		鉢	大洞 BC		口・体	4.0	1a	1		5 (上下) +菱形 陰刻			LR	右斜	sa・ qu・ ss・ws	ミ	ミ	ミ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1							
68	132		鉢	大洞 BC		口・体	3.2	1a	5		7 (上下) +菱形 陰刻			無	無	ph・ ws	ミ	ミ	ミ	にぶい・黄褐	10YR5/3	橙	75YR6/6		体	薄				
69	139	3-H	深鉢	大洞 BC		口・体	4.0	1a	3					LR	右斜	qu・ ws・ ph	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	灰黄褐	10YR4/2			体	薄		
70	145	3-H	鉢	大洞 BC		口	6.0				立体突起 + 菱形陰 刻			無	無	ws・ qu	ミ	ミ	ミ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1							
71	104		鉢	大洞 BC		口	9.0				立体突起 + 菱形陰 刻			無	無	ph・qu	ナ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	褐灰	10YR4/1						内：赤・ 全面 外：赤・ 全面
72	283	4-H	浅鉢	大洞 BC		口・体	16.0	2	5	6b	8	口唇：鋸 歯文		LR	横	ws・ss	ミ	ミ	ミ	褐灰	10YR4/1	灰黄	25%6/2							
73	143	5-J	皿層 注口	大洞 BC		口・頸	4.1	B	1	6				無	無	sa・ss	ナ	横	ミ	褐灰	10YR4/1	黒褐	10YR3/1							
74	146	6-F	皿層 注口	大洞 BC		口・頸	4.0	B	1	6e+6c				無	無	qu・ ws・bi	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	にぶい・黄橙	10YR7/2						
75	144	5-J	皿層 注口	大洞 BC		体上	4.0	2a		6f+6b+6d				無	無	ws	ケ	横	ミ	灰褐	10YR5/1	黒褐	10YR3/1							
76	176		注口	大洞 BC		体上	3.9	2a		6f+B 突起				無	無	qu・bi	ケ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR4/2	黒褐	10YR3/1						
77	152	4-H	皿層 注口	大洞 BC		体上	5.5	2a		体上：6a 体下：8 (粗形)				無	無	ws・ qu	ケ	横	ミ	黒褐	10YR3/1	にぶい・黄橙	10YR6/3						底部形 態：球	
78	202	4-H	皿層 深鉢	大洞 C1		口・体	5.1	2	1	沈線				LR	右斜	ws・sa	ナ	横	ナ	にぶい・黄橙	10YR5/3	灰黄	10YR6/2							
79	138	5-F	皿層 上面	大洞 C1		口・体	18.0	2	3'	6f				LR	右斜	qu・ ws	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	褐灰	75YR4/1		体	薄			
80	141	6-G	皿層 鉢	大洞 C1		口・体	4.5	2	3'+5	5	沈線			LR	右斜	qu ws	ケ	横	ケ	横	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	10YR6/2						

図 書 号	整 理 番 号	グ リ ッ ト	層	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 復元値			口縁 形 態	文 様	キ ザ ミ 種 類	地 文 種 類	混 入 物	調 整			色 調			炭化物			備 考							
							口 径 (cm)	最大 径 (cm)	厚 さ (mm)						口 縁	頭	体	口 縁	方 向	方 向	内 面	外 面	方 向		内 面	外 面	記 号	内 面	外 面	量	量
81	142	4-F	II層	深鉢	大洞 C1	口・体	(7.0)	4.0	2	3+5	5	沈線	LR 綾絡 文	qu' fe'sa	≡	≡	≡	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	体	薄	体	薄						
82	111		鉢		大洞 C1	口・頸	(16.0)	3.5	3+5	Z字 沈線		無	無	ws' qu	≡	横	+	横	+	灰黄褐	10YR4/2	にぶい黄橙	10YR7/3	体	薄	体	薄				
83	161		浅鉢		大洞 C1	口・体	(10.0)	4.0	2	1	6f	8	LR	右斜	ph' qu'sa	+	横	+	横	+	灰黄褐	10YR6/2	にぶい黄橙	10YR7/3							
84	193	4-F	II層	浅鉢	大洞 C1	口・体		5.0	2	1	6f	8	LR	右斜	ws' mi	+	横	+	横	+	にぶい橙	75YR7/3	明褐灰	75YR7/3							
85	154	4-F	I層	浅鉢	大洞 C2	口・体		5.0	1b	3'		8	無	無	sa' fe	+	横	+	横	+	褐灰	75YR4/2	灰黄褐	10YR5/2							
86	190	7H RP2	浅鉢		大洞 C2	口・体		5.0	1b	3'	6f	8 (崩れ)	LR	右斜	qu	≡	≡	≡	≡	≡	黒褐	10YR2/2	黒褐	10YR3/1	口	薄					
87	113	4-F	I層	鉢	大洞 C1	口・体	(22.0)	4.5	5	5	8		無	無	qu' ph	+	横	+	横	+	黒褐	10YR3/1	灰黄褐	10YR6/2							
88	167		浅鉢		大洞 C1	口・体	(14.0)	4.0	2	5		8	LR	右斜	qu' ws'ss	≡	+	横	+	横	+	褐灰	75YR4/1	にぶい褐	75YR6/3						
89	153		浅鉢		大洞 C1	口・体	(14.0)	4.0	2	5	6f	8	RL	右斜	ph' qu	≡	≡	≡	≡	≡	褐灰	75YR4/1	にぶい黄褐	10YR5/3							
90	182		浅鉢		大洞 C1	口・体	(24.0)	5.0	2	1	8		RL	左斜	qu' ws'ss	+	横	+	横	+	にぶい黄橙	10YR5/3	灰黄褐	10YR5/2							
91	159		浅鉢		大洞 C1	口・体	(4.1)	5.0	2	1	6f	8	LR	右斜	qu' ws	≡	≡	≡	≡	≡	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄褐	10YR6/3	体	薄					
92	189	5-J	II層	浅鉢	大洞 C1	口・体		6.0	2	1	6f	8	RL	左斜	qu' ws	≡	≡	≡	≡	≡	にぶい黄橙	10YR6/3	褐灰	10YR4/1	口	薄					
93	165		浅鉢		大洞 C1	口・体	(16.0)	4.0	2	1	6f	8	LR	右斜	qu' ws	+	横	+	横	+	褐灰	10YR5/1	褐灰	10YR5/1							
94	162		浅鉢		大洞 C1	体		4.5	2		8		LR	右斜	qu' ws	≡	≡	≡	≡	≡	褐灰	10YR4/1	灰黄褐	10YR5/2					内：赤・ 全面 外：赤		
95	192	4-F	I層	浅鉢	大洞 C1	体	(20.0)	4.5	1b		8		無	無	sa	ケ	ケ	≡	≡	≡	にぶい黄橙	10YR7/2	灰黄褐	10YR5/2							
96	170		浅鉢		大洞 C1	体		4.0	2		8		RL	縦	qu' ss'ws	+	横	+	横	+	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR7/4							
97	186	4-F	I層	浅鉢	大洞 C1	口・体	(22.0)	5.0	2	5	8		口唇：陽 刻装飾	LR	右斜	ws' qu	ケ	横	+	横	+	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい橙	75YR6/4						
98	166		浅鉢		大洞 C1	口・体	(20.0)	3.9	2	5	8		口唇：陽 刻装飾	LR	右斜	ws' qu'ss	+	横	+	横	+	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄橙	10YR7/2						
99	205		浅鉢		大洞 C1	口・体	(12.0)	5.0	2	5	8		口唇：陽 刻装飾 + キザミ	LR	右斜	qu' ws'sa	≡	+	横	+	横	+	黒褐	75YR3/1	にぶい橙	75YR5/3					
100	163		浅鉢		大洞 C1	口・体		4.5	2	3+5	6d	8	口唇：陽 刻装飾	LR	右斜	qu' ws'sa	≡	≡	≡	≡	≡	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1						
101	171	6-G	I層	台付 浅鉢	大洞 C1	口・体		4.5	2	5	8		口唇：陽 刻装飾	LR	右斜	sa' qu	≡	+	横	+	横	+	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/4					
102	185	3-H	II層	浅鉢	大洞 C1	口・体	(16.0)	5.5	5	3	8		口唇：陽 刻装飾 +6f	LR	右斜	sa' qu	≡	+	横	+	横	+	黒褐	10YR3/1	にぶい黄橙	10YR5/3					
103	183		浅鉢		大洞 C1	口・体		5.5	2	5	6d	8	口唇：陽 刻装飾	無	無	qu' ws	ケ	横	+	横	+	黒褐	10YR3/1	灰黄褐	10YR6/2						
104	175	4-F	I層	浅鉢	大洞 C1	口・体		6.0	2	5	6f	8	口唇：陽 刻装飾	LR	右斜	qu' ws	+	横	+	横	+	にぶい黄橙	10YR7/4	灰黄	24Y6/2						
105	172	7-F	I層	浅鉢	大洞 C1	口・体	(16.0)	4.0	2	5	8		口唇：陽 刻装飾 +6f	LR	右斜	ws' qu	ケ	横	+	横	+	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1						
106	179		浅鉢		大洞 C1	口・体	(20.0)	4.0	2	5	8		口唇：陽 刻装飾 +6f	LR	右斜	ws' qu	+	横	+	横	+	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR4/1						

整理番号	グ リ ット	層	器種	時期	残存 部位	計測値 () 復元値			口縁 形態	文様	キザミ 種類	地文 種類	混 入物	調整			色調			炭化物			備考
						口径 (cm)	最大径 (cm)	厚さ (mm)						内面	外面	方向	内面	外面	記号	内面	外面	量	
107 168		浅鉢	大洞 C1		口 - 体	25.0	6.0	2	5	8	口唇：陽 刻装飾 + キザミ	LR	右斜	ph・ qu・ ws	≡	≡	灰黄褐	10YR4/2	灰黄褐	10YR4/2			
108 178		浅鉢	大洞 C1		口 - 体	(180)	5.0	2	5	6f	口唇：陽 刻装飾	無	無	sa・ss	≡	ナ	灰黄褐	10YR5/2	灰黄褐	10YR6/2			
109 284 MH		浅鉢	大洞 C1		口 - 体	7.0	4.0	2	5	8	口唇：陽 刻装飾	LR	右斜	qu・ ws	ナ	横	にぶい黄橙	10YR7/2	灰黄褐	10YR6/2	体	薄	内：赤・ 口・体 外：赤・ 口・体
110 155 4-F		浅鉢	大洞 C1		口 - 体		5.0	2	5	8	口唇：陽 刻装飾	LR	右斜	qu・ph	ケ	横	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄橙	10YR5/3			
111 160 5-J		浅鉢	大洞 C1		口 - 体		4.0	2	5	8	口唇：陽 刻装飾 + キザミ	無	無	qu・ ws・ ph	≡	ケ	灰黄褐	10YR4/2	褐灰	10YR5/1			
112 181		浅鉢	大洞 C1		口 - 体		6.0	2	5	8	口唇：陽 刻装飾	LR	右斜	qu・ ws・ ph・ss	ケ	横	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄橙	10YR6/3			
113 173 2-F		浅鉢	大洞 C1		口 - 体	(20.0)	6.0	2	5	8	口唇：陽 刻装飾	LR	右斜	sa・ qu・ss	ナ	横	明黄褐	10YR6/6	明黄褐	10YR6/6			補修孔2 つ
114 180 9-J RP-13		浅鉢	大洞 C1		口 - 体	(22.0)	5.9	2	5	8	口唇：陽 刻装飾	LR	右斜	m・ qu・sa	ナ	横	にぶい黄橙	10YR7/2	浅黄橙	10YR8/3			
115 157 7-H		浅鉢	大洞 C1		口 - 体	(24.0)	4.5	2	5	6f	口唇：陽 刻装飾 + キザミ	LR	右斜	sa・ph	≡	≡	黒	7.5YR2/1	にぶい褐	7.5YR5.3			
116 156 4-F		浅鉢	大洞 C1		口 - 体	(9.0)	5.0	2	5	8	口唇：陽 刻装飾	LR	右斜	ws・ ss・qu	ケ	横	褐灰	10YR4/1	褐	10YR4/1			内：赤・ 口唇部外： 赤
117 147		浅鉢	大洞 C1		体		4.5	2		8		LR	右斜	qu・ sa・ws	≡	≡	灰黄	2.5Y7/2	黒褐	10YR3/1			
118 286 MH		台付 浅鉢	大洞 C1		台	(12.0)	4.9				台：8	無	無	ph・sa	ケ	横	灰白	10YR8/1	灰白	10YR7/1			内：赤・ 全面 外：赤・ 全面
119 191 5-H		壺	大洞 C1		頭		7.0			隆体交 差穿孔		無	無	qu・ fe・ bi・sa	ケ、 ナ	横	にぶい黄橙	10YR7/2	浅黄橙	10YR8/3			
120 287		壺	大洞 C1		頭		6.0			隆体交 差穿孔		無	無	sa・ ss・qu	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	10YR6/2			
121 188 4-F		壺	大洞 C1		頭		7.0			隆体交 差穿孔		LR	右斜	qu・bi	ナ	横	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/4			
122 174 4-F		Ⅱ層 注口 上面	大洞 C1		体上	(18.0)	3.0	2b			体上：キザミ + B 突起体下：8	LR	右斜	qu・ bi・ ws・ss	ケ	横	褐灰	10YR4/1	にぶい黄橙	10YR7/3			
123 216		鉢	大洞 C2		口 - 体	(12.0)	4.2	1b	1	刺突列		LR	右斜	qu・ ws	ケ	横	灰黄褐	10YR6/2	灰黄	2.5YR6/2			
124 206		深鉢	大洞 C2		口 - 体	(26.0)	4.0	1b	1	刺突列 + 沈線		RL	左斜	ss・ sa・ws	≡	≡	灰黄褐	10YR5/2	にぶい黄褐	10YR5/3	体	薄	
125 244 4-H		Ⅰ層 深鉢	大洞 C2		口 - 体		4.5	1b	5	沈線		羽状		qu・ ws	≡	≡	黒灰	7.5YR3/1	褐灰	10YR4/1	体	薄	
126 222 4-F		Ⅱ層 鉢	大洞 C2		口 - 体	(16.0)	3.8	1b	1	沈線		羽状		ph・ qu・ ws	ナ	横	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/1			
127 207		鉢	大洞 C2		口 - 体		4.0	1b	1	刺突列 + 沈線		羽状		ws・ qu	ナ	横	黒褐	10YR3/1	灰黄褐	10YR6/2			

図 書 番 号	整 理 ソ ー ス	層	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 復元値			口縁 形態	文 様	キ ザ ミ 種 類	地 文 種 類	混 入 物	調 整			色 調			炭化物			備 考	
						口径 (cm)	最大径 (cm)	厚さ (mm)						内 面	外 面	方 向	内 面	外 面	記 号	内 面	外 面	量		量
128 203		深鉢	大洞 C2		口・体	(220)	4.2	2	1	沈線		RL 縦	qu'ws	ナ	横	ナ	黒褐	10YR3/2	黒褐	10YR3/2	体	薄	体	薄
129 211	5-G	II層 鉢	大洞 C2		口・体	(100)	4.8	1b	1	沈線		LR 右斜	qu	ケ	縦	ミ	黒褐	2.5YR3/1	暗灰黄	2.5YR5/2				
130 149		鉢	大洞 C2		口・体	(105)	(11.5)	5.9	1b	1	沈線	RL 右斜	qu'fe-sa	ナ	横	ナ	黒褐	10YR3/2	黒褐	10YR3/1	口・体	厚	口・体	厚
131 229		鉢	大洞 C2		口・体	(200)	(320)	6.0	1b	1	沈線	RL 縦	qu'sa	ナ	横	ナ	にぶい黄橙	10YR4/3	にぶい橙	7.5YR6/4	口	厚	口	厚
132 213	4-F	II層 鉢	大洞 C2		口・体	(180)	4.5	1b	5	沈線		羽状	城砂	ミ		ミ	黒	10YR2/1	黒	10YR2/1	体	厚	体	厚
133 208	5-G	II層 鉢	大洞 C2		口・体	(220)	(340)	5.0	1b	1	沈線	RL 右斜	sa-qu	ナ	横	ナ	褐灰	10YR4/1	にぶい黄橙	10YR7/3	口	薄	口	薄
134 223	5-F	I層 鉢	大洞 C2		口・体	(140)	4.1	2	1	沈線	B突起	RL 右斜	qu-bi	ミ		ミ	黒褐	10YR3/2	灰黄褐	10YR4/2	体	薄	体	薄
135 218	5-G	II層 鉢	大洞 C2		口・体	(120)	3.5	1b	1	沈線	B突起	LR 右斜	bi-sa	ナ	横	ナ	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/2				
136 221	4-G	II層 深鉢	大洞 C2		口・体	(160)	(180)	4.0	1b	1	沈線	RL 左斜	qu'ws	ナ	横	ナ	灰黄褐	10YR5/3	黄褐	7.5YR8/8				
137 209		鉢	大洞 C2		口・体	(120)	4.0	2	1	沈線	B突起	LR 右斜	qu'ws-ss	ナ	横	ナ	褐	7.5YR4/3	にぶい橙	7.5YR6/4	体	薄	体	薄
138 215		鉢	大洞 C2		口・体	(180)	4.5	2	1	沈線	B突起	羽状	sa-qu	ミ		ミ	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR6/3	体	薄	体	薄
139 210		深鉢	大洞 C2		口・体		4.5	2	1	沈線	B突起	RL 縦	qu'ws	ミ		ミ	にぶい黄橙	10YR6/3	黒褐	10YR3/2				
140 219		鉢	大洞 C2		口・体	(90)	(105)	3.8	1b	3	刺突列	B突起	qu'fe-ws	ナ	横	ナ	灰黄褐	10YR5/2	灰黄褐	10YR5/2				
141 251		鉢	大洞 C2		口・体		4.0	1a	2 (A突起起)+5	裏：三角 形挟	9	RL 左斜	qu-bi	ケ	横	ナ	黒褐	10YR3/1	黄灰	2.5Y4/1	口・体	厚	口・体	薄
142 246		鉢	大洞 C2		口・体		4.0	1b	2 (A突起起)+5	裏：三角 形挟		羽状	ss	ミ		ミ	黒褐	2.5Y3/1	黒褐	2.5Y3/1	口・体	厚	口・体	厚
143 217		鉢	大洞 C2		口・体	(240)	5.0	1a	2 (三突起一車位?)	口唇：沈線	9	RL 左斜	qu'ws	ミ		ミ	黒褐	10YR3/1	にぶい黄橙	10YR7/3				
144 230	5-J	I層 鉢	大洞 C2		口・体	(140)	4.5	1a	1	9		RL 左斜	qu	ケ	縦	ミ	にぶい黄橙	10YR6/4	黄灰	2.5YR5/1	口	薄	体	薄
145 212	4-F	II層 鉢	大洞 C2		口・体	(65)	5.2	1b	2 (A突起起)	裏：三角 形挟	9	RL 縦	qu'fe-sa	ナ	横	ナ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1				
146 240		鉢	大洞 C2		口・体		5.0	1a	2 (A突起起)	裏：三角 形挟	9	LR 右斜	ws-fe	ミ		ミ	灰褐	7.5YR4/2	灰黄橙	10YR4/2	口唇	薄		
147 204		鉢	大洞 C2		口・体		5.2	1b	1 Z字沈線	体：8+縦B突起穿孔		LR 右斜	qu-bi	ミ		ミ	浅黄橙	10YR8/3	にぶい黄橙	10YR7/3	口・体	薄	口・体	薄
148 224		深鉢	大洞 C2		口・体	(80)	4.5	1b	2	8		LR 右斜	qu-sa	ミ		ミ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	口	厚	口	厚
149 197		鉢	大洞 C2		口・体		4.0	1b	1	沈線	8+B突起	RL 左斜	qu'ws	ミ		ミ	灰黄褐	10YR5/2	黒褐	2.5Y3/1	体	薄	口	薄
150 196		鉢	大洞 C2		口・体		4.0	2	5	沈線	8+B突起	RL 左斜	qu'ws	ミ		ミ	黒褐	10YR3/1	灰黄褐	10YR4/2	体	薄		

整理番号	グ リ フ ット	層	器種	時期	残存 部位	計測値 () 復元値			口縁 形態	文様		ミ ザ ミ 種 類	地文 種 類	混 入 物 方 向	調整			色調		炭化物		備考
						口径 (cm)	最大径 (cm)	厚さ (mm)		口縁	体				内 面	外 面	方 向	内 面	外 面	内 面	外 面	
151 195	4-F	II層	鉢	大洞 C2	口・体		5.2	2	5	沈線	8+B突起	LR	縦	qu・ph	≡	ナ	横	黒褐	10YR3/1	にぶい黄橙	10YR7/3	体 薄
152 233			鉢	大洞 C2	口・体		5.0	2	1	沈線	8+B突起	RL	左斜	qu・ fe・ ph・ ws	≡	≡		黒褐	10YR3/2	黒褐	7.5YR3/1	体上 薄
153 214	5-G	II層	鉢	大洞 C2	口・体		4.0	1b	1	9	B突起 +入組 C字文 (磨消)	LR	右斜	ws・bi	ナ	横	ナ	灰黄褐	10YR4/2	にぶい黄橙	10YR5/3	体 薄 体 薄
154 194	5-G	II層	鉢	大洞 C2	口・体		5.5	1b	5	裏：三角 形抉	8	RL	左斜	sa・qu	ナ	横	ナ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	口 厚 口 厚
155 198			鉢	大洞 C2	口・体		5.0	2	1	9	B突起 +8	LR	右斜	qu・ fe・ws	ナ ≡	縦	ナ	褐灰色	10YR4/1	黒褐	10YR3/1	
156 248 3			鉢	大洞 C2	口・体		4.5	2	3'	沈線	入組C 字文	RL	左斜	sa・qu	ナ	横	ナ	にぶい黄橙	10YR7/2	にぶい黄橙	10YR6/3	
157 248 2			深鉢	大洞 C2	口・体		4.5	2	3'	9	入組C 字文	無	無	sa・ qu・ph	ナ	横	ナ	灰黄褐	10YR5/2	褐灰	10YR4/1	体 厚 口・体 厚
158 248 1			深鉢	大洞 C2	口・体		5.0	2	3'	沈線	入組C 字文	RL	右斜	sa・qu	ケ	横	≡	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR5/3	体 薄
159 226			鉢	大洞 C2	口・体		5.5	1b	1	9	8+B突起 起	RL	縦	qu・ fe・ss	≡	≡		灰黄褐	10YR4/2	黒褐	10YR3/2	
160 235	4-F	II層	鉢	大洞 C2	口・体		5.0	1b	1	9	12相形 (磨消) +B突起	RL	左斜	qu・ ws	≡	≡		灰黄褐	10YR5/2	灰黄褐	10YR4/2	
161 254	4-F	II層	鉢	大洞 C2	口・体		6.0	1b	2 (二 個一 対)	9	12相形 (磨消)	無	無	qu・ ws	ケ	横	≡	灰褐	7.5YR4/2	明褐灰	7.5YR5/2	
162 239			鉢	大洞 C2	口・体		3.0	2	1	9	12相形 (磨消) +B突起 +11	LR	右斜	sa・qu	ケ	横	ナ	黒褐	2.5Y3/2	暗灰黄	2.5Y5/2	
163 232	5-G	II層	鉢	大洞 C2	口・体		4.0	1b	2 (二 個一 対)	9	12相形 (磨消) +B突起 +11	LR	右斜	qu	ナ	横	ナ	黒褐	2.5Y3/1	黒褐	2.5Y3/1	口・体 薄 口・体 薄
164 258	5-G	II層	深鉢	大洞 C2	口・体		4.2	2	2 (二 個一 対) +5	9	12相形 (磨消)	LR	右斜	qu・ ws	≡	≡		にぶい褐	7.5YR5/4	にぶい黄橙	7.5YR6/4	
165 234			鉢	大洞 C2	口・体		4.0	1b	2 (三 個一 対) 裏：三角 形抉 ?+直 線にキ ザミ	9	12相形 ?+直 線にキ ザミ	LR	右斜	sa・qu	ケ	横	ナ	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい黄橙	10YR6/4	
166 227	2-F	I層	鉢	大洞 C2	口・体		6.0	2	1	9	12相形	RL	右斜	sa・qu	ナ	横	≡	黒褐	10YR3/2	黒褐	10YR3/2	
167 253	5-G	II層	鉢	大洞 C2	口・体		5.0	1b	1	9	12相形 (磨消)	RL	縦	qu	ナ	横	ナ	黒褐	2.5Y3/1	灰黄	2.5Y6/2	口・体 薄 口・体 薄
168 131			鉢	大洞 C2	口・体		3.0	1b	5	表裏：3	沈線 12相形?	LR	右斜	sa・qu	ナ	横	ナ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	口・体 厚 口・体 薄
169 252			鉢	大洞 C2	口・体		4.0	1b	5	表裏：3	沈線 12相形 (磨消)	RL	左斜	qu・ss	≡	≡		にぶい褐	7.5YR5/4	褐灰	7.5YR4/1	体 薄 体 薄
170 228	4-F	II層	鉢	大洞 C2	口・体		4.0	2	2 (A 突 起)	9	8+B突起 起	LR	右斜	qu・ss	ケ	横	ナ	黒褐	10YR3/1	灰黄褐	10YR5/2	体 薄

図 番 号	整 理 番 号	グ リ ツ ト	層	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 復元値			口縁 形態	文様	キ ザ ミ 種 類	地 文 種 類	調 整			色 調		炭 化 物		備 考											
							口径 (cm)	最大径 (cm)	厚さ (mm)					内 面	外 面	方 向	内 面	外 面	記 号	内 面		外 面	量									
171	249		鉢	大洞 C2		口・体	(180)	(200)	50	1b	1	9	口縁へ突起 + 三叉状突起 + B突起	口縁 + 三叉状突起 + B突起	RL	左斜	qu'ws	ナ	横	ナ	横	褐灰	75YR4/1	灰黄褐	10YR4/2	体	薄	体	薄			
172	225		鉢	大洞 C2		口・体		40	1b	1	口縁へ突起 + 円文	9	無	無	fe'sa	ケ	横	ケ	横	ケ	横	浅黄	25Y7/3	浅黄	25Y8/3	体	薄	体	薄			
173	177	4-F	II層	深鉢	大洞 C2	口・体		50	1b	5	連続三角形状 + キザミ	9	無	無	qu'ws'sa	ナ	横	ナ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR7/4	明褐	75YR5/6							
174	158	6-G	I層	深鉢	大洞 C2	口・体	(180)	(180)	4.5	1a	5	裏：沈線 +5	8	LR	右斜	sa'qu-ph	ケ	横	ミ	灰白	10YR8/2	浅黄橙	10Y8/3									
175	199		鉢	大洞 C2		口・頸	(280)		50		5	8 (崩)		LR	右斜	sa-qu	ケ	横	ナ	横	にぶい黄	25Y6/3	にぶい黄	25Y6/3								
176	200	4-F	I層	鉢	大洞 C2	口・頸	(140)	(140)	50	3'	5	8		無	無	ws'ph	ケ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	にぶい黄橙	10YR7/2								
177	247	5-J	II層	浅鉢	大洞 C2	口		50	2	2 (A突起)	8 (崩) 裏：縄文隆帯	6f		LR	右斜	ws'sa	ナ	横	ミ	にぶい黄橙	10YR6/3	にぶい黄橙	10YR7/3	口唇	薄							
178	187	4-F	II層	浅鉢	大洞 C2	口・体		5.5	2	3'	口唇：陽刻装飾	8 (崩)		LR	右斜	ws'qu	ケ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	灰黄褐	10YR5/2								
179	184	4-F	I層	浅鉢	大洞 C2	口・体	(6.5)	(6.5)	50	2	3'	8 (崩)		無	無	qu'fe'ws	ミ	ナ	横	黒褐	10YR3/2	灰黄褐	10YR5/2									
180	169	5-J	I層	浅鉢	大洞 C2	口・体	(100)		5.5	2	3'	裏：3	8 (崩) 裏：縄文隆帯	LR	右斜	qu'ws	ミ	ミ	にぶい黄褐	10YR5/3	灰黄褐	10YR4/2									内：赤漆・口・体、外：赤漆・口・体	
181	288	4-F	III層	深鉢	大洞 C2	口・体	(15.5)		4.5		2 (A突起) +5			無	無	qu'ss	ナ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR7/3	にぶい橙	75YR6/4								
182	243		壺	大洞 C2		体		40			連繫入組文 + B突起			LR	右斜	fe'ws	ケ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR5/3	にぶい黄橙	10YR6/4								
183	237		注口	大洞 C2		口・体下		(26.0)	40	A-2a突起	2 (A突起) 12粗形 (磨消)			LR	右斜	qu-ph	ミ	ミ	灰黄褐	10YR4/2	灰黄褐	10YR5/2	肩部	薄								
184	164		注口	大洞 C2		口・体下		(14.0)	30	B-2a	5	8	8 + B突起 + キザミ	LR	右斜	sa-qu	ケ	横	ナ	横	にぶい赤褐	5YR5/4	にぶい赤褐	5YR4/4								
185	98		注口	大洞 C2		体(つまみ部)		30	2a		体上：透かし体(ツマミ部)：三角形突起 + B突起 + キザミ			無	無	sa-qu	ケ	横	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	灰黄褐	10YR6/2								
186	285	7-H RP-2	注口	大洞 C2		体	(240)	(240)	40	2a	体上：三角形突起 + 上下B突起 体下：8			無	無	sa'ws-qu	ケ	横	ケ	横	にぶい黄橙	10YR6/3	灰黄	25Y6/2							外：赤漆・体	
187	238	4-F	II層 中面	注口	大洞 C2	体		70	2a		体下：12+突起 + キザミ			無	無	qu'ws	ケ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR7/4	にぶい黄橙	10YR7/4								
188	289	5-F	II層	浅鉢	大洞 A1	口・体	(220)	(820)	40	2	5	裏：沈線	9	12		無	無	qu'ws'ss	ナ	横	ナ	横	にぶい黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/4						内：赤漆・口唇部、黒漆・頸・体、外：赤漆・体全面、黒漆・頸

図 書 番 号	整 理 番 号	グ リ ット	層	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 復元値			口縁 形態	文 様	ミ ナ ミ 種 類		地 文 種 類	混 入 物	調 整			色 調			炭 化 物		備 考
							口 径 (cm)	最大径 (cm)	厚さ (mm)			口縁	頭			体	その他	内 面	外 面	方 向	内 面	外 面	方 向	
189	290	5-F	II層	浅鉢	大洞 A1	口・体		6.5	2	1	12	無	無	qu・ss	ナ	横	ナ	横	褐灰	10YR4/1	褐灰	10YR6/1		内：赤漆・ 体全面、 外：赤漆・ 体全面
190	260	2-F	I層	浅鉢	大洞 A1	口・体		5.0	1	1	9	体：匹字文?+粘土 粒	無	qu・sa	ナ	横	ナ	横	黒褐	10YR3/1	橙	5YR6/6		
191	250		鉢	大洞 A1	口・体		5.0	5.0	1b	2 (A裏：三角 突起 起)	体：匹字文?	RL	縦	bi	ケ	横	ニ	灰黄褐	10YR4/2	黒褐	10YR3/2	体	薄	
192	257	4-G	II層	鉢	大洞 A1	口・体	(42.0)	6.0	2	1	9	体：12+ 粘土粒	LR	右斜	qu・ph	ニ	ニ	浅黄褐	10YR5/2	浅黄褐	10YR5/2			
193	255	5-G	II層	浅鉢	大洞 A1	口・体	(22.0)	3.0	1b	2	体：匹字文?+眼鏡 状浮文	無	無	qu・sa	ナ	横	ケ	横	橙	7.5Y6/6	橙	7.5Y6/6		
194	256		浅鉢	大洞 A1	口・体	(18.0)	5.0	5.0	2	2 (A裏：三角 突起 起)	9	12	無	qu・ss	ナ	横	ナ	横	にぶい・黄橙	10YR6/3	浅黄橙	10YR8/3		
195	242	5-J	II層	鉢	大洞 A1	口・頸	(14.0)	5.0		2 (A突起 起)			無	qu・ ws	ケ	横	ケ	横	にぶい・橙	7.5YR7/3	灰黄褐	10YR6/3		
196	241	4-H	II層	壺	大洞 A1	口・頸	(16.0)	6.0		2 (A突起 起)			無	ws・ss	ナ	横	ナ	横	橙	7.5YR6/6	にぶい・橙	7.5YR6/4		
197	259	4-G	II層	蓋	大洞 A1	口・体	(14.0)	4.0	1	1	12		無	qu・ ws	ニ	ニ	ナ	横	灰黄褐	10YR5/2	にぶい・黄橙	10YR6/3		

第5節 高石野遺跡出土土製品・石製品（図43、表10）

報告書未図化資料を中心に、土製品5点、石製品3点、計7点を実測した（図43）。土製品の内訳は有孔土製品4点（1～4）、耳飾1点（5）である。有孔土製品は径2cmほどの花卉形の土玉である。1・2は縦方向、3・4は斜め方向に刻み目が入られる。1・2には赤色顔料が付着する。5は径3.6cmの円形の土製耳飾である。筒形で表面中央に穿孔があり、それを中心に巴文がある。文様から大洞B式に属すとみられる。

石製品は岩版1点（6）と石棒2点（7・8）がある。岩版は軟質な凝灰岩製で復元長9cmほど、厚さ0.8cmと小型で薄い。沈刻は渦巻文と三叉文である。石棒は安山岩製である。断面楕円形で台形の頭部をもつ。

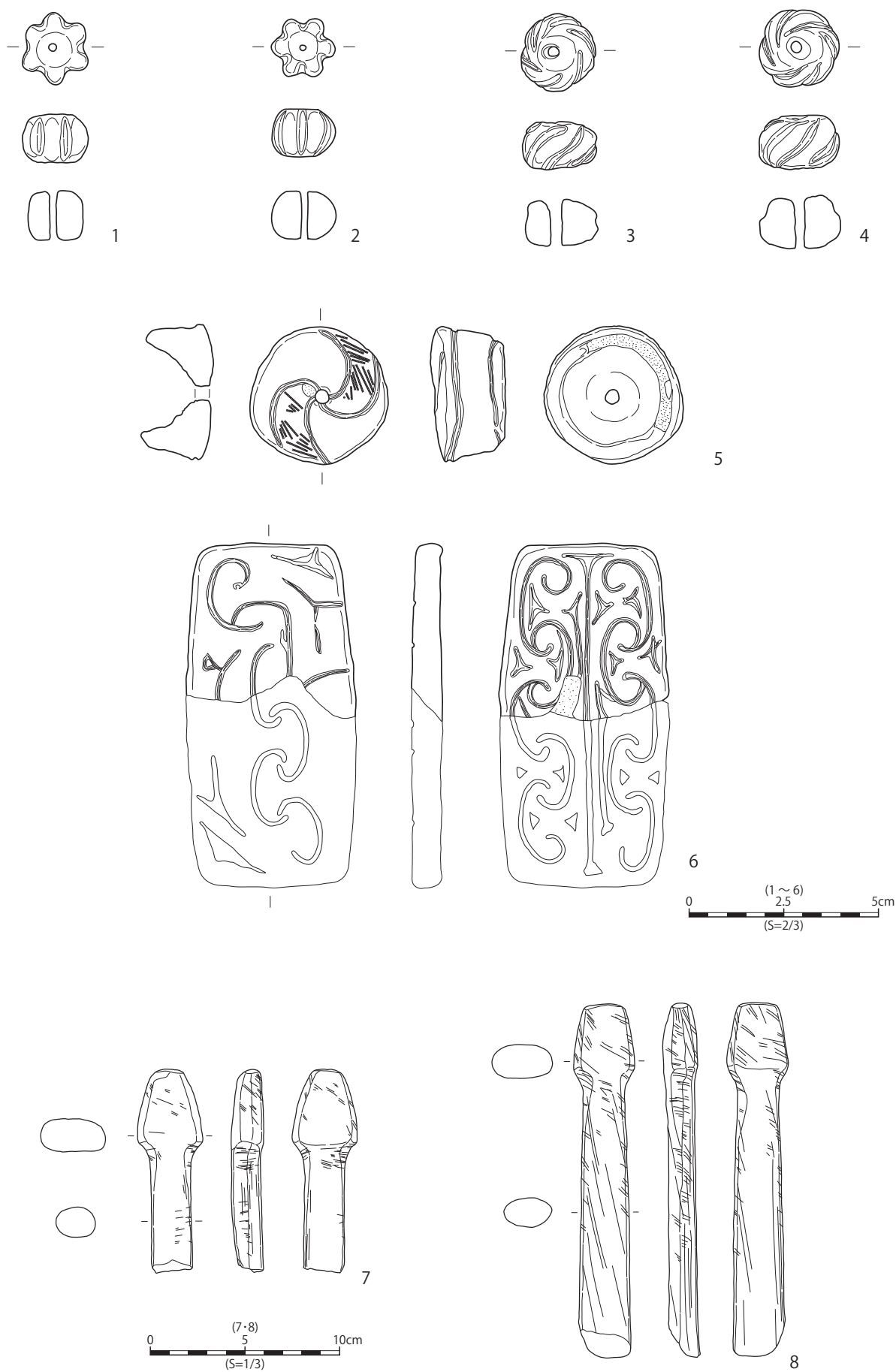


図 43 高石野遺跡出土土製品・石製品

表 10 高石野遺跡出土土製品・石製品観察表

図 番 号	器種	計測値 () : 残存値			色調	混入物	石質	備考	注記	整理番号	町報告書写真図版 掲載番号
		長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	重さ (g)						
1	有孔土製品	19	18	13	3.4	10YR 7/2 にぶい黄橙	-	赤色顔料付着	1B2 床土	273	-
2	有孔土製品	15	17	13	2.6	10YR 6/3 にぶい黄橙	-	赤色顔料付着	2C1	274	-
3	有孔土製品	21	20	12	3.8	7.5YR 7/6 橙	-		1D2	275	-
4	有孔土製品	20	21	14	4.9	7.5YR 7/6 橙	-		2C1	276	-
5	耳飾	36	36	18	19.1	5Y 3/1 オリーブ黒 10YR 7/4 にぶい黄橙	石英・白砂 海綿状骨針	単節 LR 縄文	82 高 7J Ⅱ層上面	271	586
6	岩版	(47)	44	8	41.3	-	凝灰岩	復元長 89mm		279	82.2
7	石棒	(106)	34	13	83.2	-	安山岩			281	79.2
8	石棒	(187)	32	18	130.4	-	安山岩		82 高 3F I 層	282	79.9

第6節 高石野遺跡の遺物分布（図44）

復元土器45点、破片197点の実測図を掲載した。過去に実測図が掲載された復元土器48点と合わせると335点の土器を資料化したことになる。未接合の土器を除くと、おおよそ7割が資料化されたことになる。そこで、遺物の分布を検討した（図44）。

その結果、遺物分布の変遷には三つの段階があったことがうかがえる。第1期は後期末葉～大洞B1式古段階で、調査区南東のF・G-1～4グリッドの範囲に集中する。主に注口土器と台付浅鉢が目立つ。異形の皿形土器は、それより20m北に離れた地点で検出されている。

第2期は大洞B1新段階～大洞BC式段階で、調査区中央のJ・H-4・5グリッドに分布の中心が移動する。多様な器種がみられ、中空土製品（土笛）もこの範囲から出土した。土偶や土面はこの集中範囲より5m以上離れた場所から検出されている。なお、大洞BC式段階では遺物の集中範囲が調査区東へ拡大する。

第3期は大洞C1～大洞A式段階である。調査区東側のF・G-4・5グリッドを中心にF・G-7～9といった北側にも遺物が分布する。遺構群がある東調査区の資料は未整理であるが、遺物が東側に集中する大洞BC～A式段階の遺構が多くあると推定され、ここを居住域として八郎潟側に捨て場が形成されたとみられる。このように全ての資料の精査が終わっていない段階ではあるものの、時期ごとの遺物分布の変化が明らかになった。中山遺跡では大洞B式段階の画期があり、大洞C式段階で遺跡が縮小した。これらの画期は高石野遺跡においても同様であることが明らかとなった。

（大内 望咲・牧野 つぐみ・上條 信彦）

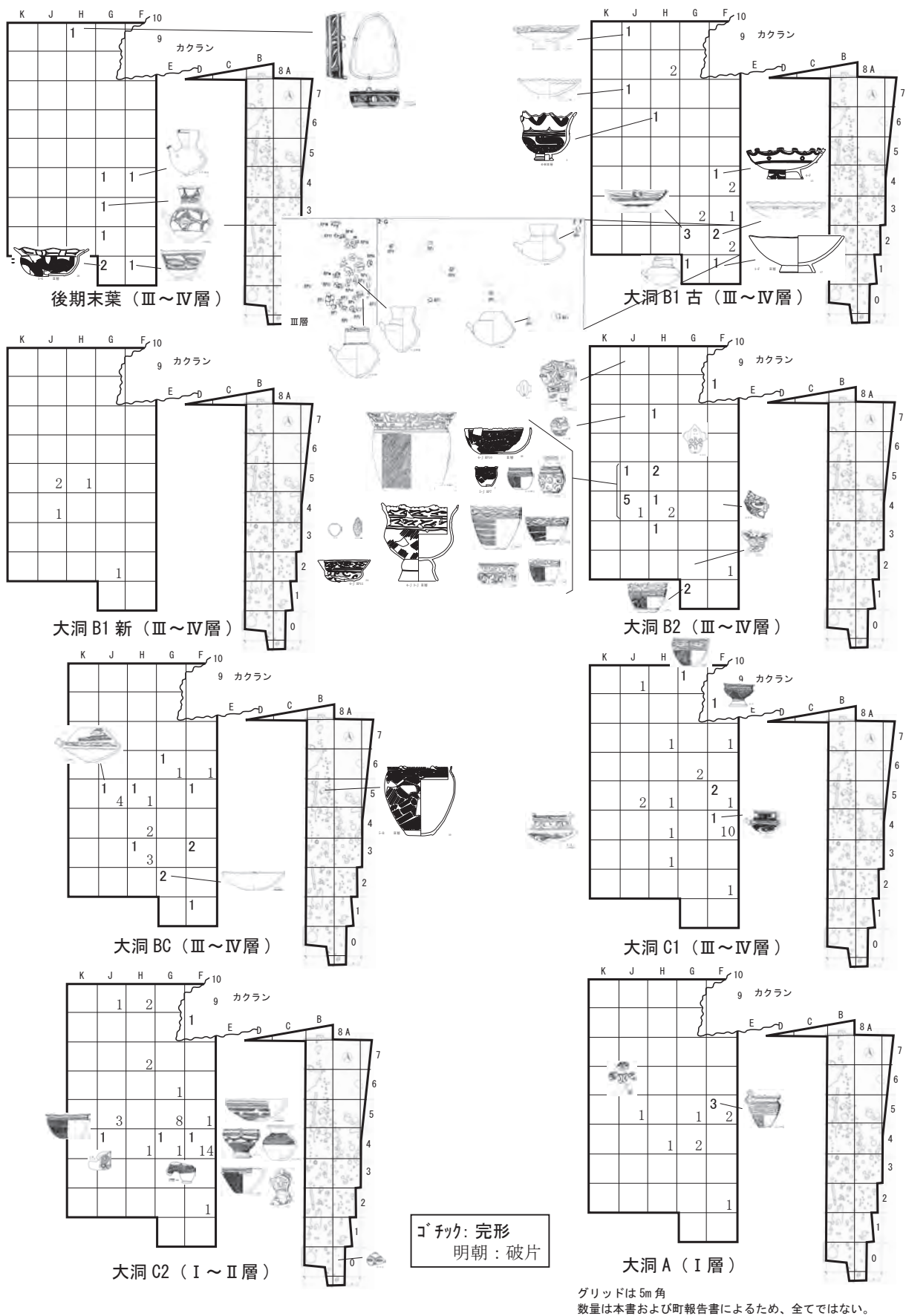


図 44 高石野遺跡時期別遺物分布

第8章 大沢Ⅰ遺跡出土遺物

第1節 遺跡について

大沢Ⅰ遺跡（遺跡地図番号 206-6-30）は、男鹿市船川港比喩字大沢に所在する。明治期から周知の遺跡で、「田中大沢遺跡」「田中遺跡」「大沢遺跡」とも呼ばれてきた。

同遺跡出土品としては秋田県立博物館蔵の佐藤初太郎コレクションと天野源一コレクションが知られる。佐藤初太郎コレクションの大沢Ⅰ遺跡出土資料はすでに明治期から蓑虫山人や若林勝邦、大野雲外によって紹介された。明治27（1894）年、蓑虫山人の『蓑虫山人画記行』のなかに佐藤初太郎所蔵の大沢遺跡の資料が描かれている（庄内 2002）。これについては次章で述べる。

明治28（1895）年4月、若林勝邦は「羽後国男鹿半島の土俗及び遺物」『東京人類学会雑誌』第10巻第109号で田中大沢遺跡出土の土偶・土器・石器を紹介した。またこの時佐藤初太郎は東京人類学会へ入会し、同年8月に「男鹿半島古物探求誌」『東京人類学会雑誌』第10巻第113号で田中山畑（大沢Ⅰ遺跡）から遺物が出ることを紹介した。ここには真崎勇助と遺跡を巡ったことも記されており、両者の交友関係が知れる。特に大量の石器が採集され、石鏃の形態分類が行われた点は当時の先駆である。次章に述べる石器の多くが器種別、形態別に厚紙に括られている点は、佐藤初太郎の作業を反映しているとみられる。明治30（1897）年、若林勝邦は有孔小石器として南秋田郡田中村の資料（佐藤初太郎報告）を掲載した（若林 1897）。

明治35年、大野（1902）には羽後国南秋田郡船川村字田中出土の資料として大野が実見した土玉1点、磨製石斧3点、石匙2点、石鏃5点、石錐1点、土偶胴部片1点が掲載された。土偶は縄文時代晩期前葉と推定される。

明治37（1904）年には、大野延太郎（雲外）が「黥面土偶に就て」において、佐藤初太郎蔵の船川村字田中小字大澤発見の土偶頭部が紹介された（大野 1904）。この土偶頭部については、次章の『蓑虫山人画記行』に蓑虫山人が描いた秋田県立博物館所蔵の土偶と同一とみられる（図50-12）。なおこの土偶頭部は、高石野遺跡出土の土偶（琴丘町教育委員会 1983 第15図）に類似しており、所属時期は大洞B式期と推定される。

天野源一（1892 - 1959）は現 男鹿市の出身で、脇本村長、県議会議員などの要職に就きつつ、男鹿地方の考古学研究に尽力した人物である。天野源一の考古学への関心は、本書掲載の中山遺跡を発掘した佐藤初太郎が脇本小学校に在職したことがきっかけであったようである。昭和10年5月に大沢遺跡を発掘した。この際の資料については第10章でふれたい。

その後、遺跡は昭和46（1971）年の開田工事の際、遺物が発見され、磯村朝次郎により昭和46（1971）年9月18日～9月25日の5日間、緊急の発掘調査が行われた（磯村 1971）。9m²のトレンチ1本の調査であった。磯村（1971）によると、遺物包含層は3層にわたって認められたが、遺構は検出されなかった。遺物は上層で大洞C1式、下層で宮戸Ⅲ式併行の土器片多数が出土したほか、石鏃、石匙、石鋤、石錐、磨製石斧、土偶、土版がある。大洞C1式の鉢とともに完形の壺が出土し、その頸・胴部に鳥獣を表現したものと認められる線刻画があるもの1点がある。

男鹿市史には大沢遺跡について遺物の実測図とともに紹介されている（男鹿市 1995）。大沢遺跡については、昭和46年調査の出土遺物として「晩期前半の土器、宮戸島式に併行する土器、土偶、土版、石鏃、石匙、石錐、石斧、凹み石などで、石鏃の柄部や土版状遺物にアスファルトが付着したものが認められた。土偶の下方に小孔があり、はし状のものを差し込んで地面などにたてたと思われるもの、動物の線刻画を施した小形土器、宮戸島Ⅱ・Ⅲ、十腰内式併行土器、大洞B・BC・C1・C2式土器片、石棒、石皿、小玉などがある。」という記載がある。実測図には後期の土器として後期後葉の深鉢形土器片2点、晩期の資料として大洞B式の鉢・深鉢形土器片4点、大洞BC式の深鉢形土器片2点が掲載されている。なお、今回検討した土器には含まれていない。

遺物は、1975年ごろまでは他の遺物とともにガラス戸のついた棚に展示されていたが、1974年ごろに、

上記の動物の線刻画を施した小形土器が行方不明になったようである（児玉 2015）。児玉（2015）には行方不明になる前に実測された図が掲載されている。時期は晩期前葉と推定される。今回の調査でも該当する資料はやはりなかった。

このように大沢Ⅰ遺跡は、中山遺跡とならび、秋田県の縄文時代研究史を知るうえで重要な遺跡であったことが分かる。男鹿半島には縄文時代晩期の遺跡が少ないため本地域の様相を明らかにするうえで、資料化が不可欠と判断された。資料は土器にある注記から昭和46（1971）年の磯村朝次郎による調査の発掘品である。男鹿市教育委員会との共同研究により、2013～14年度に男鹿市教育委員会資料の調査を行った。

第2節 大沢Ⅰ遺跡出土土器（図45・46、表11）

本節では、大沢Ⅰ遺跡出土の縄文時代後期後葉から晩期中葉の土器31点について述べる（図45・46）。器種は深鉢・鉢が23点（図45-1～図46-23）、浅鉢5点（図46-24～28）、壺2点（図46-29・30）、注口土器1点（図46-31）である。縄文時代後期後葉～大洞C1式に属す。グリッド、層位は不明であり、器種、型式の順に分類した。

（1）深鉢・鉢（図45-1～図46-23）

深鉢・鉢は22点図示した（1～23）。このうち後期後～末葉5点（1～5）、後期末葉1点（6）、大洞B1式3点（7～9）、大洞BC式7点（10～15・23）、大洞C式1点（16）、縄文晩期と考えられるもの6点（17～22）がある。

後期後～末葉の深鉢・鉢は5点（1～5）ある。全て粗製深鉢である。口縁部の残るものは4点（1～3・5）あり、いずれも平口縁である。口縁部断面は調整により、緩やかな丸みをもつものが1点（1）、調整により平坦になるものが3点（2・3・5）ある。底部形態がわかるものは1点（4）あり、上げ底である。地文は条痕4点（1～3・5）、条痕に切られるLR縄文1点（4）がある。条痕は3点（1～3）が横方向である。4のみ縦方向で、5は横方向の条痕の上に、短い弧状の条線が互いに入組むように施文される。

後期末葉の深鉢・鉢は1点（6）ある。精製深鉢の頸部～体部片で、体部が括れない器形である。頸部と体部の区画に刻目と瘤がある。

大洞B1式の深鉢・鉢は2点（7～9）ある。7は口縁部がわずかに内傾する器形と考えられる。平口縁で、断面は平坦に調整される。頸部に入組帯状文がある。地文はLR縄文である。

8は口縁～頸部片である。突起口縁で、断面は平坦に調整される。頸部は入組帯状文である。9は頸部の下でゆるく括れる器形で、頸部文様帯には挟入組帯状文と考えられる文様がある。地文はRL縄文である。

大洞BC式の深鉢・鉢は6点（10～15）ある。器形は頸部の下で括れる器形が2点（10・11）、括れない器形が4点（12～15）ある。微細な小波状口縁が3点（12～14）、微細な小波状口縁上にB突起2点（10・11）、B突起のみ2点（15・16）がある。頸部は全てで羊歯状文がある。羊歯状文のうち、クランクが分離するものが2点（10・11）、クランクが端部で結合するものが1点（14）、一段の四角形のボジ文のみの羊歯状文が3点（12・13・15）ある。体部文様は2点（10・11）にみられ、いずれもクランクが分離する羊歯状文である。地文はLR縄文である。このうち特徴的なのは10・11の2点で、頸部文様帯と体部文様帯が無文帯により区画されて、羊歯状文が二段に施される。

大洞C2式の深鉢・鉢は1点（16）ある。16は鉢の口縁～頸部片であり、頸部の下で括れる器形である。B突起であり、頸部にはZ字沈線文が施される。

縄文晩期の深鉢・鉢は7点（17～23）ある。23のみ鉢で、ほかは全て深鉢で、いずれも口縁部が内湾する器形である。口縁部が残るものは4点（18～20）あり、全て平口縁である。底部形態がわかるものは3点（17・21・22）で、上げ底が2点（17・22）、平底が1点（21）ある。地文は全て縄文で、LR縄文5点（17・18・20～22）、RL縄文1点（19）がある。

(2) 浅鉢 (図46-24～28)

浅鉢は5点図示した(図46-24～28)。このうち大洞B1式1点(24)、大洞BC式1点(25)、大洞C1式3点(26～28)がある。

大洞B1式の浅鉢は1点(24)ある。器形は括れない器形である。平口縁で、断面は平坦に調整される。頸部には玉抱き三叉文がある。

大洞BC式の浅鉢は1点(25)ある。器形は頸部の下で括れる器形である。平口縁であり、頸部には縦のクランクが分離する羊歯状文がある。底部形態は平底である。

大洞C1式の浅鉢は3点(26～28)ある。26は逆三角形の器形で、器高の下3分の1で括れる。B突起がある。広くとられた頸部文様帯には祖形的な配置文が磨消縄文によって施される。底部形態は球状で自立しない。27・28は括れない器形で、27は口縁部が内湾し、28は直立する。いずれも平口縁であり、断面形態は緩やかな丸みをもつ。体部には配置文である。地文はいずれもLR縄文である。

(3) 壺 (図46-29・30)

壺は2点図示した(29・30)。

29は晩期と考えられる壺である。体部が球状をなす器形で、頸部が直立し、外にひらく。平口縁である。文様や地文はない。底部形態は上げ底であり、器面調整はミガキである。口縁～頸部には赤色顔料と黒色漆が薄く付着する。

30は大洞C1式の壺である。口縁部に向かうほどすぼまる細長い三角形の器形で、B突起がある。頸部には四角形のボジ文で描く羊歯状文が一段配される。体部は沈線により上下で2つの文様帯に区画され、配置文が二段に配置される。底部付近には一条の沈線がある。欠損のため底部形態は不明である。

(4) 注口土器 (図46-31)

注口土器は1点図示した(31)。後期末葉の口縁部片である。口縁部の装飾が特徴的で、4単位の肥厚する山形口縁をもつ。口縁部には中央の窪んだボタン状の突起が三叉文に挟まれて4単位配される。口唇部には三角形の挟りが4単位ある。

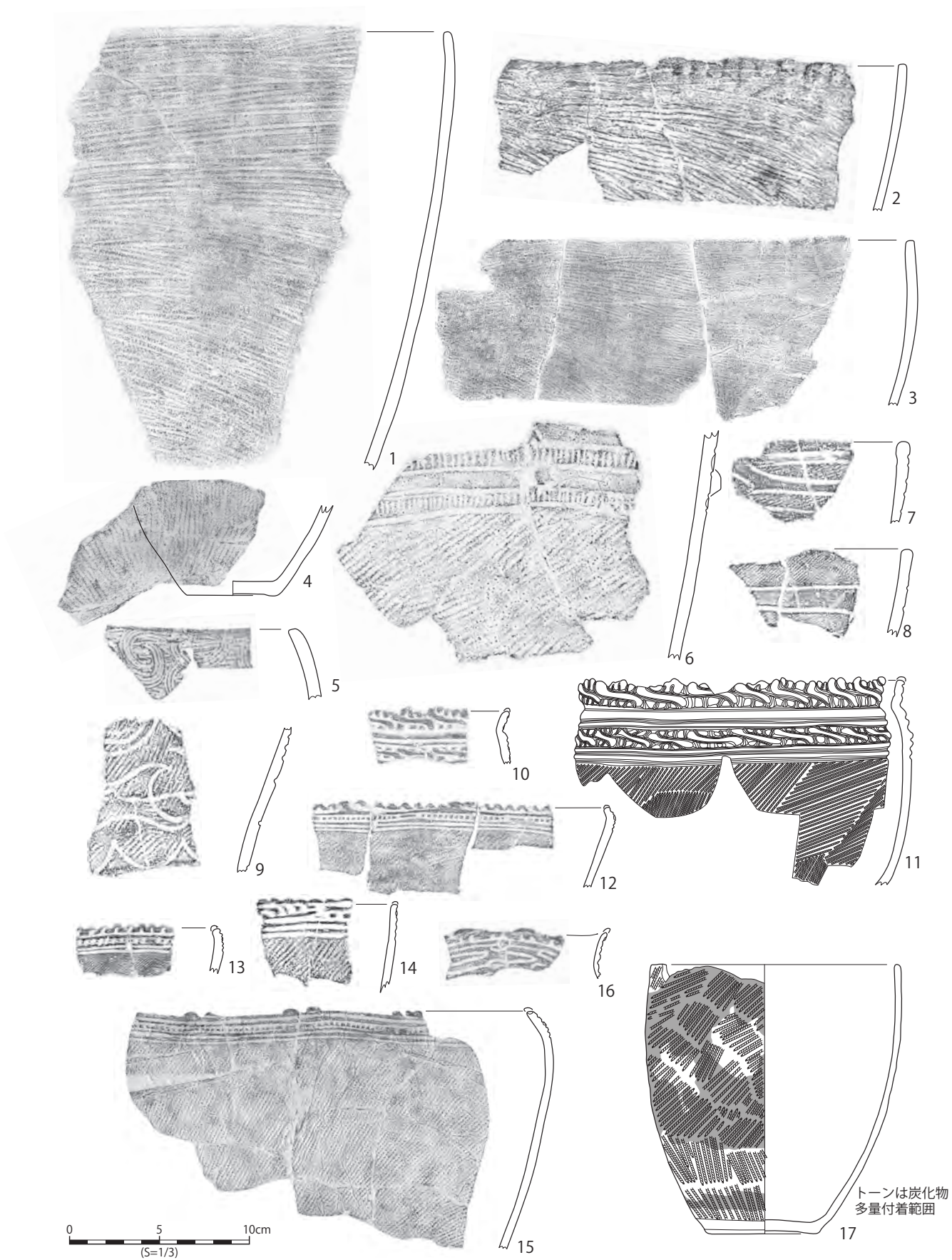


図 45 大沢 I 遺跡出土土器・1

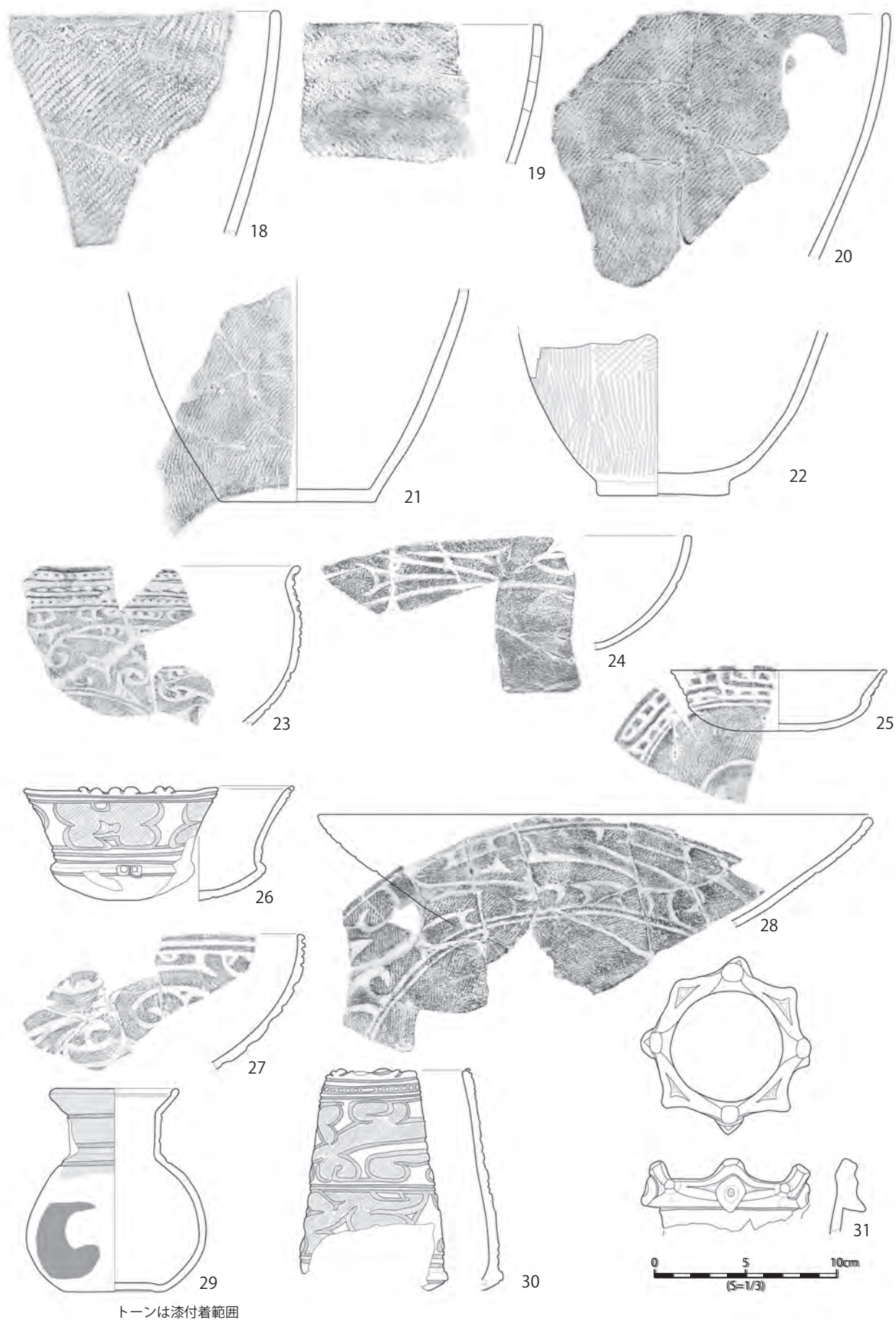


図 46 大沢 I 遺跡出土土器・2

表 11 大沢 I 遺跡出土土器観察表

図 番 号	器 種	時 期	残 存 部 位	計測値 () 残存値				口 縁 形 態	文様		底 形 態	地文		混 入 物		調整		調		炭化物		備考			
				器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底・台 径 (cm)		厚さ (mm)	口縁		その他	種類	方向	人物	内 面 方 向	外 面 方 向	内面	記号	外面	記号		内面	外面	量
1	粗製 深鉢	後後- 後末	口・体		22.0	23.0	7	2	1		条痕	横	sa・qu	ケ	横	条痕	横	浅黄橙	10YR8/3	浅黄橙	10YR8/3	体	薄		
2	粗製 深鉢	後後- 後末	口・体		30.0		7	2	1		条痕	横	sa・qu	ケ	横	口縁才 サエ→ 条痕	横	褐灰	10YR5/1	浅黄橙	10YR8/3				
3	粗製 深鉢	後後- 後末	口・体		(20.0)	(22.0)	5	2	1		条痕	横	sa・qu	ケ	横	条痕	横	浅黄橙	10YR8/4	浅黄橙	10YR8/4				
4	粗製 深鉢	後後- 後末	体・底				5.2	6	2		上	LR→条 痕	縦	sa・qu	ケ	縦	縄文→ 条痕	暗灰黄	25Y5/2	灰黄	25Y6/2				
5	粗製 深鉢	後後- 後末	頸・体		(20.0)		7	2	1		条痕	横→弧 状	sa・qu	ケ	横	条痕	横	灰白	10YR8/2	にぶい 黄橙	10YR7/3				
6	深鉢	後末	体				8				区画・刻 目列 + 瘤	LR	左斜	sa・qu	ケ	横	横	浅黄橙	10YR8/3	灰白	10YR8/2				
7	深鉢	大河 B1	口・頸				7	1	1	1	LR	左斜	sa・qu	ケ	横	横	黄褐	25Y4/5	にぶい 黄	25Y4/6					
8	深鉢	大河 B1	口・頸		(18.0)	(18.0)	7		2	1	LR	左斜	sa・qu	ケ	横	横	浅黄橙	25Y7/3	灰黄	25Y7/2					
9	深鉢	大河 B1	頸				6	1a		2?	RL	右斜	ws・qu	ナ	横	横	明黄褐	7.5YR6/6	明黄褐	7.5YR6/6					
10	深鉢	大河 BC	口・体		(18.0)	(18.0)	6	1b	3'+5	6a	体・6a	sa・qu	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR5/3	灰黄褐	10YR5/2	口・体	薄			
11	深鉢	大河 BC	口・体		(18.0)	(20.0)	5	1b	3'+5	6a	体・6a	qu・ sa・fe	ナ	縦	ナ	横	橙	7.5YR7/6	橙	7.5YR6/6	体	薄			
12	深鉢	大河 BC	口・体		(19.6)	(20.0)	5	2	3'	6f		LR	左斜	ph・qu	ミ	ミ	黒褐	10YR3/1	黒褐	10YR3/1	体	薄			
13	鉢	大河 BC	口・体		(26.0)	(28.0)	5	2	3'	6f		LR	左斜	sa・qu	ナ	横	横	10YR3/1	黒褐	10YR3/2					
14	鉢	大河 BC	口・体		(18.0)	(18.0)	4	2	3'	6b		LR	左斜	ws・qu	ナ	横	横	10YR4/1	褐灰	10YR5/2					
15	鉢	大河 BC	口・体		(22.0)	(24.0)	5	2	5	6f		LR	左斜	ws・qu	ミ	ミ	褐灰	10YR4/1	灰黄褐	10YR5/2	体	薄			
16	鉢	大河 C2	口・頸				3	1b	5	3	Z字沈線文	sa・qu	ナ	横	ナ	横	浅黄	10YR7/3	浅黄	10YR7/3	口	薄			
17	深鉢	晚期	口・底		22.4	20.9	26.5	9.5	2	1		上	LR	左斜	sa・qu	ナ	縦	縄文	にぶい 黄橙	10YR7/3	浅黄橙	10YR8/3	体	厚	
18	深鉢	晚期	口・体		(34.0)	(34.0)		7	2	1		LR	左斜	sa・ qu・ws	ナ	横	縄文	にぶい 黄橙	10YR7/3	にぶい 黄橙	10YR7/3	体	薄		
19	深鉢	晚期	口・体		(16.0)	(16.0)		5	2	1		RL	右斜	sa・qu	ナ	横	縄文	黒褐	10YR3/1	にぶい 黄橙	10YR7/3	体	薄		
20	深鉢	晚期	口・体		(22.0)		5	2	1		LR	左斜	sa・qu	ケ	横	縄文	灰白	10YR8/2	灰白	10YR8/2					
21	深鉢	晚期	体・底				8.4	5			平	LR	左斜	bi・qu	ケ	横	縄文	にぶい 黄橙	10YR7/2	浅黄橙	7.5YR8/3	底	薄		
22	深鉢	晚期	体・底				8.0	6			上	LR	左斜	qu・ws	ケ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	7.5YR7/4	にぶい 黄橙	10YR6/4			
23	鉢	大河 BC	口・体								LR	左斜	qu・ws	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR7/2	にぶい 黄橙	10YR7/4				
24	浅鉢	大河 B1	口・体				4	2	1	3		平	LR	左斜	ws・sa	ナ	横	ナ	横	にぶい 黄橙	10YR7/2	にぶい 黄橙	10YR7/4		
25	浅鉢	大河 BC	口・底		3.3	(12.0)	(12.0)	(5.0)	4	1b	1	6a		LR	左斜	sa・ rm・ qu	ナ	横	灰白	10YR8/1	灰白	10YR8/2			

図番 番号	器種	時期	残存 部位	計測値 () 残存値				口縁		文様		底		地文		混入物			調整			炭化物		備考		
				器高 (cm)	口径 (cm)	最大径 (cm)	底・台 径 (cm)	厚さ (mm)	器形	口縁 形態	口縁	頭	その他	形態	種類	方向	内面	外面	方向	内面	記号	外面	記号		内面	量
26	浅鉢	大河 C1	口・底	6.3	11.0	11.0	2.2	3	1a	5	8 (組型)	球	LR	左斜	ws・qu	横	ケ	縦	黄灰	25Y5/1	褐灰	10YR5/1				
27	浅鉢	大河 C1	口・体		(14.0)			4	2	1	体・8	LR	左斜	ws・qu	横	ナ	横	暗灰黄	10YR5/2	にぶい 黄	10YR6/4					
28	浅鉢	大河 C1	口・体		(30.0)			4	2	1	体・8	LR	左斜	ws・sa	横	ナ	横	灰黄褐	10YR6/2	にぶい 黄橙	10YR7/3					
29	壺	晚期	口・底	11.2	7.2	9.9	5.4	4	1	1	上			sa	ミ	ミ	にぶい 橙	7.5YR6/4	にぶい 黄橙	10YR6/4						
30	壺	大河 C1	口・底	12.2	5.0	8.1		5	細長	5	6f	体・8+8	LR	左斜	qu・ph	横	ナ	横	褐灰	10YR6/1	褐灰	10YR5/1			口・類・赤 顔料・黒 漆・薄	
31	注口	後末	口		7.6			5		4 ⁴	口唇：三 文に挟ま れた突起 ⁴	口唇：三 角形挟 ⁴			sa・qu	ナ	横	ナ	横	灰白	10YR7/1	灰白	10YR8/2			

第3節 大沢Ⅰ遺跡出土土製品・石製品（図47、表12）

土製品4点、石製品2点、計6点がある。土製品の内訳は土偶2点（1・2）、土笛（中空土製品）1点（3）、耳飾1点（4）である。1は後期末葉の土偶頭部で高石野遺跡に類例がある。頸部の破損面にアスファルトが付着する。2は晩期前葉の土偶体部である。頸部にアスファルトが付着する。3は土笛で、頭部から底部にかけて貫通孔がある。手は板状で垂直方向に伸びる。4は径4.5cmの環状の土製耳飾である。石製品は軽石製品1点（5）と有孔石製品1点（6）、計2点がある。5は長さ10cmほどで細長い舟形である。断面三角形で上部に穿孔があるため、垂飾の可能性はある。6は、安山岩の有孔石製品である。穿孔の位置から横形の垂飾の可能性はある。表面に丁寧な沈刻文様がある。文様は注口土器肩部に見られるような弧文を巡らす。よって大洞BC式に属すとみられる。

（落合 美怜・伊藤 昂平）

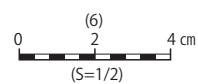
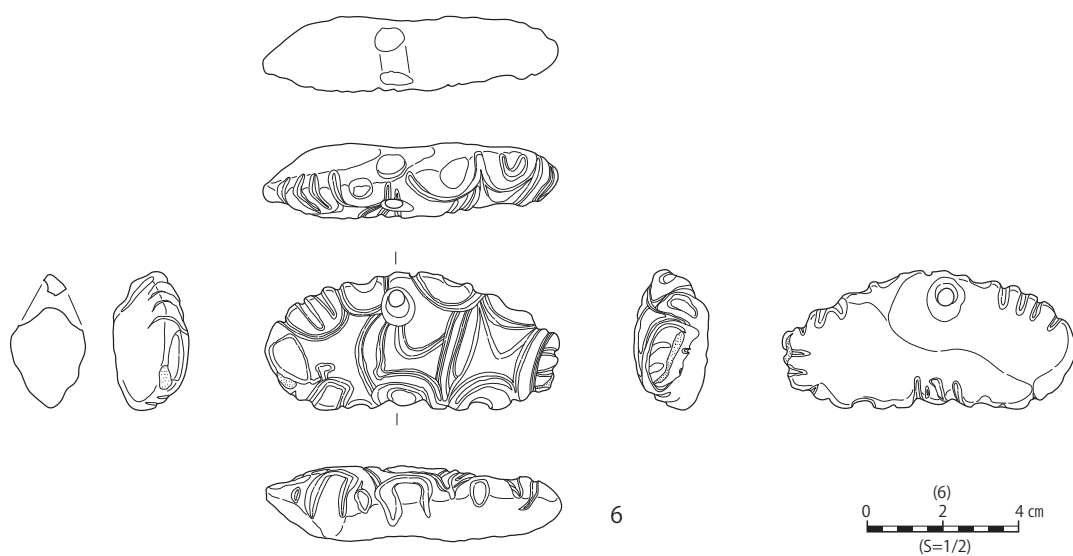
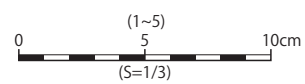
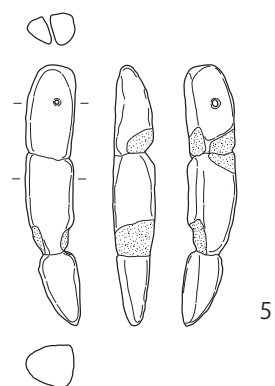
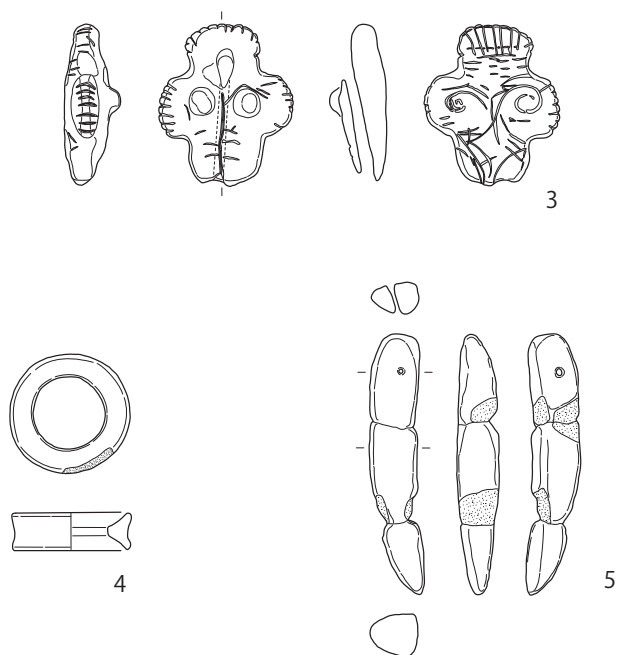
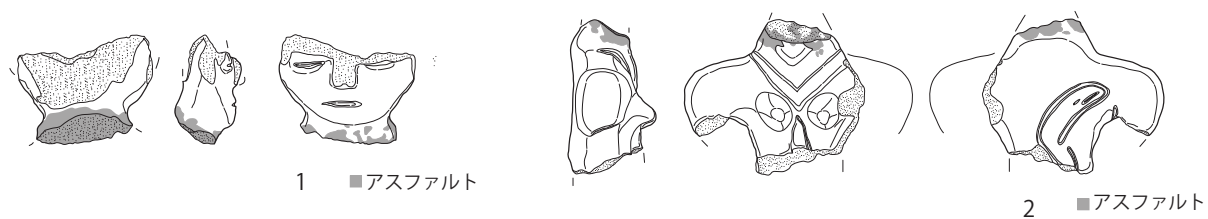


図 47 大沢 I 遺跡出土土製品・石製品

表 12 大沢 I 遺跡土製品・石製品観察表

図 番 号	器 種	時 期	計測値 () : 残存値				色 調	混入物	石 質	備 考	注 記	整 理 番 号	大 沢 No
			長 さ (mm)	幅 (mm)	厚 さ (mm)	重 さ (g)							
1	土 偶	後期末葉	(38)	53	24	34.9	25Y 6/3 にぶい、黄 25Y 6/1 黄灰	qu・ws・fe	-	頭部のみ残存、アスファルト付着	1B2 8/14	38	大沢 1 (2)
2	土 偶	晩期前葉	(60)	72	33	85.2	10YR 6/3 にぶい、黄橙 25Y 5/1 黄灰	qu・ws・ss	-	体部のみ残存、アスファルト付着	3B2 下 PE 8/13	37	大沢 1 (3)
3	土 苗	晩期前葉	64	53	22	45.2	25Y 6/2 灰黄 10YR 7/4 にぶい、黄橙	qu・bi	-	なし		36	大沢 1 (4)
4	土製耳飾		47	48	15	16.4	25Y 8/2 灰白 25Y 5/1 黄灰		-	直径 45mm	5A1 8/11	34	
5	軽石製品		103	19	19	7.4	-	軽石	上部に穿孔有	田中大沢 C4-1 8/8		39	
6	有孔石製品	晩期	35	78	19	57.6	-	安山岩		2B2 8/12		35	

第9章 佐藤初太郎旧蔵の大沢遺跡出土遺物

第1節 佐藤初太郎旧蔵資料について

佐藤初太郎については、第3章で詳しくふれた。佐藤初太郎は、明治17(1884)年より13年ほど脇本小学校訓導を勤めた。明治27(1894)年に蓑虫山人とも会っている。大沢遺跡出土品を含む佐藤の収集資料は、彼の死後、石川理紀之助の協力も得て、遺族から明治42(1909)年4月、県立図書館に入った。昭和51(1976)年に県立図書館から県立博物館へ移管された。秋田県立博物館蔵の『蓑虫山人画記行』には蓑虫山人が佐藤初太郎を訪ねた際に描いた考古資料が掲載されている。庄内(2002)は『蓑虫山人画記行』の紹介とともに、『蓑虫山人画記行』掲載の図に該当する佐藤初太郎旧蔵資料6点を見出した。『蓑虫山人画記行』には「田中字大沢出土」の石棒・石剣・石刀計7点(図版う21・庄内2002以下同)、土器2点、土偶5点、土石製品5点(図版う22)、磨製石斧2点(図版う23)、磨製石斧11点、玉類7点、石鏃1点、異形石器1点(図版う25)の計41点が描かれている。これらのうち、石刀1点、土偶2点、磨製石斧1点がこれまで秋田県立博物館で所蔵確認されている。そのほか、佐藤初太郎旧蔵資料には大沢遺跡出土品が多数含まれている。そこで、本研究では、秋田県立博物館蔵佐藤初太郎旧蔵資料における大沢遺跡出土資料の実測を行うとともに、『蓑虫山人画記行』掲載の考古資料の有無を再調査した。その結果、弘前大学の調査では、『蓑虫山人画記行』において遺跡名不明の画譜が大沢遺跡出土品と判明したほか、追加で資料の所蔵が確認されたものがある。

佐藤初太郎旧蔵資料のうち、大沢遺跡出土のものには朱字で「田中」あるいは「T」(田中字大沢の頭文字)が注記されている。そのほか、興味深い貼紙があるものが2点あった(図48)。1点は鉢台部片(1827:D-82)に朱字「三〇、七、一九 田中 発掘」(図48左)と書かれており、明治30(1897)年7月19日に大沢遺跡が発掘されたことが分かる。以上の朱字は筆跡や色合いから全て当時、佐藤によって注記されたと判断される。当時佐藤は脇本小学校勤務であり、男鹿の滞在期と合致する。また、明治35年の大野(1902)での出土品紹介以前となる。蓑虫山人の来訪は明治27年のことなので、本資料は描かれていない。もう1点は、注口土器(1795)の底部に「佐藤」と「初太郎」と押印された貼紙(図48右)が付いている点である。これは佐藤初太郎の旧蔵品であったことが確実であるほか、これとまったく同じ押印を東京大学総合研究博物館蔵中山遺跡出土品(第3章)で確認し、由来の共通性をうかがい知ることができる。剥片石器の多くは、「秋田県立図書館」印のある厚紙でできた台紙に器種別に10~30点ほどを糸で括りつけられている。

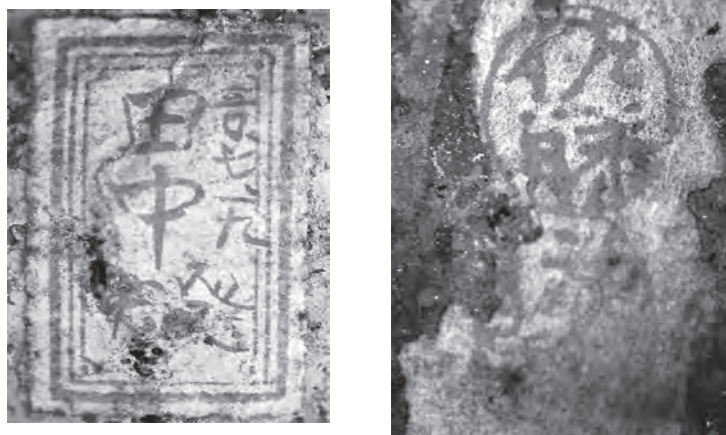


図48 佐藤初太郎旧蔵大沢I遺跡出土資料の貼紙

第2節 佐藤初太郎旧蔵大沢遺跡出土遺物（図49・50、表13）

2017年6月時点で秋田県立博物館において調査を行い、大沢遺跡出土品と確認したのは、323点にのぼる。内訳は、土器片19点（香炉形・鉢・深鉢・注口土器・台部）、土偶3点、円板状土製品1点、石鏃205点、石筥16点、石匙53点、石錐4点、異形石器4点、磨製石斧9点、石棒8点、石刀1点である。石器が圧倒的に多く、なかでも石鏃が極めて多い。一方、土器は土器片のみであり、形態が分かるのは台部のみである。この状態はやや違和感があり、完形土器は別の場所にあったのかもしれない。

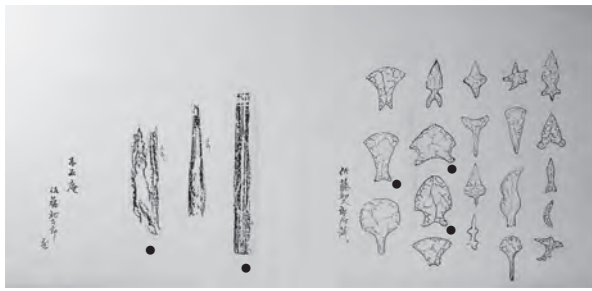
実測では、土偶、円板状土製品、香炉形土器、計5点を図化した。

また『蓑虫山人画記行』掲載遺物との照合作業の過程で、『蓑虫山人画記行』掲載の遺物として、庄内（2002）ですでに確認されていた土偶2点、磨製石斧1点、石刀2点、土師器高坏1点のほか、新たに石棒4点、異形石器3点、香炉形土器頂部1点、計8点を確認することができた。さらにこの照合作業でこれまで出土地不明とされてきた『蓑虫山人画記行』の「う20」（番号は庄内2002による）に、大沢遺跡出土遺物が描かれていることが明らかになった（図49）。

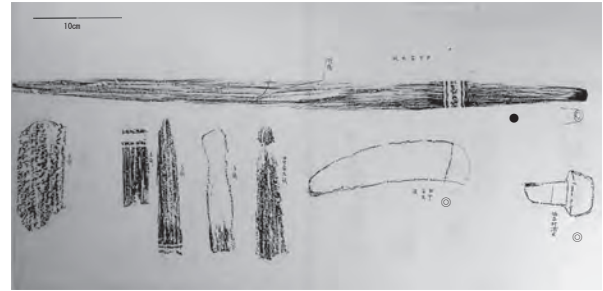
次に遺物について、土器片は後期中葉から晩期中葉（大洞C2式）に属す。時期別には後期末がやや多い。1・2・8・9は石棒である。全て粘板岩製で断面円形の無頭石棒である。後期末葉～晩期初頭に多く見られる類型である。2・8には二重の沈刻が巡る。『蓑虫山人画記行』う21には1本が描かれているが、中央に破損部が記入されており2本に折れていたことが分かる。3～5は頁岩製の異形石器である。石筥形で基部が二又に分かれる。6・7は粘板岩製の石刀である。台紙には6が「発見年月 不明」、7が「秋田縣南秋田郡男鹿曼陀羅堂」出土と書かれているが、『蓑虫山人画記行』には6が「田中字大沢」、7が「脇本村浦田」出土と書かれており、それぞれ出土地が異なる。6は刃部、7は把部である。刃幅が広く縄文時代後期に多く見られる類型とみられる。10は磨製石斧である。定角石斧ではなく、扁平礫の周辺を剥離整形した後、刃部のみ研磨で作り出される。

11・12・15は土偶である。11・12は『蓑虫山人画記行』に描かれている。11は胴部上半、12は頭部である。11は板状で無文であること、12は眼の表現と頬の文様から、後期後葉のポーズ土偶とみられる。検討の結果、11は若林（1895）、12は大野（1904）掲載品であることが判明した。13は香炉形土器の頂部と見られる。頂部がつまみ状に閉じることから後期後葉に属す。13は『蓑虫山人画記行』掲載遺物と新たに確認されたものである。『蓑虫山人画記行』は上下逆である。これも若林（1895）掲載品であることが判明した。14は円板状土製品である。表面は摩滅のため縄文の有無が確認できない。中央に穿孔がある。15は遮光器土偶の肩～腕部の破片である。頸部と胸部に羊歯状文があることから大洞BC式に属す。そのほか、大沢遺跡出土ではないが、『蓑虫山人画記行』掲載遺物として、古墳時代の土師器の高坏がある（図版26-16）。内黒である。『蓑虫山人画記行』より脇本村字飯村地獄谷地出土と分かる。遺跡の場所は、飯村集落東方の砂丘地の高まりの間にかつてあった細長い低地と推測されている（児玉2017）。脇本飯の町遺跡では昭和8年に道路開削中に蕨手刀が出土しており、その周辺と推定される。

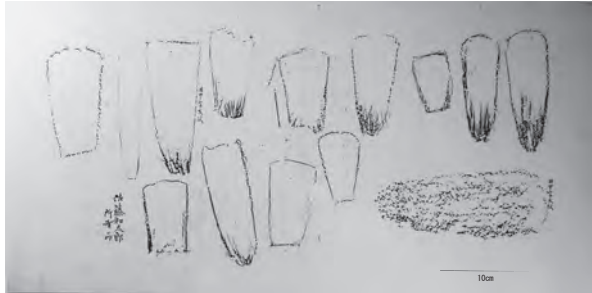
（上條 信彦）



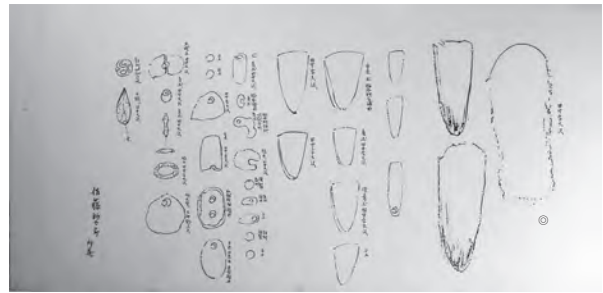
う 20



う 21



う 23



う 25

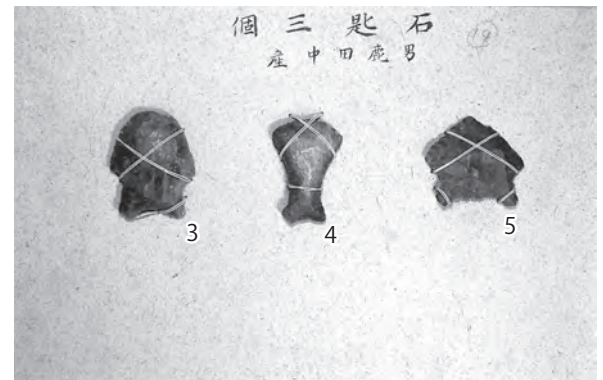
◎ 庄内（2002）で所蔵が確認されていた資料
● 本稿で新たに所蔵が確認された資料



1(1963)



2(1963)



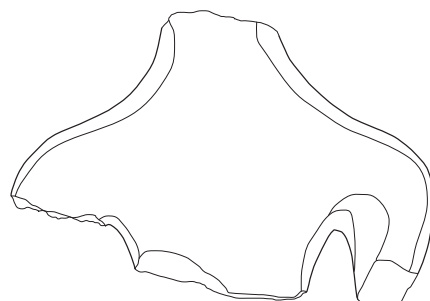
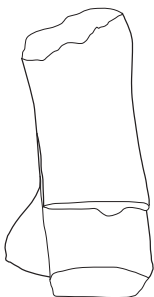
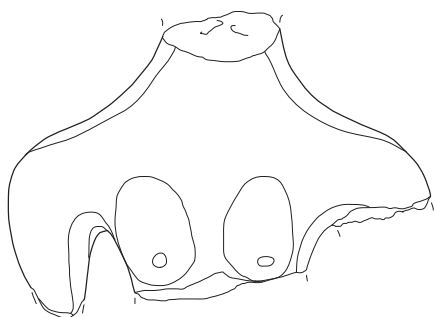
10(1949)

図 49 佐藤初太郎旧蔵大沢 I 遺跡出土資料と『蓑虫山人画記行』1（秋田県立博物館蔵）

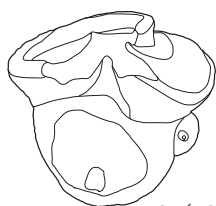


う 22

◎ 庄内 (2002) で所蔵が確認されていた資料
● 本稿で新たに所蔵が確認された資料

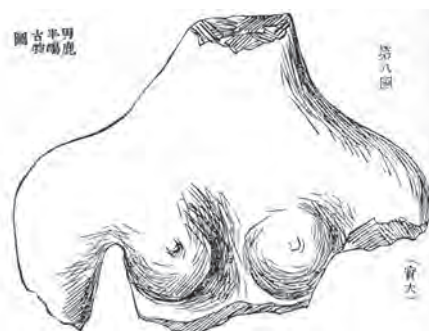


11 (1898)

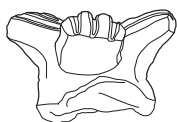


12 (1895)

(70)



若林 (1895) 289 頁



13 (1840)



大野 (1904) 80 頁



若林 (1895) 288 頁



14 (1907)



15 (1900)

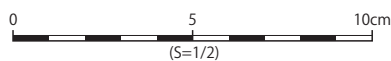
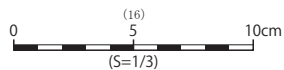


図 50 佐藤初太郎旧蔵大沢 I 遺跡出土資料と『蓑虫山人画記行』掲載資料 (秋田県立博物館蔵)

表 13 佐藤初太郎旧蔵大沢遺跡出土資料観察表

図番号	収蔵 番号	図書館 注記	器種・部位	大沢遺跡 の点数	遺跡名	注記	備考	「養虫山人 画記行」掲載
1	1963		石棒	1	大沢	朱字「田中」		○
2	1963		石棒	3	大沢	朱字「T」		○
3～5		14	異形石器	3	大沢	「石匙三個 男鹿田中産」、朱字「田中」裏に貼紙「石ヒ三 二十五銭ヅツ 七十五銭」	台紙3個貼付	○
6・7	1972	三	石刀	2	大沢1、曼陀羅堂もしくは浦田1	台紙:「石刀一、出所 秋田縣南秋田郡男鹿曼陀羅堂産 二、発見年月 不明」 「秋田縣立秋田図書館」朱印 ※養虫山人画記行には「脇本村浦田、田中宇大沢」と注記	台紙2個貼付 想像図添付	○
8	1968		石棒	1	大沢			○
9	1969		石棒	1	大沢			○
10	1949		磨製石斧	1	大沢			
11	1898		土偶胴部	1	大沢		若林（1985）289頁掲載	○
12	1895		土偶頭部	1	大沢		大野（1904）80頁掲載	○
13	1840		香炉形頂部	1	大沢		若林（1985）288頁掲載	○
14	1907	D-67	円板状土製品	1	大沢	「T」		
15	1900	D-58	土偶	1	大沢	「T」	遮光器土偶腕部	
		D-27	土師器高坏	1	地獄谷地	※養虫山人画記行に「脇本村宇飯村地獄谷地」と注記	内黒	○
	1827	D-82	土器台部	1	大沢	ホワイトカラー「田中」朱字「田中」		
	1827	D-82	土器台部	1	大沢	ホワイトカラー「田中」貼紙朱字「三〇、七、一九 田中 発見」		
	1827		土器片	10	大沢	朱字「T」	深鉢3、鉢3、壺2、注口2	
	1827	D-54	土器片	6	大沢	朱字「T」	注口6	
	1924		磨製石斧	11	大沢	朱字「T」		
	1924		磨製石斧	1	大沢	墨書「田中大澤」		
	1952		石棒	1	大沢	墨書「〇〇田中」		
	1973		石刀	1	大沢	墨書「田中大沢」		
	2047		石筥	11	大沢	朱字「田中」、朱字「T」、鉛筆書「田中」、墨書「田中」		
	2066	1	異形石器	1	大沢	「石鉢 貳個 男鹿田中産」	台紙1個（1個欠）貼付	
	2069	1	石錐	4	大沢	「石錐 六個 男鹿田中産」	台紙4個（2個欠）貼付	
		1	石鏃	3	大沢	「漆痕石鏃 八個 男鹿・御所野・男鹿田中」、朱字「ゴ」「ゴショ」「T」「マ」	台紙8個貼付	
		2	石鏃	35	大沢	「石鏃 三拾六個 男鹿田中産」朱字「T」	台紙35個（1点欠）貼付	
		2	石匙	2	大沢	「石匙拾個 男鹿産 田中・古仲」、朱字「古仲」貼紙「田中」	台紙10個貼付	
		3	石匙	4	大沢	「石匙拾個 田中・館山・曼陀羅・平澤・マンダラ」、朱字「T」「田中」「カタ」	台紙10個貼付	
		4	石筥	1	大沢	「石匙三個 男鹿産」、朱字「田中」「九」、裏に貼紙「石ヒ三 二十五銭ヅツ 七十五銭」	台紙3個貼付	
		5	石匙	1	大沢	「石匙三個 男鹿産 館山・田中」、朱字「カ、タ、」「T」	台紙3個貼付	
		6	石匙	5	大沢	「石匙九個 男鹿産 館山・曼陀羅・田中」、朱字「カ、タ、」「T」「マン」	台紙9個貼付	
		8	石匙	3	大沢	「石匙拾個 男鹿産 田中・館山」、朱字「カタ」	台紙10個貼付	
		9	石匙	3	大沢	「石匙拾個 平沢・タロサハ・田中・拂戸・山谷・椿中山」朱字「T」「タロサハ」「椿中山」墨書「払戸」	台紙10個貼付	
		10	石匙	3	大沢	「石匙拾個 田中・御所野・椿中山・館山」、朱字「T」「カ、タ」「ゴショノ」「椿中山」、墨書「ツバキナカ山」	台紙10個貼付	
		12	石鏃	2	大沢	「石鏃 拾貳個 平沢・マンダラ・延命寺・田中」	台紙12個貼付	
		13	石匙	2	大沢	「石匙八個 館山・曼陀羅・田中」、朱字「曼」「マ」「カタ」「T」「田中」	台紙8個貼付	
		14	石鏃	24	大沢	「石鏃 三拾六個 男鹿産 田中・平澤」、朱字「T」「田」「ヒ」	台紙36個貼付	
		15	石匙	1	大沢	「石匙八個 曼陀羅・北秋麻生・田中」朱字「マ」	台紙8個貼付	
		16	石匙	1	大沢	「石匙拾個 椿中山・田中・館山・曼陀羅・石カミ」朱字「椿中山」「T」「カ、タ」「カタ」「マ」	台紙10個貼付	
		18	石匙	1	大沢	「石匙拾個 延命寺・曼陀羅・館山・田中・平沢」、朱字「T」「マ」「カ、タ」	台紙10個貼付	
		19	石匙	2	大沢	「石匙拾個 田中・館山・鹿角太湯」、朱字「T」「田中産」「カ、タ」	台紙10個貼付	
		20	石匙	2	大沢	「石匙拾個 曼陀羅・脇本前野・館山・田中」朱字「曼」「T」「ワキモトマヘノ」	台紙10個貼付	
		21	石匙	2	大沢	「石匙拾個 男鹿産 館山・マンダラ・田中」、朱字「カ、タ、」「田」「T」「マン」	台紙10個貼付	
		22	石匙	2	大沢	「石匙拾個 田中・平沢・館山・山本鶴形・椿中山」、朱字「田」「椿中山」「カタ」	台紙10個貼付	
		22	石鏃	2	大沢	「石鏃 三拾六個 延命寺・八幡臺・鯉川・脇本山・田中」、朱字「タ」「エ」「八幡臺」「鯉川」「ワ」「T」	台紙36個貼付	
		23	石鏃	36	大沢	「石鏃 三拾六個 男鹿田中産」朱字「T」	台紙36個貼付	
		23	石匙	6	大沢	「石匙拾個 男鹿産 館山・曼陀羅・田中」、朱字「カタ」「カ、タ、」「T」「マ」	台紙10個貼付	
		24	石匙	6	大沢	「石匙八個 男鹿産 田中」、朱字「田中」「T」	台紙8個貼付	
		27	石匙	6	大沢	「石匙拾個 男鹿産 館山・曼陀羅・田中」、朱字「カタ」「田」「T」「曼」	台紙10個貼付	
		30	石鏃	18	大沢	「石鏃 三拾六個 男鹿産 延命寺・マンダラ・田中」	台紙36個貼付	
		31	石鏃・異形石器	16	大沢	「石鏃 三十個 男鹿産 田中・脇本山・田中大沢・延命寺・曼陀羅・飯村」、朱字「T」「マ」	台紙30個貼付 うち異形石器1点	
		33	石鏃	16	大沢	「石鏃 三拾六個 田中・脇本前野・石カミ・平沢・山谷・椿中山」、朱字「T」「ゴ」「ゴショ」「マヘノ」「ツバキ」「山谷」「ヒ」「石」、墨書「ツバキ中山」	台紙36個貼付	
		35	石鏃	2	大沢	「石鏃 二拾四個 男鹿産 田中・延命寺」、朱字「(不明)」	台紙24個貼付	
		37	石鏃	36	大沢	「石鏃 三拾六個 男鹿田中産」朱字「T」	台紙36個貼付	
			石匙	1	大沢	「石匙八個 山本鶴形・館山・飯村・曼陀羅・椿中山・北秋麻生・田中」墨書「ツバキナカ山」、朱字「マ」「イヒムラ」	台紙8個貼付	

第10章 天野源一旧蔵の大沢遺跡出土遺物

第1節 天野源一旧蔵資料について

天野源一（1892－1959）は、南秋田郡脇本村（現 男鹿市）出身で、脇本郵便局長、脇本農会長、脇本産業組合長、同信用組合長、また昭和9（1934）年から終戦まで脇本村長を務めた。さらに戦後は県会議員を1期務めるなど地域の振興に尽力した。天野氏の考古学への関心は、明治中頃の佐藤初太郎の脇本小学校への着任がきっかけであったようである。天野氏は脇本浦田坂の上、若美町館山、船川港比詰大沢の発掘を行った。そのほか、上記脇本飯町出土の蕨手刀の発見など秋田考古会の会員として考古資料の調査と保存に携わった。昭和23(1948)年には男鹿史談会を結成した。著作には『新訳真澄翁男鹿遊覧記』（1952年）、編著『秋田の郷土食』（秋田翼賛叢書 第六輯）（1943年）、『独立独行の平田篤胤』（秋田翼賛叢書 第七輯）（1943年）などがある。民俗にも造詣が深く、「ナマハゲ伝承異考」『秋田魁新報』（1952年）などがあるほか、昭和11(1936)年3月に吉田三郎らの男鹿半島の調査への協力し、その状況は『男鹿寒風山麓農民日録』（アチックミュージアム彙報 第16）（1936年）に書かれている。

秋田県立博物館発行のコレクション図録によると（秋田県立博物館1979）、「船川港比詰大沢」出土（大沢Ⅰ遺跡）出土品として、深鉢3点、鉢6点、台付鉢4点、台部5点、浅鉢2点、壺15点、注口土器4点、香炉形土器2点、ミニチュア土器2点、土偶2点、動物形土製品2点、石製品1点、石棒・石剣8点、土器片10点が掲載されている。時期的には大洞B式と大洞BC式が主体で大洞A式はほとんどない。

本章の説明では秋田県立博物館の収蔵番号2473～2588を使用する。なお、複数の資料に同一の収蔵番号が付されている場合、a～のアルファベットを付けて区別した。また、実測図は写真のオルソ画像化により、作成した。そのため断面図を略している。

第2節 天野源一旧蔵大沢遺跡出土遺物（図51～53、表14）

本研究では、天野源一旧蔵大沢遺跡出土遺物75点（表14）のうち土器50点（2473～2525のうち）、石器11点（2542～2559のうち）、石製品4点（2572a～c・2574）、土製品3点（2584・2585・2588）、計68点を掲載した。コレクション図録（秋田県立博物館1979）と比較すると、台付鉢1点（2487）、壺1点（2504）、注口土器2点（2508・2511）、ミニチュア土器2点（2517・2518）、人面付土器（2524）1点、鉢底部（2525b）がコレクション図録未掲載で本研究において新たに掲載した資料である。またコレクション図録で「船川港比詰大沢」出土とされる動物形土製品1点は、遺物注記を確認したところ「字 向山イマザ」とあった。そのほか、壺1点は「浦田字坂上」、鉢1点は土器器坏（出土地不明）であった。そのためこれらを除外した。

土器の内訳は深鉢3点、鉢5点、浅鉢2点、台付鉢4点、壺15点、注口土器6点、香炉形土器2点、ミニチュア土器5点、人面付土器片1点、土器台部・底部・壺頸部片7点である。壺と注口土器が多い。時期は縄文時代後期末葉～晚期中葉（大洞C2式）である。石器は、磨製石斧1点、石鏃7点、石匙1点、石錐2点である。石製品は石棒6点・石剣3点・石刀1点、石製品1点、土製品は土偶2点、動物形土製品1点である。資料の多くに墨書で「昭和十、五月 字田中」などと書かれており、昭和10（1935）年5月の発掘によって出土した資料と理解できる。なお昭和10年は天野源一が脇本村長だった時期である。

（1）深鉢（図51-2473～2475）

深鉢は3点ある。2473は、口縁部形態は山形口縁、口縁部文様はない。主文様は入組帯状文が8単位である。体部に地文はない。大洞B1式である。2474・2475は高さ15cmほどの小型粗製深鉢である。器形はやや丸みがあり、地文はLR縄文である。時期は晩期前半である。

(2) 鉢 (図51-2476・2477・2479～2481)

鉢は5点図示した。全て高さ10cm未満の小型鉢である。2476は口縁部がくの字に屈曲する鉢である。地文は上下で斜縄文の向きを変える。大洞C2式である。2477は底部が球底の無文鉢である。高さ1/3のあたりでくびれる。2479は地文が条痕文で底面まで施される。2477・2479ともに後期末葉である。2480は地文LR縄文の膨らみのある鉢で、口唇部にB突起がある。2481は口縁部が大きく開く。球底で体部にB突起がつく。2480・2481ともに大洞BC式である。

(3) 浅鉢 (図51-2483・2484)

浅鉢は2点図示した。2483は口縁部に入組三叉文がある。大洞B2式である。2484は球底の粗製浅鉢である。地文のみで、摩滅のため縄文かどうか不明瞭である。

(4) 台付鉢 (図51-2485～2487・2490)

台付鉢は4点図示した。2485は器壁が肥厚する。台部は無文で低い。小波状口縁で器高の半分が文様帯となる。磨消縄文による入組帯状文である。後期末葉である。2486は三角形の透かしのある台部で直立的である。口縁部がやや開き、連続するキザミと山形の突起がある。口縁部には上下の沈線の間を連続した横位の挟りが巡る。大洞B2式である。2487は外に開き台付浅鉢に近い。B突起口縁で羊歯状文が施される。台部は無文で外に開く。大洞BC式である。2490は口縁部が内傾する。B突起口縁で口縁部に羊歯状文、体部に配置文が施される。大洞C1式とみられる。

(5) 壺 (図51-2492～図52-2506)

壺は15点図示した。うち無文が5点、地文のみ5点がある。2492～2494・2501・2504は地文縄文である。2492・2504の最大径は下半部にあり、2493は体部中央、2501は上半部にある。2495は無文の精製壺で口縁部がくの字に屈曲する。大洞B式とみられる。2497は体部に円文があり、頸部が二段作りである。大洞B1式に属す。2498は口縁部がくの字に曲がる。体部上半には菱形入組文が施される。大洞B2式である。2499は長胴形である。4本の無文帯と帯縄文が巡る。2500は肩部に入組三叉文、体部全体に巴文・渦巻文が巡る。口縁部はくの字に屈曲する。大洞B2式である。2502・2503は最大径が器高の下半にある無文壺である。晩期前葉に属す。2505は胴部上半に菱形入組文が施される。大洞B2式である。2506は球形の無文壺で頸部が短い。2498～2500・2505の4点は全体に赤色顔料がみられる。

(6) 注口土器 (図52-2507～2512)

注口土器は6点図示した。2507・2508は2段作りで内傾する口縁部と扁平な体部をもつ。球底で口頸部と体部上半に巴文が施される。大洞B2式の古段階である。2509は傘のつく三段作りの注口土器に復元できる。体部上半に渦巻文が巡る。大洞B2式である。2510・2511は傘のつく三段作りである。2510の口縁部と頸部には羊歯状文と扁平化した巴文が配される。2511は口縁部と頸部に羊歯状文、体部上半に渦巻文がある。2点とも大洞BC式である。2512は小型で三段作りある。口縁部に渦巻文、体部上半にC字文が入る。

(7) 香炉形土器 (図53-2514)

香炉形土器は1点図示した。台部と頂部を欠く。上半部には2つの窓があき、配置文が展開する。下半部は縄文を施す。大洞C1式とみられる。

(8) ミニチュア土器 (図53-2515～2519)

ミニチュア土器は5点図示した。器種は鉢2点(2516・2519)、台付鉢1点(2515)、浅鉢1点(2517)、壺1点(2518)である。2515・2519は有文で口縁部に入組文、体部に縄文を施す。大洞B2式である。2516～2518は無文である。2518は精製であるが2516・2517は粗製である。

(9) 台部 (図53-2525a)

5点中1点図示した。2525aは径14.5cmの大型鉢の台部とみられる。膨らみのある上段には透かし付きの玉抱三叉文、下段には刻目文が施される。大洞B2式である。

(10) 鉢底部 (図53-2525b)

1点図示した。2525bは鉢か浅鉢の体部下半から底部の破片である。底面全体に弧文が施される。体部下半部には羊歯状文とB突起がみられる。赤色顔料が付く。大洞BC式である。

(11) 人面付土器 (図53-2524)

2524は人面付土器とした破片である。大洞C1式の浅鉢の口縁部の突起部分とみられる。口縁部にB突起が巡る。

(12) 土偶 (図53-2584・2585)

2点ある。2584は頭部～胴部、左腕が残る。長顔で眼・口・鼻孔を刺突で表現する。腹部に大きな突起をつける。2585は胴部と左腕が残る。扁平な胴部と垂れ下がる乳房が特徴的で、胴部下半が曲がるため、両脚の膝を立てる形となる。時期は後期末葉とみられる。

(13) 動物形土製品 (図53-2588)

1点ある。長さ5.7cmで脚部を欠く。頭部はハート形で目鼻を刺突で表現する。イノシシ形とみられる。

(14) 石棒 (図53-2572a～c)

石棒は6点中3点図示した。いずれも破片である。棒状で断面円形である。2572aは把部で波状文を沈刻で巡らす。2572bは先端部である。

(15) 石剣 (図53-2574)

3点中1点図示した。粘板岩製で直線的な形態である。左右側縁に刃部をつくる。

(16) そのほか (図版29)

図化以外の石器として、剥片石器と磨製石斧、石刀がある。石鏃(2550)は7点ある。すべて珪質頁岩製である。凸基鏃でうち5点が有茎である。石匙(2554)は1点あり、つまみの向きから横形石匙である。石錐(2559)は2点あり、つまみ付きである。磨製石斧(2542)は定角式である。石刀(25756)は1点ある。

第3節 大沢遺跡出土遺物のまとめ

以上のように、第8～10章にかけて佐藤初太郎、天野源一、磯村朝次郎の大沢I遺跡出土資料計113点を図化した。その結果、土器の時期は後期末葉～大洞C2式で、主体は後期末葉～大洞B2式と分かった。このうち、天野資料は大洞B2式が主体であるのに対し、磯村資料は大洞BC～C1式が主体である。佐藤資料は後期末葉から大洞C1式まで満遍なくある。後期末葉は天野・磯村資料ともに一定量みられる。この時期の違いは、佐藤資料の多くが発掘資料の他に表面採集資料を含むのに対し、天野・磯村資料はそれぞれ発掘によるものということに起因するとみられる。よって、大沢I遺跡には天野資料にみられる大洞B2式主体と、磯村資料にみられる大洞BC～C1主体という二つの地区があったと考えられる。この状況は先に検討した中山遺跡や高石野遺跡と同様に、遺跡としては後期末から晚期中葉まで存続しつつも大洞B式と大洞C1式に捨て場の移動という画期がみられる点で一致しており、この地域の亀ヶ岡文化の成立過程とその展開に共通性があるといえよう。

(上條 信彦)

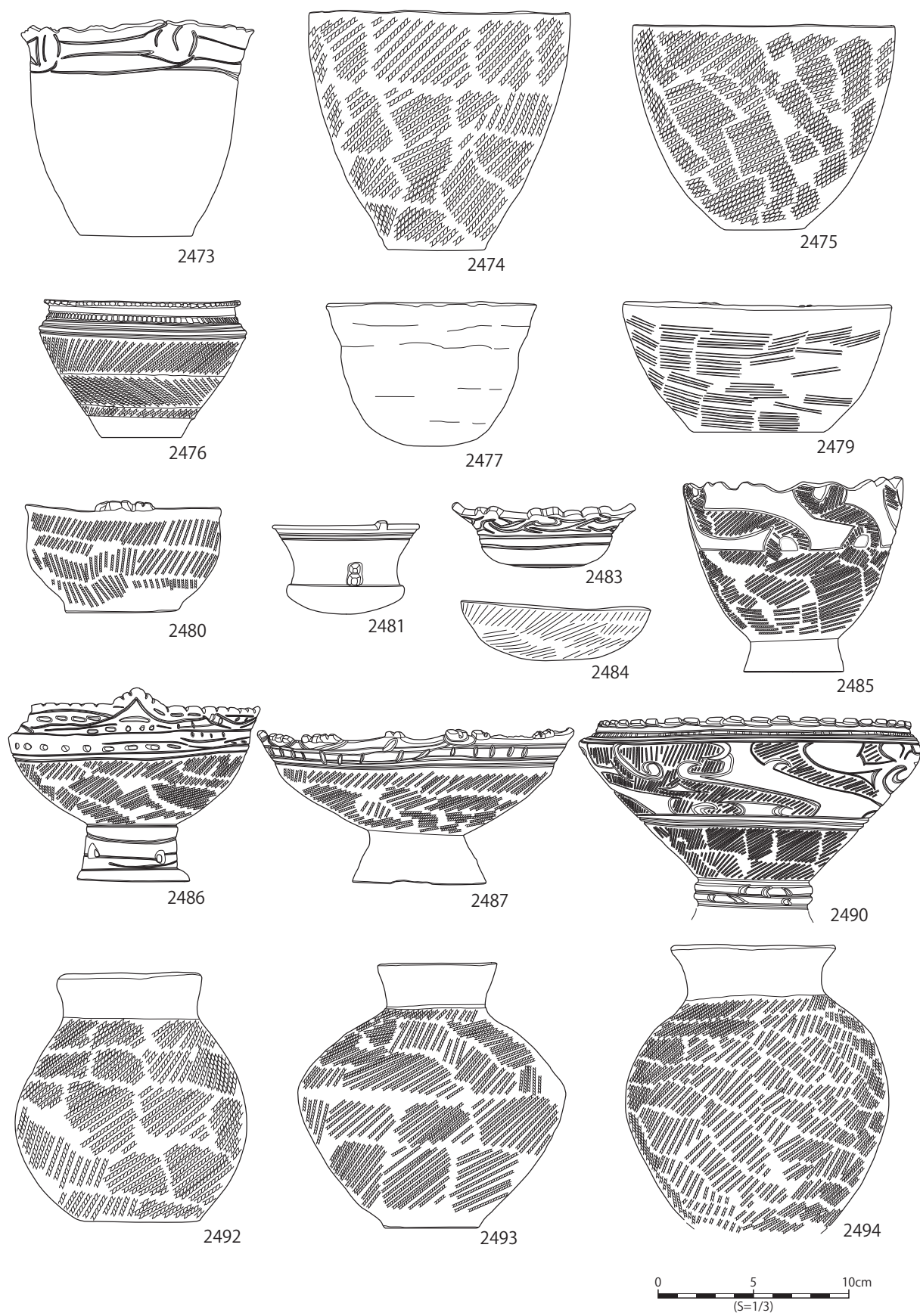


図 51 天野源一旧蔵大沢Ⅰ遺跡出土土器（秋田県立博物館蔵）・1

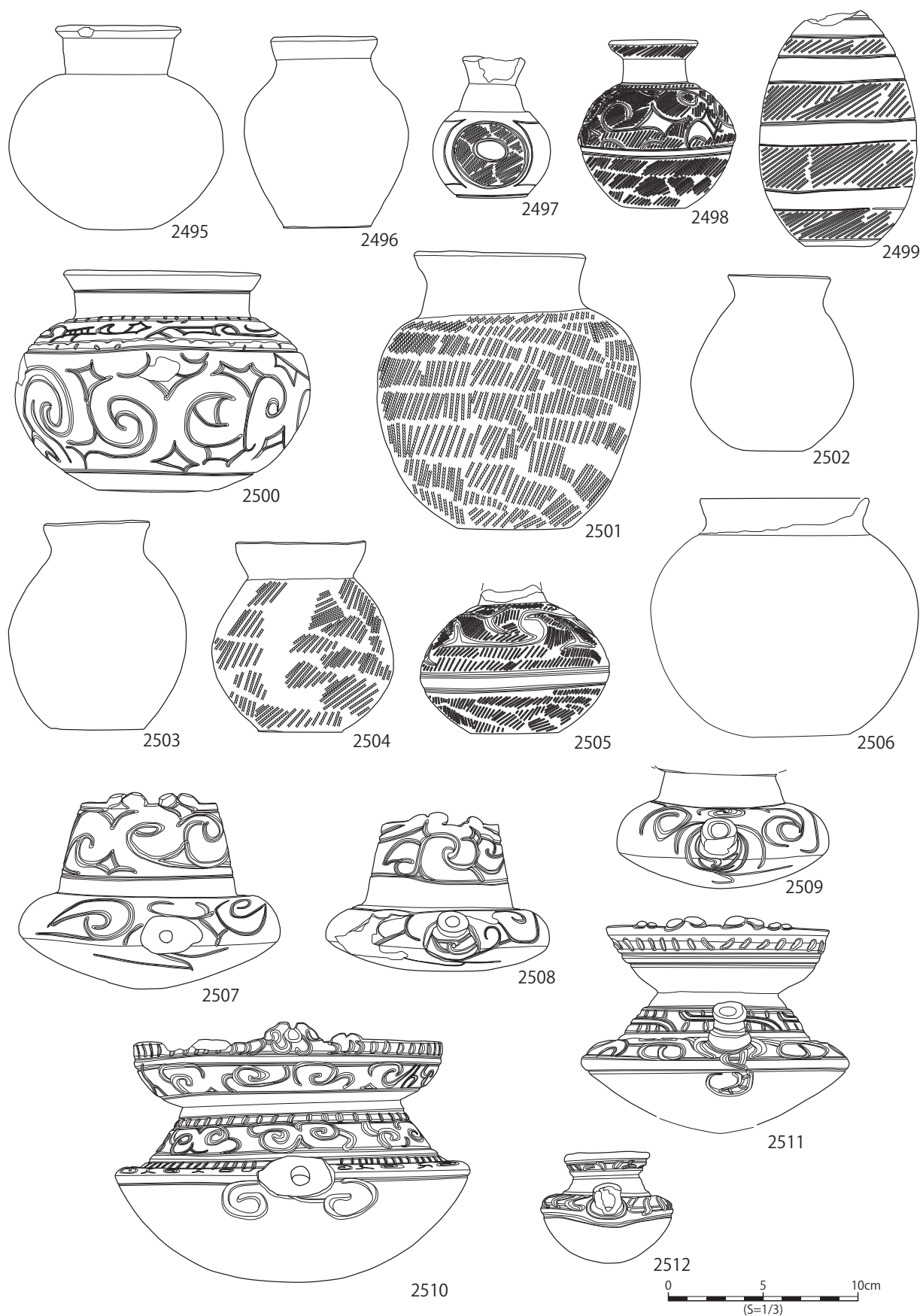


図 52 天野源一旧蔵大沢Ⅰ遺跡出土土器（秋田県立博物館蔵）・2

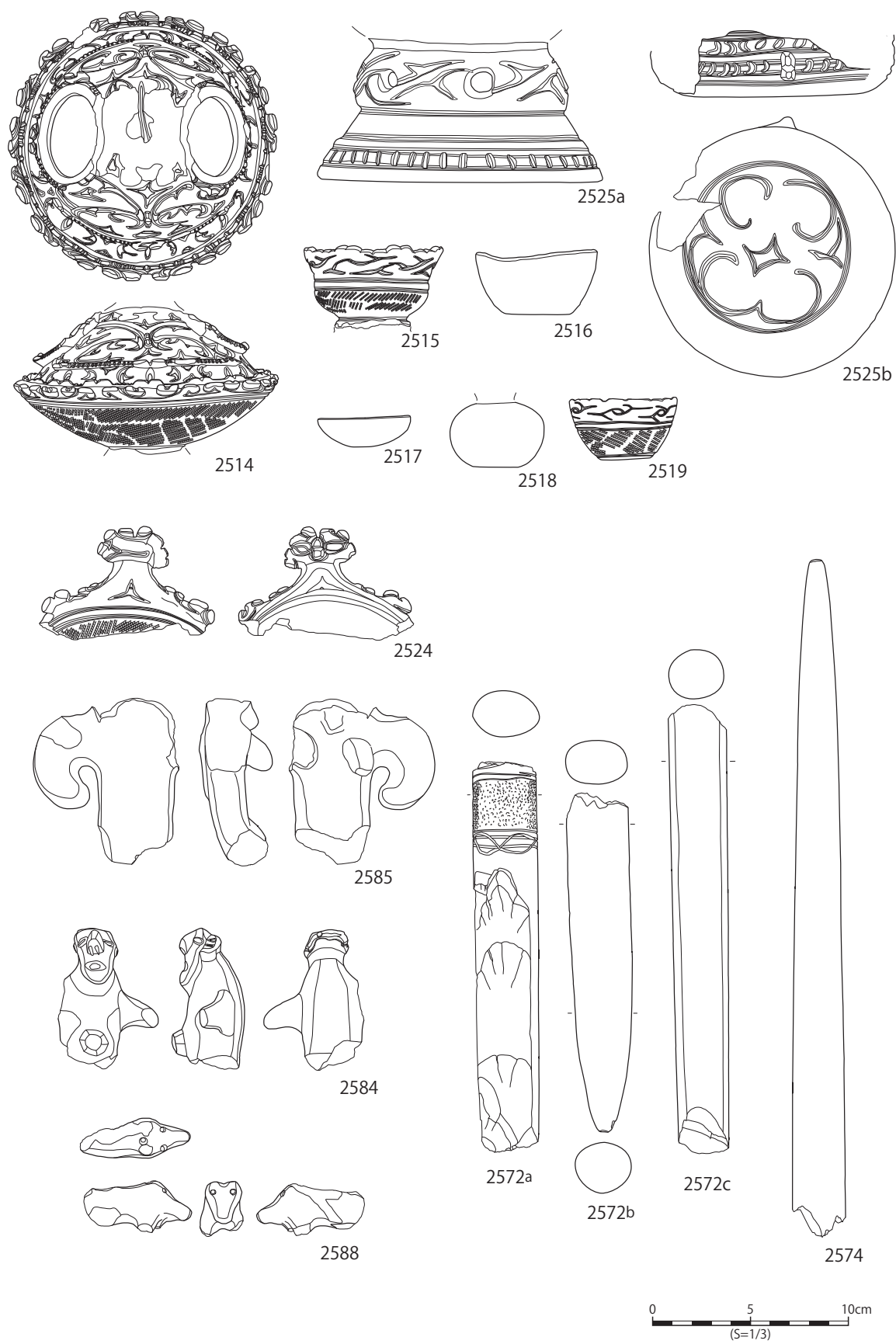


図 53 天野源一旧蔵大沢 I 遺跡出土土器 ・土製品・石製品（秋田県立博物館蔵）

表 14 天野源一旧蔵大沢遺跡出土資料観察表（秋田県立博物館蔵）

収蔵番号	博物館 注記	器種	時期	点数	器高 (cm)	口径 (cm)	注記	備考	本書図有無
2473	C3-2	深鉢	大洞 B1	1	11	12	「昭和十、五 字田中」		
2474	C3-3	深鉢	大洞 B-BC	1	12	13.5			
2475	C3-4	深鉢	大洞 B-BC	1	10.5	13.5			
2476	C2-4	鉢	大洞 C2	1	7.5	10.3	「昭和十、五 字田中」		
2477		鉢	後期末葉	1	7	11	「昭和十年五月 字田中」		
2479	C2-5	鉢	後期末葉	1	7.5	14.5			
2480	C2-2	鉢	大洞 BC	1	5.5	10.5			
2481		鉢	大洞 BC	1	5	7.8			
2483	C1-1	浅鉢	大洞 B2	1	3.5	9.5	「昭和十、五月 字田中」		
2484		浅鉢	後期末葉	1	3.3	10.5	「昭和十、五月 字田中」		
2485	D-6	台付鉢	大洞 B1	1	10.5	12	「昭和十、字田中」		
2486	D-5	台付鉢	大洞 B2	1	9.5	14.3	「昭和十、五 字田中」		
2487		台付鉢	大洞 BC	1			「昭和十、五 字田中」	秋田県立博物館（1979）未掲載	
2490	D-3	台付鉢	大洞 C1	1	11	16.5			
2492	A-12	壺	大洞 B-BC	1	13.5	8	「昭和十、五 字田中」		
2493		壺	大洞 B	1	14	6	「昭和十、五 字田中」		
2494		壺	大洞 B-C1	1	15.5	8.5	「昭和十、五 字田中」		
2495	A-1	壺	大洞 B	1	11	6.8	「昭和十、五 字田中」		
2496	A-4	壺	大洞 B-C1	1	10.3	5.7	「昭和十、五 字田中」		
2497		壺	大洞 B1	1	7.5	3.2	「昭和十、五 字田中」		
2498	A-3	壺	大洞 B2	1	8.5	4.7	「昭和十、五 字田中」	赤色顔料	
2499	A-7	壺	後期末葉	1	12	3.5		赤色顔料	
2500	A-10	壺	大洞 B2	1	12.5	10.5		赤色顔料	
2501		壺	大洞 B-BC	1	14.7	9.5			
2502	A-5	壺	大洞 B-BC	1	9.5	5.5			
2503	A-6	壺	大洞 B-BC	1	11.5	6			
2504	A-8	壺	大洞 B-BC	1				秋田県立博物館（1979）未掲載	
2505	A-2	壺	大洞 B2	1	8	3		赤色顔料	
2506	A-9	壺	大洞 B-BC	1	13	-			
2507	B1-6	注口	大洞 B2	1	9.5	7	「昭和十、五 字田中」	注口部：アスファルト	
2508	B1-2	注口	大洞 B2	1			「昭和十年五月 字田中」	秋田県立博物館（1979）未掲載	
2509	B1-3	注口	大洞 B2	1	6.3	6.5	「昭和十、五 字田中」		
2510	B1-5	注口	大洞 BC	1	12	16		赤色顔料	
2511	B1-1	注口	大洞 BC	1				秋田県立博物館（1979）未掲載	
2512	B1-4	注口	大洞 B2	1	6	4.7			
2513		香炉形	大洞 B2	1	10	-			未実測
2514	36	香炉形	大洞 C1	1	7	13.5			
2515	D-4	ミニチュア	大洞 B2	1	3.7	7	「昭和十 田中」		
2516	E-2	ミニチュア	大洞 B-BC	1	3.2	5.8	「昭和十 字田中」		
2517		ミニチュア	大洞 B-BC	1			「字田中」	秋田県立博物館（1979）未掲載	
2518		ミニチュア	大洞 B-BC	1			「昭和十 字田中」	秋田県立博物館（1979）未掲載	
2519	E-3	ミニチュア	大洞 B2	1	3.2	5.7			
2524		人面付土器	大洞 C1	1			「昭和十、五 字田中」	秋田県立博物館（1979）未掲載	
2525a	G-12	台部	大洞 B2	1	7	14.5	「昭和十年五月 字田中」		
2525b	H	鉢底部	大洞 BC	1			「昭和十、五月 字田中」	赤色顔料、秋田県立博物館（1979）未掲載	
2525c	G-2	台部	大洞 B	1	5.8	8.2	「字田中」		未実測
2525d	G-4	台部	大洞 B	1	4	9.3	「字田中」		未実測
2525e	G-3	台部	大洞 B	1	4.2	7.2	「字田中」		未実測
2525f	G-1	台部	大洞 B	1	3	5.2	「字田中」		未実測
2525g	H	壺頸部		1			「昭和十 字田中」	秋田県立博物館（1979）未掲載	未実測
2542		磨製石斧		1			「昭和十、五 字田中」	秋田県立博物館（1979）未掲載	未実測
2550		石鏃		7					未実測
2554		石匙		1					未実測
2559		石錐		2					未実測
2572a		石棒		1			「昭和十、五 字田中」		
2572b		石棒		1			「昭和十 字田中」		
2572c		石棒		1			「昭和十、五月」		
2573a		石棒		1					未実測
2573b		石棒		1					未実測
2573c		石棒		1					未実測
2573d		石剣		1					未実測
2574		石剣		1					
2575a		石剣		1					未実測
2575b		石刀		1					未実測
2576		石製品		1	6.5				未実測
2584		土偶	後期末葉	1	7.8		「昭和十字田中」		
2585		土偶	後期末葉	1	8.5		「昭和十字田中」		
2588		動物形土製品		1	5.7		「昭和十 田中」		

※計測値は秋田県立博物館（1979）による。

参考文献

- 秋田県立博物館 1979『天野源一コレクション図録—考古図録 第4集—』
- 磯前順一・赤澤 威 1996『東京大学総合研究博物館所蔵、縄文時代土偶・その他土製品カタログ（増訂版）』言叢社
- 磯村朝次郎 1971「田中大沢遺跡緊急調査略報」『日本考古学年報』24
- 大野雲外 1902「男鹿半島の石器時代遺物」『東京人類學會雜誌』第18巻第201号
- 大野延太郎 1904「黥面土偶に就て」『東京人類學會雜誌』第20巻第223号
- 男鹿市 1995「大沢遺跡」『男鹿市史（上）』男鹿市史編纂委員会
- 男鹿市教育委員会 1987「大沢遺跡」『男鹿市の文化財』第7集
- 男鹿市史編纂委員会 1995『男鹿市史 上巻』男鹿市
- 小野一二 1975「数多い縄文遺跡」『五城目町史』五城目町史編纂委員会、8-18頁
- 金子昭彦 1988「同時期・同地域に併存する多様な土偶について—縄文時代晩期前半の北上川上・中流域を例として—」『遡航 第6号』早稲田大学大学院文研考古談話会編
- 金子昭彦 1991「いわゆる遮光器土偶の編年について（2）—大型の土偶—」『北奥古代文化 第21号』北奥古代文化研究会
- 金子昭彦 1997「東北地方北半部における縄文時代後期後半の土偶—その変遷と遮光器土偶の成立—」『土偶研究の地平』「土偶とその情報」研究会
- 上條信彦 編 2016『八郎潟沿岸における低湿地遺跡の研究 秋田県五城目町 中山遺跡 発掘調査報告書』弘前大学人文学部北日本考古学研究センター
- 上條信彦・佐宗亜衣子・諏訪元 2015『東京大学総合研究博物館 人類先史部門所蔵 中山遺跡出土標本データベース』<http://umdb.um.u-tokyo.ac.jp/DJinruis/nakayama/hajime.php>
- 熊谷常正 1990「x字状土偶」『季刊考古学 第30号』雄山閣
- 栗田茂治 1951『南秋田郡史』南秋田郡郷土研究會
- 甲野 勇 1995『縄文土器のはなし（解説付新装版）』学生社
- 五城目町教育委員会 1983『中山遺跡発掘調査報告書』
- 五城目町教育委員会 1984『中山 中山遺跡発掘調査報告書』
- 五城目町教育委員会 1991『1990 中山—中山遺跡発掘調査報告書—』
- 兄玉 準 2015「大沢Ⅰ遺跡出土線描画のある縄文土器」『男鹿地域史研究ノート』第1集、男鹿の歴史を探る会
- 兄玉 準 2017「地獄谷地の縄文土器」『男鹿地域史研究ノート』第24号
- 琴丘町教育委員会 1983『高石野遺跡発掘調査概報』
- 琴丘町教育委員会 1992『高石野 秋田県高石野遺跡出土資料写真集』（琴丘町文化財調査報告第6号）
- 小林圭一 2010「東北北半出土の注口土器の様相」『亀ヶ岡式土器成立期の研究—東北地方における縄文時代晩期前葉の土器型式—』早稲田大学総合研究機構先史考古学研究所、194-211頁
- 斎藤 忠 1975「大野延太郎集」『大野延太郎＋八木獎三郎＋和田千吉集』（日本考古学選集4）築地書館、3-94頁
- 佐藤初太郎 1895「男鹿半島古物探求誌」『東京人類学会雑誌』第10巻第113号
- 佐藤初太郎 1898「赤鐵鑛及金滓ト非鐵器時代」『東京人類學會雜誌』第13巻第143号
- 佐藤初太郎 1900『石器 中山』（潟上市郷土文化保存伝習館 蔵）
- 庄内昭男 2002「資料紹介『蓑虫山人画記行』から」『秋田県立博物館研究報告』第27号
- 須藤 隆 編 1995『縄文晩期貝塚の研究2 中沢目貝塚Ⅱ』東北大学文学部考古学研究会
- 関根達人・上條信彦 編 2012『下北半島における亀ヶ岡文化の研究 青森県むつ市不備無遺跡発掘調査報告書』弘前大学人文学部付属亀ヶ岡文化研究センター（弘前大学人文学部日本考古学研究室研究報告8）
- 高橋忠彦 1984「第2節 歴史的環境」『中山』秋田県五城目町教育委員会、4・5頁
- 東京人類学会 1906「佐藤初太郎氏の訃音」『東京人類学会雑誌』第21巻第246号
- 東京帝国大学 1928『日本石器時代遺物発見地名表』（第五版）
- 富樫泰時 2011『秋田県考古学研究史』書肆えん
- 中村真理・野口和己子・佐宗亜衣子・諏訪元 2008『東京大学総合研究博物館 人類先史部門所蔵 八幡一郎「大形打製石器」関連標本—綴子・中山・鶴ノ木・菅谷—』（東京大学総合研究博物館 標本資料報告 第75号）
- 中谷治宇二郎 1927「注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布」『東京帝国大学理学部人類学教室研究報告』第四編、東京帝国大学
- 奈良修介・豊島 昂 1967『秋田県の考古学』
- 初鹿野博之・山崎真治・諏訪元 2006『東京大学総合研究博物館 人類先史部門所蔵 陸平出土標本』（東京大学総合研究博物館 標本資料報告 第67号）
- 分銅志静・小野一二 1955『郷土史 五城目町』五城目町郷土史編纂委員会
- 真崎勇助 1887「秋田縣鑛石產地一覽表」『東京人類学会報告』第2巻第11号
- 八幡一郎 1948「三 大形打製石器」『日本の石器』彰考書院（1937東京人類学会日本民族学会総合大会第二回記事初出）
- 若林勝邦 1895「羽後国男鹿半島の土俗及び遺物」『東京人類学会雑誌』第10巻第109号
- 若林勝邦 1897「石器時代人民所製の有孔小石器」『東京人類学会雑誌』第13巻第139号

写真図版

- ・番号は図に対応させた。
- ・縮尺は図に依拠したが
高石野・大沢Ⅰ遺跡の完形土器は約1/4とした。



10



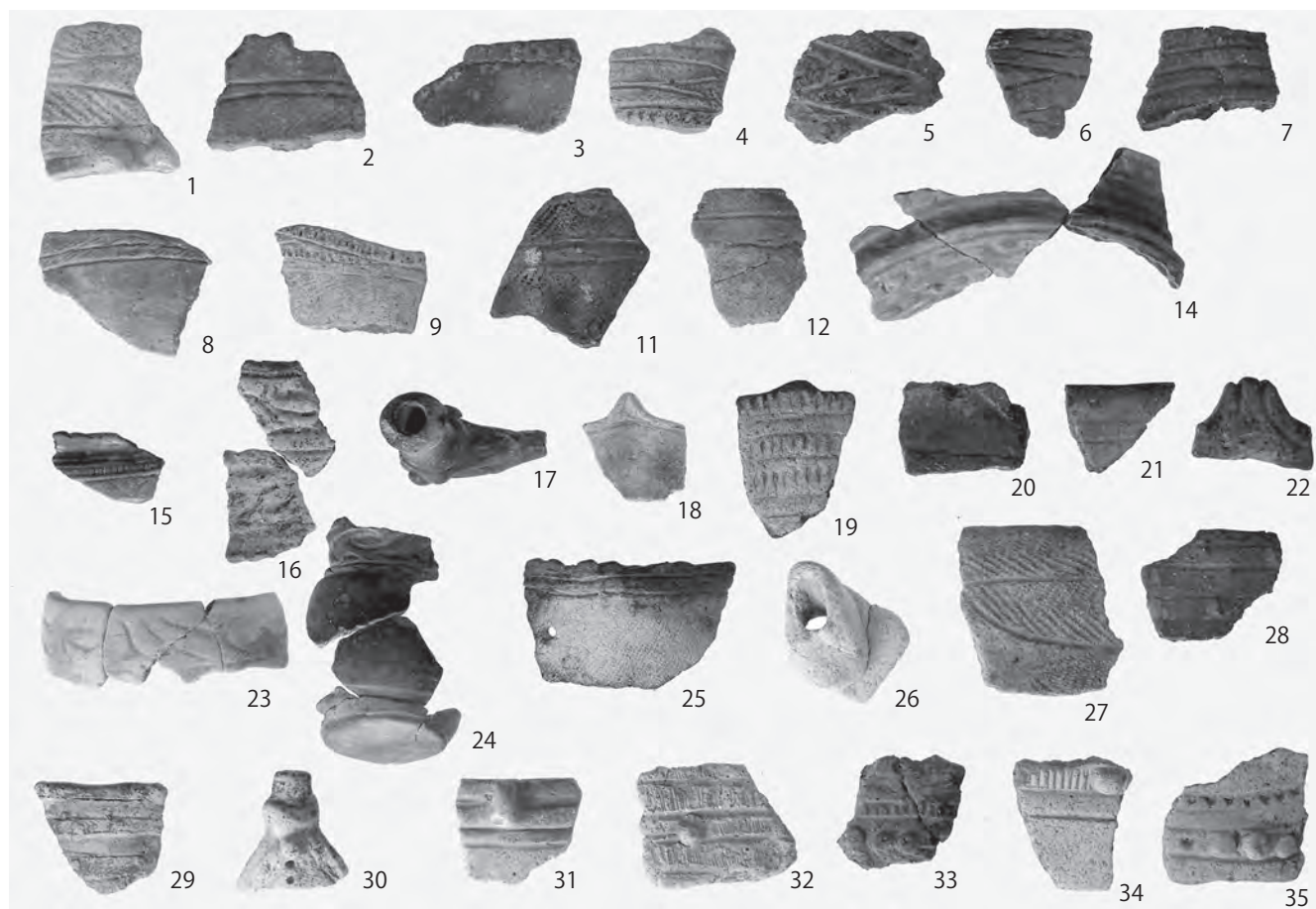
13



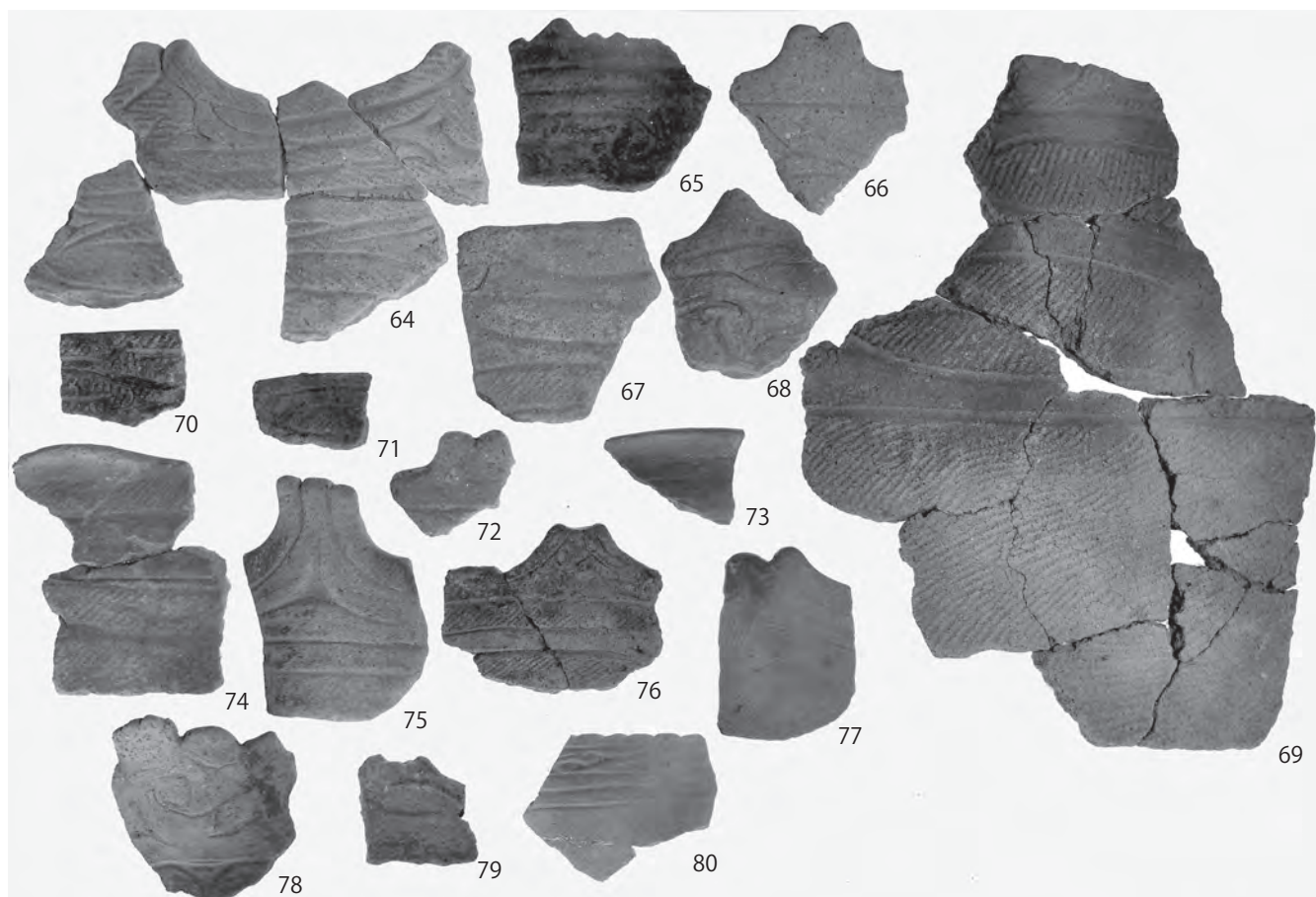
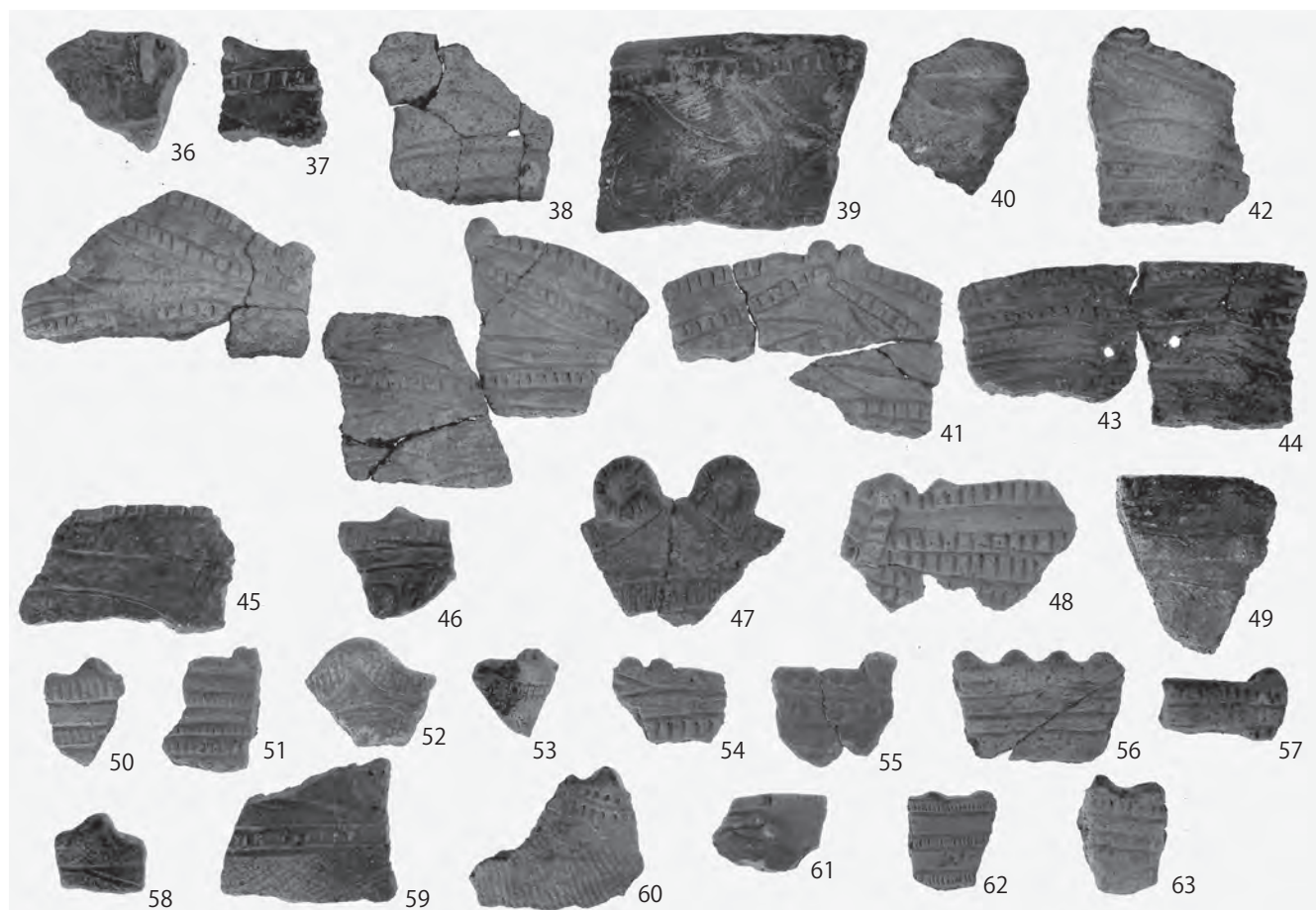
96



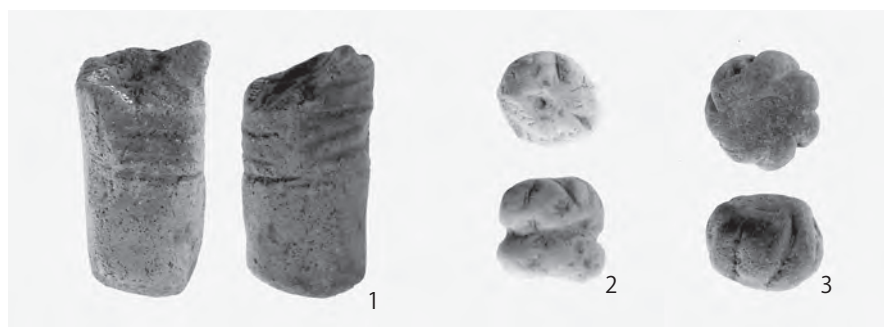
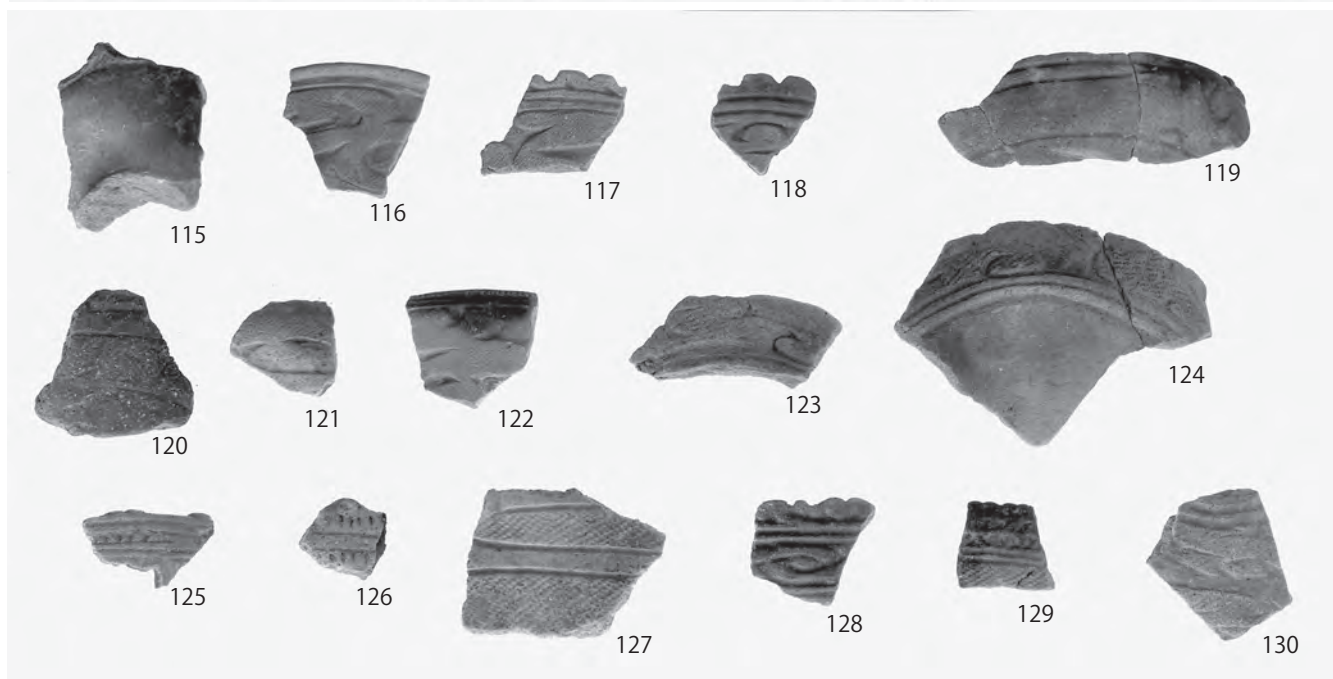
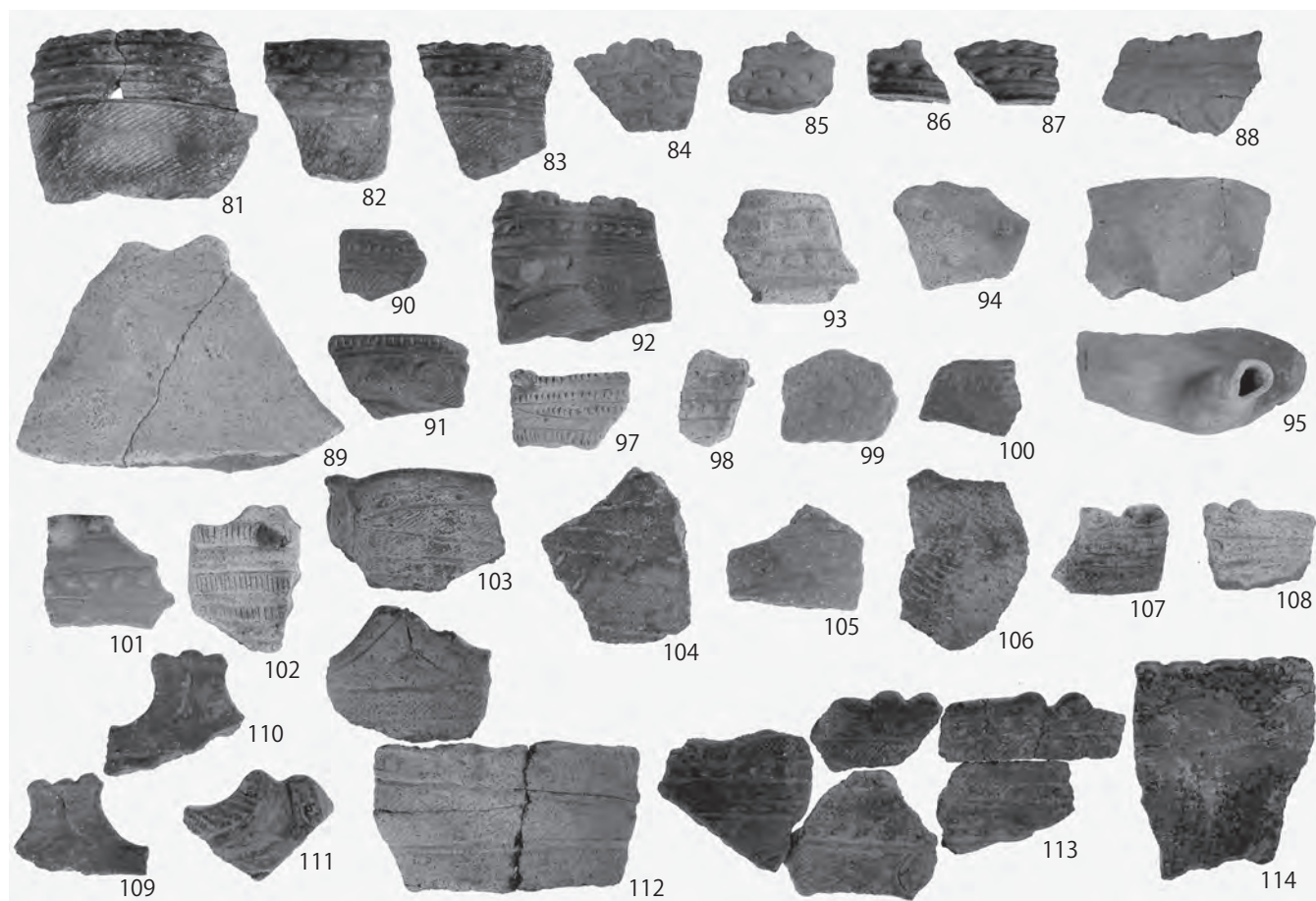
131



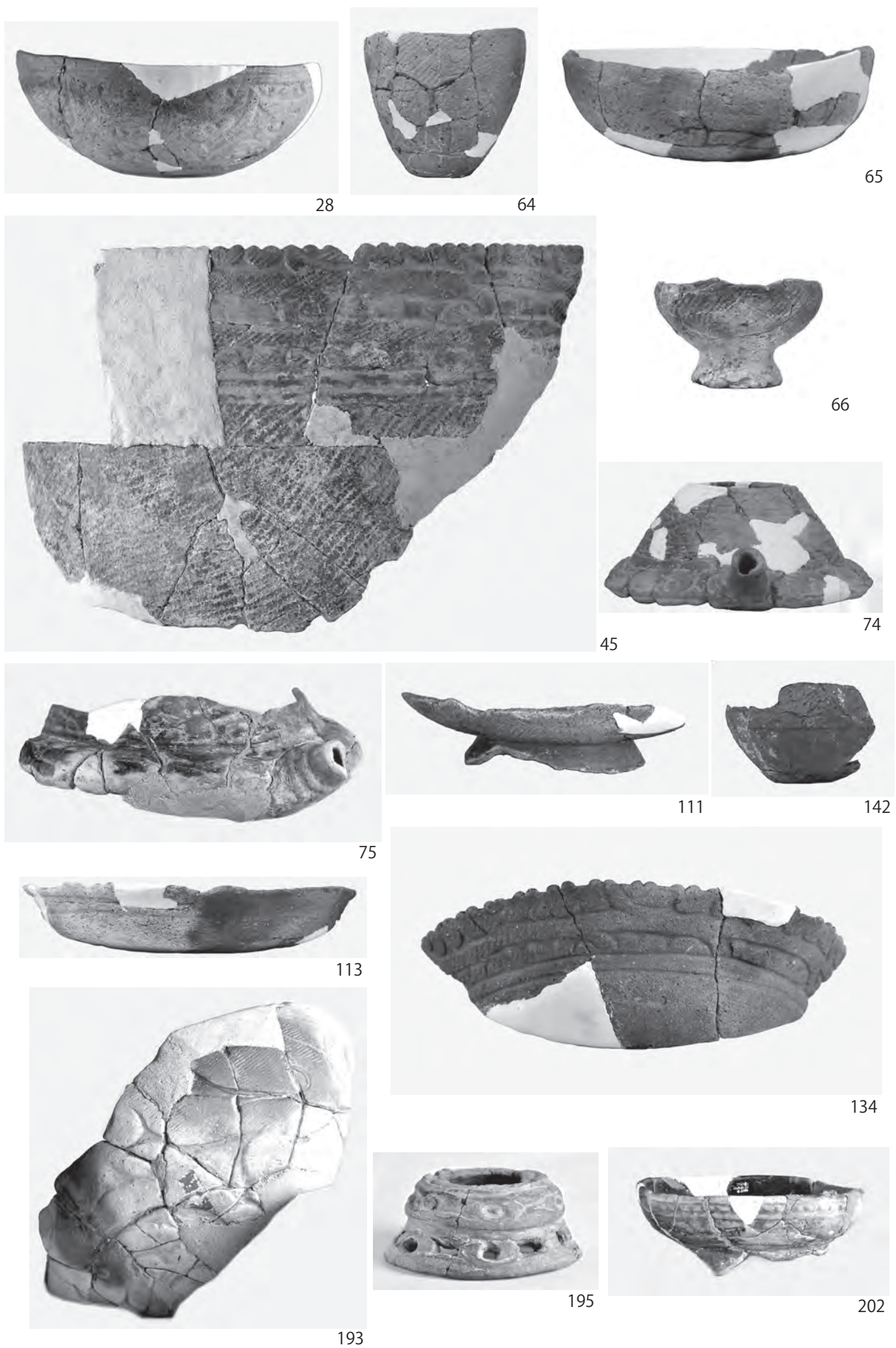
図版 1 中山遺跡 1982 年度発掘調査出土資料・1



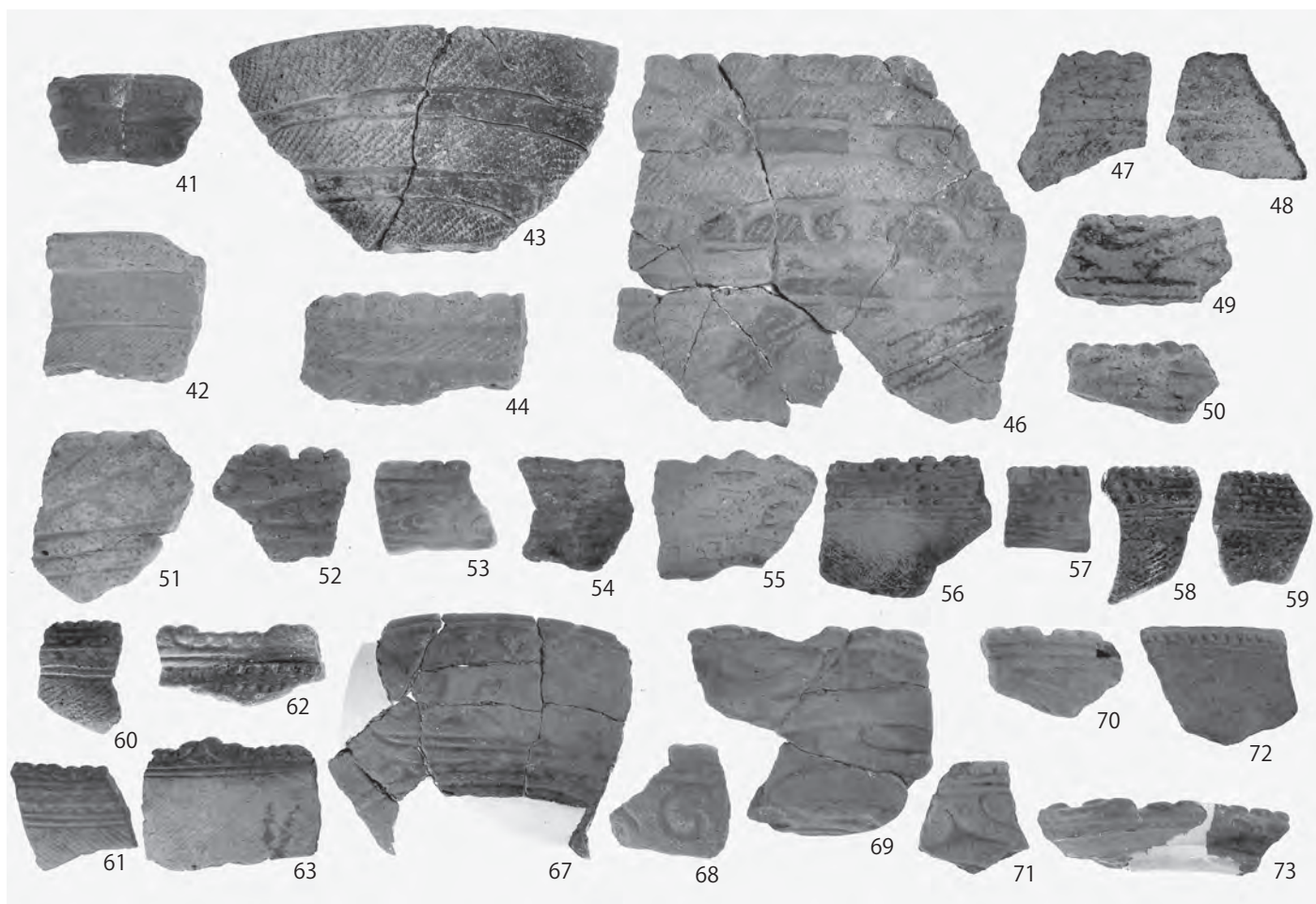
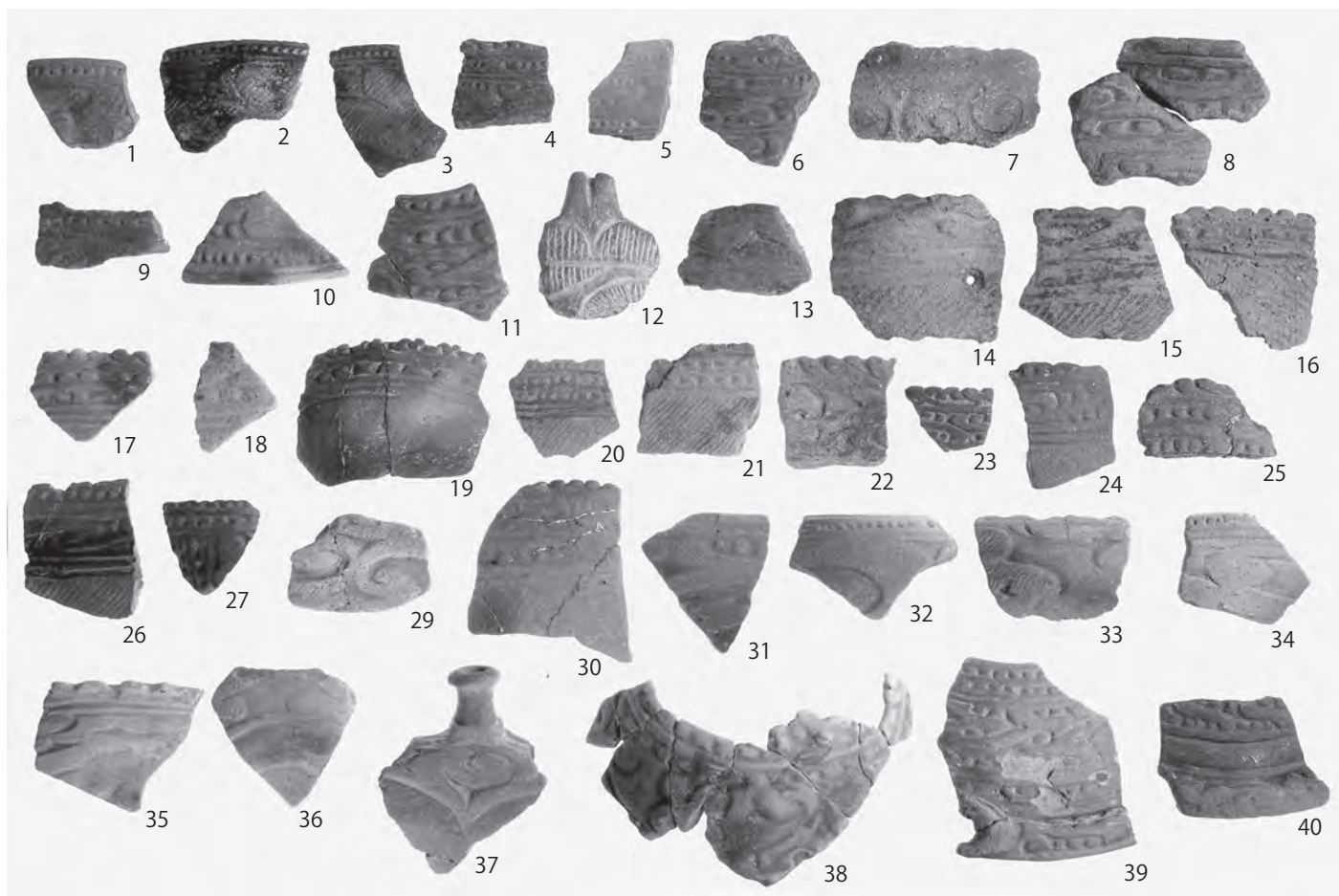
図版 2 中山遺跡 1982 年度発掘調査出土資料・2



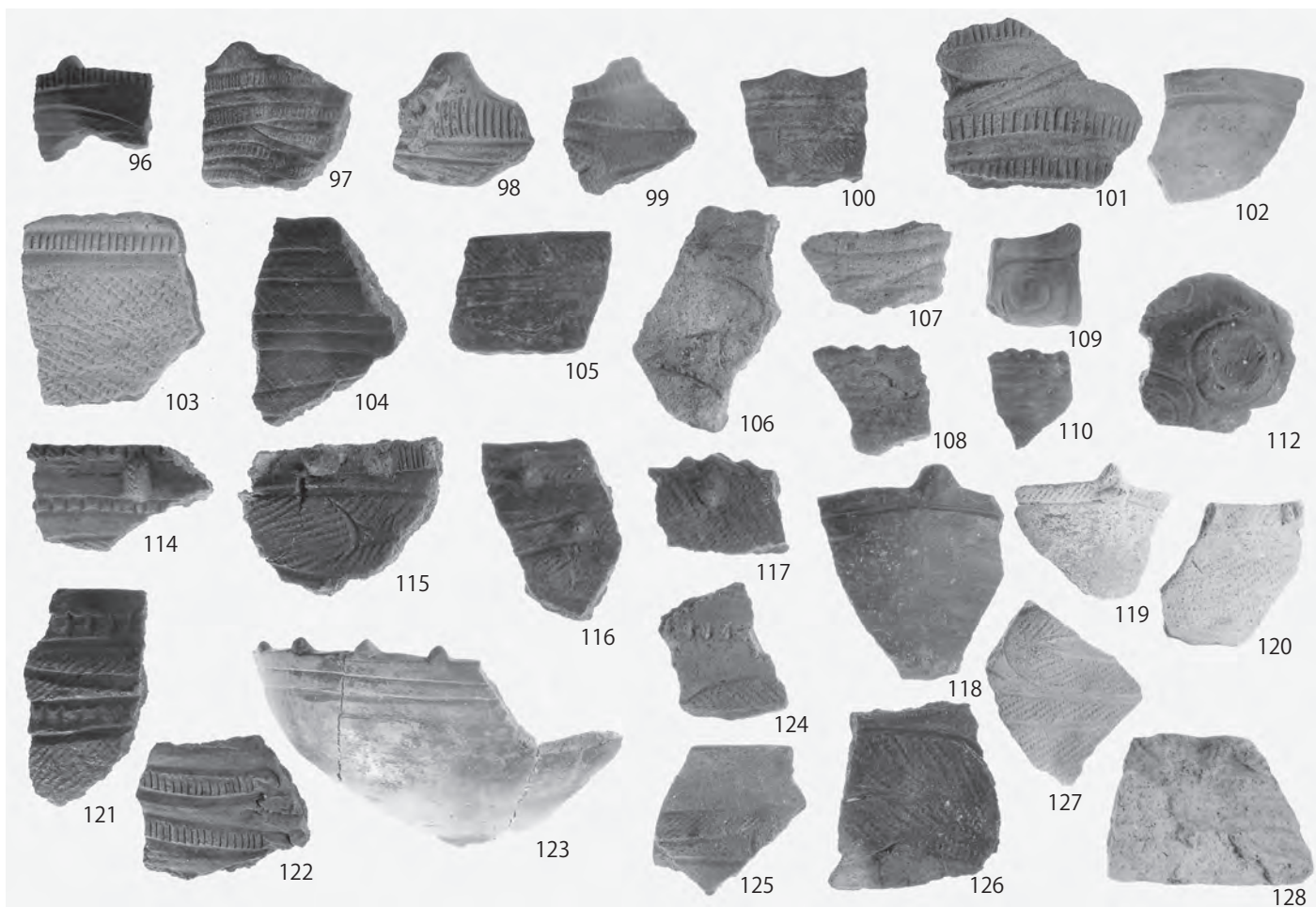
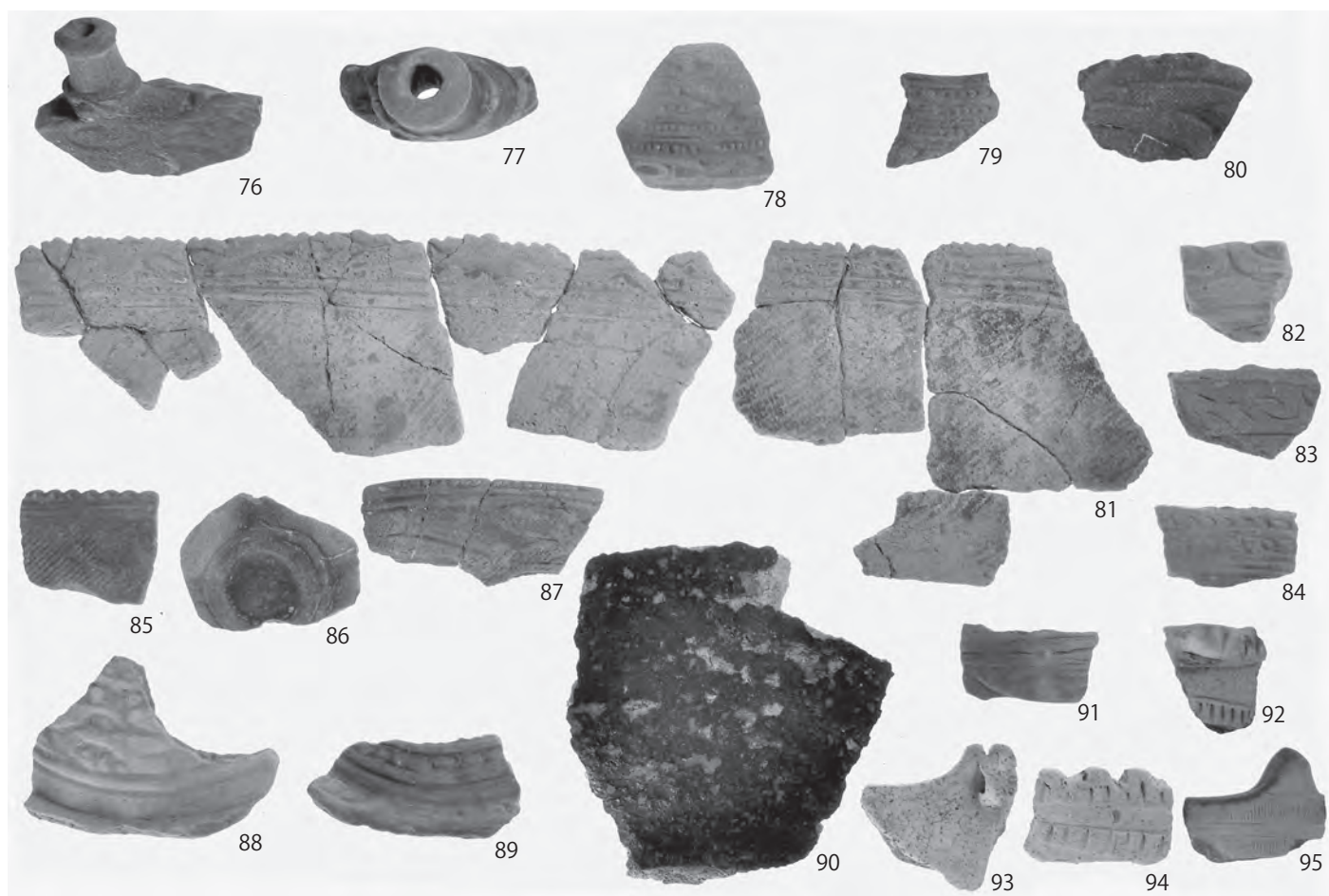
図版 3 中山遺跡 1982 年度発掘調査出土資料・3



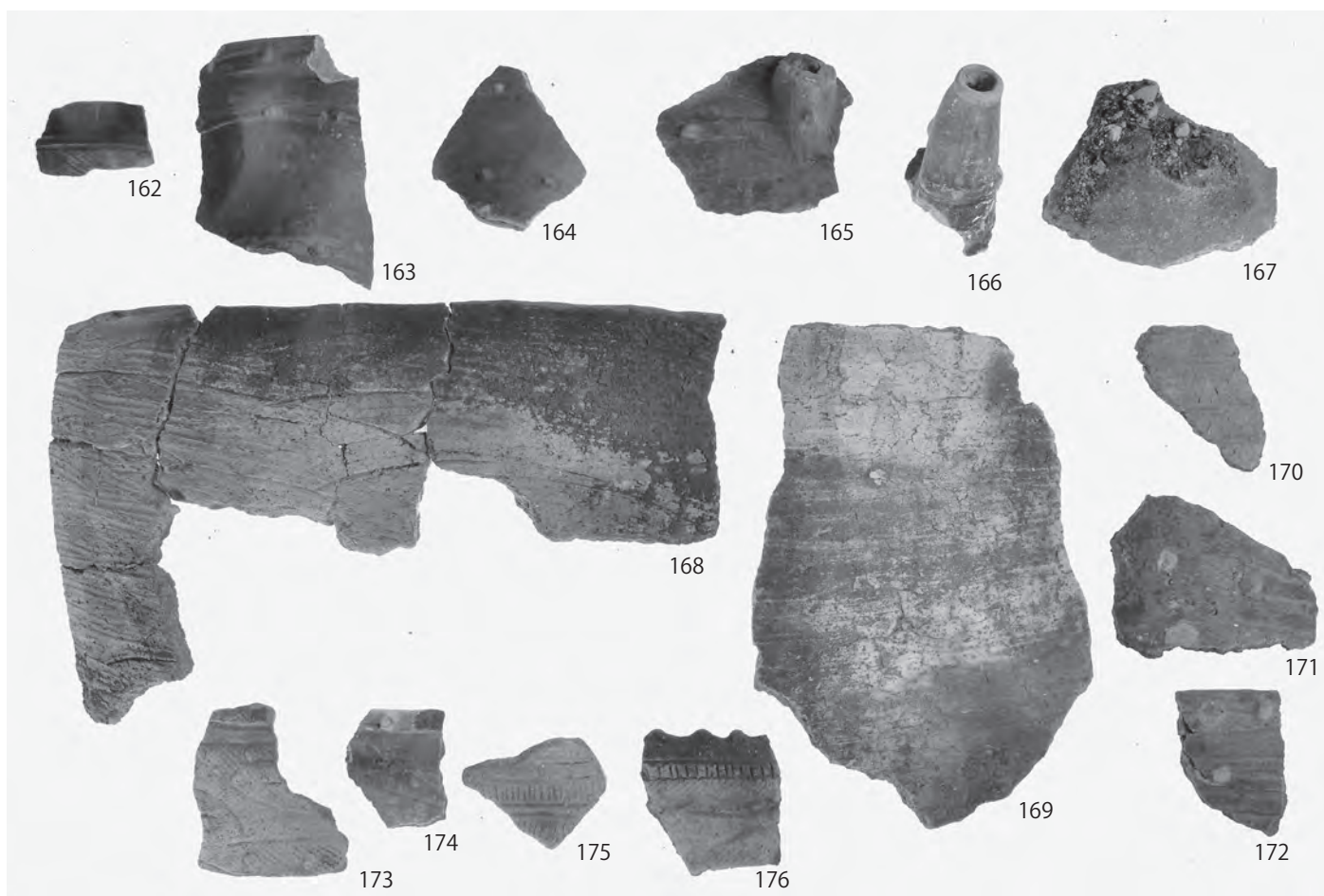
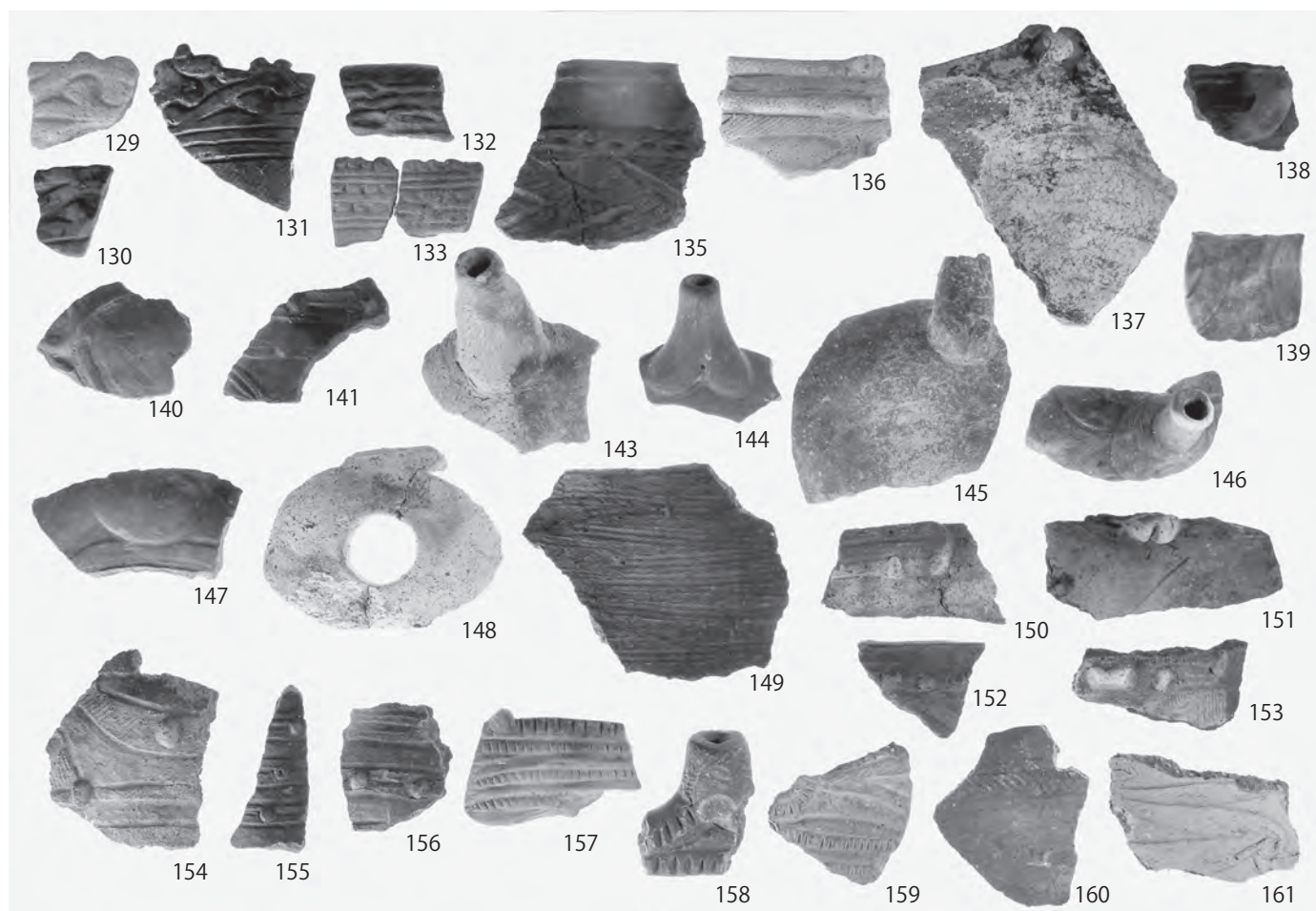
図版4 中山遺跡 1983 年度発掘調査出土資料・1



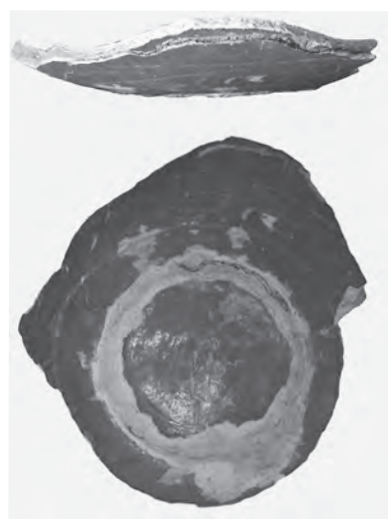
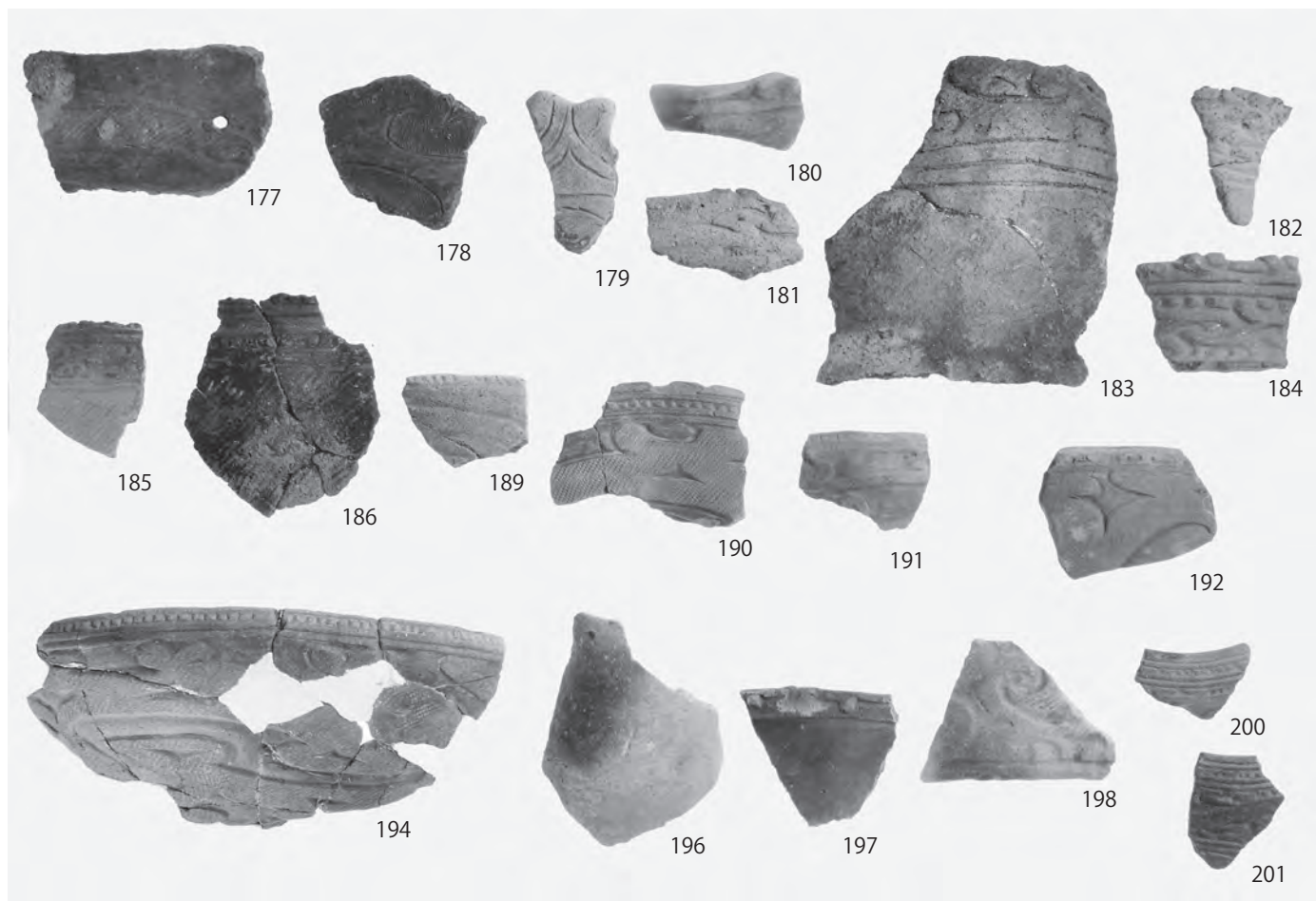
図版 5 中山遺跡 1983 年度発掘調査出土資料・2



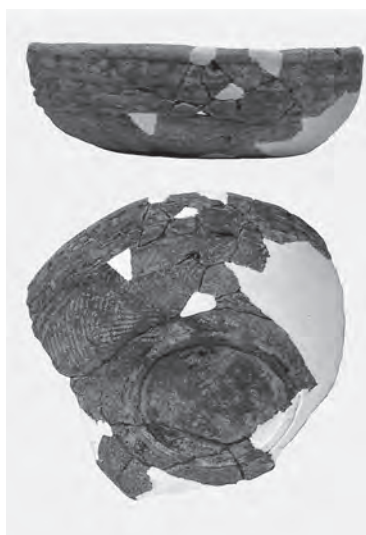
図版6 中山遺跡 1983 年度発掘調査出土資料・3



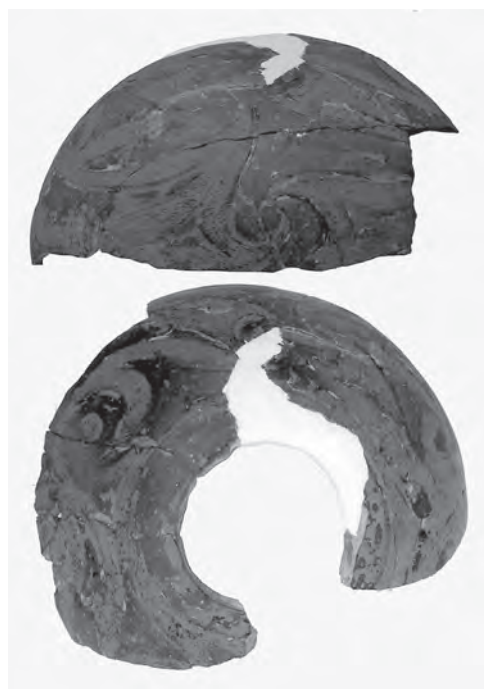
図版 7 中山遺跡 1983 年度発掘調査出土資料・4



187

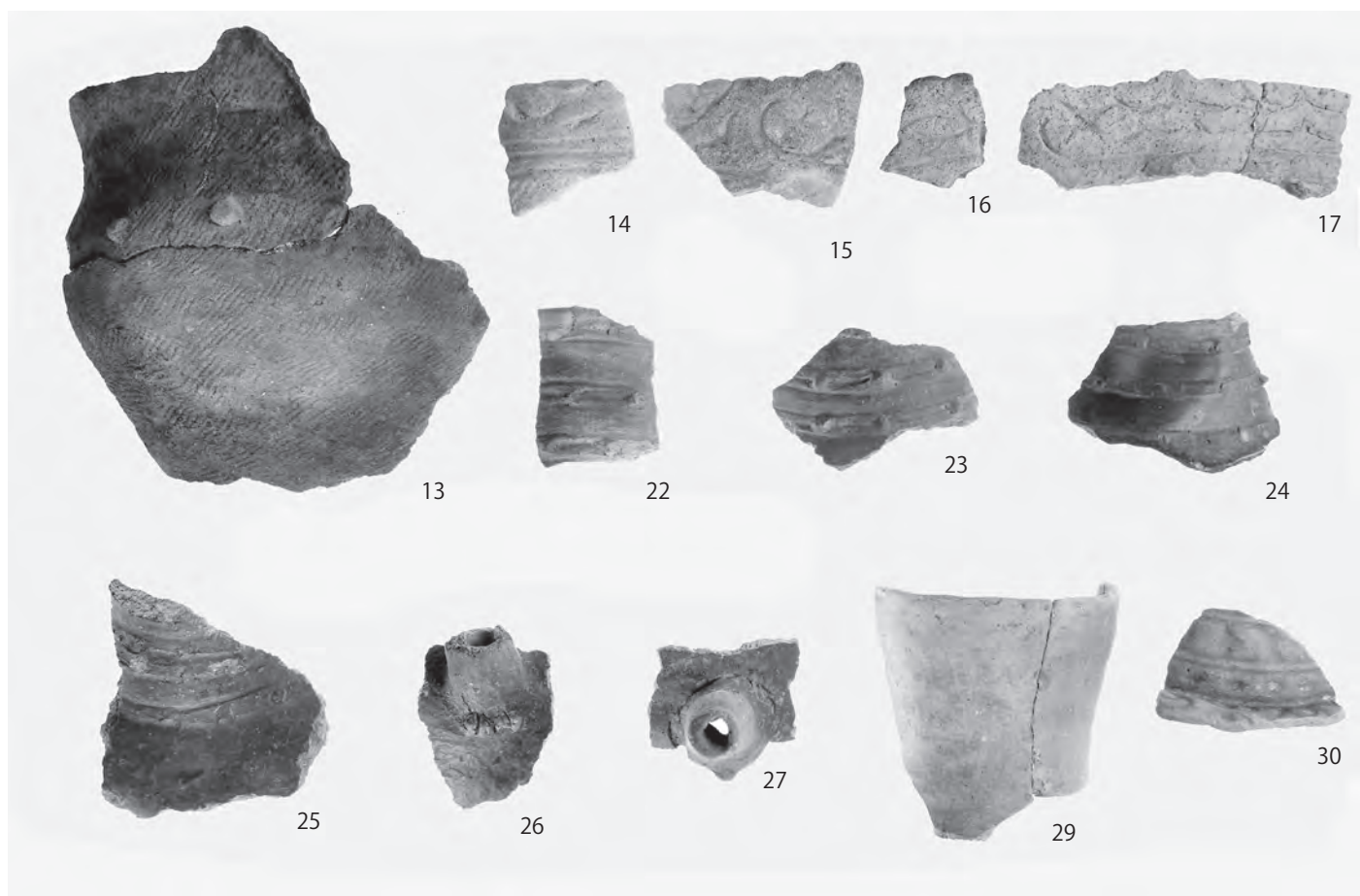
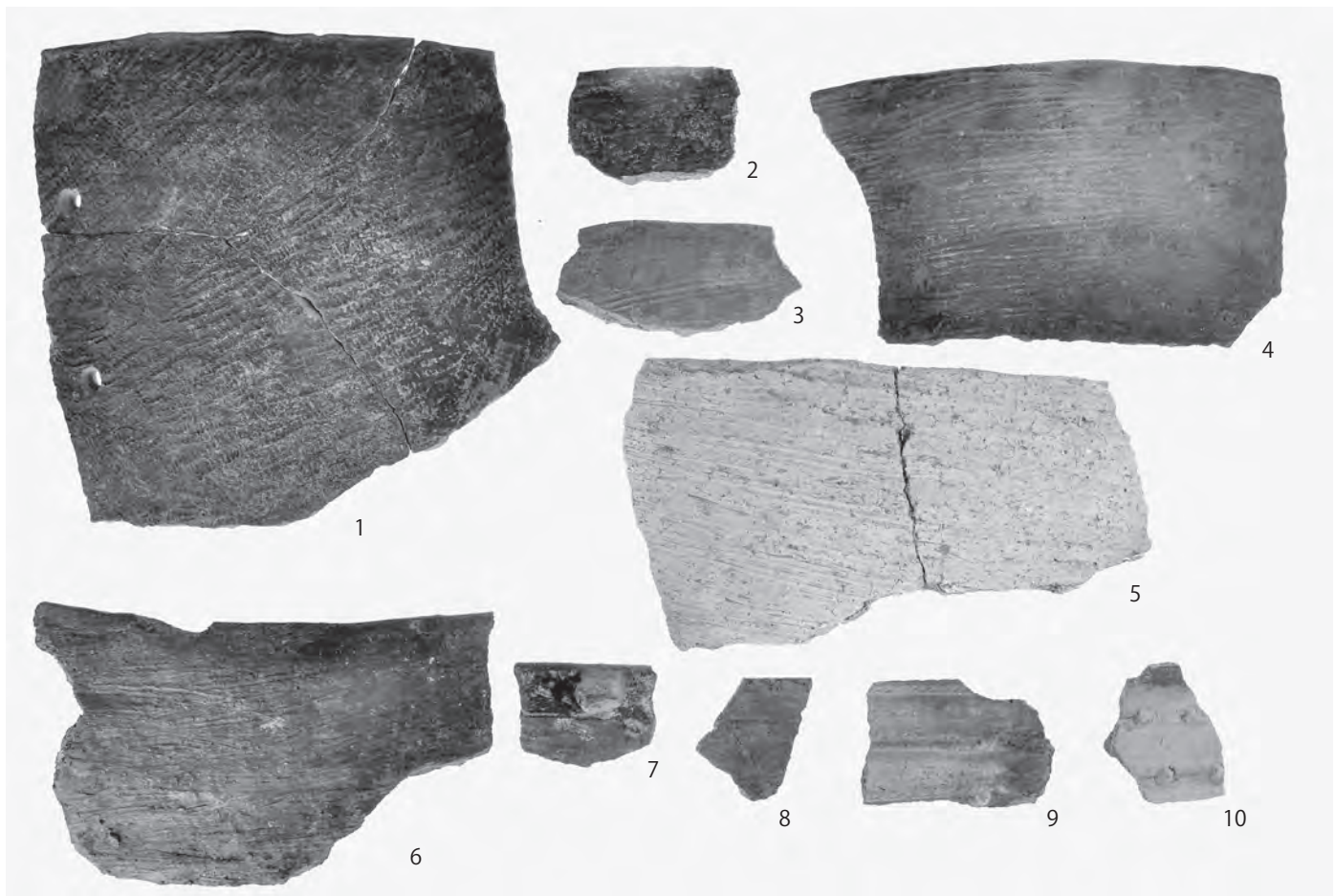


188



199

図版 8 中山遺跡 1983 年度発掘調査出土資料・5



図版9 中山遺跡 1990 年度発掘調査出土資料・1



図版 10 中山遺跡 1990 年度発掘調査出土資料・2 未注記資料



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

図版 11 館岡コレクション中山遺跡出土資料



1



2



3



4



5



6



7



8

図版 12 潟上市郷土文化保存伝習館蔵考古資料



図版 13 高石野遺跡出土土器・1



16



17



18



19



21



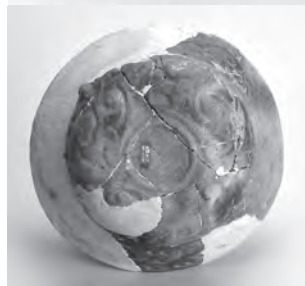
22



20



23



24

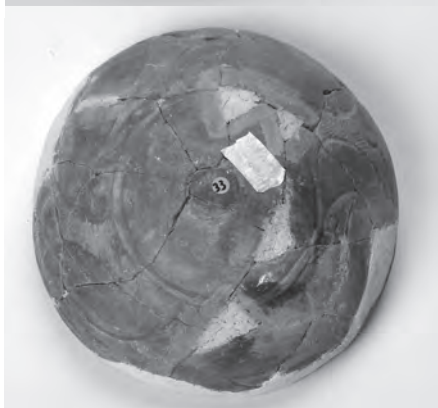


25



26

図版 14 高石野遺跡出土土器・2



27

28



31

30



32



33

29

図版 15 高石野遺跡出土土器・3



34



36



37



35



38



39



40



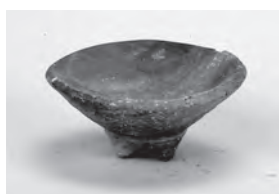
41



42



43

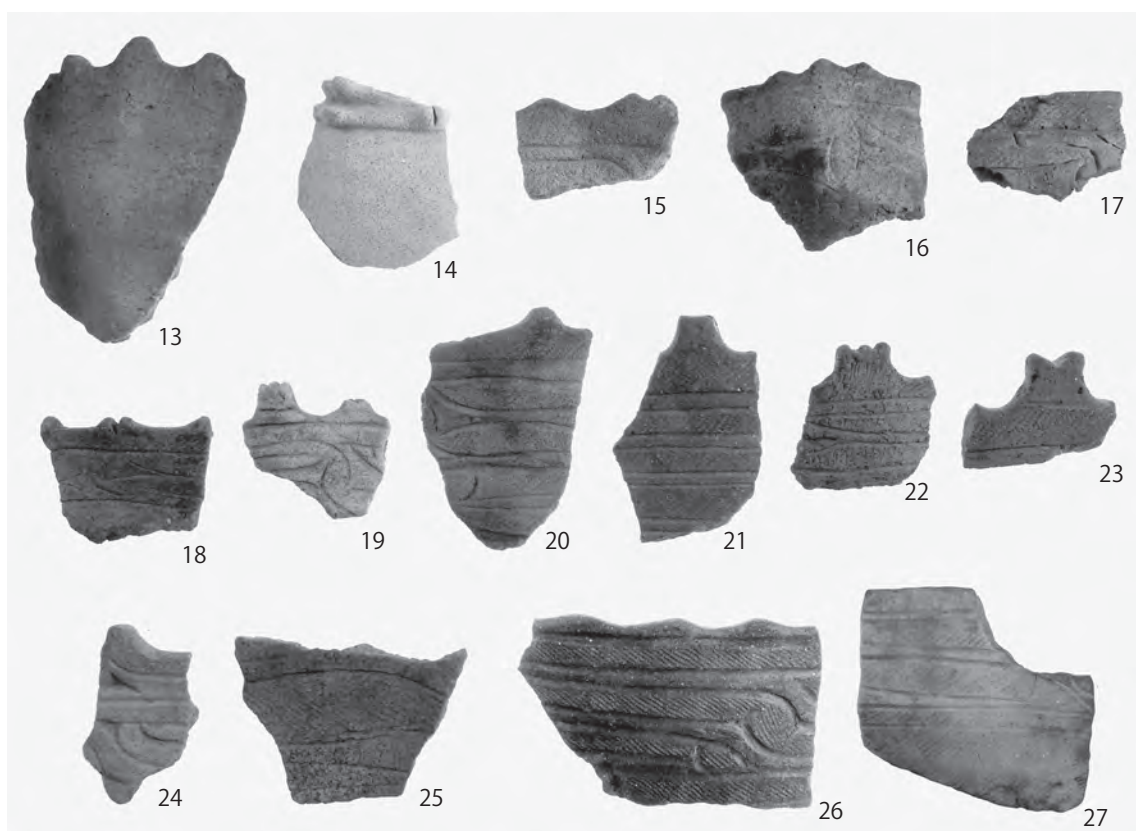
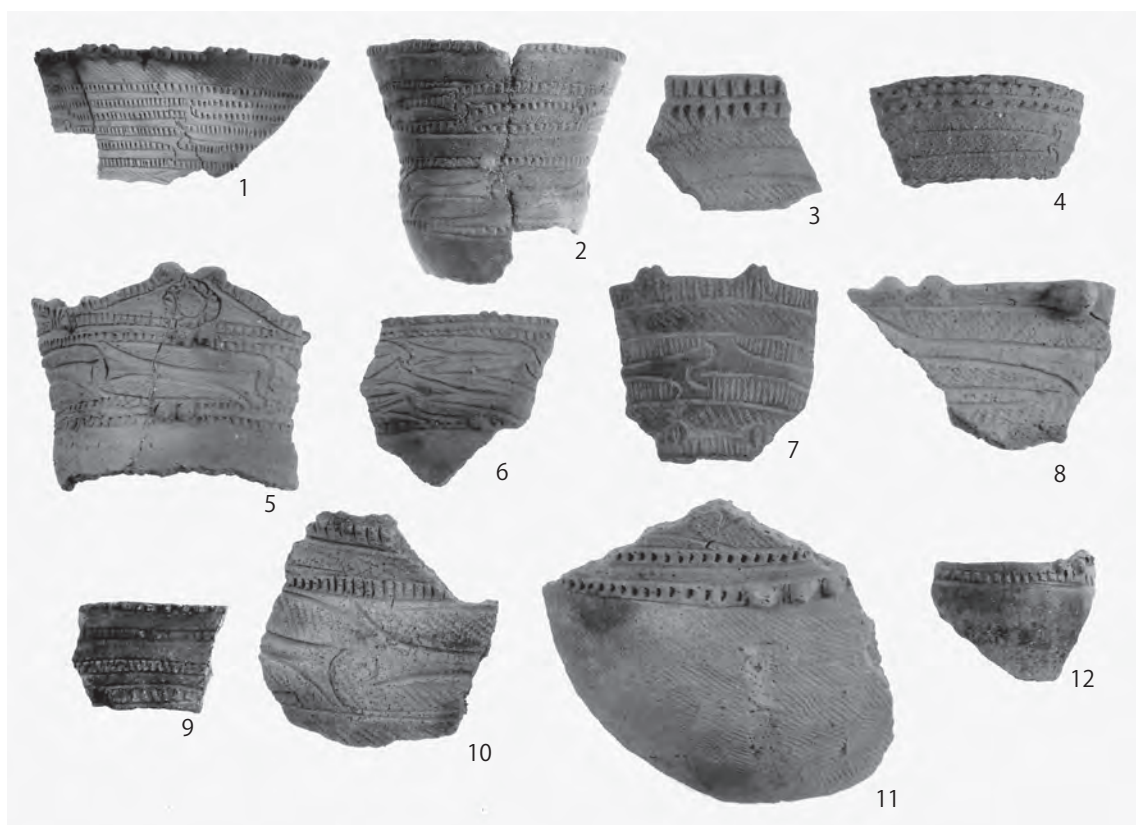


44

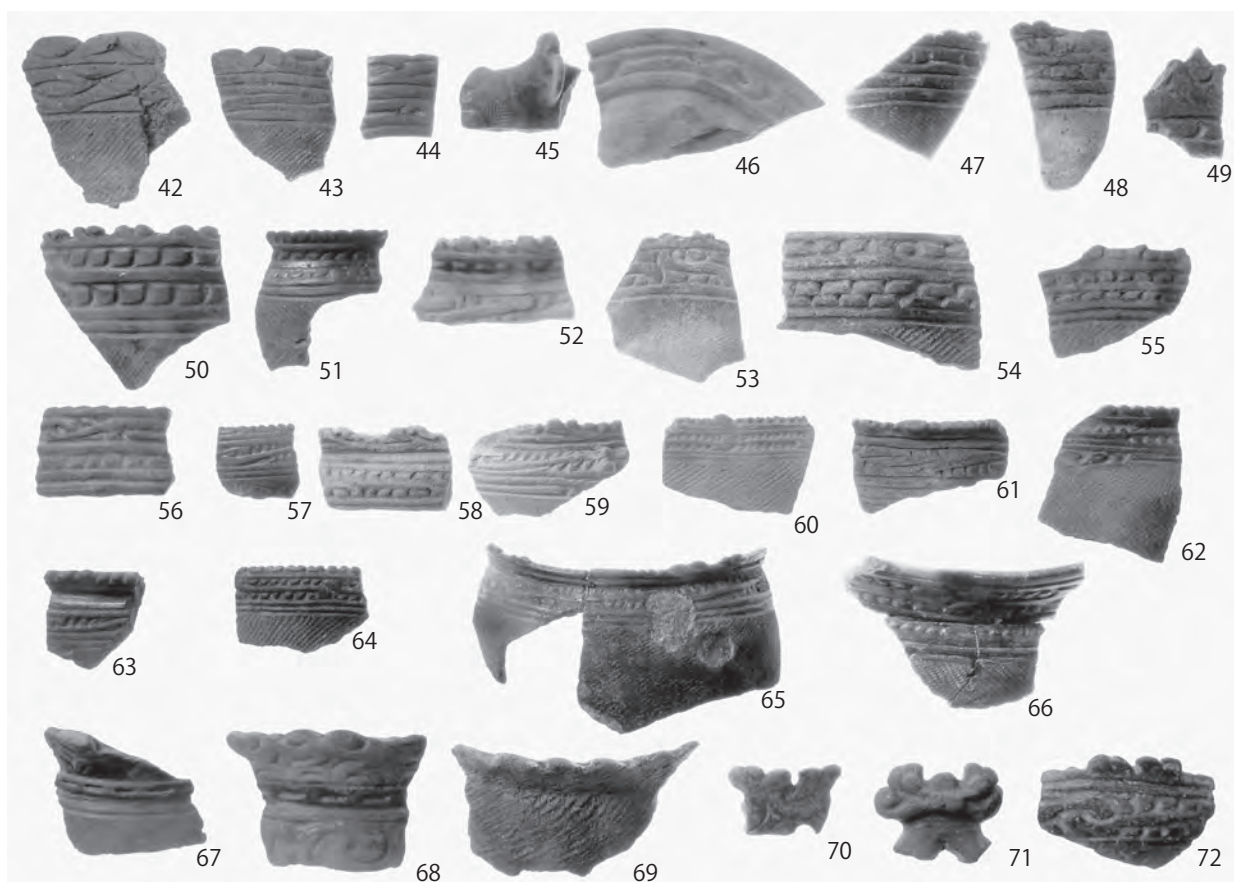
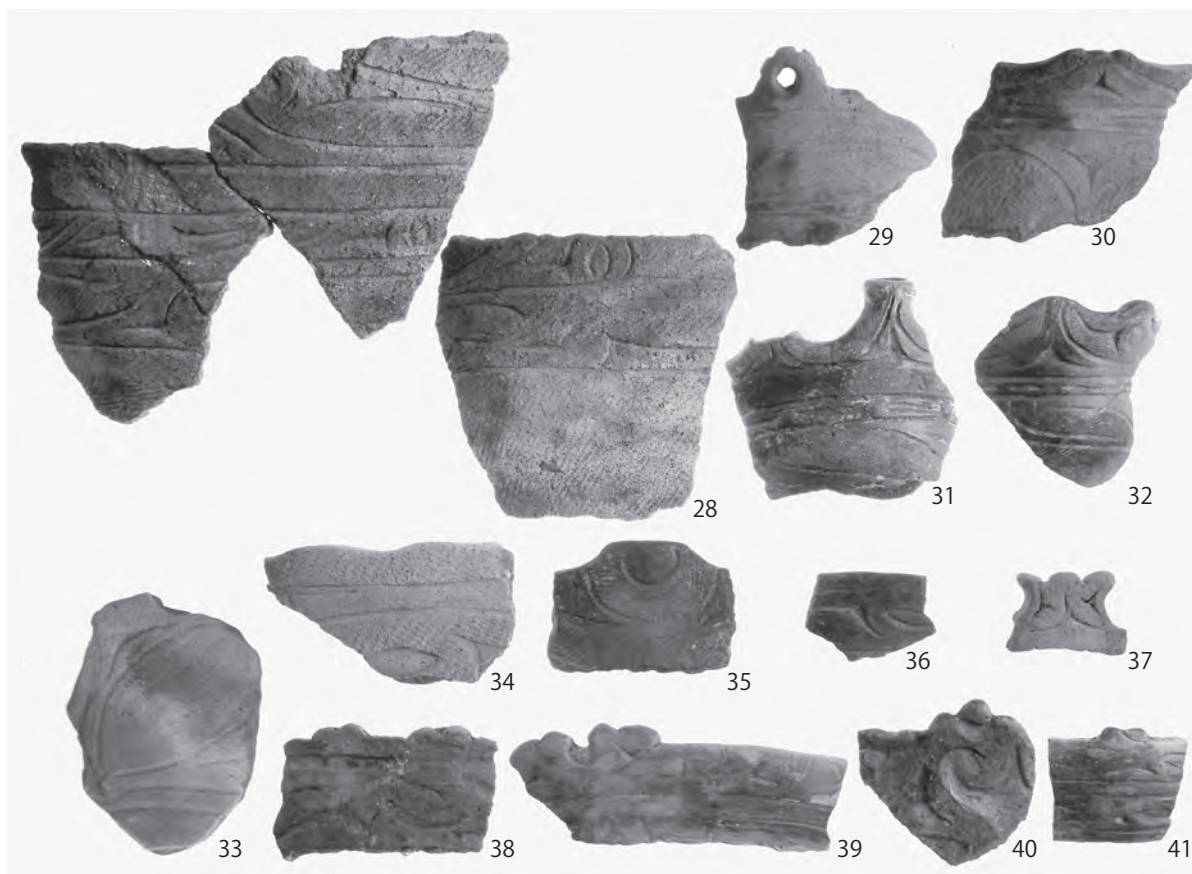


45

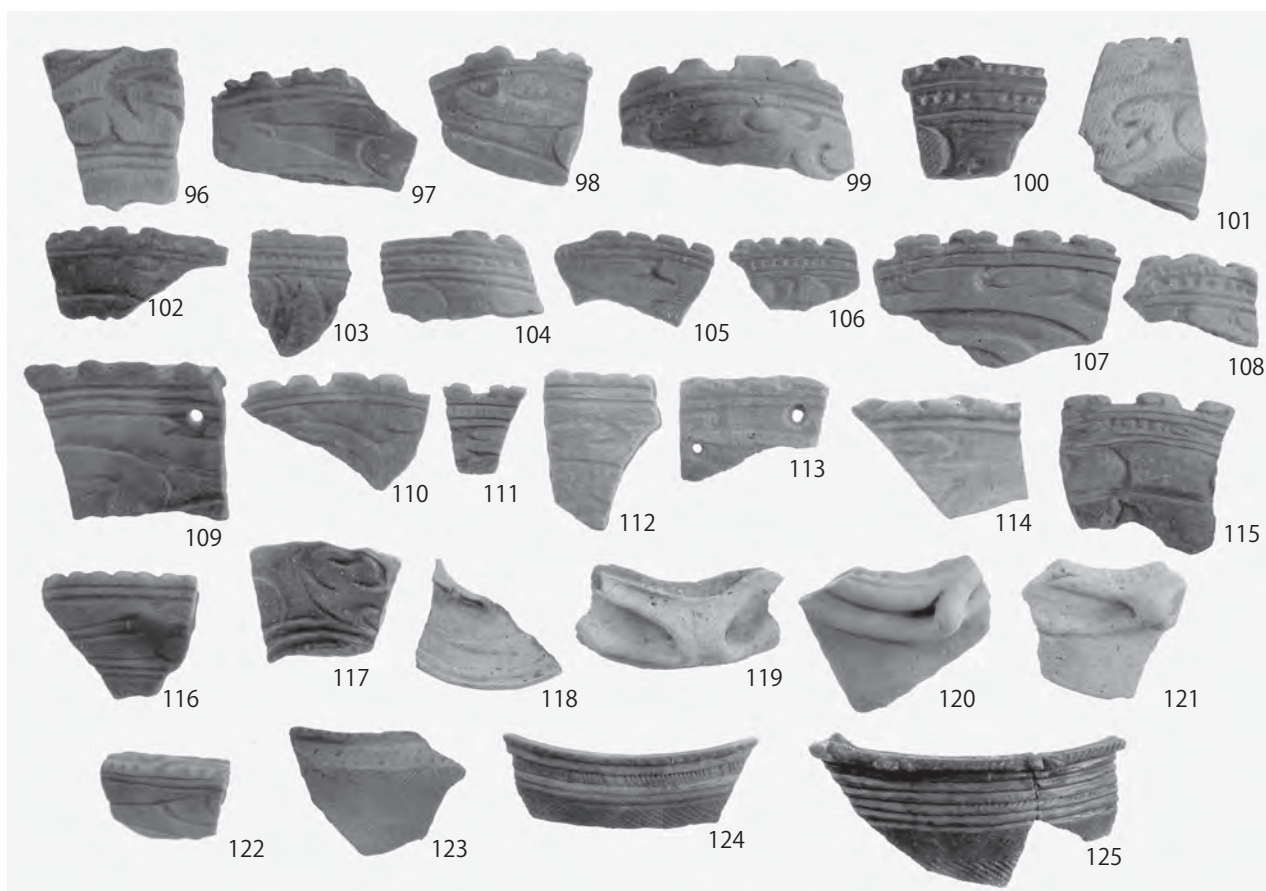
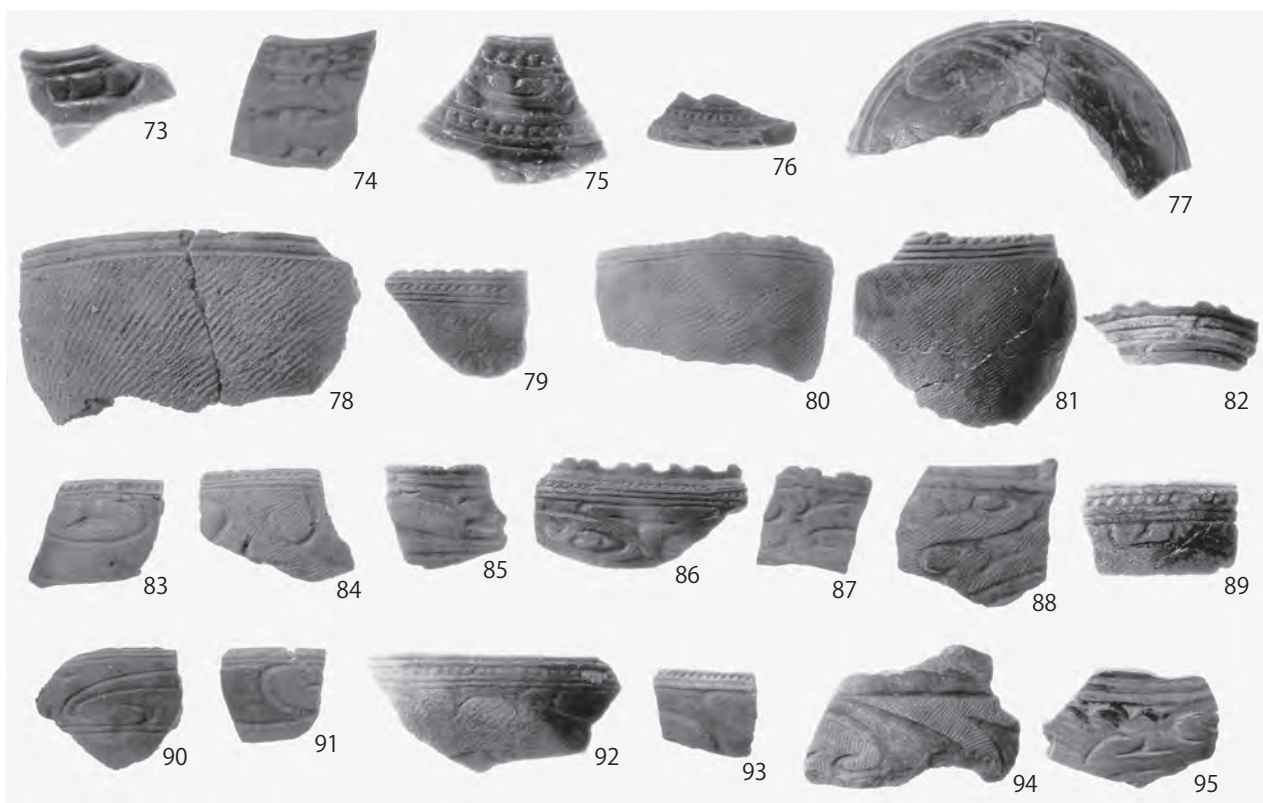
図版 16 高石野遺跡出土土器・4



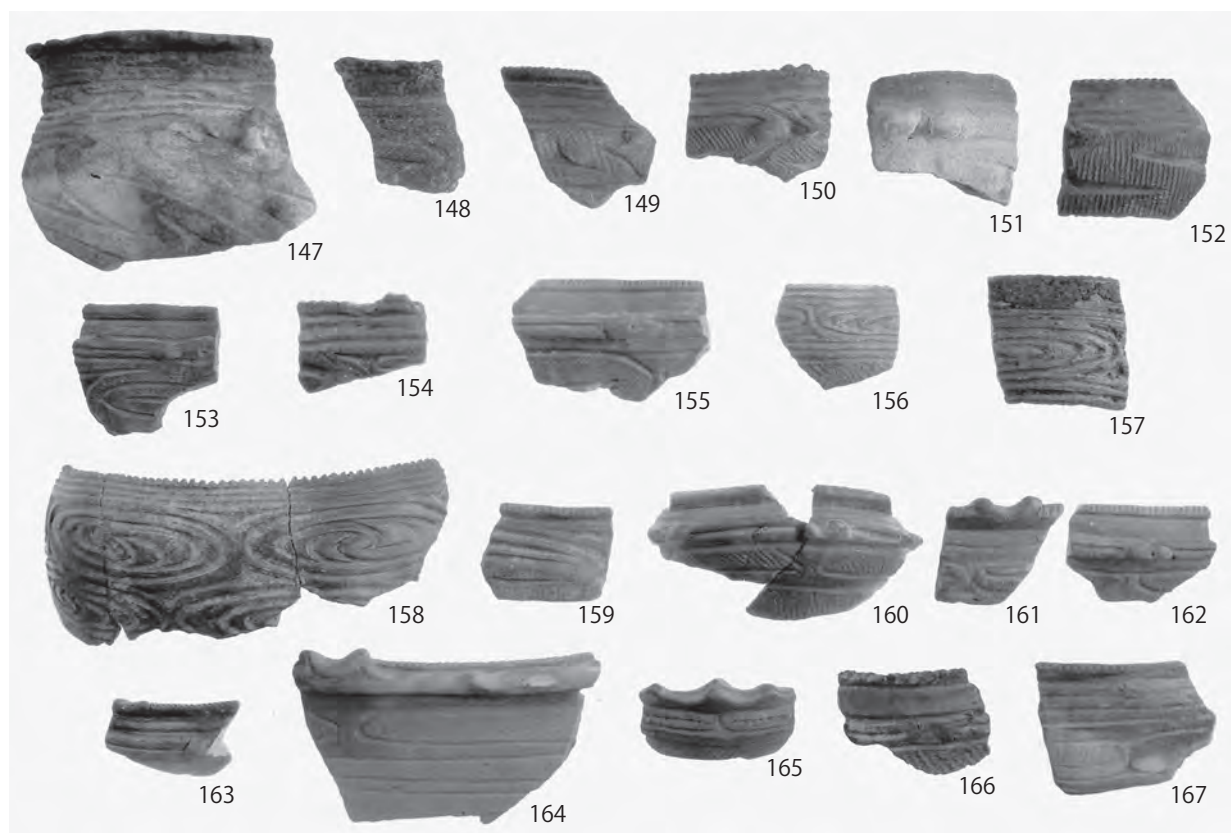
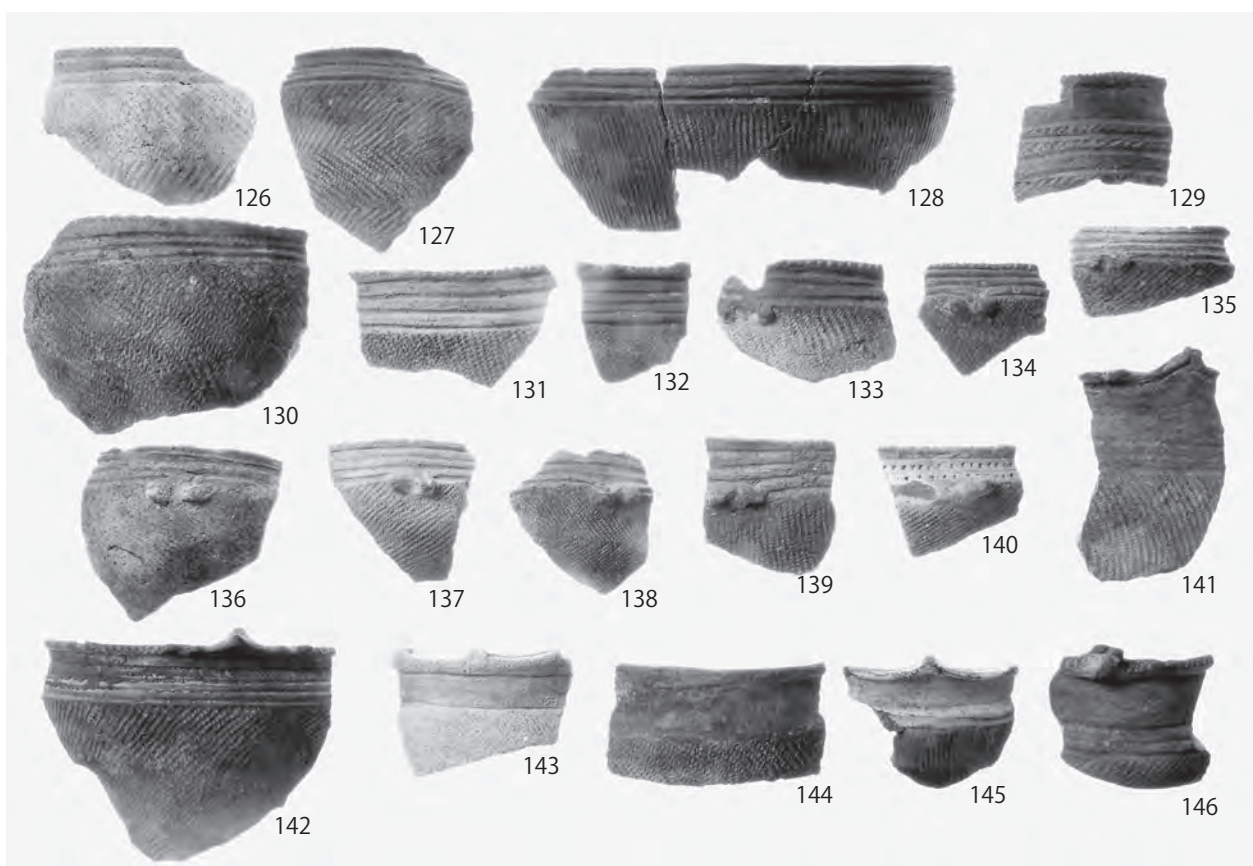
図版 17 高石野遺跡出土土器（破片）・1



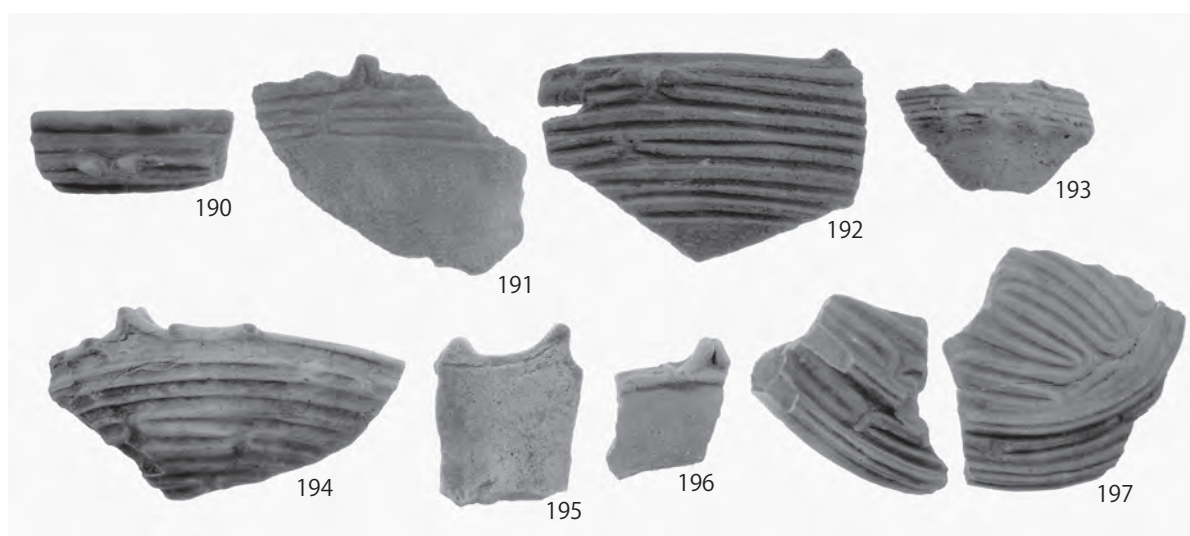
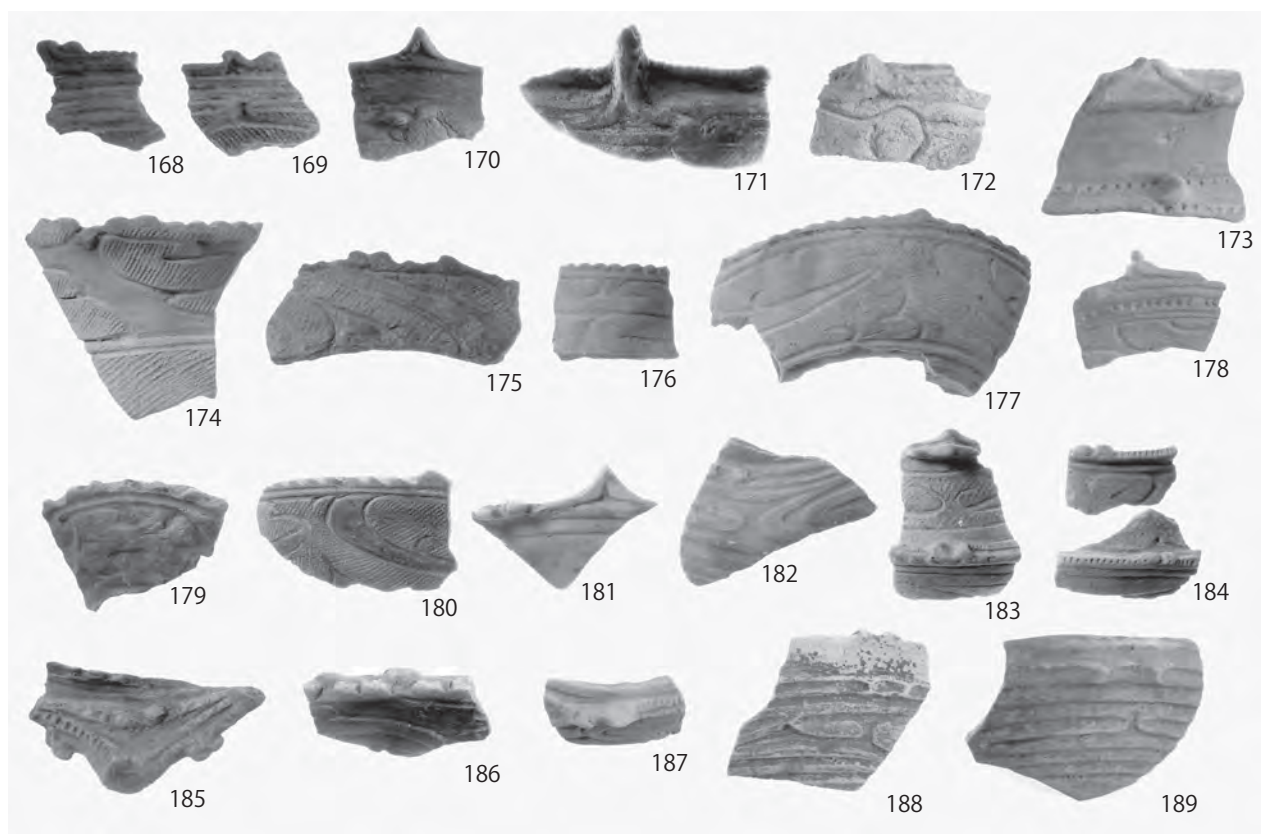
図版 18 高石野遺跡出土土器（破片）・2



図版 19 高石野遺跡出土土器（破片）・3



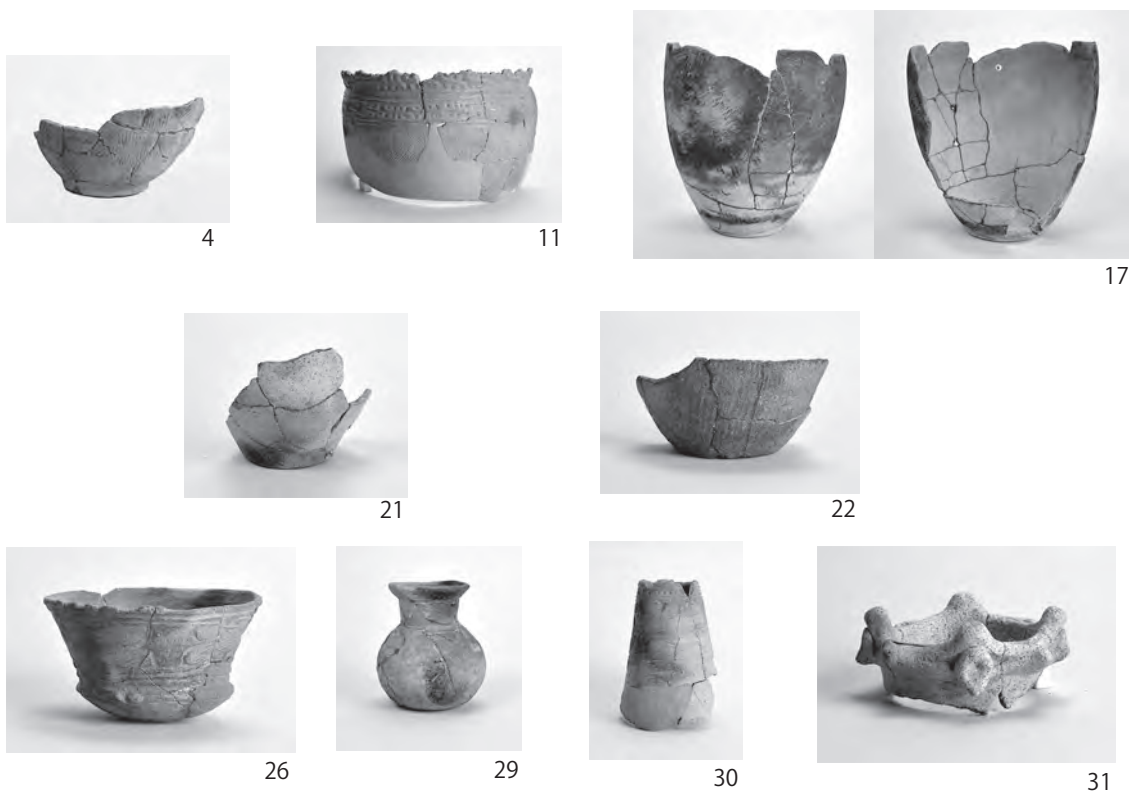
図版 20 高石野遺跡出土土器（破片）・4



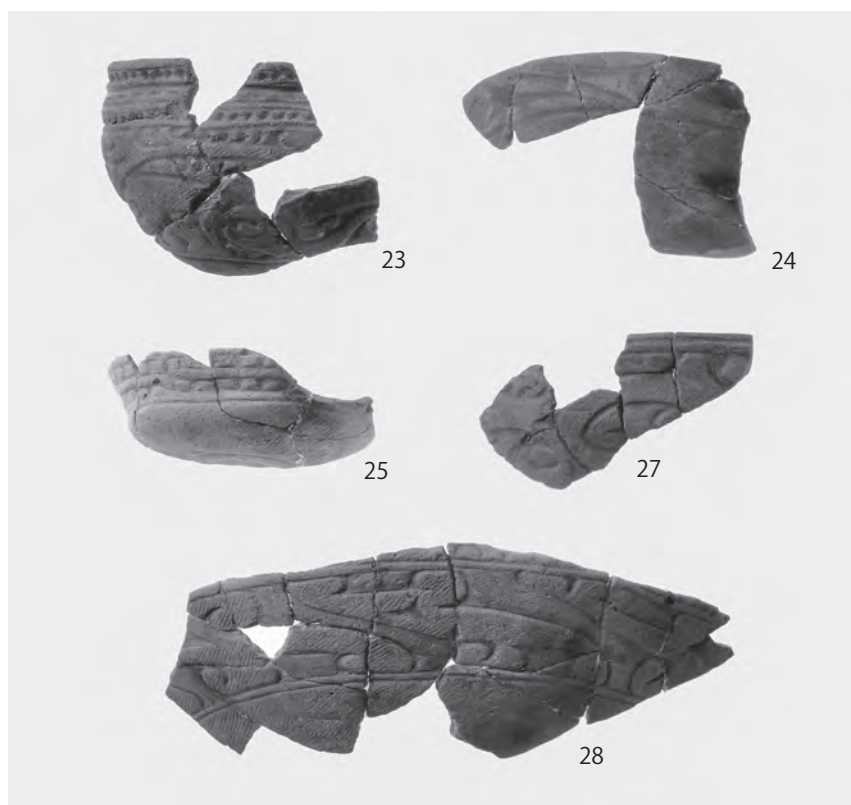
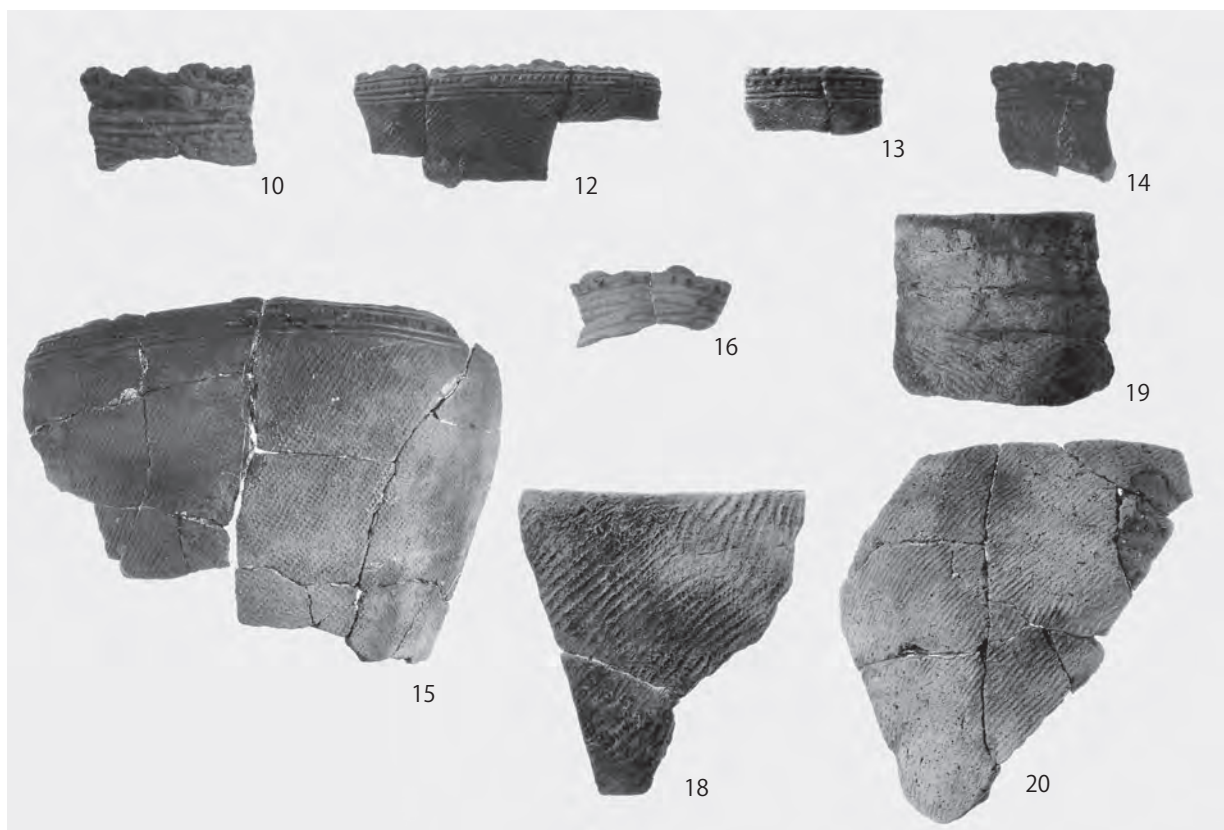
図版 21 高石野遺跡出土土器（破片）・5



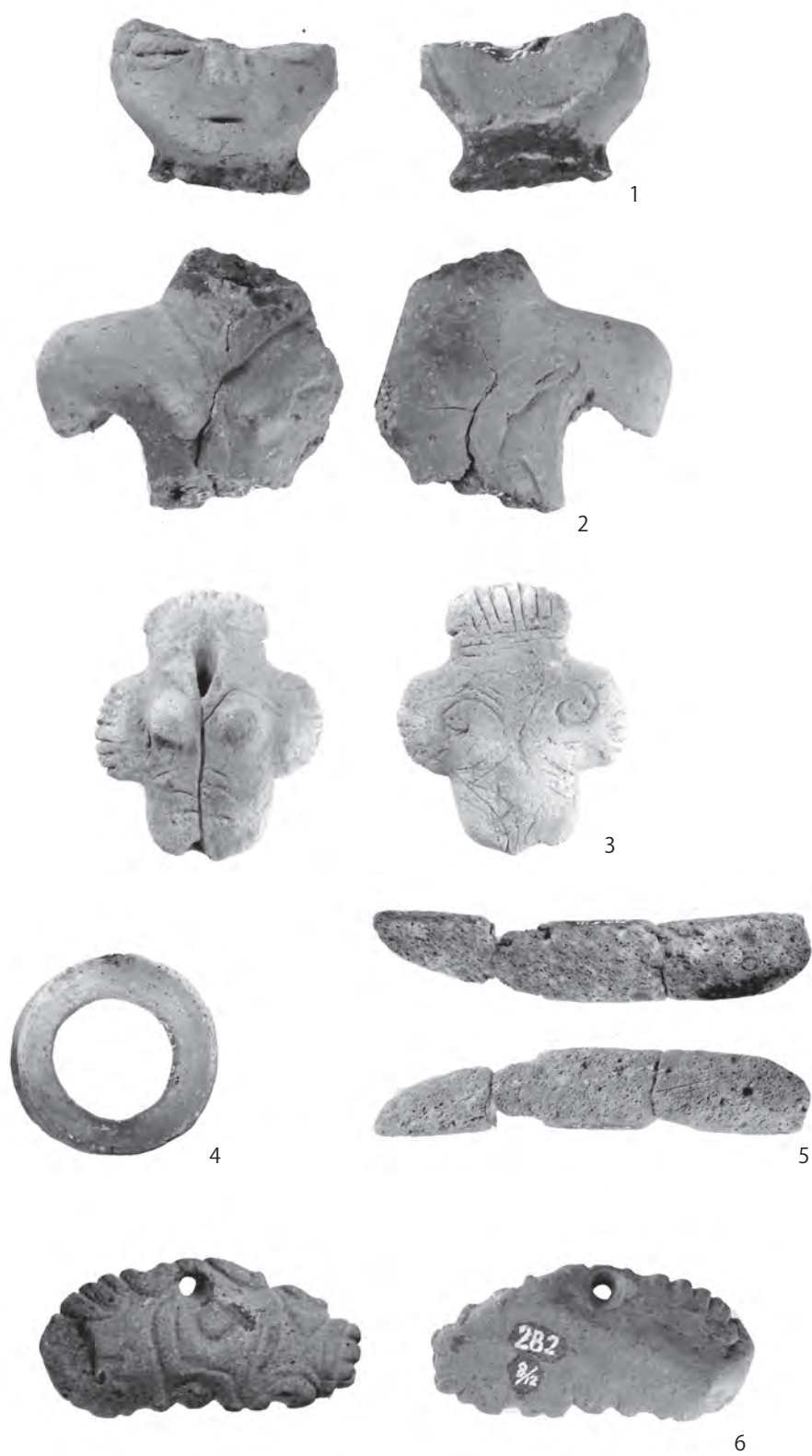
図版 22 高石野遺跡出土土製品・石製品



図版 23 大沢 I 遺跡出土土器・1



図版 24 大沢 I 遺跡出土土器・2



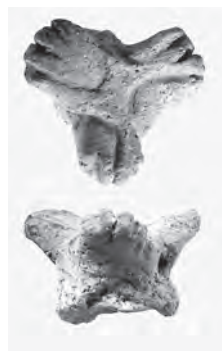
図版 25 大沢 I 遺跡出土土製品・石製品



11 (1898)



12 (1895)



13 (1840)



14 (1907)



16



15 (1900)



(1827)



(1827)

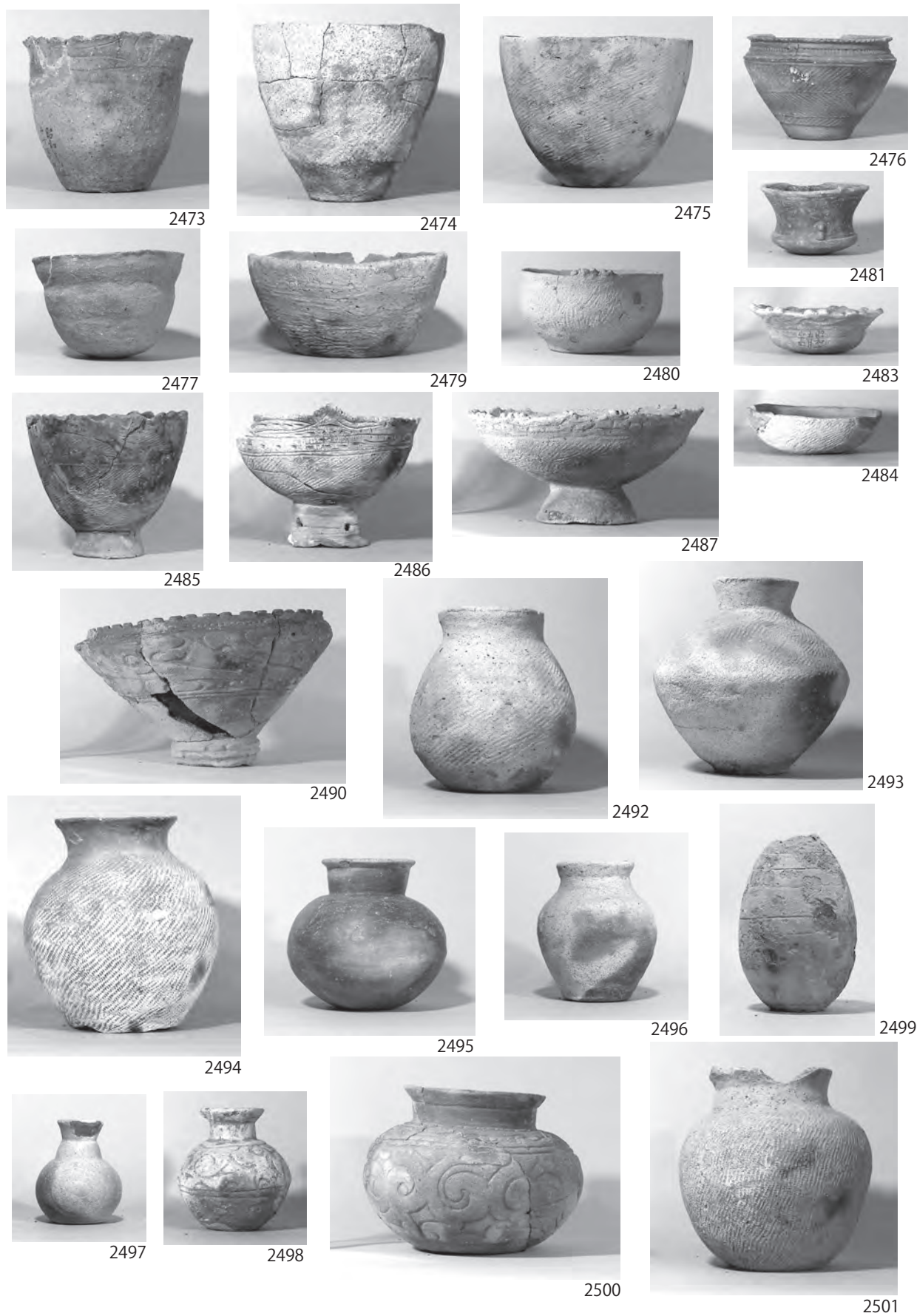


(1827)



(1827)

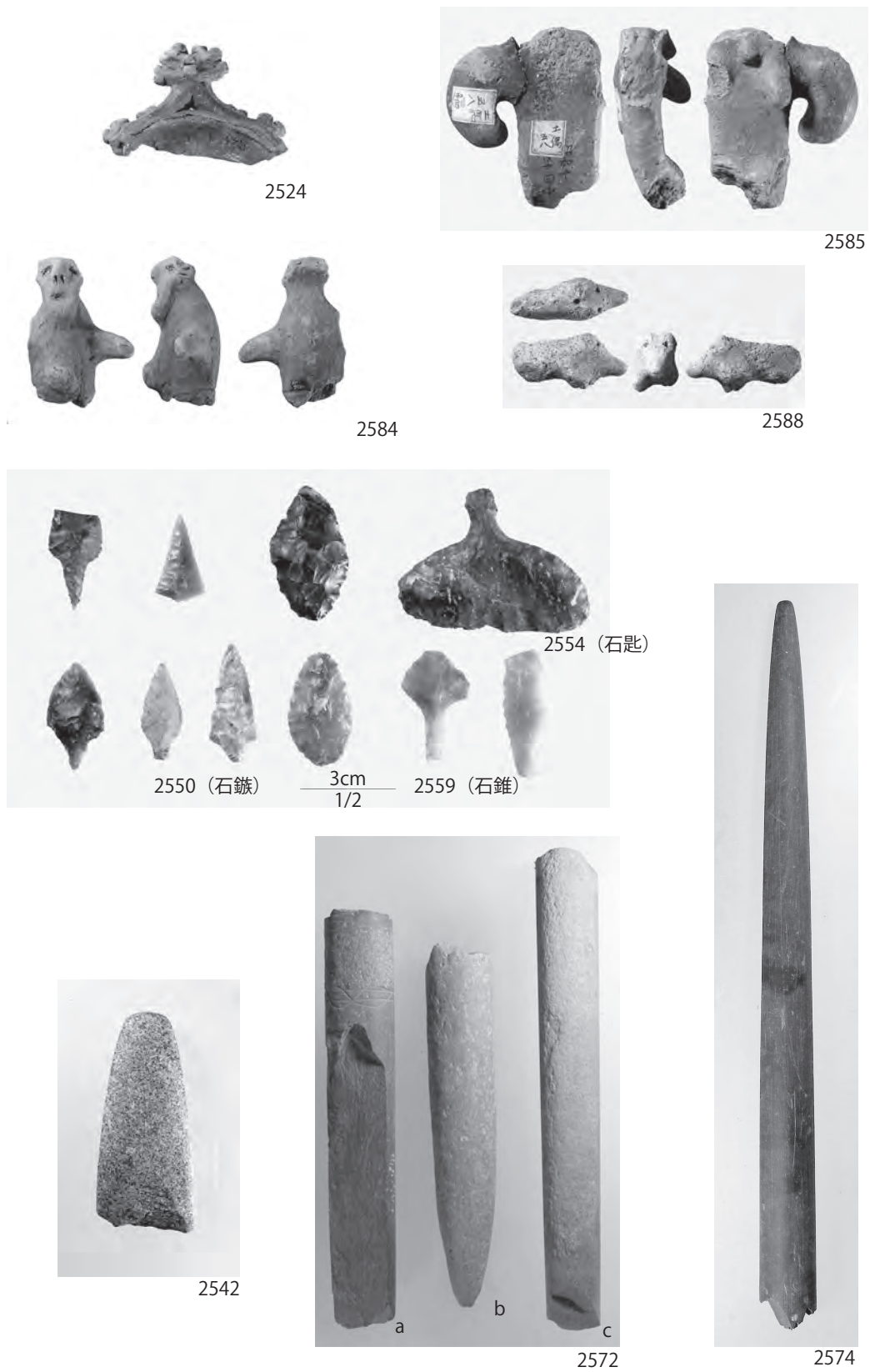
図版 26 佐藤初太郎旧蔵大沢 I 遺跡出土資料 (秋田県立博物館蔵)



図版 27 天野源一旧蔵大沢Ⅰ遺跡出土土器（秋田県立博物館蔵）・1



図版 28 天野源一旧蔵大沢Ⅰ遺跡出土土器（秋田県立博物館蔵）・2



図版 29 天野源一旧蔵大沢 I 遺跡出土資料 (秋田県立博物館蔵)・3



小川忠博 撮影

表紙は森山から見た八郎潟と男鹿半島

中山遺跡・高石野遺跡・大沢Ⅰ遺跡出土資料の研究

八郎潟沿岸の亀ヶ岡文化

発行日 2018年2月28日

編集 上條 信彦

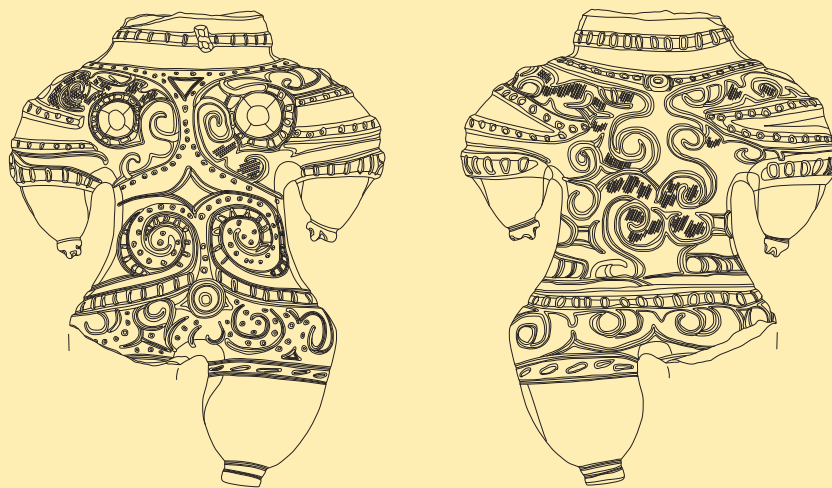
発行 弘前大学人文社会科学部 北日本考古学研究センター
〒036-8560 青森県弘前市文京町1番地
弘前大学人文社会科学部
TEL 0172-39-3190

印刷 やまと印刷株式会社
〒036-8061 弘前市神田4丁目4-5
TEL 0172-34-4111 FAX 0172-36-3299

ISBN:978-4-907995-05-8

The KAMEGAOKA Culture in the coast of Lagoon Hachirō

– The Archaeological study in the site of Nakayama, Takaishino, Ōsawa I, Japan –



2018

Research Center for Archaeology of Northern Japan, Hirosaki University